炭鉱において「女である」こと
―労働と性愛と生命再生産から考える

同志社大学
グローバル・スタディーズ研究科

姜　文姫

＜目次＞

序章

第１章　戦後炭鉱の女性における「性」「性愛」と労働――森崎和江
　第１節　森崎和江と「朝鮮」――「女である」こと
　第２節　集団と「性」の思想化
　第３節　炭鉱における聞き書き――労働と性愛

第２章　文学における炭鉱という場所
　第１節　炭鉱とアリラン部落――上野英信「あひるのうた」帚木蓬生『三たびの海峡』
　第２節　炭鉱の「周辺」――畑中康雄「泥だらけの記」「後山」
　第３節　戦後の炭鉱における「闇」――井上光晴『虚構のクレーン』
　第４節　戦後の炭鉱における「闇」――井上光晴「地の群れ」
　第５節　炭鉱におけるお産と医療――渡辺淳一「廃礦にて」
　第６節　炭鉱における「関係の貧しい」人々――高橋揆一郎「観音力疾走」「木偶おがみ」

第３章　主婦会と炭婦協――「主婦」として、「母」として
　第１節　「主婦」とは誰なのか――暮らしを守る主婦たち
　第２節　「主婦」と主婦会
　第３節　「主婦」の母親運動

第４章　女たちの文化運動
――太平洋炭鉱主婦会誌『母のうぶごえ』の生活綴方欄の分析
　第１節　『母のうぶごえ』（1955 年～2005 年）とは
　第２節　生活綴方における「生活」と「家族」の関係
　第３節　生活綴方を通した「文化」の獲得

第５章　北海道の炭鉱における女性の炭鉱労働と暮らし、恋愛――映画『女ひとり大地を行く』（1953 年）
　第１節　映画の成立事情・背景、映画における「記録性」
　第２節　炭鉱労働の記録としての側面――1929 年～1949 年、北海道の炭鉱
　第３節　「サヨ」という人物――炭鉱労働と恋愛
　第４節　恋愛と「健全たる」労働者像、歌

第６章　1950 年代炭鉱映画における女性と労働――『にあんちゃん』（1959 年）の日韓

映画をめぐって
　第１節　『にあんちゃん』とは
　第２節　日韓における出版、翻訳
　第３節　日韓における映画の制作
　第４節　日韓映画における女性と労働

終章

参考文献

序章

日本近代における炭鉱は、女性の労働と性というジェンダー問題において先鋭なテーマ及び生命再生産の領域を抱え込んでいる場所であった。炭鉱を取り扱う多くの本と映像などからも分かるように、炭鉱は石炭採掘労働が主となる世界でありながら、その労働を支える暮らしが労働と同じように重要だとされた。坑内労働をする労働者たちが労働を共にする人と組んで労働を行ってきたという点、そして例えば筑豊炭田では夫婦の共稼ぎ労働の「先山－後山」という労働形態が主流であったことからも分かるように、炭鉱の労働は暮らしの中でも家族の形態と密接に関わっていたといえる。1960 年代にあった三池炭鉱争議においては暮らしを支える主婦たちの存在感が目立っており、炭鉱の労働における女性の役割と存在は無視できないものとなっている。

そのような場としての炭鉱に注目した研究の中に、「主婦」としての女性の性と生殖に関してジェンダーの観点から近代家族の形成を究明した田間泰子がある。田間泰子（2006）の研究は、性別役割分業といった労働の形態と夫婦間の性的規範、保健衛生的な条件、女性の生殖と性の在り方、「母性愛」の強調などが重層的に重なり合って形成される近代家族の形態に目を向け、その生殖の統制が社会的にいかに言説化されたかを「複眼的」に捉えようとする試みである。この研究で注目すべき点は、近代家族の形成において女性の労働及び性別役割分業という労働の形態を、生殖のコントロールと結び付けて論じているところにある。外での稼ぎ労働よりは家事労働に従事する女性「主婦」がその生殖コントロール主体であり、これは荻野美穂（2008）も指摘したように、日本鋼管など企業で行われた新生活運動においても単に産児制限のみならず、生活全般にかけた生活の改善とともに「労働力の質の改善」を図るものであった。しかし、田間の研究で触れられている炭鉱の事例（青森県の上北炭鉱・北海道炭礦汽船の夕張鉱業所）における産児制限は、他企業の産児制限との相違点、すなわち「女性の、主婦としての人生を含めて家庭生活全体を変容させようとした新生活運動」が抜けていることから子供の数を制限するだけにとどまったと位置付けされている。つまり、人口問題に取り組む日本政府の政策的変化において中心にあった主体[1]の一つである「人口問題研究会」が関

[1] 実際にその指導に取り組んだエイジェント―主婦たちを「組織化し具体的に指導した立場の者たち」すなわち企業の担当者たち―は、「主体性があくまでも自主的なものとして発揮され」た主婦たちとは異なり、産児制限は政府機関により行われるものとして認識していた。「人口抑制」ではなく「愛や性の根底にかかわる問題」として「家族計画」を考えた元日本家族計画普及会会長の国井長次郎とは異なり、人口問題研究会は、創立当初の 1933 年には「人口問題と食糧問題を結びつけて考えられた時代」としての背景があったので「人口食糧問題調査会」という名前から出発した団体であった。1946 年には、「産業貿易をもつと積極的に発展させる」「経済の再建によつて人口の収容力を拡大強化」「多産少死の消費型を少産少死の節約型に改めることこそ文化国家の努力目標」という方針で建議するなど、戦後国家の再建に向けてその方向性があった。田間泰子『「近代家族」とボディ・ポリティクス』世界思想社、2006 年、232 頁；永井亨「開会の挨拶」『創立２０周年記念公開講演會

与していないことから、ごく少数の異例なケースとしてまとめられている。このような問題意識は、田間の著作についている付録(「人口問題研究会と企業との接触（1954 年 12 月～1957 年 9 月」[2]）にも垣間見ることができる。

戦後日本において生殖をコントロールする政治的力学、現場の実践とテクノロジーとは、その「主体」とされた「主婦」が生殖のコントロールを通じてもっと強力に「家庭」と「家族」と関わっていくことに他ならない。企業における産児制限と家族計画もそうであったが、筑豊の炭鉱で坑夫として働いた女性の労働の変容も同様のことがいえる。

野依智子の研究は筑豊炭田における女性労働の変容を追いかけ、労働過程のジェンダー分析を行っている。野依智子（2010）は筑豊の炭鉱における女性労働の変容を追うことによって「家庭」(家族)「主婦」観念と「母性」イデオロギーが生じてくる様子を明らかにしている。戦前においては女性も坑内で腰巻一枚の姿をして男性と一緒に働き、時には男性のように労働していたが、1928 年に改正された「鉱夫労役扶助規則」により、坑外の選炭婦や主婦としての労働にシフトしていった。野依は炭鉱運営に関する調査、沿革史など豊富な史料と統計に基づいて、坑内労働をする女性を支えていた坑内保育所も衰退していき、「家族賃金」の登場により女性たちは「主婦」という名のもとに置かれることになると分析をしている。「労働と家族の関連を包摂した労働過程のジェンダー分析」(野依 2010、16 頁)の必要性を唱えている点においては、女性の労働が「家族」「家庭」に収められていくこと、密接になっていく結びつきを示唆する。また女性の坑内労働禁止の意味を、夫一人の賃金による「家族賃金」のみならず同時に「後山夫の低賃金化と後山労働の家計補助的位置づけ」（野依 2010、169 頁）であったとの分析は、その後に続く「近代家族」の形成が資本主義社会の変化としての必然的な流れであることを的確に指摘している。しかしこのような分析に集計されない家族の形態、すなわち家族賃金に変化していくことのない労働とそれに伴う人々の暮らし方とは分析に考慮されていないといえる。本論文中で検討される、炭鉱労働者の中にも存在した複数の差、特に日本人でない朝鮮人・中国人労働者、炭鉱会社に直接に属しない「組夫」、坑内労働者ではないながらも炭鉱の下請業をする日雇い労働者などがそれである。要するに野依の研究は、「近代家族」に変化していく集団とそれに伴う労働の形をすでに「近代家族」・家族賃金労働の前段階として分析しているのである。

「主婦」概念は、時代と場所・地域などによってその様子と活動、存在の意味も異なってくる。田間の研究においては、生殖のコントロールにおける女性労働及び性別役割分業と近代家族の形成を論じる際に引き出され、野依の研究においては国と会社政策と運営上の変化により形成された近代家族とそれを支える家族賃金制のもとで家計補助的に位置づけされる。日本炭鉱主婦協議会(炭婦協)の活動を取り上げ、社会的主体とし

講演集』財団法人人口問題研究會、1953 年 5 月、7・9 頁。

[2] 田間泰子(2006)、293 頁～297 頁；荻野美穂『「家族計画」への道―近代日本の生殖をめぐる政治』岩波書店、2008 年、199 頁。

て運動を行ったと社会学の立場から分析する古村えり子（2005）は、炭婦協の運動を戦前から続く婦人会の伝統とは峻別されうる特徴から明らかにし、古村の観点によると「主婦」は自己への規定が明確であり[3]、この点は婦人会が展開してきた運動と異なる。1952 年に炭婦協が結成されるが、女性問題研究家の嶋津千利世が『炭労十年史』(1964)のなかで書いた「炭婦協のあゆみ」においては、1952 年炭婦協が結成される前から各炭鉱に存在した婦人部の動きにも触れていることに注目したい。各炭鉱に組織された「婦人部」が活発に活動するなかで、1947 年に「北海道全炭婦人部確立大会」が開かれ、その方針において「働ク婦人」と「主婦」が区別されている。このプロセスでは、「働く婦人」の方が発言権を持っており、審議を経てからもその区別は残り「働く婦人を正員主婦を賛助員」(嶋津 1964、696 頁）とする規約が採択された。この「労働婦人」＝「働く婦人」と「家庭婦人」＝「主婦」の区別は、活動の中で分離と統合をしながらも存在したという。このことは、「主婦」を全面に掲げていた炭婦協が結成時には「組合員の家族たる主婦で組織する」方針をとっているが、そもそもその「主婦」とは「労働婦人」との関係性の中で作られ、炭婦協が実際には家庭の主婦だけの団体ではなかったことを証明している。そのような関係性―「労働婦人」と「労働組合」との―を内包しつつも、1951 年からは世界的な国際婦人運動の動きとともに「主婦」たちは、「労働婦人」とは別の組織で運営するようになる、つまり「再編成」をするに至る。これには「婦人部」組織当時からあった労働組合との密接な関係も影響しているのだろう。炭婦協の結成は、前段階の婦人部の時から一貫して女性の持つべき権利を主張するも、ますます労働組合と相互補完する関係になっていくのである。その中で炭婦協の運動と主張は、当然「家族」を単位にしてせざるを得ない。森崎和江が 1950 年代末主導的に参加した『無名通信』(1959～1961)の試みは、このような動きに対する一つの批判としてあったといえる。そして 1970 年代のウーマンリブ運動の中では、「家族」「家庭」に束縛されない女性の生き方を唱える動きも登場する。女性の労働と性の重要性を訴えた 1970 年代の言説がそれである。雑誌『女・エロス』[4]は女性たち自らの「女」が置かれた状況を診断し、女が抑圧される条件を模索・批判する中で追求すべきもの＝労働と性(エロス)を発信する雑誌であった。この雑誌において女性の「女である」ことは、すべての社会的規定からの自由な「無産」の故に「自らの労働に依って立たねばならない」（「女・エロス」編集委員会 1973、7 頁）ことを意味する。その時、「女」を「女」として生き切ることを妨害する「社会的規定」とは、「私有財産制を基盤とする資本主義的

[3] 「労働者の妻」と自己定義を指している。「この自己規定は社会的存在としては男性に依拠するという矛盾をはらんでいたが、階級的立場の明確化、支配者側の立場に立った婦人との峻別という大きな意味を持った」。古村えり子「「闘う主婦」の誕生～日本炭鉱主婦協議会の活動から～」『北海道教育大学紀要（教育科学編）』第 55 巻第 2 号、2005 年、190 頁。

[4] この雑誌への「批判」として豊田雅人(2019)の読解がある。『女・エロス』に対する豊田の評価は、比較対象である『わいふ』と対立的な位置付けの側面が強く、この雑誌が出された状況への考慮があまり見えない。

生産関係」「天皇制＝身分制を頂点とした婚姻制度」「それらを民主的イデオロギーとして持つ国家の、あらゆる権力機構である」（「女・エロス」編集委員会 1973、8 頁）。そして女として生き切る願望＝「エロス的交流による共同体の願望」は、単に「男」に「対」としての「女」ではなく、「男との関係を、負の形態としてみざるを得ない意識を」「同志的愛・恋愛的対関係を果てしなく追い求める意識」（「女・エロス」編集委員会 1973、9 頁）と「交錯させ合う」ことによって可能になる。女性の産む性[5]と労働が女として生き切るための価値を持ち、中心的なキーワードである。女性が「主婦」「母」などの名において論じられる手前の議論、つまり「わたしたち」が「人間」であるよりまず「女」であるとの宣言は、女性自身が「無名」「無産」である認識につながっていく。そして女性の「性」と「労働」こそがその女として「生き切る」ことを可能にする根本的要素である。この点、女性が自らの「女である」ことを意識し性と労働をもって社会の矛盾に向かい合おうとする姿勢は女性の性と労働を中心に据えようとする本論文の目的に共通しており、炭鉱における「主婦」「母」としての運動と発信される媒介であってもその背景と契機を念頭に置きながら検討すべきであるとの示唆点がある。

これらに対して検討したいのが詩人・作家の森崎和江（1927～）である。森崎は植民地朝鮮生まれ育ちであるゆえに戦後日本に渡ってきてから自分には「ふるさと」と呼べるものがないということから「居場所」のなさに気づき、その居場所のなさを逆に戦後日本における出発できる場所と捉える（冨山一郎 2019、3 頁）。この時、森崎が戦後日本を生きていくただ一つの自明なものは、自分が「女である」ことであった。この「女である」認識は「当時の日本が概念化していた女に抗」（上野千鶴子・森崎和江〔1990〕1991、181 頁）する意味を持つ。筑豊の炭鉱に住み着く森崎は、朝鮮の人々のように「体系化の外でのびのび」（森崎和江 1998、124 頁）と生きる炭鉱の人々に出会い、坑内労働を行っていた老女など多くの女性に聞き書きをしているが、その中で注目した一つのテーマが、「家庭」・「家族」という枠をこえる女性たちの労働であった。

後山たちはもうのっぴきならない捨て身の構えで働き暮らしていました。それでも子を産みたい欲望をもち、自分を主張したい意地をもっていました。生活のぜんぶが、人間的なものの抹殺であるようなぎりぎりの場で、労働を土台として、その生を積極的に創造しようとしました。働くことを生活原理とし、理念としはじめた後山たちは、どんずまりという感覚のうしろに、なにか「始点」というようなえたいのしれない感動がうずきはじめたのです。・・・しぼられてもしぼられても能動的に生きました。後山たちは家というわくのなかで消えていく労働を、「働く」という概念にふくませておりません。主として労働力の再生産部門を受けもっていた家族制度内の女たちの、そのモラルをふ

[5] これは単に「産む」―「産まない」の構図ではなく、国家や資本主義に管理される生産、そして帝国主義と国家侵略に組み込まれる「産むこと」に対抗し拒否する意味を持つ。飯田祐子（2019）。

みいじっていく快感が、あんたんとした坑内労働にちりばめられました。その場で愛と労働を同時に生きようとしました。その共感と抵抗が、後山たちを一様に朗々とした女にさせています。（森崎〔1961〕1977、233～234 頁）

森崎が聞き書きした女性たちは、労働に対して男性とは異なる感覚を持つ。それは労働自体を楽しみ、共に働くことを目指すということである。炭鉱の労働がもっぱら石炭生産への手段としての労働であることに対して、掘り出される石炭の量よりは仲間と相手と共にする労働に重点を置いた働き方である。この森崎の視点は、次第に定着していく女性労働の形態、つまり野依の研究が明らかにする事実に抗するという意味を持つ。また森崎の営みからは、女性の坑内労働における再生産労働や生殖、セクシュアリティだけではなく、女性の労働の在り方[6]への問いが読み取れるのである。つまり、炭鉱という場所を、女性の性と労働が論じられうる場所、歴史的にジェンダー規範が争点となっていた場所として考えることを提示しているのである。

かつて坑内労働をしていた女性たちへの聞き書きと活動には、女性の性と労働が大きいテーマとなっている。また、森崎自身が「女である」ことを強く認識したうえで聞き書きを行ったことは、聞き書きの相手である女性たちとの関係が聞く―語るという一方的な関係にとどまらないという水平的関係の可能性も提示している。この水平的関係は、森崎が様々な女性たちとお話の場をつくった試み（『無名通信』）にもつながる。申知瑛（2013）が、『無名通信』は女性たちが「何を持っていないか」を確認しあうのではなく、その「何も持っていない」という認識を相互に共有する―言い換えれば「非所有の所有」―場であったと分析しているように、森崎は『無名通信』創刊と活動を通して女性たちに被られた「主婦」「母」などの名前に異議を申し立ている。その試みは、女性の性と労働を「家庭」「家族」といった枠の外から論じられる地平を開いているといえる。

森崎自身も居を構え注目した場所が、炭鉱であったことは重要である。日本の近代史において炭鉱が持つ意味は、より多くの石炭産出量と目標達成による戦争の遂行と近代化産業としての側面が大きい。本論文は、炭鉱と関わった女性の性と労働を議論の軸に据え、近代化産業として日本国の近代を支えてきた炭鉱への捉え方を再考することを目的とする。

本論文ではこのように戦後日本の炭鉱における女性の性と労働に目を据えながら、森崎和江を通して女性の「女である」ことにおける思想的考察を行い、「主婦」として名乗る女性自身について検討し、彼女らが描く炭鉱の暮らしを分析する。これらの研究を通じて、戦後日本の炭鉱において女性たちが様々な名のもとで担ってきた役割と位置をジェンダー問題として提起するのが目的である。文学と映像、生活綴方といった表現に

[6] 佐藤泉は、坑内労働をした女性たちは「地上の言葉」には翻訳不可能な言葉で労働を語り、その語りの中では「独自の労働世界を作り出し」たと分析する。（佐藤泉 2019、74 頁）。

も目を向けることで、文学的表現様式を経由して語られ、作り出される女性の性と労働が把握できると考える。本論文は、戦後日本の炭鉱において女性の性と労働を軸にしながらも一つの地域に限らない森崎和江の営みに注目することで、九州のみならず北海道に至る炭鉱が抱えた性、労働、生命再生産を考える可能性を提示する。

次には各章の内容を記すことにする。第 1 章では「女である」という森崎和江の認識に基づき、性と労働の関係を軸にした森崎の朝鮮経験を丹念にたどる。森崎和江はいわゆる「赤不浄」とお産、協働・共働きなど炭鉱で女性が得られる独自的な経験に注目して聞き書きしたが、それを可能にした森崎自身の「女である」認識に視点を設定する。森崎和江は渡航してきた戦後の日本において自分の中の「女である」ことを認識した。その「女である」ことへの認識には、やはり朝鮮生まれ育ちという出自と経験が大きいといえる。第 1 節では、森崎の朝鮮経験を中心に検討する。朝鮮から日本への移動は、森崎が「外地」で享有できた諸環境が一変する契機であった。「ふるさと」と呼べるものがなくなり居場所のない森崎に朝鮮は離れてきた地に留まらず、森崎が戦後の日本を生きぬくための回路である。「在朝日本人」としての森崎の朝鮮経験は、森崎の「女である」認識の土壌となったといえる。森崎の朝鮮経験を論じる際のキーパーソンである父・森崎庫次への検討も重ねながら、父の持つ二重的側面に基因する環境と教育から「近代的自我」を形成した森崎が朝鮮の自然と生活、人々との交流の中で形成してしまう美感と性への感覚、つまり戦後日本において自分を形成してしまった「朝鮮」に気づきたどり着くことを論じる。第 2 節では 1960 年代に書かれた森崎の著作を検討し、女性の「性」を語ることに関する森崎の試みを分析する。詩「狐」(1961) と『第三の性』(1965)、『闘いとエロス』(1970) を取り上げる。1960 年代初めの大正炭鉱労働運動における組織と性の言語化 (「思想化」)、性の語り方に関する森崎の問いかけを論じる。これらを通じて、「女である」ことと「性」「性愛」が同時に論じられる経緯が明らかにする。第 3 節では、以上から明らかになったこと—朝鮮からの移動による森崎自身の「女である」認識、性の言語化への試み—を踏まえ、「聞き書き」という方法、炭鉱での「聞き書き」における女性の「性」と「労働」の関係を捉える森崎の思想を明らかにし、それ自体が持つ近代日本の生産主義への批判としてあったと分析する。

第 2 章では二点の論点において戦後の炭鉱を舞台にした小説を取り上げる。一点目は、森崎が自分のなかにある「女」を根拠にして戦後を生き抜こうとしたように、炭鉱において「女である」ことはいかなる文学的表現を獲得しているか。二点目は、近年近代化遺産として注目を浴びている炭鉱という場所への再考である。文学的表現を通じて炭鉱に関わった人々の置かれたより複雑な状況を理解することが可能である。この二つの論点において文学作品を読み解き、労働と労働力による生産中心の場所であった戦後日本の炭鉱を、女性の性・性愛と恋愛、労働というテーマで論じるべき場所、歴史的にジェンダー規範が争点となっていた場所であると位置付ける。

第 1 節では炭鉱に存在した「アリラン部落」を題材にする小説を取り上げる。森崎和江とともに『サークル村』に参加していた記録作家・上野英信は自ら炭鉱労働の経験を持つが、1954 年には実際に暮らした朝鮮人部落のことを小説化する。「あひるのうた」（1954）という作品は、炭鉱には必ず存在したいわゆる「アリラン部落」を背景にしている。同じようにアリラン部落を描写した他の作家の作品『三たびの海峡』（1992）も共に検討する。また第 2 節では炭鉱会社に属している労働者ではない、しかし炭鉱を支える労働力であった周辺の人々を書いた畑中康雄の作品を検討する。畑中康雄は樺太出身であるが、北海道歌志内市で土工をしながら小説を書き始める。「泥だらけの記」(1956)は炭鉱の周辺にある飯場で暮らしながら日雇いをする人たちの話が書かれている。彼らはほとんど流れ者であるがゆえに、労働争議をする炭鉱労働者たちと相容れない。「後山」も坑内労働をしながらも暮らしを営む労働者が描かれているが、激しい坑内労働という側面ではない炭鉱の労働と暮らしを表現しているという点、「後山」は主として女性労働者の役割であった点において注目したい。第 3 節では原子爆弾投下による被ばくと被差別部落、朝鮮人、炭鉱などが重層的に書かれた井上光晴の『虚構のクレーン』（1960）を、第 4 節では『地の群れ』（1963）を取り上げる。井上光晴の持つ大きい問題意識、つまり太平洋戦争とそれに伴う戦後の様々な情勢に対する批判的姿勢を念頭に置きながら、炭鉱という場所がそのような戦後の矛盾＝「闇」、ジェンダーの問題をあらわにしていることに焦点を合わせる。第 5 節では、医師でもある大衆作家の渡辺淳一が炭鉱の病院で働いた際の経験と述べた自伝的小説『白夜』を参照しながら、数回妊娠中絶を繰り返したあげく命が危険になった女性を助けることを書いた「廃礦にて」（1976）を主に検討する。炭鉱病院で経験し目撃した炭鉱の事情と実態を医師の眼で書かれた作品である。第 6 節では北海道歌志内市出身である作家・高橋揆一郎の作品を取り上げ、炭鉱の独自的だともいえる人間関係、すなわち血縁で結ばれていない人々が共に生きることを論じる。このように炭鉱を背景にした文学作品の検討を通じて、池田浩士の『石炭の文学史』(2012) 問題意識に即しながらも、男性と区別される女性の経験、性と労働の問題が女性に限らない問題であると認識し、炭鉱という場所を再考察する必要があると考える。第 1、2、6 節に関しては、どのような労働が「炭鉱」を成り立たせていたかについて考えたい。炭鉱労働の在り方を問う。その中で考察するのは必ずしも女性の労働ではないことも重要である。第 3、4、5 節に関しては、いわゆる炭鉱の「闇」として表現されるものが被爆、朝鮮人問題などだけではなく、女性の身体に加えられる性・生殖の問題でもありそれが重なりあっていると論じる。

第 3 章では、序章と第 1 章での問題提起、つまり「主婦」「母」などの名を「無名」に取り戻し「女である」ことへの着目を念頭に置きながら女性の性と労働を論じるという問題意識に即して、「主婦」と「母」に名乗りその名の下で行われる運動に注目する。特に炭婦協、炭婦協の北海道地方本部である道炭婦協、それらと密接に関わりを持ちながら活動した太平洋炭鉱主婦会を検討する。炭婦協関連資料、釧路市中央図書館に所蔵

している関連資料を活用しながら道炭婦協とも関わり積極的に声を出した太平洋炭鉱の主婦会の労働運動と母親運動を取り上げる。このように母親運動を含め主婦たちの「母」としての運動・政治的領域への参加は、女性と平和を結び付ける本質主義的女性観でなく、母性を産む性として規定するものでもない。「母」となることは運動の担い手の政治参加へモチベーションを与える役割を果たしているといえる。

第 4 章では第 3 章でも取り上げる太平洋炭鉱主婦会が 1955 年から発刊した『母のうぶごえ』の「生活綴方欄」を主に取り上げ、「主婦」の女性たちが生活綴方という形式を通して何を目指したかを分析する。一般的に石炭合理化政策、具体的には賃金制度や福祉政策の変化とともに、女性の労働と位置は家庭内に限定されるものとして見なされてきた。男性の稼ぎ労働と女性の家事・再生産・育児労働、つまり「性別役割分業」が定着した。第 1 章でも触れたように森崎和江は坑内労働への聞き書きを通じて「家」「家庭」の枠に消えていく女性の労働を取り戻そうと試みた。北海道釧路市にある太平洋炭鉱では、「近代的」と言われる制度（1963 年の「持ち家制度」）と体制により、労働者とその家族の暮らしは他の炭鉱における暮らしとは異なる側面を持つ。家族の暮らしを支える役割を果たしてきた「主婦」たちは、主婦会の活動を通して地域とのつながりはもちろん、機関誌の発行及び「炭鉱映画」の制作にも関わった。機関誌『母のうぶごえ』の活動＝主婦たちが自分らの暮らしや日常を書き、話し合う生活綴方の実践こそ主婦自身のあり方を方向付ける。主婦らが独自的「文化」を獲得していくプロセスだといえる。生活と暮らしを書き、自分を顧みることに伴う、主婦自身の存在に関わる問題であるといえる。主婦たちの生活綴方を「文化運動」として見ることができるならば、主婦たちの運動は家族、子供を通して語る生活を書く行為であり、「家族」と「家庭」がその「文化運動」を成立させるのである。要するに「主婦」として発信される文化と文化運動がここにあり、それは暮らしと家族を守る主婦たちの労働運動と同時に行われるものであった。これは森崎和江の「女である」認識とそれに基づく「性」と「労働」の捉え方と対称であり、戦後日本の炭鉱における女性たちの暮らしと関わる労働運動の形態を提示している。

第 5 章・第 6 章では、炭鉱と関わる戦後の日本映画を取り上げ、炭鉱における女性とその性/性愛、恋愛と労働が如何に表現されているかを分析する。第 5 章で取り上げる『女ひとり大地を行く』（1953）は太平洋炭鉱の主婦会も制作に関わり、映画の後半は実際に太平洋炭鉱でロケが行われた。この映画は東北地方から北海道の炭鉱に出稼ぎに行った夫を訪ねてきた女性が戦前・戦中・戦後という時間を坑内労働と選炭場の仕事などをしながら生きる姿を描いている。映画の撮影体制と内容分析を合わせて行い、女性の労働と恋愛のせめぎ合いを論じる。また第 6 章では佐賀県の中小炭鉱を舞台にした映画『にあんちゃん』（1958）の分析を行う。この作品は 1953 年から 1954 年にかけて書かれた在日朝鮮人少女の日記を原作とし、1958 年に韓国と日本で同時に映画化される。日韓関係が硬直している時代的状況を踏まえながら、原作と映画の比較分析、そして日

本の映画により克明に現れる性（優生思想と産児制限、恋愛）と朝鮮人問題を中心に論じる。

第１章　戦後炭鉱の女性における「性」「性愛」と労働――森崎和江

第 1 章では、九州の筑豊炭田に暮らしながら炭鉱での聞き書きや運動に関わった森崎和江の著作と思想を取り上げ、戦後日本の炭鉱において「女である」という論点を設定する。本章で取り上げる詩人・作家の森崎和江(1927～)は、1927 年当時植民地であった朝鮮の大邱府三笠町(現・大邱広域市三徳洞)で生まれた。父の森崎庫次は妻の愛子と一緒に 1925 年朝鮮に渡り、大邱公立高等普通学校に就任した。1927 年には長女・森崎和江、続いて次女の節子と長男の健一が生まれ、森崎家は 5 人家族となった。家族は森崎庫次の転勤により居住地を大邱から慶州、金泉に変える。森崎庫次は 1938 年から 1942 年まで慶州公立中学校に校長として赴任、1942 年からは金泉中学校で勤めた。しかし戦局の悪化とともに、森崎和江は 1944 年、父の地元である福岡に渡った。福岡県立女子専門学校に入学したものの、町は焼け跡と化し学校の授業は中断された。学徒動員された森崎は九州飛行機株式会社の製図室で九州帝国大学の学生たちと一緒に敗戦を知らせる「玉音放送」に耳を傾ける。その後、森崎は結核の罹患及び回復、結婚、妊娠・出産とともにサークル運動、労働運動に参加した。1958 年には石牟礼道子、河野信子、上野英信、谷川雁らとともに九州と山口をつなぐ『サークル村』(1958～1961)を立ち上げ、この活動の頃には筑豊(九州中間市)に居を構え、サークル運動の傍ら様々な女性たちを訪ね歩いた。炭鉱をはじめ、海沿いを歩き、話を聴く。同時期には筑豊のみならず、他の地域に暮らす女性たちとの交流をする『無名通信』(1958～1961)にも参加する。『サークル村』に代表される「交流」の延長線上に大正炭鉱の争議を位置付ける谷川雁とは異なる立場性を有していたとされる（水溜真由美 2013、238～239 頁)。この争議の中心には「大正行動隊」があり、1961 年 5 月にはこの組織内で強姦殺人事件(山崎里枝事件)が起こった。この事件後、労働争議を共にした仲間には組織(集団)と性、共同体への意見の違いが存在し、その違いは森崎にとって大きいものであった。1961 年には、『サークル村』の時から始めていた老女たちへの聞き書きを『まっくら―女坑夫からの聞き書き』(理論社)に上梓する。大正炭鉱争議の後には『非所有の所有―性と階級覚え書』(現代思潮社、1963 年)、『第三の性―はるかなるエロス』（三一新書、1965 年)を発刊、性をめぐる思想を深めていく。1969 年からは、当時沖縄の返還をめぐって様々な議論がなされる状況の中で元『サークル村』のメンバー数人と「おきなわを考える会」を結成し『わが「おきなわ」』を発刊する。1970 年からは『闘いとエロス』（三一書房、1970 年）『ははのくにとの幻想婚』（現代思潮社、1970 年）『異族の原基』（大和書房、1971 年）『からゆきさん』（朝日新聞社、1976 年）など性と共同体、炭鉱、朝鮮のテーマにした著作を出している。1980 年代には筑豊と沖縄、朝鮮のみならず日本の様々な場所を歩き、関連著作を出版している。特に 1990 年代の著作から頻繁に見える「いのち」のキーワードは、森崎自身を形成したという朝鮮での経験が 1950 年代から炭鉱との出会いと女性たちとの交流、運動の経験などを経由して「性」のテーマと結合しながらたどり着くテーマである。

2008 年から 2009 年にかけて出版された『森崎和江コレクション　精神史の旅』（藤原書店、全 5 巻）には主要作品がまとめられている。それぞれ「産土」、「地熱」、「海峡」、「漂白」、「回帰」という題目がついており、特に第 1 巻の「産土」においては、日本が朝鮮を植民地支配した時期に朝鮮に生まれ育った森崎が戦後書いた朝鮮関連の文章が収められている。森崎は 1944 年に 17 歳で軍民混合船に乗って釜山から下関を経て福岡に渡ったが、朝鮮での 17 年という時間は森崎の営みと思想、文章に大きな影響を与えている。本章は、これまでの森崎和江研究において朝鮮経験が戦後の思想と関連性の中で重要なものとして考慮されてきたことから、森崎和江にとって「朝鮮」とはどのような位置付けが必要であるかを模索する作業から始めたい。本論文のテーマである「女である」ことは森崎が朝鮮生まれ育ちという出自及びその経験を「回路」にして検討することができるからである。森崎和江が 1984 年上梓した『慶州は母の呼び声―わが原郷』（新潮社）は、2020 年に韓国で翻訳出版された[7]。朝鮮での 17 年、そこから『慶州は母の呼び声』発刊まで 40 年、そして韓国語訳の出版までにまた 36 年という、森崎和江が朝鮮との新たな関わりを持つ機会が生まれた。森崎和江の著作は『からゆきさん』が 2002 年に韓国語訳された[8]が現在は絶版されており、それ以降は議論されることは多くなかった。

森崎和江と朝鮮関連については、日韓において活発に研究されてきた。シン・スンモ（2018）は「自身〔森崎和江：引用者注〕の原郷＝朝鮮を率直に懐かしむことのできない自身を意識せざるを得なかった」と述べ、植民地朝鮮で生まれ育ったという出自に基づいて「植民 2 世」というアイデンティティを規定しており、その「植民 2 世」の「罪意識」から森崎の戦後を説明している。このような視点は文学研究のみならず歴史と女性史研究の中でもみられ、広瀬玲子（2019）は在朝日本人女性研究の中において「女性植民者二世がどのような過程を経て内面化した植民地主義を克服し解体しようとするかという点」に目を向けている。ソン・ヘキョン（2018）は、森崎が日本に渡航してからの活動と思想を朝鮮経験と関連して論じている点で同様であるが、森崎の植民地主義批判が「在朝日本人の普遍的意識に収斂されない」独自性を持っていると指摘している。

---

[7] 모리사키 가즈에 지음・박승주, 마쓰이 리에 옮김, 『경주는 어머니가 부르는 목소리―식민지 조선에서 성장한 한 일본인의 수기』, 글항아리, 2020 년〔森崎和江著、朴スンジュ・松井理恵訳『慶州は母の呼び声―植民地朝鮮で成長したある日本人の手記』グルハンアリ、2020 年〕。

[8] 모리사키 카즈에(지은이), 채경희(옮긴이)『쇠사슬의 바다』박이정, 2002 년〔森崎和江著、蔡京希訳『鉄鎖の海』博而精、2002 年〕翻訳者の蔡京希は森崎の 1985 年韓国訪問時に同行している（『こだまひびく山河の中へ』朝日新聞社、1986 年）。蔡京希は「九州大学文学部の大学院に留学して言語学を専攻」（森崎〔1986〕1991、227 頁）したのちに卒業、1980 年代半ばに森崎和江に出会い交流を続けたという。『いのちへの旅―韓国・沖縄・宗像―』（岩波書店、2004 年）によると森崎は 1966 年頃九大の図書館に通い、文学部の司書を務める知り合いに戦後初めての韓国からの留学生を紹介してもらい韓国語の勉強をした。彼は農学部であり森崎と同世代であったという。森崎と蔡京希の出会いも九州大学においてである。蔡京希は、現在韓国のある大学にて教鞭を執っている。

申知瑛（2013）の研究は、森崎和江だけに限らず森崎が主導的に参加したコミューン雑誌『無名通信』における女性たちの井戸端会議とやりくりの話に注目し、分析している。森崎と複数の女性たちが話合いを通して「何も持っていない」という状態を明らかにし、これを「自分」でない他者、他の女性たちと共有しているという共通認識―「非所有の所有」―を確認することが、戦後の東アジアにおける暴力と抑圧の経験を克服する契機であると述べている。申の分析の中に出てくる「共有感覚」とは、森崎の「聞き書き」行為を読み解く際のキーワードであるといえる。こうした韓国における森崎研究からは、「在朝日本人」や「植民者」という枠組みから離れた森崎の独自の「朝鮮」との関係性が提示されている。

『サークル村』をはじめ森崎の関わった集団を媒体にして森崎の思想を論じる水溜真由美(2013)は、森崎和江の朝鮮経験を近代日本の問い直しという文脈で位置づけ、森崎和江が展開した理論と思想を明らかにしている。その視点は、森崎和江の朝鮮経験は戦後の日本に対する批判意識を可能にするものだと捉えながらも、森崎の思想や理論が朝鮮経験と父の影響を通じて形成されたと言及するのみにとどまっている。森崎における「性」に関しては、作品『第三の性』、『からゆきさん』を『無名通信』との有機的関係の中で論じている。この点について大畑凜(2018)は森崎が出会った異質的集団[9]に注目しながら「炭鉱を基点としながら流民の系譜ともいうべきものを探り当てていた」(大畑凜 2018、126～127 頁）と述べているが、ここには森崎の出自及び朝鮮経験と森崎が追いかけた「流民の系譜」との接続点が設定されていない。つまり、森崎の戦後における思想活動と森崎自身の朝鮮経験と出自は常に関連して考えるべきであるが、その関係性への考察がされていないといえる。その後の森崎の朝鮮について論じた大畑(2020)[10]は、いままで森崎自身＝「近代的自我」として謳歌することができた「自由」から「近代日本の暗部を指示するものであったことを語りえる自由をこそえた」（大畑凜 2020、146 頁）きっかけとして金嬉老事件を捉え、森崎にとっての朝鮮の意味を戦後の思想の中で考えようとした。本章では森崎和江が長い間父・森崎庫次によって提示された「近代的自我」と「自由」というテーマを考え続けてきたという議論を踏えながら、森崎の朝鮮を考える際のキーパーソンである父・森崎庫次を具体的に検討したい。森崎にとって「朝鮮」とは父との関係性の中でのみならず「女である」認識を論じる上で看過できない回路である。森崎和江の朝鮮経験は戦後の運動と思想を論じる上で重要視されてきたが、その朝鮮経験自体に関しては十分に明らかにされたわけではない。

---

[9] 「すなわち、土地から引き剥がされ着いた末に炭鉱を転々としてきた（女）坑夫、孤島苦と絶対的貧困の末に出郷していった与論島民、廃坑地帯となった筑豊から各地への流転しては時に舞い戻ってくる若い労働者、米国から日本への施政権返還による「本土復帰」を目前にして「復帰」とはなにかを問いかけつづけていた沖縄、そして、食うに食えなくなった農村から追われ海を渡ったからゆきさん。」大畑凜「流民のアジア体験と「ふるさと」という幻想：森崎和江『からゆきさん』からみえるもの」『女性学研究』25、2018 年、123～124 頁。

[10] 大畑凜「人質の思想―森崎和江における筑豊時代と「自由」をめぐって」『社会思想史研究』No.44、藤原書店、2020 年 9 月 30 日。

森崎は17歳の1944年に釜山から福岡に留学という名目で渡航するが、そのまま動員先の福岡で敗戦を迎える。単に両親が「日本人」であることと親類が日本にいることにより、これまで暮らしてきた朝鮮を出て日本での生活を余儀なくされる。その中で森崎は居場所のなさを強く認識し、「女である」ことを戦後日本での出発点とする。小林瑞乃(2014)も森崎が自分の中の「女」、自身が「女性」であることを認識することで戦後を出発したと指摘し、それに基づいて森崎のいのちと共生思想を分析する。

敗戦までのことは全部忘れたかのように振舞う戦後の雰囲気に違和感を覚え、森崎は「愛もことばも時間も労働も、あまりにも淡々しく、遠すぎる」と書いている。これについて冨山一郎(2019)[11]は「もの」を語る既存の世界に距離感を抱くことであり、このとき既存世界と彼女の距離を構成する要素は「愛、言葉、時間、労働」であると分析する。そしてその認識は「歴史を担ってきた既存の言葉への憎しみ」として現れる。森崎が炭鉱町で行った聞き書きは、このような認識から始まったといえる。その森崎の「女である」こと、そしてその具体的実践としての聞き書きを論じることは、加納実紀代(2003)が指摘したように、炭鉱で出会った女性たちを抜きにしてはできない[12]。

森崎の「女である」認識は、聞き書きと交流の中で女性たちの「性」「性愛」に目を向けさせ、そして森崎自身の思想における主要な軸として働きはじめる。その「性」「性愛」を言葉にする、言語化しようとする試みには上野千鶴子が早くから注目してきた。上野(1991：2018)は「女」を肯定し性愛を論じたという点で森崎に同意し、その先駆性は評価に値するものだと述べる。先述したように森崎の「性」「性愛」は1990年代になると「いのち」ということばにおいて語られるようになるが、問題意識は続く。その問題意識を森崎の詩分析で具体的に展開しようとする茶園梨加(2018)[13]は森崎の詩「狐」(1961)の分析を行い、森崎が産む・生まれることを現代にも続くいのちの問題として問題提起したと述べる。この詩は森崎自身も1998年の著作の中で引用し、またこれを茶園が論じることはいわば森崎和江の1960年代の問題意識を1990年代にも接続させることに他ならない。そのため、1960年代の思想についても検討が必要である。

松井理恵（2020）の研究は近年のフェミニズム研究において言及されている「インターセクシュアリティ」という概念を用いて森崎の朝鮮経験を分析している。女性たちが受ける社会的抑圧―「女の内部に存在するさまざまな差異を等閑視」し「女たちの分断」

---

[11] 冨山一郎「それは誰の記憶なのか」シンポジウム『記憶の存在論と歴史の地平』2019年11月2日広島市立大学。

[12] 加納美紀代は、1970年刊行された森崎の4冊の著書『ははのくにとの幻想婚』『闘いとエロス』『非所有の所有』『まっくら』をあげ、1970年は森崎が「いうならブレイクした」時期だったと述べている。「五〇年代のおわりから、解体する炭鉱のまちにあって、孤独のなかで積み重ねてきた思索がここで一気に放電、時代にスパークした感がある。それをもたらしたのは女たちである。」加納美紀代「交錯する性・階級・民族―森崎和江の＜私＞さがし」『リブという＜革命＞――近代の闇をひらく』インパクト出版会、2003年、248頁。

[13] 茶園梨加「特集　森崎和江の詩と思想　「産」の思想を考える」『現代詩手帖』61（9)、2018年9月。

を「深めてしまう」（松井理恵 2020、95 頁）―に対する森崎の現状把握は「女」たちの「内部」だけでなく「外部の被抑圧者」にも向けており、したがって森崎の朝鮮経験に注目することは森崎自身が身をもって追求した「社会的抑圧を捉える視座」への模索であると述べる。森崎の朝鮮経験に焦点を当て、その経験と戦後の思想・運動と同時に検討している点においては本論文の方法と共通しているが、松井が参考にした水溜と松井自身が批判している「「女」という性差のみに社会的抑圧の原因を還元する運動」への注目、森崎が見据えた「女たちの分断」は、まず森崎みずからの「女である」認識から始まったものである。本論文の第 2 節で触れるように、森崎みずからのモノローグから始まらないと、その「モノローグに閉ざされてい」（森崎 1970c、115 頁）る女たちの精神活動と矛盾に向かい合うことは不可能であるからだ。森崎の詩を書く行為に注目した反町真寿美（2020）の研究は、朝鮮経験と戦後の詩創作を関連付けて論じており、詩集の実証的分析と整理、森崎の詩における特徴を分析することで、森崎が戦後抱える異質感と「植民二世」としての原罪意識を詩の言葉としたと明らかにしている。

本章の第 1 節では、「女である」ことへの森崎の認識が、朝鮮との関わりの中で出されたものと考え、その朝鮮経験を検討する。森崎の渡日は、1944 年にされたため、いわゆる「引揚げ」と異なる。当然森崎にとって朝鮮から日本への移動には、戦局が悪化しつつある状況の中であったとはいえ、まだ不確定性が大きく働いていた。その移動は何より、「外地」での環境すべてが変化してしまう経験でもあった。そして森崎にとってその「移動」自体は、国境をこえる経験であるよりは、その移動によって生じる問題すなわち日本の戦後を生き抜くという生存的問題としてとらえることができ、また朝鮮を「回路」として経由する一つの契機でもある。その「回路」としての朝鮮を考える際、森崎の朝鮮経験に欠かせない存在である父への検討も重ねることによって、森崎の朝鮮経験が姿を見せる。

第 2 節では森崎の 1960 年代を検討し、女性の「性」を語ることに関する森崎の試みを分析する。先行研究を通して、森崎の「性」「性愛」が 1990 年代に入っては「いのち」というキーワードにおいて語られ、それは 1960 年代からの問題意識が比較的最近まで続いているということであると明らかになった。森崎にとって持続的に思惟する重要な問題意識である「性」の問題を論じるため、詩「狐」（1961）と『第三の性』（1965 年）、『闘いとエロス』（1970 年）を取り上げる。これらを通じて、「女である」ことと「性」「性愛」が同時に論じられる経緯が明らかにする。

第 3 節では、女性たちの労働の話を聴く森崎の「女である」認識を念頭に置きながら、女性たちの話の中に浮き上がる労働が増産中心・合理化された「労働」への問いかけになっている点を検討し、「共働き」「協働」の形をした女性たちの性と労働の関係を明らかにする。かつて坑内労働を行った女性たちの話を聴く作業（聞き書き）には、「女である」ことに基づいて戦後を迎えた森崎自身が強く立ち入っているといえる。

本章は先行研究の検討から得られた視点を通して、生まれ育った朝鮮から日本に渡っ

てきた森崎自身が「女である」認識を思想の軸にして「性」と「労働」を炭鉱において考えようとしたことを踏まえて、炭鉱と女性を論じる際の「性」・「性愛」が「労働」と結びつくこと、そしてその結びつきの意味について考える。

第１節　森崎和江と「朝鮮」――「女である」こと

1944 年、森崎は受験と進学のため一人で日本に渡航し、その後の 1945 年には父と兄妹二人が漁船で博多港に引揚げる。戦後、森崎は体調不良が続き療養施設にも入り、詩と短歌を作って過ごしたのちに結婚、出産する。1952 年には父が享年 56 歳で逝去し、1953 年には弟の健一が自死してしまう。森崎は家族が日本に引揚げてきてから結婚するまでに健一と二人でよく時間を過ごしていた。食糧配給がとぼしいなかで森崎は「どう生きていけばいいのか」[14]ともだえ始める。当時の森崎家は、父の兄である伯父の家で過ごしていた。やさしい村の人々と親類縁者は森崎たちを暖かく迎えてくれたが、森崎はすでに「傷ついてい」て、植民地での生活とそれに張り付く「自問」を抱えていた。

このとろりとした風光の中で、人びとは共寝のふとんのような言挙げせぬ日々を持ち合っているかに思われた。が、わたしたちは心深く傷ついていた。植民地での人生に対する灼けつくような自問をかかえている。（森崎 1984、214 頁）

この自問は、森崎の思想において日本の共同体への疑問と植民者としての自分らが過ごした「朝鮮」、そして異族との接触へと発展していくことになる。そしてこの自問と向き合おうとする森崎がその詮索の軸にしたのが父であった。朝鮮問題とその他を論じる森崎の文章の多くに父の話が織り込まれているのはこのためである。

森崎が植民地において享有することができた「近代」とは、いかなるものであったか。森崎にとって当時朝鮮において「国語」であった日本語を母語とする「日本人」とそうでない「朝鮮人」という区別が作られたのはどのようなものであったか。それは森崎が過ごした場所である大邱、慶州、金泉のうち、特に前者二つであり、その場所に暮らす人々の暮らしそのものであった。

森崎が『慶州は母の呼び声』に書いている通り、大邱は軍隊と密接な関係を持つ場所であった。大邱は、日露戦争の開始に伴って一小隊が駐屯軍として置かれて以後、義兵運動の弾圧のための中心地となり、韓国併合後の 1916 年には歩兵第 80 連隊が置かれた。日露戦争後には神社、公園の建設が行われ、日本人人口の増加とともに日本人向けの各種の教育機関が置かれ、町の中心部には道庁、府庁、法院、殖産銀行、憲兵隊本部などの植民地統治機関が集中していた（太田修 2012）。森崎が通った小学校である鳳山町小学校の近くには兵営があり、森崎の弟が生まれてすぐ森崎家族が引っ越した家は陸軍の

[14] 森崎和江「余章」『慶州は母の呼び声―わが原郷―』新潮社、1984 年、213 頁。

将校官舎と隣り合わせであった[15]。森崎は自分が暮らした町と軍隊が一緒にある風景を次のように書いた。

朝は八十連隊の営所から起床ラッパが風のまにまに住宅地までとどいた。ラッパの調子にあわせて子どもたちが歌った。（森崎 1984、19 頁）

八十連隊のある町。りんご園のある町。大邱はそのように言われていた。わたしの誕生は昭和二（一九二七）のこと。昭和の子どもという童謡のレコードを、小学校入学前に買ってもらった。「昭和の子どもよ、ぼくたちは……行こうよ、行こう、足並みそろえ、タララララ……」というようなものだったが、やはりその頃の童謡の中に、スクラム組んで、ということばがあって、「スクラムって何？」と父にたずねた記憶がある。昭和の子どもは生まれながらにがっちりと肩組んで、軍隊ふうに行進していくというイメージが誕生とともにあったのだ。男の子は大きくなったら軍人になると答えた。それは、昨今の子が大きくなったら煙草を吸うと思っているのと同じような、ごく自然な発想だった。わたしも、軍人や連隊は人の暮らしがあるかぎりあるものだと思っていた。（森崎 1984、20 頁）

軍隊に対するこのような感覚は植民地期一般の認識であるよりは、大邱という都市が持つ歴史から生まれる。『大邱府史』はその冒頭における大邱の沿革を次のように記している。

李氏朝鮮時代の後期は、三百年に垂とする対外的無事と、内部に於ける党争の繰返しとが積み重なって、沈殿不振を極めた。この後期を受けたる、ここに所謂末期は、李太王即位後、併合に至る約五十年間を指す。この期間は、併合後の新朝鮮が生れ出づる陣痛期ともいふべく、換言すれば半島に於ける日本勢力の樹立過程の期間であって、日本勢力が、明治二十七八年の日清戦役、三十七八年の日露戦役を二大転換期として進展したことは、ここに改めて言ふを要しない。我が大邱府についても同じことが言へる、即ち近代都市大邱への出発点は、かの日清・日露両戦役を期として、次第に増加した来住日本人によるところの大邱理事庁、ついで大邱居留民団の設立に在るのである。
大邱に来住した最初の日本人として知られているのは、李太王三〇年（二五五二）即ち明治二十六年九月、南門内の一家に医薬及び雑貨商を開いた岡山県人膝付・室の二人である。両人来住の翌年即ち明治二十七年八月には愈々日清戦争開かれ、大邱は南兵站線となり、両氏は共に軍隊に雇傭せられて通訳及び医務に當つた。戦役中わが大邱には常に二三個中隊の兵が駐屯し、且つ通過軍隊の数も多かつたので、右膝付の実兄膝付益吉（後の大邱覆審法院通訳官）を始めとして、日本人の来り店舗を開く者漸く増加し、同

[15] 大邱府編『昭和 7 年 11 月末現在 大邱府全図』（縮尺 1:10000、1932）上の名称。

年末にはその数約十戸を算するに至つた。（大邱府 1943、187～188 頁）

大邱は、アジアにおける日本の勢力拡張・進出のための兵站基地として 19 世紀末に新たに誕生した。李東勲が「日清戦争時には軍隊駐屯の影響から、居留民が一時的に増加する時期を経て、一定の居留民が暮らしていた」（李東勲 2019、46 頁）と書いているように、居留民と「軍」との密接な関係が分かる。盧溝橋事件勃発の際、大邱の人々は北支に向かう兵士を見送り、子どもたちすら銃後の役割を果たす。

盧溝橋事件はこれまでの度重なるシナ兵の妨害を、徹底的にやっつけるのですこし長引く様子だ、とのことで、七月の二十日過ぎに、八十連隊も出征した。
軍旗を先頭に大勢の将兵が出征するのを、わたしら小学生も中央通りの朝鮮銀行の四つ角に全校生が整列して、見送った。日の丸の小旗をふり、万歳を叫ぶ中を、文子ちゃん［森崎和江の級友－引用者］のおとうさんも馬に乗って駅へ向かった。その他幾人もの友だちのおとうさんが出征し、第三小学校［鳳山町小学校－引用者］ではすぐに慰問文を書き慰問袋をこしらえて送った。（森崎 1984、101 頁）

連隊が駐屯するということは森崎と他の在朝日本人たちにとっては当たり前のこととして考えられた。「軍旗祭」のときは朝鮮人と日本人を問わず、みんな連隊の兵営のなかで桜の下で飲み食い、演芸場ではレコードがかけられどじょうすくいまでも披露されるなど（森崎 1984、80～81 頁）、軍と民間人は常に共存していた。森崎和江と同じ 1927 年朝鮮生まれである小林勝の植民地経験について論じた原佑介の研究（2019）では、大邱における軍隊と民間人の関係性は学校も兵営と物理的に至近距離にあり学校の教育や文化も不可分の関係であったと論じられている（原佑介 2019、324 頁：稲葉継雄 2007）。
同時に、日本人と朝鮮人以外にシナ人、ロシア人が珍しくない風景も書いている。それぞれの民族がことばと文化が異なっていても「花が幾種類も一緒に咲くように自然なこと」（森崎 1984、25 頁）だったと感じる一方、それはあくまでこの地が戦勝国の軍隊に占領されている状態を想定するものであった。

「ロシヤ、ヤバンコク、クロパトキン、キンノタマ」
みんなで言って、キンノタマであははと笑う。クロパトキンとは日露戦争の折の敵国将軍だというくらいの知識であった。「ロシヤ」ということばは生活感がともなっていた。ロシア人もよく見かけたし、そのくには地続きなのだといつしか知っていたから。
「白いは兎、兎ははねる、はねるは蛙、蛙は青い、青いはチャンコロ、チャンコロは逃げる」
そう言っては追っかけたり逃げたりが始まる。チャンコロとは清国、つまりチャンコク

のなまりだろう。が、「泣いて逃げるはチャンチャン坊主」と泣く子をはやしたりもした。（森崎 1984、58 頁）

様々な人が共存するのは当たり前のこと、自然のようなことであったが、子どもたちは気づかず彼らへの純真無垢な「差別」も日常の中で同時に行っていた。森崎が暮らしていた朝鮮での生活は日清戦争と日露戦争と地続きであった。その地続きの中に自分らが「日本人」だという認識を共有するようになる。しかし朝鮮人に対する森崎和江の接し方は、同年代の日本人に比べ少し違った。父の庫次には「これからの日本は教員と警察官にちゃんとした考えの人が集まらないとたいへんなことになるんだよ。朝鮮人に対してヨボなんて言うお友だちがいたら、よくないことばだって教えてあげなさい」と言われるほど、日常的差別と蔑視には違和感を持っていた。これには父が朝鮮に来て初めて教鞭を執った学校が朝鮮人生徒のための学校であったこともあるが、父は朝鮮人生徒たちに注意深く配慮していた。少なくとも森崎和江の記述を通じて見える父は彼らが置かれている状況を精一杯理解しようとし、彼らの可能性を見ていた。

森崎一家は 1938 年大邱から慶州に引っ越す。父の転勤によるものであった。森崎の父は 1938 年から 1942 年まで「慶州中学校」―正式名称は「慶州公立中学校」（現・慶州高等学校）―の校長として赴任する。森崎は父の赴任について家族の会話を記している。慶州中学校は慶州の由緒ある家門である「慶州李氏」がつくる学校で、「おとうちゃんは李さんのお手伝いをして県庁や総督府に何度も行った」（森崎 1984、107 頁）と書かれている。

「慶州中学校は今から出来る中学校でまだ校舎もないんだよ。おとうちゃんはそこの校長先生」
「学校がないのに、どうして校長先生？」
弟が聞いた。
「慶州は朝鮮が昔新羅と言っていた頃の都だ。内地の奈良のように古い都。そこに李奎寅さんという立派なお年寄りがおられる。慶州李氏といって、平氏とか源氏とかというのと同じ、古くからの名門氏族がある。そのお一人だ。そのおじいさんが李氏一門の学校を建てようとなさった」
「ご自分たちの一門の学校をですか」
母が驚いた。
「そうだ。以前は書堂とか書院とかいって、一門の子弟を教育する寺小屋ふうの学校をヤンバンたちは持っていた。が、子弟教育をより広い教育の場にと考えられたんだ。それが慶州中学校の基礎になったんだよ」
ふうん、とわたしは言った。
「李さんは秀峯という雅号を持った教養のある方だ。李秀峯さんが校主の私立学校をよ

うやく総督府が許可した。おとうちゃんは李さんのお手伝いをして県庁や総督府に何度も行った。公立並の中学とするように」
「そうなりましたのですか」
「まあやってみろ、と言うことになった。校主が李秀峯さん、理事長がその息子の李採雨さん、そしてぼくに校長をやれとのことで、朝鮮人も内地人も通学する公立中学校として発足することになった」（森崎 1984、105～107 頁）

父・庫次の話している内容によると慶州中学校は私立学校として認可を取得しようとしたが公立になったということである。そして父は学校の認可を得るために仲介したことがわかる。

しかし、父の赴任に関する記述はその前後の文脈を一緒に検討しなければならない。森崎はこのエピソードの前後に当時朝鮮人青年に対して設けられた「志願兵制度」に触れており、植民地当局が日本人と朝鮮人の共学を図ったことの意味を書いている。それは学校を朝鮮人だけの「民族私学」にはさせない、戦争真っ最中の日本帝国にとっては政治・軍事的意図に沿うものであった。また森崎は学校の創立者の理念と父が唱える理念が通っているという、父の理想に対しては冷静な態度で一貫する。それを克明に物語るのが、創立者李秀峯[16]の息子である李採雨の態度であった。森崎は父に対する彼の「他の人には見られぬ対立的なまなざし」を敏感に感じ取る。李採雨のまなざしは在朝日本人に対する朝鮮人の一般的な態度とは言い難いが、おそらく善意を持った日本人の力を借りずでは朝鮮人のみで学校を建てることさえ不可能な状況がわかる。慶州中学校の認可はなかなかもらえなく、学校設立のための財産は学校を公立にしないと慶州が属する慶尚北道に寄付するようにすすめられた（秀峯学園五十年史編纂委員会 1988、127 頁）。また学校の中に奉安殿が建ち天皇の御真影を設置して、登校時には必ず拝むことを強制された。李秀峯は満州事変、日中戦争など 1930 年代入っての情勢によってことばと教育が奪われた民族のため教育機関を設立しようとした。慶州中学校が目指していたのは朝鮮人のための教育であり、私立として認可を求めていた理由もここにあった。ところが、慶州中学校は総督府の方針と道当局によって「私立」ではなく「公立」として設立されたのである[17]。学校設立の申し出から認可までは 2 年 4 カ月が費やされたが、その

[16] 『朝鮮中央日報』の 1936 年 7 月 29 日朝刊（ハングル）には「故李奎寅翁追悼式擧行」という見出しの記事がある。記事の日本語訳は次のようである。「古代文化の都市なる慶州に新文化の機関を建設しようと巨大な金額を投じ慶州高等普通学校の基金を作り、その事業が完成を見る前すでに故人になってしまった故秀峯・李奎寅氏の追悼式が昨二十七日午前十一時に大邱公会堂にて盛大に挙行されたという。」翻訳は筆者による。韓国史データベース（http://db.history.go.kr/）より。

[17] 「慶州私立高普校　認可不許を言明」」『東亜日報』1937 年 7 月 4 日。開校時の教科過程を見ても第 1 学年から第 5 学年まで修身科目が全学年共通で時数 1、一番多い時数は 6～8 の「歴史・漢文」と時数 3～4 の「歴史・地理」であった。「歴史・漢文」は国語購読を含

過程は私立としての認可を認めない総督府学務局との闘いと交渉であった。この交渉過程に森崎庫次の名前は見つからず、具体的にどのような役割だったかは分からない。李採雨の態度からは、学校が設立し開校したものの日本人に頼らざるを得ない状況だったか、あるいはその過程において李氏家門の開校運動推進者たちには不利な条件をつけて設立を進んだかが推測できるのみである。

父・庫次は 1938 年-1942 年まで慶州中学校で校長を務めていたが、急に金泉中学校への転任が決まる。この転任は単なる出来事ではなく、追い詰められた父の状況を表していることである。

「おかあさんが亡くなられてさみしくなったろう。すこしは落着きましたか」
校長先生はためらう風情だったが、「おとうさんとも話したのだが」と言って、
「おとうさんがこんど金泉中学校に転任されることになった」
と言われた。
「え？」
わたしは帰省の時にはなんの話もなかったことを思った。二七日の仏事も終わりやっと新学期の学校に戻って、父はまた厳しいが、しかしその心を汲んでくれる先生や生徒のいる職場で傷心に耐えてもいようと思っていたのだ。父ははた目にも痛々しかった。魂の火は体内で消えたかにみえた。
どういうことなんだろう。何があったのだろう。わたしは父が「おとうちゃんは前と後ろから銃を向けられている……」と言ったことを思い出しながら、校長先生を見つめた。（森崎 1984、177～178 頁）

引用の中に出る、森崎和江が大邱高等女学校に通い始め、週末に下宿先から家に帰ると父がつぶやいた「おとうちゃんは前と後ろから銃を向けられている……」について森崎は、父が受けただろうと思われる厳しい視線を推測している。そこには父が教えている学校で「日本人教育者」としていかなる人だったかは分からないが、彼が心を「屈折

めており、「歴史・地理」には国史（日本史）と日本地理から始まって東洋史と西洋史、外国地理になっていく。慶州中学校の認可は 2 年余りもかかり、1938 年 3 月 21 日には「慶州公立普通高等学校」として認可を得るが、それから間もない 1938 年 4 月 1 日の第 3 次教育令により校名は「慶州中学校」となる。慶州中学校は創立して最初年の生徒数が、日本人 2 名に朝鮮人が 53 名であった。やむを得ず日本人と朝鮮人の共学として出発したが、実態としては朝鮮人が多かった。（秀峯学園五十年史編纂委員会 1988、131；136～137 頁）。1938 年刊行されたの『朝鮮諸学校一覧』には、公立の中学校が 37 校、私立が 13 校であり、生徒の数は公立に日本人が 7,954 名、朝鮮人が 10,317 名、私立は朝鮮人のみ 7,551 名とある。慶州公立中学校の教員は日本人が 3 名に朝鮮人が 1 名である。原文に日本人は「内」、朝鮮人は「鮮」と表記されている。（朝鮮総督府学務局 1939、103～104 頁）また昭和 14 年から 17 年までの日本人・朝鮮人の生徒の比率をみても、日本人生徒 9 名、15 名、23 名、27 名に対して朝鮮人生徒は 101 名、144 名、189 名、234 名である。（古川昭 2007、131 頁）

し」（森崎 1984、149 頁）ながら向き合わざるを得なかった複雑な状況が描かれている。父の金泉への転任はこうした圧力によるものであったと考えてもよい。森崎和江の記憶に庫次はよく朝鮮人生徒、日本人軍人の将校などと家の座敷で話をしていた。それは学校内で朝鮮人生徒たちによる朝鮮独立運動などであった（森崎 1970a、233 頁）。

このように、森崎庫次は森崎が朝鮮で過ごした時間と記憶などを戦後に思い起こす時、必ず登場せざるを得ない。父が残したのは思想への影響ではなく、当時植民地であった朝鮮において「日本人教育者」としての父によってもたらした暮らしであり、「朝鮮人」たちとの関係において与えられた「日本人」という立場であり、戦後日本にいながら「朝鮮」自体を思考するきっかけである。

次は「日本人教育者」としての森崎庫次のことについて検討する。

わたしは亡父の書斎によばれて、父から、いつ万一自分がどのような災難に出逢おうとも父を信じて生きよといわれたことをちらと思い出したりした。思えば暗い月日であった。緊張した精神だけが華麗さを感じさせる、そんな頃であった。新羅の古都で、父は、近年のわたしが炭鉱町で労働者に接している時間の緊迫などとは比較にならぬ密度で、彼ら少年に接していた。あの地に建立された彼らの中学は朝鮮民族の私立学校であるはずであった。そこへ四十代へ至らんとする亡父が公立中学校長の任を負って赴任していった。わたしら家族はまるごと朝鮮人青少年との交流を行いはじめた。わたしは彼らによって育てられるべく、彼らの内面へむかって父から放たれていたのである。（森崎 1971、14 頁）

父は私に「朝鮮人はすぐれた人々だ。もし軽んずるようなこころが起こったら恥じよ」といっていたが、子供の私にはことさら軽んずるほどの出来ごとは起こらなかった。それよりも朝鮮人シナ人を特別に意識せずとも生活圏がちがう者だという決定的な感情でもってくらしていたのだ。
そんな私の幼時の記憶には、朝鮮人学生が暴動を起こしたり、日本人教師を袋だたきにしたり、運動会を機会に反日を叫んだり、という時の会話がのこっているのである。（森崎 1970a、233 頁）

引用は、1968 年訪韓後の 1969 年～1970 年に書かれた文章である。森崎和江は父を通して朝鮮人の少年たちと交流し、父を通して彼らが置かれた植民地下という状況を読み取った。引用のような、森崎庫次に対しても「反日を叫ぶ」生徒がいなかったとは言えないのである。慶州中学校の校長であった森崎庫次はいかなる人で、当時の生徒たちの眼にはいかなる教育者に映っていたのか。

森崎庫次（1897 年～1952 年）は福岡県三潴郡青木村浮島（現・久留米市）出身で、1916 年早稲田大学史学及社会学科に入学、1920 年首席で卒業した（森崎 2009、345 頁）。

彼は元々卒業後にドイツ留学を予定していて、帰国したら大原社会問題研究所での就職も決まっていた（森崎 1984、165～166 頁、215 頁）。しかし庫次の兄が家の財産を芸者遊びなどで使いつぶしてしまったため、庫次は留学を断念し早速就職ができる道を探して安部磯雄の助力で栃木県立栃木中学に赴任、その後は朝鮮に渡った[18]。庫次は教育者養成のため作られた朝鮮の師範学校の出身でもなく、植民地期を通して行われた「内地から」の招聘教員（山下達也 2007、100 頁）でもなかった。朝鮮に渡った理由はただ公務員の給料が内地に比べて６割高い（森崎 2012、4 頁）だけであった。

初代 森崎庫次(中)
(1938.4.1)

出典：「歴代校長」『秀峯學園五十年史』秀峯學園五十年史編纂委員會、1988 年

慶州中学校の 50 周年誌『秀峯學園五十年史』には、教育者としての森崎庫次に関する記述があり、生徒たちの回顧にも登場する。最初の記述は以下である。

新羅の古都である慶州の誇り高い遺物を大切にする国民になりなさいと日人の初代校長の森崎氏が言うほどであった。子どもたちがご先祖様の墓の上で遊んでいたのは良識ある日人校長の眼にも情けなく見えたはずである。(秀峯学園五十年史編纂委員会 1988、128 頁、原文は漢字まじりのハングル)

続いて「第 2 章　日帝治下の秀峯學園」では校長である森崎庫次自ら修身科目を教えたという記述がある。その修身の時間に森崎庫次は「報恩」「廉恥」「精進」という三つの校訓を訓示し、その後は必ず「海ゆかば」を合唱させた。

そして毎日終礼の時、「海ゆかば」という、天皇に命をささげて忠誠を尽くす歌とともに［校訓を―引用者］暗唱するようにした。森崎校長は天皇に大変忠誠たる人物であって、天皇について語るときはひたすら畏まって涙を流すばかりであったという。彼が制定した校訓にもそのような心得が表れている。彼は韓民族を皇民化するため修身教育を自ら担当するほど積極的であって、おそらく韓民族が幸せになる道は徹底的に皇民になることだと信じ込んだようである。（秀峯学園五十年史編纂委員会 1988、132 頁）

これは森崎和江が書いた、朝鮮人を軽んずることを警戒して朝鮮人生徒たちと交流する父の姿からは想像しがたい姿である。皇民化教育はいうまでもなく植民地化政策を成

[18] 森崎和江は両親の森崎庫次と愛子が森崎の誕生一年前の 1926 年に大邱公立高等普通学校の江頭校長に招かれて朝鮮に渡り、庫次は歴史と地理を教えていたと書いている。しかし韓国側に残っている『職員録資料』で「森崎庫次」の名前を調べたら「調査時期」は「1925 年」となっており、森崎和江が書いている時期と一年の相違がある。森崎和江『慶州は母の呼び声』,42 頁；韓国史データベースの『職員録資料』
（http://db.history.go.kr/item/level.do?itemId=jw）を参考。

り立たせる重要な要因であったからである。

卒業生たちが寄せた回顧録には、森崎庫次という人物像がより明確に見える文章がある。学園史が刊行される時点に慶州高等学校の校長を務めていた權五燦（クォンオチャン）は「同門初代校長が創学初代校長について考える」の中で次のように書いている。

あの方は日本史を専攻した徹底した国粋主義者であった。（中略）とにかくあの方は、日本の統治理念とも言える皇道主義に徹底し、植民地に派遣された教育者としてはほぼ完璧に近いと言えるだろう。しかしそのような点はさておきにして、教育者としても立派だったし僕が夢見る校長学（？）の教材として思い出してみることがよくある。（秀峯学園五十年史編纂委員会 1988、160 頁）

1942 年だと、アジア太平洋戦争が激しくなりつつある時期であった。いわゆる大本営発表には戦果が積み重なり街には勝利を謳歌するばかりだった。しかし識者層ではもう、「ミッドウェー海戦」の敗北後、戦局が険しくなって日本の前途には暗雲が低迷していっていることを承知していた。こんな時に日本は「ガダルカナル島」からの撤収を発表した。もちろん「作戦上の必要により」という条件付きの発表だった。この発表が出されたら森崎校長はすぐに全校生を講堂に集結させた。そして大本営の発表を伝えたが、その声は悲痛でとても暗澹たる顔だった。「天皇陛下の聖慮はどういうものだったろか……」と言い、涙を流した。

（中略）

兄の葬式が終わって学校に戻った崔律〔慶州中学校の第一回入学生－引用者〕に対して担任の教師は「消毒はちゃんと済ましたか？」であった。チフスで兄弟を失った生徒に対する弔事の挨拶としてはあまりにもひどすぎるので、崔律が泣きながら校長室に訴えたら、森崎校長は崔律に謝った後その担任の教師を厳しく叱った。「そんな精神で一体どうやって一視同仁の聖旨を打ち出すことができるか！」というものだった。皇道主義教育者の面目が躍如としているが、あの方の人間味もうかがえる。

体調が悪くて作業を休んでいる生徒のおでこにご自身のおでこを当てては、「熱があるから休んだ方がいいね」と優しく慰めてくれたあの方に民族的差別はなかったはずだと信じたい。（秀峯学園五十年史編纂委員会 1988、161 頁）

このような記述から森崎庫次は、徹底した国粋主義者・皇道主義者でありながら同時に人間味が溢れて「民族的差別」はしない優しい人物として回顧されている。彼と交流した朝鮮人生徒たちがその態度をどのように受け止めていたかについては、戦後行われた森崎和江と彼らの会話から読み取ることが難しい。しかしそれは森崎和江が父への問いのなかで振り返られていた。父に身に付きまとう切迫していた妙な雰囲気から森崎和江は父の「自由放任」の意味を繰り出そうとした。小学校時代に家庭内での教育方針に

ついて調べる宿題を出されたとき、父は「自由放任」と書く。

「自由とは和江が正しいと思ったことはのびのびとやり通すことをいう。放任とは親からいえば責任を手放すこと、和江の立場からいえば責任を引き受けること。わかったね」
「わかった。どうもありがとう」わたしはとてもうれしかった。信じてくれているのだ、と思った。早川のおじちゃんと父が、時々、自由について話しているのを知っていた。襖の中から洩れていた。
が、この調査用紙を先生に渡すと、顔色がかわった。きびしい表情でわたしを見た。わたしは平気だった。自由放任はわたしの宝物になっていたから。（森崎 1984、84 頁）

森崎和江の回想では満州事変から満州国建国にかけての 1930 年代初頭の記憶はないが、「二・二六事件」（1936 年）、「盧溝橋事件」（1937 年）、「ノモンハン事件」（1939 年）は記憶があるという。特に「盧溝橋事件」は町全体が兵士を送り出した記憶、銃後としての務めなどの記憶も鮮やかである。そのような雰囲気の時期にあった出来事として記述されるのが父の家庭教育方針である。

「自由」ということばの響きとそれが当時植民地朝鮮の在朝日本人児童に対する教育と距離があったことが、学校の先生の反応からよく分かる。先生は厳しい態度をとり、家庭訪問から外して、森崎家の家庭教育はよくないと評価する。先生が他の子どもに言った言葉を借りれば当時の教育で「自由」とは「従順でない」「率直でない」と同様であり、「赤い思想」（森崎 1984、86 頁）であった。

また森崎は、この「自由」概念を恋愛の「自由」として拡大して受けいれたといえる。森崎が父の教育方針から読み取った自由とは、母と父の関係も含めていたのである。愛子と庫次は当時の植民地朝鮮に渡り家庭を成して暮らしていたが、二人の関係は当時の民法が定めた「適合」な結合になれなかった。愛子は父と一緒に郷里から「出奔」（森崎 2008、62～63 頁）した。家族の婚姻に関しては戸主に絶対的な決定権があり、「適合」でない結合から出生した子は「嫡子」にならず「庶子」として取り扱われた。そのため森崎の戸籍謄本には「長庶子女」と記載されている。森崎は日本への渡航後にあった女学校の入学試験でのエピソードの中、自分が植民地朝鮮で生まれ育ち、更に民法に反して生まれた「適法」な存在でないことを、日本・日本人一般の道徳、倫理意識批判とともに書いている（森崎 1998、113～114 頁）。

森崎は日本に渡航してから 1968 年に初めて韓国を訪れる。慶州中学校の学校創立 30 周年記念式典に招かれて亡くなった父・庫次に代わって出席するためであった。この訪韓の際には、慶州中学校と、父が大切にした一人の青年の村を訪ねた。亡くなった父の代わりに参加した慶州中学校の創立 30 周年記念の式典は、韓国ではなく「朝鮮」との向き合いであった。今の韓国が植民地「朝鮮」であったこと、植民地である地に暮らした朝鮮人と日本人との関係性が再び思い出される。慶州中学校卒業生との出会いと会話

は、現在の韓国の文化・政治などについて話しながらも、そのもとになる「あの頃」という認識をめぐってなされた（森崎 1971）。彼らは「朝鮮人」と「日本人」であった上に、軍隊に行かなければならなかった「朝鮮人」男子と、そうではない「日本人」女子との認識の差を確認しあった。森崎和江は父を通して知り合った人々から「日本人である」ことを問われた。ふたつの国語を用いた人間がそれから抜けるすべはないかという問いかけから始まる会話は森崎自身への問いかけでもあり、それは森崎和江に自分が朝鮮の生まれ育ちでありながら元在朝日本人として暮らしたことを喚起させる。

森崎は 1968 年の韓国訪問について書いた二つの文章を「朝鮮について語ることは重たい」と始めている。戦後、韓国への旅は「朝鮮コンプレックスの是正への、こころ重たい出発である。しかし、それは果たして是正しうるものなのか。是正とは何なのか。」（森崎 1977b、182 頁）と問いかけている。森崎は誰にも告げず、一つの村を訪ねる。それは父が大切にした青年の村であり、その妻である女性に会うためであった。

とはいうものの、彼らは父との出逢いがなくともそのような人生を送ったろう。父は植民地政策下の日本の庶民にすぎないのだから。しかし私には、支配権力の植民地主義の罪業と同様に、日本人庶民の生活様式の罪がこころにかかる。生活の場での異民族との交流がどのような原則のうえで行われたか、それが日本在住の民衆の意識の何とどう関連しているのか、その民衆の意識と支配権力の支配の原理とはどういう補足関係にあるか。そこまでみきわめねば、日本のアジア侵略の悪（それをひき起こした日本の民族的特性、その内的必然性）をこえる思想は、日本民衆の生活意識のなかに生まれないのだ。（森崎 1977b、188～189 頁）

この 1969 年の記述からも分かるように、森崎は父が行ったことを、決して意識して朝鮮人を重んずることと皇道主義者であることを分けて振舞ったとは思っていない。森崎が問うているのは、「父」として現れた生活の面における「日本人庶民」の生活様式、民衆の意識である。このような民衆の意識の次元で何か起こっていたかを、森崎は「民衆意識における朝鮮人と日本人」（『現代の眼』1969 年 1 月）のような文章を通して突き詰めていくことになる。そのため、父と朝鮮人青年たちの交流は、帝国主義を教育の場において実践する「日本人教育者」と教育される「朝鮮人生徒」の関係ではなく、意識・精神の面で「出逢い」だったのである。森崎は初訪韓の際に父・森崎庫次の教育を通じて植民地時代を生きた韓国人と対話するが、その中の一人は「機械的に日本語を使ってきたわけではない」といい、「わたしは魂のもっとも深い所でわたしの精神の形成にかかわったのが、ほかならぬあなたのおとうさんであったことをくやんではいません。こうしてあなたと話していて、わたしはあなた以上に彼を理解しているのではないかとすら感じます。わたしには日本の敗戦後のあなたのおとうさんの苦痛が感じとれる」という。森崎和江はそれにより彼らと森崎庫次の間に存在する共通の感覚を見つける。彼

らと森崎庫次は植民地時代を生きるいわゆる「植民者」と「被植民者」との対立関係ではなく、植民地支配下にあった状況への理解とその支配関係が解消された後も続く悩みが共有できたといえる。そのような関係が森崎和江にはなかったこと、しかし長く自分を苦しめてきた「植民地朝鮮の生まれ育ち」という出自がわだかまりになっていることは、戦後出会う複数の人たちとの関わりの中で再び呼び起こされる。そしてその後の1969 年、森崎和江は父の教え子であった人が書いた文章を読んで、父が慶州中学校にいた時期の後半―戦争末期―に生徒たちに我が家の歴史を書かせたことをやっと知る。

たたかいが激烈になり、負けはじめたある日父の書斎に行くと、放心していた父はふと私をみとめ、そのあたりの書斎をさし、とうとうぼくも国民精神の本と買いかえねばならなくなった、きみはどんなものをもっている？といった。そのころのことである。ちょうど私と同年配の朝鮮人の少年らに、我が家の歴史を書かせたのは。（森崎 1970a、174 頁）

森崎庫次は敗戦が近い頃に、集団に優先する個人を「国民精神」に求めていた。子どもには家系・縁者と接することをさせない、また慣習的な「女」の生き方にならないよう、森崎和江を育てた。つまり朝鮮と日本の「家」から「個」（「個人」）を引き剥がすことによって「両民族の無権力者が自己を確立するとともに民族的調和へ到達」（森崎 1970a、174 頁）する可能性を見つけたのである。これを「近代的自我」「近代的個人」と判断してしまうことにはもっと慎重にならざるを得ない。「近代的自我」として享有した「自由」は 1968 年金嬉老事件をきっかけに「人質」として「生命の危機感とひきかえに自己の朝鮮を掘り起こす自由」（森崎 1970a、188 頁）になったが、それは形を変えた森崎の様々な問題意識につながるからである。「朝鮮」と「父」について考えることは、日本の農村共同体、民衆の意識、日本民衆の異集団との接触につながる。そして上で述べたように父の「自由放任教育」とは慣習的な「女」の生き方にならないようにするものでもあったことを、忘れてはいけない。日本では家制度の下に縛られ、「外地」の朝鮮では核家族をなして暮らした森崎の両親は、その存在自体が森崎に一つの恋愛の形を提示したのである。縁者と親戚との関わりを持たない、伝統的な「女」の生き方から離れるといった教えは、日本留学時代に出会った日本人女性との恋愛を貫き通したという「金さんのおじちゃん」（森崎 1984、86 頁）と民法上では適法性を持たない結合をした両親を通して、「性」と「性愛」に関する森崎の思想が形作られていく。

先行研究でも指摘されているように、渡航したのちの日本において森崎はいわゆる「戦後」の雰囲気に違和感を覚え、今までの世界と自身との距離を抱く。その距離をはかるものは「愛、言葉、時間、労働」である。居場所のなさを実感する中で「女である」ことは戦後を生きるための唯一無二の根拠であった。

「女はいいな。何もなくとも、子どもが産めるもの。大事に育てなさいね」
それは皮肉ではなかった。最後のよりどころのように、まだ論理もとどかず自由でもない女の性にすがりついて、そしてそこから日本というくにとの接点をみつけたいと思っていた。いたわるように、去りゆくように、そう言って弟の声を韓国を走る車の中で思い起こす。（森崎 1984、212 頁）

森崎の弟は引き揚げてから数年後、東京から森崎を訪ねてきては「ぼくにはふるさとがない」「女はいいな。何もなくとも、子どもが産めるもの。大事に育てなさいね。」という言葉を残してその数日後自ら命を絶つ。森崎も弟もまだ「外地」に引っかかったまま、日本は「外国」のようなものであった。それは同時に日本に引き揚げないといけない理由が見つからないことに対する問いと共存した。弟の言葉は女性の生殖能力への評価ではなく、居場所のなさを朝鮮生まれ育ちの二人は深く共有したということであり、「女である」ことが森崎の「居場所」になったという証拠でもある。

第２節　集団と「性」の思想化

古河鉱業の共同出資によって節理瑠された大正鉱業株式会社が運営した大正炭鉱は、1950年代末から本格化するエネルギー政策のなか石炭合理化の影響を受けていた。1960年代初めにおける三池闘争の敗北は炭労の合理化政策への見直しという見方の変化をもたらしたが、大正炭鉱の青年行動隊は炭労が受け入れた合理化案も拒否し、戦闘的な労働争議を行った。当時青年行動隊は企業別労働組合が労働運動において持つ抑圧性を乗り越えようとする姿勢をとっていたが、森崎は組織が持つ目標性の方向に注意を払った。それは、どの組織にも属していない「組織化」されない労働者たちの流民化に注目することでもあった（森崎1970a、55頁）。森崎はこのような状況の中で起こった強姦殺人事件によって、組織に対する以上のような問題意識を「女である」認識から問うことになる。労働争議の場にいながらそこで起こった事件をきっかけに「性」を語ることに悩み、「性」と「朝鮮」を自分の中で接続させようと試みる。「朝鮮」を探さない限り「組織」も「性」もイメージだけであり、柔らかいままである（森崎1970b、310～311頁）という。『第三の性』(1965)と『闘いとエロス』(1970)、そして詩「狐」(1961)の検討を通して具体的に見よう。

1958 年に立ち上がった『サークル村』は、関係者の多くが大正炭鉱の労働者であったことから「大正行動隊」として労働争議に関わった。『闘いとエロス』は「契子」と「室井」という二人の男女を中心にして物語を展開しながら『サークル村』と『無名通信』、「大正行動隊」を経由し、フィクションとノンフィクションの境界が曖昧になっている著作である。森崎和江と谷川雁という名前が別の人物として登場するが、契子＝森崎和江、室井＝谷川雁と重なる点が多い。このなかで契子は炭鉱の女性たちに話を訪ねて歩き、傍らでは『サークル村』とも『無名通信』とも関わりを持つ。6 章の「大正行

動隊Ⅰ」と 9 章の「大正行動隊Ⅱ」の間には、争議の最中に起こった強姦殺人事件が描かれる。殺害されたのは組織の一員だった女性で、犯人も同じ組織の一員であったことが明らかになる。そして彼女の死の 2 週間後に彼女の兄（彼も同じ組織の一員）も車にひかれて亡くなる。同書で目立つことは、主人公ともいえる二人における事件に対する捉え方の違いである。契子はこの事件にショックを受けたあげく性機能不全になる。室井はショックを受けたというものの殺された女性の死よりはその後の兄の死にさらなるショックを受ける。ここで契子は組織の中で「性」を語ることにおけるタブーのようなものを感じ取る。

> けれども、その組織づくりは、千の万の少女の死臭と歩く。千の万の、夜を歩く。わたしが死に果て、わたしのあとのわたしが果てて、たくさんの男らの、血を吸い、その死骸をあたためながら歩かねばならない。わたしらの組織はひとりの少女を強姦し殺した。冬空はくらいのが自然であるように、わたしらは、千の万の夜そのままに在るのである。どんなに室井賢とわたしとが、予感をはらんで抱きあいようとも、彼と肌よせあって機夜経たろう、その肌がこの夜をいつ溶かすというのだろう。（森崎 1970b、158 頁）

> 女の意識の母体は家族関係内における諸労働です。労働力の再生産のための諸行為です。そこに注がれたエネルギーの堆積が女の意識をつくってきました。けれどもそれは思想化されてはいません。また、それと歴史時間との間の媒体は折々外部から持ちこまれるだけで、私たちからのものは、何もありません。（森崎 1970b、90 頁）

契子は室井を愛していて性愛と通じて彼との関係を深めても、組織は変わらずそのままである。一つ目の引用はそのようなことを書き留めながら絶望ともいえる契子の心情が読み取れる。組織は「行動力をもつリーダーで「サークル村」解体後のヤマを引きしめていた」（森崎 1970b、159 頁）兄の死は悲しむが、殺害された女性の死は組織の付き物のような扱いされる。契子は、組織の指導者である室井は組織主義者ではないといいながらも、「性と集団のかかわりぐあい」（森崎 1970b、159 頁）に無関心な組織・集団、男たちをみる。そして室井をはじめとする男たちにおいて女性の死が「思想の空洞」になっていることに気づく。契子は「性」の言語化を求めて男たちに尋ねるが彼らからその言葉は見つからない。さらに契子は批判する。その「思想の空洞」はいわば連帯するとなっているプロレタリアート、つまり労働者との付き合いのなかでも現れる。彼らをわれら知識人が再度作り直して仮想の「彼ら」として呼ぶ。しかしまた女性の死はこの中にも「ない」と言う。このように、契子もしくは森崎がこの本全体を通して問うているのは、組織と「性」との関係性に他ならない。その問いは単に両者を対立するものとしてではなく、組織・集団性の在り方に向かっている。

これらを二つ目の引用と合わせてみると、森崎が論点にしているのは、「組織」だけに限らない「性」である。女性の家庭との関わり、家庭内での労働を考えることでやがて女性の意識を形作っているもの、女性の「女である」ことの世界が見えるのである。これは女性の家庭での労働だからすぐに性別役割分業の話になるのではない。「家族関係内における諸労働」「労働力の再生産のための諸行為」に「注がれたエネルギーの堆積が女の意識をつくってき」たがまだ「思想化されていない」とは、女性の経験をもっと語る、論じるというような経験自体ではなく、その経験の蓄積を越えるものが論じられないといけないということである。しかし「性」を語ることに関しては、森崎自身ももがきながら、探索の中に居続けた。女性たちが「自己の内界と外界をがらがらとはじきあう場」（森崎 1970c、117 頁）は作られるが、「私有意識を所有」したという「共有意識」からの「疎開」に置かれているため「非所有」だけを所有する。そして女性たちが「みずからを顕在化する方法論の創造以外に、非所有の社会的再生産は不可能である」ために性を語ることは「モノローグ」の形であるしかない。

私はモノローグからはじめた。そしていつまでも固執している。もういまはそれをぬきにして語ることの不十分さに堪えがたいほどになっているのだ。なぜなら女の精神活動はモノローグに閉ざされていて、それを越えるべき方法論の探索が解放の糸口であるのだから。そうであるのに独白の領域内での矛盾や対決さえ意識されていない。そのために女たちは自らの精神活動の思想化の拠点を持つこともできずにいる。（森崎 1970c、115 頁）

私はこのような女たちが相互に社会的条件を創造しあう最小限度の外的関係を持たず、また相互に内的要素を交換する契機をも持たない状況は悲嘆にあたいするとは思わない。だからこそモノローグの展示会を固執する必要があったわけだが、ただこのような欠落の真上にどっかりと坐らなければならないと考える。そのちょうど水面に直立するような地点の認識を少しでもはずれれば、女の革命化は不可能だ。そこへ立ちつくすことの強要なしに性的疎外の止揚ははじまらない。欠落の逆利用から歩くのだ。……（森崎 1970c、132 頁）

モノローグつまり一人語りは方法であるよりは、それでないと「女である」こと—何かを持っていないという認識の共有（申 2013）—を認識することが不可能である。続いて検討する『第三の性』において二人の女性の関係をすぐさま「連帯」と規定できないことも、同じ文脈である。律子と紗枝という二人の女性は、いくつかの点において経験も、置かれている環境、成長の背景が異なる。この作品において二人の異なりは、特に「性」において目立つ。律子と紗枝が「産まない」と「産んだ」立場からの性と性意識を語っているように、森崎にとって「性」の問題とは産む・生まれるなどお産に関わ

る問題でありながらも、その根底にはやはり「性意識」の問題がある。この性意識の問題は、森崎の「女である」ことを論じるうえで重要である。『第三の性』中で律子が言っている「性のしくみ」に関する記述をみよう。

性と産むことは一連のことであるようだけれど、これはまた全くちがうものであると思えるの。性のしくみの中に、たしかに生殖はあるでしょう。けれど全くそうでない何かがあるんです。産んだあなたには分っているんでしょう？「性」と「産む」こととは一連のことでありながら、しかも性のしくみはそれを越える何ものかであることが。わたしはね、三つほど年上の友だちがあります。彼女はある時、ひとりで「地下水道」という映画を見に行ったんです。そして終わったあと、そこのソファの上にぶったおれて起き上がれなくなってしまったんです。
その映画は、追われる人たちが下水道を通って、絶望的な脱出を試みる話なのですが、男女の主人公たちはぎりぎりの死をみつめ、しかし、二人でみつめていたんです。――死にせまられたって二人じゃないか。握りあった手があるじゃないか。……。
人間の性のしくみは、握りあった手があるじゃないか、といわせる何かがあるんです。（森崎〔1965〕1992、48 頁）

これは紗枝が幼年期に朝鮮で覚えたと言う自然（雪、アカシア、裸木など）に対する感動、そしてそれら自然と交換しあっているという感覚が自分の性意識の始まりのようなものだと言っていることを受けての記述である。

律子は気管支拡張症を患い家中心の生活を送り、身体の成長が遅れがちで、しかも女に囲まれて「女の園」的な環境で育てられる。「性のちがい」があることを意識せず、しかしだんだんその「不自然さ」（森崎 1992、31 頁）に気づく。中学教員をした時期には「私ども婦人は」と言う仲間と付き合ったが、それは病気のせいにさらに重さをもったと言う。紗枝は上の段落で書いている通りの経験を持っており、それは朝鮮においてであった。「男を知っている」と言い、結婚をして子供もいる。炭鉱町の女性たちとの交流があり、彼女たちの性に対する考え方をところどころで言及し伝えている。これは炭鉱という場所と性のテーマが森崎思想において結合するところでもある。

この作品、『無名通信』、『非所有の所有』を含めて、森崎は「性」を語る、話し合う場を作ろうとした。1960 年代に女性が「性」を語ることは、それを語るため男性との「共通のことば」さえなかったせいで、とにかく書かないといけなかったのである。

私は、本気で、野垂れ死を考えました。男も子供も、仕事も金も失って、孤独に死ぬことです。その覚悟で、男に話しかけるより方法がありませんから。
けれども、話しはじめるや、共通のことばがないことに、やっと、気がついたのでした。なぜ共通のことばがないのか、それさえ分らない。なぜ男女のことばの概念はすっかり

ちがっているのだろう。どこから手をつければいいのだろう。（森崎 1992、210 頁）

私は男たちにも女について、まともに考えてみようという気を起こさせる本が書きたくなりました。同時に、同性の仲間が欲しいのです。さみしいものですから。どこかで誰かが同じことを考えているにちがいないのです。でも情報がない。やっとテレビが誕生したころですものね。一人芝居じゃ、なんにもなりません。（森崎 1992、212 頁）

『第三の性』は「男」との「共通のことば」を探り当て、同時に同性との「対話」を触発するために書かれた。律子と紗枝の対話は、森崎と友人とのノート交換（森崎 1992、214 頁）に基づいている。二人の話は何か共通点を探るためでも、重なり合うような形ではない。二人は「産まない」と「産んだ」という違う立場[19]、「性」に関いてはおかれた環境と経験に極端的な違いがあるのに、ふたりの言葉はお互いに補強しあっている。作品のなかで紗枝が語っている性と性愛、異性、集団的エロスなどは森崎自身の言葉であり、それに寄り添いながら律子の話がつづく。最後には律子が死んだとされ、紗枝は「わたしを裁断し、はねかえしてくれたわたしの対極点。」（森崎 1992、204 頁）と書いているように、二人は対立ともなく完全一致するわけでもない、最後まで「対極点」として付き合い続くことができた。1961 年の詩「狐」も、異なる経験の女性が自分のことを交互に語り続く形式となっている。『第三の性』では付き合いという形式をとりながら「違い」はそのまま二人の関係性として保たされたことに対して、「狐」においてはそれが二人の意思疎通不可能の状態に描写されている。まるでモノローグのような女性の語りがそれぞれ続くのである。

1998 年、森崎は著書『いのち、響きあう』の「まえがき」において詩「狐」の一部が「いのちとは何か」「いのちの継承とは何か」「エロスとは、なに？」という問いのなかで引用されている。森崎自身が 30 代末のとき書いたと言及している詩「狐」は、1961 年書かれ森崎の第二詩集の『かりうどの朝』（深夜叢書社、1974 年）に収録されている。詩は「伯母」と「桐江」という二人の女性が交わす会話の部分と、坑内において女たちのお祝いの場面で成される部分、再び伯母と桐江の会話の部分で構成されている。二人は違う経験を持っているばかりではなく、「性」においての考え方と生活様式が異なるままに生きている存在である。森崎は『いのち、響きあう』において自分の「女である」性と生殖、生き方に関して語ったことがない「自身の生と性を思想化できずにいる者」（茶園梨加 2018、99 頁）と背中合わせの存在はいのちを取り上げこの世に送る者である助産婦と言っているが、詩「狐」においては元女坑夫（後山）と「自身の生と性を思想化できずにいる者」が対話していることが興味深い。長くなるが、詩「狐」の前半を

[19] 水溜は『第三の性』から「産まない」ことを欠落させている性愛論の問題点を読み取り、国境を越える存在としての可能性をはらんだ「からゆきさん」に現れる「子どもを持たない女性の心の闇」が『第三の性』の主要テーマでもあったと指摘する。（水溜 2013、315 頁）

引用する。

伯母
知ったことか/おまえは茶碗一杯の血だろうが/おれは五十年/ななつのときから坑内へさがって/おれはいっぱいひりだした/桐江/おれはおまえのように見てくれないぞといいはせん/いう相手はおらんとばい/おれは石炭に/見ておれ見ておれといいながら/なんかいっぱいひりだした/茶碗いっぱいの血かい！

桐江
なにや！/茶碗いっぱいの血とあんたの五十年と　どこがどうちがう/あんたがなにをしたとぬかす/みてみ/こんな　くされやまの/やぶれ医者の/板ん間に/まいにちたくさんのおなごの血が重っとる/それがなにか/あんたにわかっとるかの

伯母
わからんことはないばい/おれはわかっとる

桐江
よかたい/わかっとるいうても　それはあんた一人ががてんするばかじゃ/なんにもなりはせん/男は血がでりゃ金になる/とうちゃんは坑内で　じぶんで指を断ちおとして金をとる/金になる血と/金にならん血と/それはどこらへんでわかれるのかなあ

伯母
金になる血か
やす売りするな
売るな
ぜんぶ　ぶっかけろ

桐江
うちはあんたをうらんどる
あんたは五十年というばってん
なにかわからんもんをひりだしたというけれど
それでもそいつのゆうれいがあるやないか
化けもんのようなボタ山が
そこにひっかけとるやないかね自分を
うちが太うなったころは
おなごは坑内にもいれてくれん

うちはどこへ行けばよかったの
どこへ入ればよかったのかい
うちは好いてもおらん男と遮二無二こすりあって
十二かいも掻きだした
それだけがうちの現場じゃ
うちの現場には見えん狐がおる
おるのにない……
おるのにない　おるのにない　うちはそういいつづけた
それがなにかしりたくて
かきだせるだけかきだすとじゃ
あんたの幽霊とどこがどうちがうか
みせようとつれてきたんじゃ
（森崎 1974、95〜98 頁）

桐江は「女の現場」には「見えん狐がおる」が「おるのにない」と言う。これは、女には異性との性愛と性交渉があり交渉によって産まれるいのちがあるはずなのだが、そのいのちを強制的に「産めない」（堕ろす）ようにさせた何かが問われるのである。桐江は「それがなにかしりた」いがまだそれを言い表す言葉を持たない。それに対し伯母は聞く。「石炭のようなもんがどっさりあるとおもわんか」と。伯母は「あるものとないものの／さかいに立った」ためである。お天道様がいる地上の世界とは異なる地下の世界にある確かなものは「石炭」だけである。この詩で論点になっているのは「産む」「産まない」に関する「性」であるが、注目したいのは森崎がそのような「性」の問題を取り上げ、「女である」ことを問いかけようとしたという点にある。ここで森崎は「性愛」と「生殖」を分離していない（上野千鶴子 2018、54 頁）ようにも見える。ところが森崎が考えようとしたのは女性の「性愛」と「生殖」の連続性ではなく、「女」が抱え込んでいる問題を「言語化」[20]したということである。それは詩「狐」においては元女坑夫の「五十年」と桐江の「茶碗いっぱいの血」の重さの違いを問うことであり、1990 年代に入ってからの「いのち」に関わる問題意識―一代完結主義に終わるのでない「生命の連続性」―とも接続している。

上で述べたように日本における居場所のなさを深く感じ取った森崎は、森崎は自身の「女である」ことを根拠にする（森崎 1984、212 頁；上野・森崎 1991、181 頁）。日本の家制度、女性の性を語るような雰囲気ではないことに森崎は戸惑う。

帰国した地の男のからだにあふれている旧態然とした家意識。ムラの感情。巷の笑い。しかし絶望したくないのだ。なぜなら、私は女に生まれているのだから。勝手に彼らの

[20] 上野千鶴子による用語。森崎は「思想化」と書いている用語にあたる。

体系によって色づけされているけれど、でも、それは、文字界を主体とした領域のことである。私の本質は百年や千年の汚染になぞ弱りはしない。必ずや、この日本の暮らしにも、私が植民地で感じたような、体系化の外でのびのびと生きる人間群の本質があるはずだと思う。それに会いたい。
ヤマの女と男
ようやく、会えた、と感じたのは、ヤマの人びとだった。（森崎 1998、124 頁）

「日本人」としていられた朝鮮ではある程度の特権層に属していたから、森崎が感じた「朝鮮」が家父長制と性別役割分業から自由であったとはいえない。しかし森崎が自分の「女である」ことを認識し戦後の出発点としない限り、「朝鮮」は姿を現すことがないからである。森崎は終戦後に妊娠と出産を経験するが、女性の生殖に関する妊娠、出産を論じること自体が容認されない雰囲気があった[21]。森崎は出産のときを「身ふたつになる経験」と表現している。日本語では「産む・生む」と「生まれる」が違う言葉と感覚で言い表されているが、朝鮮語では「ナッスムニダ（났읍니다[22]）」という言葉で「産む・生む」と「生まれる」が表現されている。森崎は朝鮮語のこの言葉を経由して「自動詞でもあり他動詞でもあるあの両義性。生む・生まれる、あの身ふたつになる働きの総体的表現」（森崎 1977b、31 頁）を獲得する。森崎はこの「発見」ともいえる瞬間を「私はナッスムニダといいながら、涙がじわじわ湧いて止まらなくなった。あったわ、こんな近くに。」（森崎 1977b、31 頁）と書いた。森崎が「《生む・生まれる》モノローグ」（『辺境』7 号、1972 年 3 月）において「産む・生む」、「生まれる」ことにまつわる様々な伝承を書いたあと、その伝承の地の一つである慶州という場所における父母との思い出で文章を締めくくっていることは偶然ではない。当時は大学に朝鮮関連の書籍も数少なく、電車の中で朝鮮語の本を開いていると「なぜ朝鮮語の勉強をなさるのですか。どうせやるなら中国語がよくはありませんか」（森崎 1970a、189 頁）[23]と聞かれるほど、日本人の対韓国／朝鮮観と対中国観があまりにも異なる時期であった。『慶州

[21] この森崎自身のお産の経験は 1970 年代の著作にも度々出ていたが、その体験は 1950 年代の初期のことであって、森崎が第一子を妊娠しているとき経験したことである。今までふつうに使ってきた「私」という一人称で森崎が自身のことを言おうとするとき、その一人称の「私」が急に「胎動を感じながら談笑していた私から、すべり落ちた」（森崎 1998、24 頁）とされる。「胎児をはらんでいる女の一人称にふさわしい内容を持つことばが見当たらず」（森崎 1977b、31 頁）、森崎は初めて「女たちの孤独」を感じる。そして言葉の不完全性を感じつつ「「生誕」（あるいは分娩）を言語化しようとしてまだ」（森崎 1971、216 頁）できずにいることに気づく。さらに上野千鶴子は、森崎が胎児を「私」ではない「私」の内部にいる「他者」と捉えている点は、「中絶の権利」を巡って出された第二派フェミニズムの「性的自己決定権」主張と困惑を「言語化」していると指摘する。（上野 2018、55 頁）
[22] 現在韓国語においては「났습니다」が標準語になっている。
[23] 「中国人とは日本の大衆も血を流しあって対決したのである。朝鮮人に対しては日本の大衆は血も流さず異種同化の輪をひろげた。日本のなかにも、中国とはたたかったが敗けてはおらんという心情もあるけれど、……」（森崎 1970a、189 頁）

は母の呼び声』と 1970 年代に書かれた文章たちは、そのような時代と森崎の朝鮮への思いが詰まっている。自身の妊娠と出産、そして炭鉱における女性たちとの出会い、交流労働争議の中で森崎が思想と活動の軸として据えていたのは、「女である」ことであった。

第３節　炭鉱における聞き書き――労働と性愛

森崎和江著作の多くは、「聞き書き」という手法によって書かれている。これに関しては、森崎は九州の佐賀県を中心にして興行された「佐賀にわか」の一人者である筑紫美主子のそばにいながら彼女の役者としての姿を観察し話を聞き、交わした話を中心にして著作（森崎和江『悲しすぎて笑う―女座長筑紫美主子の半生』文藝春秋、1985 年）を書いたが、この本の「あとがき」には「聞き書き」に関する森崎自身の考察が述べられている。

私は人間という存在の総体が好きである。その矛盾にみちた多面的で、かつ単純な存在が。その中から意識性だけをとりだすことのうそっぱちにしらけやすい。が、それだけを追うことは容易であるから、若いころは頼りもした。しかし全体像への哀歓ぬきに、人の持つ意識性への信頼は生まれないのだ。
こうした人間への好みを私自身が自分でぶちこわすことのない描き方で、同時代の人のノンフィクションが書きたい。そう思いながら方法が容易に作りだせなかった。
なぜフィクションではいけないのか。どこがちがうのか。
そのことに対する答えは私の中にはっきりとしていて、それは書き手の想像力に奉仕する表現ではなく、対象へ接近する手段としての言語がほしい、のだった。（森崎 1988、296 頁）

佐藤泉も森崎の『からゆきさん』執筆時の文体と森崎自身との関係について「そこ〔彼女らの生の具体性：引用者注〕に流れるある普遍性を捉え、我々自身の生に回付しなければならない。その文体はいかにして可能か。解決不可能の難問を前にして、この聞き書きが作り出された」（佐藤泉 2015、43 頁）と述べている。何かを書くなら「対象へ接近する手段としての言語」と「我々自身の生に回付」する「文体」でなければならない。対象を書くためには森崎自身の生が問われ、この時、「対象」と「書き手」＝森崎の距離は縮むのである。森崎が『からゆきさん』を執筆する時に悩み、怒りを感じたこと[24]もこのような文脈で把握できる。話を聞いて書くこととは、実は森崎自身へ突き詰めていく作業であった。そのため、森崎が終戦後の日本において「炭鉱」にたどり着き、女性

[24] 「とても人ごとと思えぬおもいが、わたしを怒りや、はずかしさのかたまりにしました。あるいは人なつかしさに涙をたれ、または日本を棄てたい思いにもだえました。」（森崎〔1976〕1980、208 頁）

たちの話を聞く行為からも、聞き手と対象の関係を考えなければならない。そして森崎の「女である」もここから理解可能であり、女坑夫の聞き取りはこの「女である」ことを念頭に置いておかなければならないのだ。

炭鉱で働いていた女性たちに話を聞き歩き、彼女たちには働くことが愛することと性愛とが別のことではないことを見つけている。元女坑夫たちの聞き書きでは、女性たちは男性とは異なる人間関係と考え方[25]を保ち、それは当然ながら労働に対しても異なる観点をもたらしたことが読み取れる。特に、その女性たちが共に働くことをその労働の原理にしている点は重要であった。女性たちの労働は「共働き」「協働」という形をとった。労働と性との関係性において言えば、森崎がみた女性たちにとっての炭鉱労働のあり方とは、自由な「恋愛」と同時にあるものであった。

後山たちは家というわくのなかで消えていく労働を、「働く」という概念にふくませておりません。主として労働力の再生産部門を受けもっていた家族制度内の女たちの、そのモラルをふみいじっていく快感が、あんたんとした坑内労働にちりばめられました。その場で愛と労働を同時に生きようとしました。その共感と抵抗が、後山たちを一様に朗々とした女にさせています。（森崎 1977a、234 頁）

〔男たちの：引用者注〕個体の認識よりも、食わねば生きられぬ個体を各自ふまえてそれら脳なしどもの総体を対称として共働き、共働の成果を問うことよりもその場での充足感を求めたのでした。（森崎 1970a、140 頁）

坑内労働を行う女性たちは、共に労働ができる男性と組を組んで（先山と後山）働き、「同じ現場で働く同性を愛しはじめ」「家族を引きつれて信頼しあう女たちどうしが同じ地域に集ま」（森崎 1970a、140 頁）ることもあった。男性と異なり女性が働き続けられるのは決して一致することのない「一生つづ」く「男性と女性の性のちがい」（森崎 1970a、295 頁））すなわち、労働の成果を問うよりは労働そのものが与える充足感を感じるために労働を行ったからである。このような女性たちの働き方は、炭鉱において行われた増産中心の石炭政策とはずれている。この点こそ、森崎が戦後の日本において憎悪を抱き、「いつの日かは訪問するにふさわしい日本人になっていたい」「他民族を食い物にしてしまう弱肉強食の日本社会」「そのような日本でない日本が欲しかった」「そうでない日本人になりたかった」（森崎 1984、206 頁）と述べたことにつながっている。炭鉱は、「そうでない日本人」たちが集まる場所であり、「そのような日本でない日本」である同時に「そのような日本」の顔であった。地下の世界は、地上の世界とは異なる独自的文化とタブーが存在した。

[25] 森崎は閉山後も相変わらず働く、支える女性たちの生き方を「やさしさ」という言葉に託している。（森崎 1990、127～133 頁）

引揚げて十年を過ぎた頃、炭坑を知った。その町を見た。おずおずと炭坑町に住んで、権威と縁なく、都市や農漁村とも体質を異にし、男も女も働く日本人に接した。人びとは、はじけるように明るくて、地上の権力に意を注がなかった。それよりもおそろしい地下の暗黒とたたかっていたから。（森崎 1984、206 頁）

女坑夫たちは、口ぐちに語った。地の下のことを、上でぐだぐだいう男は捨ててくれる、と。
性意識が、ひとりの女の、地上と地下ではたいそうちがう。その分裂を暮らすのである。男たちは二種に別れていた。坑夫男女を統轄し指図しその生殺の権を握る者たちの性意識と、農夫から坑夫へと転じた坑内夫と。後者は、どこか女坑夫たちの認識に近い。前者は強者である自分の誇示と性欲発揮のために、統御する坑夫男女の性を愚弄しつつ、ほしいままに左右しつづけた。（森崎 1998、124 頁）

山本作兵衛の記録画をはじめ炭鉱を描く様々な作品から分かるように、炭鉱から逃げようとしてばれた者は過酷な見せしめにさらされる。「圧制」はよく炭鉱の前につく修飾語であり、森崎が書いているようにそのような属性は近代日本の炭鉱が持つ「労働構造と意識状況」（森崎 1970a、142 頁）である。森崎はいわゆる「アジアの前近代性」（森崎 1970a、142 頁）とみなされる視線も熟知していた。

くらがりに引きずりこんで髪をつかみ目も鼻もふくれあがるように打ちすえたあげくのはてにそれが愛着と独占と不安の現われであることをすっぱぬかれて動きがとれなくなる親方をこりかこみ、つかず離れずしかも明日の現場を物色する彼女たちは、日本のもろさとしぶとさをよく感じとっています。（森崎 1970a、142 頁）

暴力、圧制にも挫けず女性たちが働こうとしたのは、労働をするということ自体が彼女たちにとっては「生」をつないでいく重要なものであったからだ。これは生産主義を志向する働き方とは異なる。

私には、それとも女たちは、なぜこうも一切合財が、髪かざりほどの意味も持たないのでしょう。渋茶色の波をひからせている川にむかって、川よ川よ、と、私は呼びかけていました。愛もことばも時間も労働も、あまりに淡々しく、遠すぎるではありませんか。なにもかもがレディ・メイドでふわふわした軽さがどこまでもつづいているので、まるで生きながら死人のくにへ追われているようです。その思いに暗く重くとらえられてしまう。
それは私が本などを読みはじめたころからこの世のなかに感じた反感と憎悪の白い根

でした。女たちの内発性とまっこうから拮抗しないニッポン！武士道！もののあわれ！近代！
そこにあるもろもろの価値に血が噴くような憎しみを感じた敗戦前後、あかんべえと舌をだすことを覚えました。心の底から日本という質をさげすんでいる自分の火を守りました。それはまるで民族的な訣別へ私を追うような強さで、私の歩みを押しました。（森崎〔1961〕1977、2 頁）

森崎は 1960 年代の初め頃、子供たちを負ぶって手をつないで炭鉱町を歩き、敗戦後みんながなにもなかったかのような顔をしている状況を感じ取り、その状況を断固として拒否した。「女である」ことと向き合おうともしない「日本」を憎む。日本に渡航してきた以来「居場所のなさ」は森崎にとって日本と向き合う大きなきっかけとなり、自らの「女である」ことをもって日本と向き合おうと新たな「言葉」を作り出す。それが炭鉱の女性たちへの「聞き書き」である。

かつて炭鉱で坑内労働をした女性たちは「坑内労働をその肉体をもって思想化している者」（茶園 2018、99 頁）であり、そこから森崎は「女である」ことを語る場所を得る。その女性たちとの出会いと交流は、豊かな方言の世界への参加であり、文字を基盤とし概念に縁取りされたものではなく、生活の実感としてお互いにつたわりあっているものとの世界であった。老女たちのお話を聞く場において森崎は圧倒されるような感覚を覚える。

私はその熱烈な話ぶりにのまれながら、うなずいた。こういう雑談の場は、いっせいにみんなが話を出すので電話の混線のようになる。声が一段とはねあがる。……ほんとうに、おそまつなことながら、私はこうして神話や昔話のなかみに通じる生命の観念が今日なお文字としてではなくて、生活の実感として伝わりあっていることと、それを軸にしてある体系が共通のものとして活動していることを知り、かつ、その場にゆき当たってびっくりしたのである。（森崎 1977、15〜16 頁）

聞き書きは、このような女性たちとの出会いと交流の中から森崎が感じ取ったエネルギー[26]を通して、性と労働の言語化に挑む「方法」であった。ところが、聞き書きはあくまでもそれで完結してしまうものではなかった。森崎も坑内で働いた女性たち個人に話を聞きに尋ねるが、それがいつもうまくいくことはなかった。話は中断され、語る方が「口をつぐんでしま」うこともさんざんあった。それにも関わらず森崎は話を「読者

[26] 大門は、森崎が日本に渡航してきた後日本に溶け込むことができずいたから、女坑夫たちの労働と愛に対する「エネルギー」に惹きつけられたと分析しているが、これは森崎の日本に対する言葉・言語の感覚と朝鮮に向き合う態度を考慮していないものである。大門正克『語る歴史、聞く歴史―オーラル・ヒストリーの現場から』岩波書店、2017 年。

の方々にいくらかでもまっすぐに受けとってもらうために、その条件のなかの一面を書きとめておきたい」（森崎 1977、75 頁）のであった。そのために炭婦協と炭鉱の主婦会の集まりにも参加して見聞きした（森崎 1977、231 頁）のである。様々なレベルでの交流を通した森崎の聞き書きは、朝鮮生まれ育ちという出自とそれによる移動、戦後日本との向き合いを自分の「女である」ことに基づいて展開していき、女坑夫の話の中から「性」と「労働」の関係を探る「方法」であった。「方法」としての聞き書きは、朝鮮経験を過去のことにせず「回路」としてする手法とも似ている。

小括

第 1 章では森崎和江の『慶州は母の呼び声』、『闘いとエロス』『第三の性』「狐」「非所有の所有」『まっくら』を主に取り上げた。森崎和江の父・森崎庫次を中心とする朝鮮経験を検討し、日本人教育者としての父が持つ矛盾と葛藤、自由放任という教育方針に焦点を当てた。戦後、父を経由した植民地主義への考察とともに朝鮮と日本の違いを感じ取りつつその違いから「女である」視点を得た森崎が労働運動・サークル活動によって向き合う性の言語化を模索・展開する様子を分析した。その上で坑内労働を行った女性たちへの聞き書き行為が持つ意味と聞き書きの根底に流れる労働と性の関係性を分析した。

これらの分析は、森崎にとっての「朝鮮」が戦後の思想と運動にどのような形で響き、働いているかを念頭に置いて行った。父からの影響の受け身ではなく、朝鮮経験の中に位置する父の行為と意味を考えることは「日本」を相対化することを可能にした。そして「日本人」対「朝鮮人」という国民国家の分類に頼らず、「日本人」の中の様々な「日本人」すなわち「異族」を探し求めたのである。民衆次元での他民族との接触、出会いへの探求も同じ文脈で理解できる。森崎が自身のくらしとともに付き合ったのが炭鉱の女性たちであった。坑内労働を行った女性たちから話を聞き取り、その労働と性、更に炭鉱から広がる女性たちの労働と性に目を向けた。

以上から引き出された論点は、「女である」ことへの着目から得られる性と労働、生命再生産という要素であり、これは九州という地域に限らない問題として残り、炭鉱におけるジェンダー規範を様々な角度から考察するため重要である。また、森崎の聞き書きからは、生産主義に捉われない女性の労働が性の関係性からみると明らかになるということも重要である。これらは、生産主義によって支えられる近代石炭産業に対する問いかけでもある。

次章からはこのような森崎の問いかけから炭鉱を題材にした文学作品と労働運動、サークル運動における生活綴方、映像を分析していきたい。

第２章　文学における炭鉱という場所

本章では、炭鉱の労働と炭鉱を取り上げた文学作品をとりあげ、「炭鉱」という場所が戦後日本において持つ意義と性格を明らかにする。「炭鉱」という場所は、近代エネルギー産業の中枢として、その「光」と対比される「闇」―過酷な労働条件と生活、各種の坑内事故発生、外地からの強制動員など―に象徴されるような捉え方がある。近年、日本では長崎県に属する端島（通称・軍艦島）が 2015 年国際連合教育科学文化機関(UNESCO)の世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産～製鉄・製鋼、造船、石炭産業」に登録されるにつれ、産業遺産としての炭鉱が注目を浴びている。軍艦島の世界遺産登録には韓国側の強烈な反対があり、朝鮮人の強制徴用及びその実態を明示する条件で登録はされたが、その後約束が履行されてないとの抗議を受けるなど、問題は続いている。軍艦島は 2009 年より上陸が解禁となり、フェリーに乗船し、島に上陸し一部を観光することができる。軍艦島には戦時期に約 500～600 人の朝鮮人が動員され（林えいだい 2010、162 頁）、近年には韓国で強制徴用される朝鮮人たちを描いた映画『軍艦島（原題：군함도）』が 2017 年公開された。この映画における炭鉱労働と生活の描写と演出は、日本の帝国主義と植民地支配に対する批判のみが強い。軍艦島の世界遺産登録をめぐる問題とこの映画の公開に当たり、韓国のマスコミには韓国人（朝鮮人）の悲惨な歴史と日本帝国主義、現在日本の歴史教育に対する批判と反省を求める動きがあふれている。

それに先立って 2011 年には、山本作兵衛（1892～1984）が制作した炭鉱記録画（「山本作兵衛コレクション」）が UNESCO の世界記憶遺産に登録された。この炭鉱記録画では、福岡県の飯塚市で生まれ、炭鉱労働者として筑豊を転々した山本作兵衛自身が経験した炭鉱の暮らしと文化が万遍なく表現されている。山本の作品 697 点の内 627 点が現在、九州の福岡県田川市にある田川市石炭・歴史博物館に所蔵されている。

近代日本におけるもう一つの炭鉱地帯であった北海道の場合、2006 年に夕張市の財政破綻による夕張の石炭博物館の存続の危機をきっかけに、北海道の石炭産業遺産への存続と保存が喚起され、2007 年には NPO 炭鉱の記憶推進事業団の発足とともに「そらち炭鉱の記憶マネジメントセンター」が開館する[27]。同事業団は 2018 年、石炭博物館の改修工事の後リニューアルオープンの際、指定管理者となった。

炭鉱は日本の近代化を成し遂げた産業革命の中心となる場所としてますます注目されている。また、炭鉱及び関連施設を「世界」の遺産としてしようとする側を含めて現在の展示館・資料館など施設、廃坑となった炭鉱の記録保存やツアーなどには、いずれもその生産力の遺構をノスタルジックに回顧する傾向があり産業遺産やダークツーリズムなど観光の視点も強い。

日本近代の炭鉱の歴史や記憶にかかわる先行研究では、池田浩士『石炭の文学史』（2012）が、海外進出文学論として炭鉱文学と朝鮮人問題を取り扱っている。先述したように、炭鉱という場所はその「光」と「闇」といった見方では説明しきれない。ドイ

[27] 「そらち炭鉱の記憶マネジメントセンター」http://www.mc.soratan.com/

ツ文学者の池田には、かつて日本の国策事業としてあった炭鉱を保存し近代化遺産として見直そうとする動向とは異なる視点がある。池田は、物質としての「石炭」に含まれた意味からなる小説を論じ、朝鮮人問題、プロレタリア文学における生産文学への検討などが行われている。池田はこの研究をはじめたきっかけを、次のように述べている。

「石炭の文学史」というテーマと向き合いはじめた当初、わたしはただ、いわゆる産業革命(第一次産業革命)以来の近代化の文字通りのエネルギー源となった石炭が、文学表現のなかでどのように描かれてきたかを、作品に即して見なおしてみたい――というきわめて単純な思いをいだいていたに過ぎなかった。欧米諸国と日本とをつらぬく資本主義体制と資本主義社会の形成・展開・頽落の過程そのものを、石炭を描く文学表現によって再構成したみたい、と考えたのである。だが、一九七八年夏、初めて中国東北三省を訪れ、黒龍江省ハルビンが国際開放都市となって最初の日本人訪問団の一員として市内の諸施設や「七三一部隊」の跡地を実見し、さらには遼寧省の瀋陽(旧・奉天)に程近い撫順炭鉱でかつて「苦力」として日本人に使役されていた中国人古株労働者の話を聴く機会に恵まれたとき、「石炭の文学史」への関心は「海外進出文学」という構想の一環として具体化しはじめた。(池田 2012、510 頁)

過去の歴史のひとこまをふりかえろうとするとき、もっとも困難な作業のひとつは、その時代の現実を具体的に生きた人間たちを等身大で想い描くこと、その現場の感情と視線を具象的に追体験することである。(池田 1997、388 頁)

引用において「近代化」と述べられている部分は、日本の国策により内地のみならず「外地」や「海外」において行われた石炭増産が不可分であることが示唆されている。その上で池田が重点を置いているのは、文学作品を通して可能な限り物質としての石炭と場所としての炭鉱が当時を生きる人間たちにとってどのような意味を持っていたかを積極的に探ることである。

なぜ池田はその方法論を「海外進出文学論」と名付けたのか。それは池田が「海外進出」という言葉をあえて使用していること自体が、「侵略」・「収奪」・「だまされた」・「被害と加害」といった現在における言葉の乱立が実際に「歴史的現実」に触れることなく行われている今日への批判的態度であるからだ。『石炭の文学史』の問題意識とは植民地と宗主国の単純な関係を描いていることなどに限らない。池田が「石炭の文学史」を、「資本主義体制と資本主義社会の形成・展開・頽落の過程そのもの」を描くのではなく、生きた人間の肉声から考えてみようとした点は重要である。

例えば、1930 年代末に撫順炭鉱において展開されていた石炭から石油への資源開発をめぐる様々な人間の思惑を描いた小山いと子『オイルシェール』(1940) は、「国策とともに死すべき運命」であり「自分一個を殺すことによって重要な国策事業であるオイ

ルシェール工業を生かすという道を選んだ」人物の話である（池田 2012、244～249 頁）。このような作品の読み方は、「侵略」・「収奪」という言葉によって語られる植民地主義の支配・被支配の関係の言葉とはかけ離れている。

本章では石炭と炭鉱の歴史に対して現在の文脈において裁断するのではなく当時を等身大の感覚で読み解こうとする池田の基本的論じ方を受け入れながらも、三好十郎の作品に対する分析からみえるような、炭鉱での女性の労働に関する読み方には、補足が必要であると考える。

プロレタリア文学の擡頭によって社会的な声を上げてきた坑夫たちは、それゆえ本来の意味における「げざいにん」としての自己をあらためて発見する可能性だけでなく、むしろその自己がいっそう大きな「大儀」に帰一する道を歩む可能性にも直面していたのだ。

シュプレヒコール「婦人よ、列へ！」が書き上げられた一九三二年一月には、満州事変に投入された日本軍は、満州の全域をすでに制圧していた。この作品が一九三二年三月八日の「国際無産婦人デー」に上演されたときには、すでにその一週間前に傀儡国家「満州国」が樹立されていた。石炭と石炭に関わるあらゆる労働もまた、むしろこの労働こそがまず、歴史のこうした展開と無関係ではありえなかった。（池田 2012、155～156 頁）

池田は、三好十郎が炭鉱をテーマにした作品を集中的に書き上げた時期に注目し、三好が炭坑夫を取り扱った作品のみならずそうでない作品も「国際婦人デー」を念頭に置いていたと指摘する。池田は「国際婦人デー」に向けてのシュプレヒコールとして発信した三好十郎「疵だらけのお秋」(1928)には炭坑夫は登場しないが、それとともに炭坑夫が登場する他の作品を重ねて読んでおり、ところがその最終的読み方は観客に「ゆだねられている」ものとして保留している（池田 2012、155 頁）。しかし三好十郎の詩「敗れて帰る俺達」において女性坑夫の労働が坑内労働と子育て、つまり「夫を落盤事故で亡くして幼い子供をかかえるヨロケかかった」側面をもっており、それが「疵だらけのお秋」が内包している女性の性・生殖の問題と共に論じられる可能性を持っている。池田の研究においては「年配の男性坑夫」の経験と明白に異なっている女坑夫の経験を同一なものとし、炭鉱におけるジェンダーの差異を一般化された「「げざいにん」としての自己」に収斂させている。本章では、文学作品における炭鉱の女性に着目し、場所としての炭鉱がジェンダーの問題と再生産労働という領域までを抱え込んでいたことを考察する。

上野英信と帚木蓬生の作品は、九州筑豊の炭鉱に存在した朝鮮人部落（「アリラン部落」）を作品の中で重要なテーマとして書いており、朝鮮人の強制連行及び労働、それが孕む問題群に着目している。畑中康雄の作品も「組織化」されない、炭鉱を支える労

働力としての人間たちを描くことで、戦後炭鉱を成り立たせるものを問うている。井上光晴と渡辺淳一の作品は、背景になる場所が九州と北海道という違いがあるが、炭鉱が戦後において持つ位置を示していることと、「性」と関連して登場するということで共通している。また、二人とも作家自らの体験が小説の素になっていることも注目すべきだろう。井上光晴は佐世保の崎戸炭鉱で働きまた共産党員であったことを小説の主人公に投影している。渡辺淳一も作家でありながら現役医師であったこともあって、多数の小説は医師の立場から書かれている。二人の作品には生命再生産という領域が女性の身体に加えられる傷痕において表現されている。高橋揆一郎の作品は女性を語り手、もしくは主人公にして、炭鉱町に暮らす人と人の関係が繋がれていくこととそれが性と絡み合っていることを書いている。

第１節　炭鉱とアリラン部落――上野英信「あひるのうた」帚木蓬生『三たびの海峡』

第１章で取り扱った森崎和江とともに『サークル村』に参加した記録作家の上野英信の小説を通して、炭鉱で労働する人たちのみならず炭鉱の周辺に集落をなして暮らした朝鮮人、日本人の暮らしを検討する。

上野英信「あひるのうた」（1954）は実際に炭鉱で働きながら所謂「アリラン部落」に住んでいた上野自身の経験に基づいて書かれた短編小説である。この作品とともに、1990 年代に映画化もされた帚木蓬生の『三たびの海峡』も検討し、「アリラン部落」と呼ばれたところ自体が炭鉱を構成し労働を成り立たせる要素であったことを検討する。

筑豊の炭鉱には、1939 年 7 月「国民徴用令」が公布されてから 1945 年の終戦までのあいだに約 15 万人が強制連行された（林 1981、103～104 頁）。炭鉱があるところには朝鮮人の収容所と寮、社宅、居住地があった。朝鮮半島から強制連行されてきた人達が入る宿舎は一般的に「朝鮮人寮」「訓練所」「合宿所」と呼ばれた（林 2010、88 頁）。いわゆる「アリラン峠」「アリラン部落」と呼ばれるものがあり、むろん地図には載っていない。林えいだいは次のように説明している。

筑豊の炭鉱周辺には、必ずといっていいほどの通称アリラン部落とか、アリラン峠がある。炭鉱が盛んな頃から朝鮮人の家族が集団で住みついた、その名残である。道路の左側に三菱鯰田炭鉱第 5 抗の朝鮮人寮があり、成績の良い坑夫には外出が認められ、峠を越えた下鴨生の在日同胞の営む食堂でマッカリを飲み、雑炊を食べた。そこでは朝鮮語を話し、故郷を想い出しながら、店にきている同胞とくつろいだ。店を出ると再び寮に帰らなければならない。アリランの歌を口ずさみながら峠を越えた。誰がつけたか、アリラン峠と呼ばれるようになった。（林 2010、93 頁）

引用からは炭鉱で働く労働者たちの寮とアリラン部落は遠くないところにあったこと、そしてアリラン部落では朝鮮語の使用と朝鮮料理が食べられることなどがわかる。

しかし終戦後にもその地に住み続けるようになった人たちはどのような生活をしていただろうか。

記録文学作家の上野英信は、実際に自分が住んでいた「アリラン租界」で見たこと、経験したことに基づいて「あひるのうた」を書いた。この作品が掲載されている『地下戦線』は上野英信がかつて共に労働していた日炭高松炭鉱第一坑の仲間たちと作った文芸誌であった。高松炭鉱（現・福岡県遠賀郡水巻町）第三坑は、上野が二度目の坑夫として働き 1953 年に解雇された場所である。その後、上野は日炭高松炭鉱第 3 坑の近くにあるアリラン部落に住み始めた。大家さんの孫たちの勉強をみてあげることと借家人が納める「アリラン焼酎」を自由に飲み、部屋代は不要だという好条件であった（上野〔1954〕1985、295 頁）。

作品は、紙芝居のおばさんとどんじゅうばあさん、そしてギリ少年を中心に展開される。紙芝居のおばさんの家で飼っていたあひるが誰かに叩かれて死にかけたのが物語の始まりである。舞台は「アリラン租界」であり、狭くて貧乏な生活、朝鮮語が飛び交う場所である。

紙芝居のおばさんは彼らにむかって、あたかもヤマの子どもたちに紙芝居を見せる時のように、劇的な熱弁でことの次第を報告し、朝鮮人の残虐と無礼のほどを語ってきかせた。が、隣人たちは、彼女のいかにも紙芝居らしい弁舌のはなばなしさには慣れきっていたので、べつに驚きはしなかった。朝鮮人たちとのあいだに朝晩の挨拶みたいにくりかえされるいざこざにも慣れきっていた。
なにしろこの界隈は、「アリラン租界」と名づけているほど朝鮮人の多い地区だ。彼らの大部分は現在、養豚や屑鉄回収、焼酎の密造などでほそぼそと生計を立てているが、戦争が終わるまではここのヤマで働いていた人たちばかりである。（上野 1985、196～197 頁）

作品からわかるように、ここは「アリラン租界」とは言っても朝鮮人だけではなかった。紙芝居のおばさんもどんじゅうばあさんも日本人であるが、二人は朝鮮人に対して極端的に反対の態度を示す。紙芝居のおばさんは朝鮮人を罵るがどんじゅうばあさんはギリ少年をかばいながら彼の面倒までも見てあげようとする。

もともとどんじゅうばあさんは大納屋の頭領の子どもとして生まれ、百姓出身の夫と共に坑内でたくさん働いた。今は紙芝居のおばさんの部屋に居候しながらゴミ拾いをして生計を立てている。このように、炭鉱の周辺では極貧な生活のなかに日本人と朝鮮人という民族の違いは、対立だけではなくつながりの可能性を孕んでいた。

アリラン部落は、帯木蓬生（ははきぎ・ほうせい）の長編小説『三たびの海峡』にも登場する。帯木は、福岡県小郡市生まれで、東京大学文学部仏文科を卒業しテレビ局勤務、その後九州大学医学部を卒業したのち精神科医となる。1988 年に北九州市の八幡

厚生病院に赴任後、在日二世である同病院の副院長や元炭鉱夫の患者から朝鮮人鉱夫の話を聞いたことをきっかけに、『三たびの海峡』を執筆する。この作品は、第 14 回吉川英治文学新人賞を受賞し、1995 年に神山征二郎監督、三國連太郎主演で映画化された。

この作品のあらすじは、以下のようなものである。現在の韓国、河時根（ハー・シグン）は韓国・釜山で大きい会社の会長であるが、病におかされ人生の最後が見えたことをきっかけに日本に渡り、かつて自身が働いていた「高辻炭鉱」を訪れる。彼は日本統治時代の 1943 年に、慶尚北道尚州村から造船所で働くとだまされ九州の炭鉱に送り込まれた過去を持っている。かつて炭鉱夫たちを暴力で支配していた労務監督・山本三次が政治家として選挙活動を行い、炭鉱で死んだ朝鮮人鉱夫たちが眠る丘を開発によって消し去ろうとしていることを知る。

作中では、河と鉱夫仲間たちが自由時間にアリラン部落にある食堂でハルモニが作る朝鮮のご飯を食べて、アリランを歌いながら帰る光景が描かれている。労務監督による暴力と過酷な労働、仲間の自殺などに耐えられなくなった河は脱走を図るが、逃亡に気づいた労務担当を絞殺し、アリラン部落に隠れる。その後、遠賀川の護岸工事をする安川組に入れてもらい、一緒に働く日本人女性千鶴と恋に落ちてしまう。二人の関係は認めてもらえずアリラン部落に駆け落ちする。終戦を迎え、同胞たちは喜ぶが河は喜べない。帰国船には一緒に乗れない千鶴とともに朝鮮に密航し、河の故郷である慶尚北道に帰るが、韓国の農村になじめない千鶴と生まれた子どもは日本に帰ってしまう。

この作品においてアリラン部落は、暴力と朝鮮人への差別、圧制が日常だった炭鉱での生活を忘れさせ、骨休めができる場所であった。炭鉱で働く朝鮮人たちが祖国を想い出す場所でもありながら、困ったことがあるときには信頼して頼れる場所でもある。

第２節　炭鉱の「周辺」――畑中康雄「泥だらけの記」「後山」

ここでは樺太の炭鉱と引揚げ後には北海道の芦別炭鉱で働きながら小説を書いた畑中を取り上げ、炭鉱の飯場に基盤をもつ下層労働者たちのくらしを読んでいく。畑中康雄は 1928 年に樺太生まれる。樺太の炭鉱で働いたのち引揚げ、1950 年、北海道歌志内市で、土工をしながら康雄小説を書きはじめる。1956 年、「泥だらけの記」が炭労文芸コンクールに入選し、以降『炭労新聞』『月刊炭労』『炭道文学』『新日本文学』『現実と文学』などに作品を発表する（畑中康雄 1976）。小説をはじめ『小林多喜二の文学』『革命は何処へ行った』などの評論と「東馬流」「南部の廃鉱」「足尾」「松川・芦別事件オルグ日記」などのルポルタージュを書く。1971 年からは個人誌『年刊労働者』を発刊し続いており、2018 年で第 46 号を迎えている。

ここで取り上げる「泥だらけの記」は、畑中康雄の小説集『炭鉱（ヤマ）』（土曜美術社 1976 年）の巻頭に収録された作品で、1956 年炭労文芸コンクールに入選したものである。飯場で暮らす労働者「僕」（只野）は 25 歳で東北の片田舎に農家の三男として育った。飯場の隣部屋には常雄夫婦が住み込みでいて妻のふじ子は飯場の炊事婦である。

只野と常雄らが過ごしている宮島組の飯場は、この町のK炭鉱の下請業をしているがいまは仕事がきれているため誰もいない。常雄はいつも炭鉱で働くことを夢見ているが、僕はただ目的もなしに過ごしているだけであり、その中久しぶりに命じられた仕事は「門を造る」ということであった。

詳しい真相は分からないまま、人足たちはただただ命じられた仕事をするのであった。何の仕事すら分からずに多くの人数が集まり、僕等は仕事があること、賃金がもらえることに喜んでいる。しかし現れた炭鉱夫たちによってこれは「会社のロックアウト」ということが明らかになり、仕事が中止される（畑中 1976、44 頁）。その後、周辺人物の面々が描かれる。只野は彼らを見ながらふと故郷の光景と家族を思い出す。只野は結核（「肺病」）に罹り、故郷にいることができない立場であったことに対して、常雄は樺太からの引揚者であったが父親の故郷の農村で知り合ったふじ子と駆け落ちして、いまは二人で世帯もちたい、故郷に帰りたいと夢見ている。「故郷」に対する二人の想いは全く違う。

この作品の中心にある出来事は、わけも分からず働かされ、ただ賃金が目的である土方とストライキを起こす炭鉱労働者たちとの対立である。「わたくし達は労働者同士です。話合って分からないことはありません」「…話せばわからないことはないはずです。みんな働くもの同士ですからね」と「労働者」を名乗る炭鉱労働者たちは自らの立場を明確な言葉で説明する（畑中 1976、44〜47 頁）。対して、土方やその他の人物たちは仕事を求めて飯場にくる様々な背景を持った集団で、出自もそれぞれである。

このような違いを木下昌明は、「組織化」・「未組織化」という問題として捉え、小説の結末を「階級的闘争にはいまだ無自覚であっても、それでも現実のどうにもならない労働生活から脱皮していこうとする（いかざるをえない）主人公の姿勢がにじみでている」と評価する（木下昌明 1977、105 頁）。また木下は、ストライキから炭鉱労働に戻って一人前の人間になり故郷に錦を飾りたいと言う常雄と、レッドパージのため炭鉱に流れてきて労働運動の阻止に動員されることに矛盾を感じる岸本が、「組織労働者になるだろう」と考えられる只野の二つに分かれた未来への暗示であり伏線であると述べている。このように只野の組織化への可能性を読み取ることは、作品に添えられた「作者注」によって実際の作者畑中と作中の只野が一致していると受け止められたことによる。作者自身がこの作品を自分の物語として註釈を加えているため、作品と作者自身の履歴を合わせて自伝的に読む方向性が提示されている。

翌年、僕は三井芦別炭鉱に入った。炭鉱夫になるのが、僕の夢だったのである。そこでは、一九五二年の炭労全山の六十三日スト、翌年の三鉱連の「英雄なき一一三日」に企業整備反対闘争と、烈しい闘いが続き、僕自身もその渦中にあったのだが、階級意識にめざめるということがなかった。（畑中 1976、268 頁）

そこ［労働組合の学習講座：引用者注］で僕なりに、労働者の書く文学はどういうものでなければならないか、という問題と対決することになった。こうして僕の内部の変化の後に書いたのが「泥だらけの記」である。歌志内市の土方生活を題材にした。これが、その年の炭労文芸コンクールに入選したのである。僕の今日までの、そしてこれからも続く文学活動の、第一ページの作品であった。次に「泥だらけの記」の一ヵ月後に書いた「後山」が、翌年の『炭道文学』コンクールに応募して入選した。こうして僕は道炭労の文学運動に参加していくことになった。（畑中 1976、269 頁）

しかし、この作品における炭鉱という場所の重要性は、「組織」と「未組織」を論じる手前にあるそれぞれの来歴を抱えた人間群像にある。引用のように、作者自身が炭鉱の労働者として炭鉱にいた時期は、歴史的な運動が盛んになっているときに重なるが、「階級意識にめざめるということがなかった」というくだりは注意深く考える必要がある。彼にとっては「組織化」とは異なる人間関係性がある故に、働くもの同志の連帯を求める炭鉱労働者たちの発する言葉には違和感をいだく。この作品では、労働組合に組織化されていない周辺人物の織り成す関係性が只野の飯場生活を生き生きとしたものにしている。作品の最後に只野が故郷と兄妹を思いながら寂しく涙を流すシーンが目立つ理由は、にぎやかに夫婦喧嘩をする常雄・ふじ子とやっと 7 人目に男の子が生まれ喜ぶ馬車追夫、黙々と豚を養う爺さんがそこにいるからである。

「泥だらけの記」において、澄んだことのない「黒い流れの小川」沿いの狭い小屋で養われる「豚」は、土方たちの姿でもある。只野は 2 カ月で汚い布団のにおいになれる。この豚のような暮らしからの脱出の方向は、常雄においては坑夫として坑内労働にはいることに向けられている。只野は、坑内労働者との対峙の後、匂いになれた豚小屋のような生活を「狭いところだなあ」と自覚し、次の展開を準備する形で物語が終わる（畑中 1976、51 頁）。

畑中康夫の「後山」（『炭道文学』第 6 号のコンクールに入選）は、「泥だらけの記」と同じ時期に書かれたものであり主人公は同じく東北の農村に三男として育った只野信三である。後山の只野はもともと「炭積み」をしていたが、半年くらい前からはより賃金の高い坑内労働に請負で出される。しかし彼は炭鉱の切羽現場の労働において一番必要とされる、効率性を欠けた「どんじり」とされる。38 歳になって、切羽で働くようになってから半年も経っていないが、器用でもなく、気転の利かない男である。坑内労働に向いてないが彼がやめられないわけは、新しく 4 人目の子供が生まれたためである。只野は何回も自分の不器用さを感じながらも、生まれたばかりの赤ん坊と妻、子供たちを浮かび上がらせる。只野は休みの日には大根干しをし、魚を買いに行く。そこでも彼は激しい奥さんたちとの競いで負けて「足が満足に揃っていない」魚を持って帰る（畑中 1976、73 頁）。

「後山」は「泥だらけの記」と同じように、結末は多少感傷的なものになっており、

いずれも主人公は作者自身を思わせる。1977 年の『月刊社会党』では労働者文学研究会によって畑中康雄文学の特集が組まれているが、先述した木下昌明と共に小田美智男は、畑中康雄の文学のなかにあるべき労働者文学を見いだそうと試みている（小田 1977、111 頁）。しかし、本節でも述べたように労働者文学のあり方を想定した上で畑中康雄の作品を見た場合、階級意識に目覚めていく労働者像が評価の中心になる一方で、東北の寒村にとどまることができず故郷を思い出し感傷的に涙を流す、季節の変化を語る主人公は、階級意識の形成からははずれていく。不器用でながらも助けてもらえる仲間と心が引かれる同僚がいて、怒鳴るばかりの先山のことを理解しようとする心遣いからは、炭鉱における人間関係の重要さがうかがえる。

第３節　戦後の炭鉱における「闇」――井上光晴『虚構のクレーン』

戦後の工業化を中心にした経済成長の主要なエネルギー源として「黒いダイヤ」と呼ばれた石炭は、増産体制のなかで多くの「闇」を生み出した。この節では井上光晴の文学作品『虚構のクレーン』（1960）を取り上げ、炭鉱における「戦後」とは何であったかを考察する。

井上光晴は、1926 年に福岡県久留米市で生まれた。両親がそれぞれ家を出たため、1933 年に祖母と共に佐世保に転居する。1938 年からは親族を頼って佐世保の外海の島にある崎戸炭鉱へ移り、井上自身も 1941 年から坑夫として働く。戦後には共産党に入党するも 1953 年に離党、上京後に吉本隆明や奥野健男と『現代批評』を創刊、1970 年からは雑誌『辺境』を主宰している。井上が坑夫として働いていた崎戸炭鉱は、1907 年に九州炭鉱汽船が採炭を開始した。当初から三菱の資金融資を受け、1911 年には三菱が株式の半分を取得し販売権を独占する一方で、蛎浦坑（第一坑）、浅浦抗（第二坑）、福浦坑（第三坑）と次々に坑口を増やし採炭の近代化を図った。1940 年には三菱鉱業が九州炭鉱汽船を合併し、北海道の三菱美唄に次ぐ出炭量を誇る九州における三菱系列炭鉱で最も多い出炭量となる。崎戸炭鉱では 1910 年代から朝鮮人坑夫が働いていたが、竹内康人の調査によれば 1939 年から 1944 年末までの間に計 6000 人以上の朝鮮人連行があった（竹内 2013、296 頁）。1944 年 8 月末からはサハリンからの炭鉱労働者の転送が始まり、崎戸炭鉱には朝鮮人 510 人と日本人 1570 人が送られてきた（髙實 2016、5 頁）。1943 年には崎戸炭鉱は 126 万トンの出炭を記録するが、1943 年から終戦にかけて常時約 3000 人ほどの朝鮮人が働いていた。また朝鮮人女性も存在し、島の北西部にあたる蛎浦の奥浦には 20 軒の遊郭があったが、そのうち 2 軒は朝鮮人遊郭であった。また島の中央にあたる浅浦の菅峰は「アリラン峠」と呼ばれ、菅牟田の三軒屋には三軒の朝鮮人遊郭があった（竹内 2013、306 頁）。

橋川文三は、『虚構のクレーン』の解説において、『地の群れ』を含めた井上光晴の作品に描かれているものは、「炭坑、原爆、癩、朝鮮人、部落、特攻隊、天皇制、右翼、共産党など、すべて戦争という極限状態を背景として、人間存在の究極の意味を問いつ

めるにふさわしいような問題ばかり」であると指摘している（井上 1969、300 頁）。また原爆文学の側からも、『地の群れ』は「井上文学の主題の一切が投入されている、いわば総決算的位置に立つ」作品であり、「長崎県を舞台に、被差別部落民、在日朝鮮人、共産党員、炭鉱、原爆犠牲者、原爆症など戦後の日本がかかえ持つ病根を、重層的な構成のもとに鋭く剔出した、独特の作品」と評価されている（水田 1997、193 頁）。

井上光晴の『虚構のクレーン』は佐世保の海底炭鉱を一つの舞台にしながら「戦争と天皇制」を問う作品である。この作品の主人公仲代庫男は東京で空襲によって焼け出され電車で佐世保に向かう途中、尼崎で薬専の学生だという女性芹沢治子を窓から列車に引き上げる。この出会いをきっかけに仲代は佐世保近くの炭鉱で働きながら長崎の浦上に帰った治子と文通をはじめる。仲代は鹿児島の七高（第七高等学校造士館）に通っていたことがあるが、ある事件をきっかけに退学となる。七高で仲代が所属していた日本文学の読書研究会「土曜会」が、影山正治と橘孝三郎の影響を受けた上級生桜井秀雄の参加によって「右旋回」した。仲代は、満州の父親から送られてきた文芸雑誌の評論を土曜会で取り上げたが、転向した元左翼文芸評論家の岩上順一の評論の無断転載であったことがわかる。仲代の無知を批判した同級生の家に乗り込み口論となるが、結核の末期であった同級生は数日後に死んでしまう。相談に行った上級生の桜井の家で「異様に力をこめた腕によってある行為を強いられ、一挙に呪われた関係に陥った」のである。退学を選んだ仲代は東京で國學院大學と電気の専門学校に通っていたが、中野で焼け出されていた。

作品には冒頭から「朝鮮人」たちが登場する。彼らは徴発され日本人班長に引率されて炭鉱に向かっていた。この船の乗り場である関門海峡で出会った朝鮮人の群れ、また船上での空襲の際に朝鮮人たちに対する軍人たちの威嚇と過剰な統制に仲代は強い違和感を覚えると同時に、かつて炭鉱で働いていた時の朝鮮人たちのことを想い出す。このような仲代の認識は「朝鮮人も同じ日本人ではないか」（井上 1969、56 頁）、なぜ朝鮮人にひどいことをするのかという疑問を経て、朝鮮人たちの存在自体からある「不穏さ」を感じ取るに至る。

「皆朝鮮から来られたんですか」仲代はいった。
「行きましょう」芹沢治子は彼を促した。その時さっきの男とちがう椅子に座っている朝鮮人が、びっくりする声で仲代にこたえた。
「テンノーヘイカノタメ、タンコーユク」
そのまるで幼稚園の子どもが暗唱するような「テンノーヘイカノタメ」という日本語をどのようにうけとめるべきか、仲代がとっさのことに迷っていると、シュッシュッというサイレンの鳴る音が頭上にきこえ、そのサイレンが実際に鳴りだす前に、「警戒警報解除、警戒警報解除」という声が遠くで上がった。（井上 1969、47～48 頁）

「テンノーヘイカノタメ、タンコーユク」というたどたどしい日本語しか話せない朝鮮人から彼は、かえってその言葉がひどく天皇を侮辱しているように思うのであった。これは仲代が昭和天皇の「玉音放送」を聞いてから坑内に入って終戦を告げる時「ちんちられん」（信じられん）としゃべる朝鮮人のことばがもたらす響きとも通じるものであった。後述する炭鉱で起きる一銭銅貨事件とも関わって、このように仲代が感じ取ることは重要である。小説の最後にようやく出される戦争の正当性と天皇制への仲代の疑問は、朝鮮人に対する感情と考え、一銭銅貨事件がきっかけに触発されたからである。そして「日本が負けた」という終戦を迎え、アメリカによる占領体制に入ることは仲代が今まで経験したこと全部を露にする引き金となったといえる。この時、仲代には変貌したとしてとらえる親友鹿島明彦の「これからはアメリカと共産主義だ」という、恐ろしいほど簡潔で現実に迎合する態度は、朝鮮人たちのことがひっかかってしまいすぐにはそう身動きができない仲代の態度と極端的に異なる（井上 1969、287 頁）。

先述した一銭銅貨事件についても見てみよう。仲代は東京から佐世保に帰ってから「戸島炭鉱」に務めるようになる。戸島炭鉱は海底炭鉱で、進学とともに東京に出る前まで仲代が育ち、また働いていたところでもある。今度は採鉱作業と関連して代数、物理、化学などを労働者たちに教える「技能者養成所」（青年学校）の教員である。佐世保に帰ってから間もなく空襲があり、その直後に戸島炭鉱の朝鮮人労働者一人が宿舎の便所で首を吊った。問題はその自殺した崔班秀の葬式の日に起こった。崔の火葬場に行く途中の道に、一銭銅貨４枚を重石のようにして「朝鮮人たちがまんしろ、もうすぐだ」（井上 1969、149 頁）と日本語で書かれた半紙が発見される。誰がその半紙を書いたか、何が起こっているのか、など様々な憶測が飛び交うなかで、その事件について知っているという理由で朴本準沢（朴準沢）が警察に逮捕される。続いて朴本が李山根錫（李根錫）から聞いたと「白状」したとされ、今度は李山が引っ張られて行く。李山がひどい訊問の末に出した名前の兪済永は警察がなだれ込む寸前に薬を飲み込んで自殺する。

仲代は、自分の意志とは関係なく展開されていく朝鮮人たちの苦難と死に会わされ戸惑うばかりである。そしてその都度仲代の頭を過るのは過去の友達である「高善烈」であった。

彼の前に黒々と横たわっている関門海峡のように海底炭坑の切羽も暗くもの悲しかった。先に行くに従って天井が低くなる暗い坑道は百メートルも先から坑夫たちの垂れた糞便の饐えた匂いがガスの匂いにまじって鼻をついてくるが、時々その匂いがひどくニンニク臭くなるときがある。朝鮮人坑夫の誰かが新しい糞をたれたのだ。そのニンニクの匂いがぷんぷんする坑道で、彼と一緒に掘進の払いにダイナマイトを運んでいた道具方の同僚の高山善烈（小学校の時の高善烈が太平洋戦争勃発直前に山の字を一つつけ加えた）がある日彼にいった。

坑内でニンニクの糞の匂いがするといつもおれは自分のことを考えるんだ。これだから

バカにされるんだという気もするし、ニンニクはおれたちの食いものだからバカにされんでもよい、というような気もする。しかしなぜ日本人は朝鮮人をバカにするのかね、朝鮮人もほんとの日本人じゃないのかね。（井上 1969、50 頁）

朝鮮人たちがまんしろ、もうすぐだ、と鉛筆でかかれた半紙のことから連想して、東京から焼けだされて帰郷する途中、関門海峡で会った、徴用鮮人の集団のことを思い浮かべていたからである。…いまは逆にテンノーヘイカノタメ、タンコ―ユクといった徴用朝鮮人たちのたどたどしい日本語が生々しくきこえてくる。（井上 1969、153 頁）

仲代にはやっぱり本当の気持ちはわからんよ、同じ日本人ならなぜ中途昇坑する朝鮮人ばかりひっぱたくんだ、なぜ日本人の抗夫も同じように叩かんのだ。…高善烈の声が急に半紙の上にのせられた一銭銅貨のように、重く彼の胸を圧迫したからである。（井上 1969、157 頁）

朝鮮人と関わるたびに仲代は周りから朝鮮人たちの味方をしていると見られる。しかしいざ仲代のまなざしはかなり曖昧である。この曖昧さと葛藤こそ敗戦を淡々と受け取る姿勢につながるが、小説のところどころで見えるように「戦争」と「天皇」への根本的認識は維持され続ける。芹沢治子宛の日記形式の手紙で分かるように、彼は炭鉱における朝鮮人の労働実態に対しては改善すべきものだと考えながらも、その根本にある「戦争」という目的の遂行に関しては少しとも譲っていない。七高時代の友達に「戦争は天皇を防衛するための手段だと考えればいいんだ。…」（井上 1969、197 頁）と言っている。これは戦時期の生産様式においては個人も企業も結局のところは利益追求のため総力戦には適しないという昭和の国家主義者・本間憲一郎の言葉の引用からも分かる。

その事件とは別に実際坑内に入るようになって想像以上に朝鮮人抗夫の労働は激しいこと。…特に徴用朝鮮人の労働条件は普通では考えられぬ位悪いもので、もし戦争を遂行し、天皇を守るという目的がなければ、とても考えられぬようなものであることなどをかき送っていたのである。（井上 1969、196 頁）

(2) しかし戦争を遂行していくためにはいろいろ無理もでてくるし、その点をどう調整するかが問題になる。日本人の抗夫もきつい。しかしこの点は朝鮮人も皇国の民という自覚を持って（双方から）少なくとも労働条件も配給も差別がないようにすること。
(3) 葬式の日に起こった一銭銅貨と半紙の行為はやはり罰せられなければならない。書いてあることは事実でも、朝鮮人だけによびかけては逆に差別をひどくするだけだ。日本と朝鮮は一体なのだから、ヨーロッパや米国の民族問題とは異なるということをこの半紙の言葉は考えてはいないということ。（井上 1969、207 頁）

作品の最後まで何回も繰り返す「天皇制打倒という考え方もあるのか」という仲代の言葉は、今までの自分の日常を作り上げてきたすべてを崩してしまう可能性のある問いである。一方、共産主義という新たな答えを求める最中で発せられる言葉でもあった。共産主義と天皇制打倒・廃止、戦争責任が同時に考慮されているのである。

……戦争責任とはどういうものか、考えねばならない。（井上 1969、287 頁）

天皇制廃止という考えがあるのか、天皇制廃止という考え方ができるのか、と昨夜からずっと思いつめてきたことを反芻しながら……（井上 1969、289 頁）

天皇制の打倒という考え方ができるのか、天皇制打倒という考え方ができるのかと思い鉄と鉄を打合わせるようなひびきがふたたび仲代庫男の胸にきこえてきた。（井上 1969、293 頁）

さらに言えば、この作品のもう一つ重要なテーマが後景化されているにも関わらず物語の軸となっていることを忘れてはならない。この作品の軸をなしているのは二つである。一つ目は何より炭鉱の朝鮮人たちであり、二つ目は事後的な表現のみであるが物語の進行に拍車をかける長崎の原子爆弾投下である。

「バケツ」と「国家」「哲学」「一銭銅貨四枚」「万歳」「桜井秀雄」などの言葉が頭のなかでぐちゃぐちゃになり絶句するような悲惨な焼け跡の描写（第 5 章）も原子爆弾投下による惨状を伝えている。ところがその表現よりもっと注目したいのは、芹沢治子の死であり、その死の表現形式である。何度かの文通をへて芹沢治子は、自身が結核と診断され療養生活を送っていることを仲代に伝える。

ねていると、いろんなことを思います。学校のこと、空襲のこと、人間のこと、いろいろです。男は兵隊にいく、女はいかない、男は兵隊にいく、女はいかないと馬鹿なことをぶつぶつくり返したりしています。（井上 1969、161 頁）

治子が仲代に送った手紙の中には、戦時体制のなかで男が出征し、女が銃後を守るというジェンダー編成が提示される。小説の舞台となる崎戸炭鉱では出征する日本人炭鉱労働者による不足を上回る形で連行による朝鮮人労働力が導入され、男性が多数を占める空間が現出した。橋川文三による「解説」には、この作品のタイトル「虚構のクレーン」の題名の意味を井上光晴から聞いた時の様子が書かれている。

井上は少し困ったようににやっとしたが、すぐに全く別のことを話し始めた。

「君にアサイチのことは話したかなあ。話さなかった？」
アサイチというのは、井上が子供のころ、朝風呂に一番乗りで入って来た男の通称だったそうだ。しかし、ただそれだけではなく、その男はまた、その土地一番というべき巨大な象徴の持主でもあったそうだ。それらが複合してアサイチの名称が生まれたということだが、井上はクレーンというとき、その子供の頃に見たアサイチのイメージをなんとなく思い浮かべるというのである……。
クレーンはある力の象徴である。それは、すべて地に引きこまれ、落ちようとするものを、道の空間に向かってきりきりと吊しあげ、身も世もあらぬ錯乱に陥れたのち、奇怪な自己満足のうなりをあげながら、やがてその物を再びどこか別の場所へと置きかえる怪物のことである。敏感な少年井上の眼に映った実存のクレーンは、井上にとって己れの存在を宙吊りにし、やがては別の存在へと変化せしめるあらゆる力のシンボルに見えたのかもしれない。端的にいえば、天皇権力も、原爆も、その後につづいた占領軍権力も、いずれもそうしたクレーンの意味をもったのかもしれない。（井上 1969、299〜300頁）

橋川による井上光晴のエピソードは、「クレーン」を相互に重なる二つの読み方を提示している。一つ目は、この作品を「クレーン」＝男根の象徴をテーマとするものである。土曜会の読書会や上級生の桜井との「呪われた関係」を準備した七高、そして日本人の労務者も連行朝鮮人も男性労働者しか登場しない海底炭鉱など、作品内の主要な舞台は「クレーン」の価値観が支配する空間である。二つ目は、一つ目と重なりつつも「クレーン」を天皇や原爆、占領軍など、「存在を宙吊り」にして「別の存在へと変化せしめるあらゆる力のシンボル」ととらえる読み方である。橋川の提示した読み方に留意しつつ、作品の題名「虚構のクレーン」の「虚構」に力点を置くのであれば、作品中の「クレーン」の虚構性に気づく場面に注意を払う必要がある。「クレーン」が登場するのは、仲代が原爆後の長崎県浦上におもむき治子を探し迷い歩くさなかである。

彼は原子爆弾の焔の筋を斜にはっきり焼きつけている長崎医大病院の壁の前に立ったのである。煉瓦色と白っぽい鉄色の混りあった奇妙な風景が海までつづいていた。コンクリートの建物が上の方だけ溶けてしまい、その一階の窓の下に未開地の人々が使用する石の通貨のようなものがぴたりとはりついている不思議な形をした風景が彼の目の前にひらけていた。地獄が準備する時間もなくやってきたのでとどまっているような、逃げおくれた呻きが鳴っているような、考えようによっては笑いだしたくなるような風景が見渡す限り畑のような段々を作っていた。みごとな悲劇というよりむしろみごとな開拓地とよぶ方がふさわしい風景が物音一つたてず遠く夕日に染まった煙の中に没していた。煉瓦色はやがて間をくぎるように遠くの方から影をつくっていき、浦上駅があったと思われる地点に飛行機の尾翼の格好でつきささっているブリキ板の血のでるよ

うな光を放った。三菱造船所のガントリークレーンの上の小さい雲が一瞬、その血の吹きでたブリキ板を吸いこんで赤く燃え上り忽ち暗い欠片になった（井上 1969、255 頁）。

原爆後の長崎には「地獄が準備する時間もなくやってきた」ような風景が広がっており、「みごとな開拓地」と言ったほうがふさわしい廃墟のただなかに佇むのが三菱造船所の「クレーン」である。橋川の提示した二つの読み方に沿うのであれば、廃墟のなかの「クレーン」を戦時中の男同士の関係性が中心だった社会の崩壊ともよめるが、同時に「別の存在へと変化せしめるあらゆる力」と解するのであれば、それは戦後も継続して仲代やこの作品の登場人物たちの自己の在り方にもかかわる何かを暗示している。

ここでは「クレーン」が何であるかを保留し、作品内では炭鉱で働く女性がまったく現れないなかで、2 つの恋愛において男女関係が描かれ、それぞれの人物の戦後の生き方が語られる。一人目は仲代の友人鹿島明彦で、終戦後に軍需部の倉庫から「士官服」を盗み出し、市役所にも盗みに入ろうとしたことから逮捕される。鹿島は、戦時中からコンサイスの英和辞典を多数購入して備蓄しており、空襲で焼け出されたときも唯一の財産としてトランクに入れて運び出し、敗戦後の米軍占領を予期している。鹿島は、配給のタバコを刻んでヨモギや独自の材料を混ぜて 10 倍の量にして販売し、したたかな生き方をする人物として描かれている。タバコを売りに行く徴用工員寮の先には、熊本から来た女子挺身隊の寮があり、鹿島は隊員の一人と逢引する恋愛関係にある。佐世保の街は、上海事変以降は軍事特需によって潤う軍港の街であり、佐世保海軍工廠には多くの人材が工員として軍に徴用され、未婚女性も女子挺身隊として動員されていた（谷澤 2012、181 頁）。二人目は主人公の仲代であり、佐世保までの電車の旅を共にした芹沢治子との手紙による交換日記によって進行する。敗戦後にこの作品を読む読者は、仲代が書く手紙の部分においてすでに長崎に投下された原子爆弾に気づいており、二人の関係の終わりが仲代による浦上の廃墟を歩く行為によって確かめられたあとに登場するのが、三菱造船所のガントリークレーンである。先行研究において「一貫して描こうとしてきた第一義的な「党」が揺らぎ出し、そこへ密かな「抵抗」が差し向けられつつあることを「恋愛」の表面化は示唆している」（柿谷 2006、159 頁）という指摘があるように、井上の作品において恋愛は、第一義的な「党」の存在に「揺らぎ」を与えるものであった。占領軍による進駐がすすむなかで仲代は、「佐世保に純正共産主義研究団体生る」という新聞記事を目にし、建設会社の門をたたくと同じ記事を見た鹿島からも団体への入会希望の電話があったことを知る。戦時中からしたたかに生き、進駐軍の時代への準備をしてきた鹿島は、まるで「虚構のクレーン」によって別の存在に移し替えられたように、共産主義団体へ入会希望する。仲代も、進駐軍の時代を感じ、共産主義団体の門をたたくも、「天皇制打倒」と言ってもいいのかを留保しつづける。「クレーン」を地で行く鹿島に対して、仲代は「存在を宙吊り」にされたままの状態で戦後をずるずると生きる。

井上光晴は 1982 年に『明日一九四五年八月八日・長崎』を上梓している。長崎の原子爆弾投下を取り扱っているのだが『虚構のクレーン』とはその手法が異なることが注目を引く。『明日』においては原爆の前日 1945 年 8 月 8 日にくらす長崎の人々の話を淡々と書いている。井上自身が「小説『明日』の構成にあたって、私は可能な限りありのままの八月八日を再現しようと試み」、「一章から零章に至るまで、ストーリイのための虚飾は用いなかった」（井上〔1982〕2015、213～214 頁）と述べているように、実際に原子爆弾を経験した人々の証言（『長崎の証言』）を中心として、「再現」に力点が置かれている。ここで「ありのまま」という言葉をどのように受け止めるか。『虚構のクレーン』における長崎での出来事が抽象性を持って書かれたとも言いづらい。噂とデマという形を通じて人々に伝わったという、実際の情報源や伝播の貧弱さ、戦争を遂行する上で士気を高めるための軍部の判断、それを伝える新聞などメディアの体制、態度などが重層的に働いた結果である（長岡 1977）。そして逆に、そのような文学的表現を用いたことによりリアリティーを獲得したともいえる。

そのような書き方は、『虚構のクレーン』を「原爆文学」という枠に収めないという傾向として現れるように[28]、「噂」と「デマ」という形式が問題としてある。朝鮮人抗夫たちに関わる一銭銅貨事件が作品の全面に出ているということもあるだろう。

しかし作品の中で芹沢が置かれた状況や位置は、『明日』において相手の男性高谷藤雄が三菱造船所の派遣でヒロシマ・呉市に行ったきり消息不明になって不安を感じる女性亜矢の話を巧みに反転しているものだといえる。8 月 8 日の時点でもうヒロシマは焼け跡になっているはずであるのに、亜矢をはじめ周辺人物たちはそれに気づくことが完全にできない。仲代も同じである。仲代は芹沢がいた長崎医大病院は浦上にあったことをやっと思い出すが、浦上は原子爆弾の爆心地からわずか 500m離れている。しかし長崎に原爆投下される 8 月 9 日日付の日記にも、仲代はまだその「新型爆弾」の状況がまったく把握できておらず、一銭銅貨事件のことだけを書いている。長崎の原爆投下の情報はかろうじて 10 日に入手しているが、9 日から 3 日も経った 12 日には「被害が僅少」だと書く新聞の報道を疑いもせず「安心しました」と信じ込んでいる。

＜8 月 10 日＞
長崎にも新型爆弾が落ちたそうですね。昨日ラジオでいったらしいですが、誰もがソ連の対日宣言布告に気をとられていたのでしらなかったのです。心配しています。
＜8 月 11 日、土曜日、夜 8 時＞
……

[28] 金子章予「井上光晴の原爆文学の現代的意義」西武文理大学サービス経営学部研究紀要第 27 号、2015 年 12 月。他に中野和典「空洞化する言説：井上光晴『西海原子力発電所』論」（花書院、原爆文学研究 10、2011 年 12 月）；長野秀樹「井上光晴「手の家」の構図」（花書院、原爆文学研究 1、2002 年 8 月）も参考。

三菱造船所が新型爆弾でメチャメチャにやられたなどというデマがとんでいます。運炭事務所の係員がしっているというのでききにいきましたが不在でした。広島にも落ちた新型爆弾の解説が新聞にでていますが、非常に心配です。（井上 1969、208～210 頁）

坑内で日本人の管理職労働者たちの騒ぎ立つ会話も、事実の一つもつかめず新聞で読んだことだけに基づいている。この会話自体がまた 2 次、3 次の噂とデマを生み出すことは明白である。養成所が閉鎖になってしまったところで労務課への勧誘を断って坑内に入る仕事を自ら希望した仲代は「坑務」つまり坑内点検―末端の労働者ではないながらも―に就く。暑苦しい海底炭鉱での労働が終わり、やっと地下の世界から地上の世界に向かう瞬間にこのような雑談、噂話ができるということは、坑内が地上とは隔離された空間として機能していたことでもある。当時戦争の状況や原子爆弾投下のニュースなどをリアルタイムで知った人々はほぼいなかったはずであり、炭鉱という場所は更に遠ざかっていた地下の世界であった。少しの時間のロスも許さないというふうにして炭鉱に独自の青年学校をつくり、それも次第に一時停止というかたちで縦断させて「増炭目標のために」労働者をもっと集中的に炭鉱の労働に縛り付けることが行われたためである。

第 4 節　戦後の炭鉱における「闇」――井上光春「地の群れ」

次に検討する作品『地の群れ』（1963）も、複数の出来事が重層的に重なって語られているという点において『虚構のクレーン』と類似している。粟津則雄による解説では「戦争期の体験との全面的な対決を行ったことが、彼に、まさしく戦争体験と戦後体験をひとつに重ねるものと言うべき原爆被害者という主題をとりあげることを可能とした」（井上 1972、339 頁）と指摘されているように、井上光晴にとって原爆被害者を書くことが自分の「原体験」に基づきその模索を結集した表現である。『地の群れ』では、舞台となる佐世保の街に被爆者を多数登場させている。九州の海底炭坑で働いたのちに上級学校を経て医者となった宇南親雄は父を探しに原爆後の長崎を歩いている。また部落の少女福地徳子を強姦する男が住む部落「海塔新田」には多数の被爆者が身を寄せ合っている。娘の家弓安子の病症が「原爆病に似た」と言われても否定し続ける船上生活者の母・家弓光子からは、原爆とそれによる影響というテーマに井上光晴が如何に心血を注いでいるかが分かる。このように生々しく、相互に絡み合う、差別し合うという構図のなかで後景化するのが主人公の宇南親雄の炭鉱経験である。その経験がこの作品の中でどのような位置にあるかを、宇南親雄とその周辺人物との関係を中心にして概観しながら検討する。

作品の舞台は終戦後の長崎県佐世保である。主人公は一人ではなく、複数の登場人物がそれぞれの物語を展開していく形である。宇南がいる診療所に豚の内蔵を売りにくる津山金代と宇南の祖母アマネの話を通して浮かび上がるのは、孫の津山信夫である。原

爆死した母を持つ津山は「マリヤ像」を破壊したことで警察に取り調べられている。そのような彼に暴行を加える男たちがいて、彼らは「長崎に長く住んだ者ならばすぐ「浦上の信者」とわかる顔つきをした」人たちであった。彼らは「踏絵シタ足ヲススイダ水ヲ、主ニ対スル贖罪トシテ飲ミホシテイタ先祖代々ノ、カクレキリシタン」と唱え始める(井上 1972、127～128 頁)。このシーンは一人の津山に対して 3 人に 5 人まで加勢した合計 8 人の男が一方的に暴行を行使するという凄まじい状況に加えて、狂気に満ちた男たちの姿によって原爆と隠れキリシタンの観光化に対する批判になっている。原爆の投下のみならず、それを目当てにして訪れてくる観光客の行列に対する怒りはカタカナで表記されていて、その怒りがどこに、そして誰に向かってのものであるかを問うている。長崎の原爆を見世物、観光の対象にすることへの怒りと問い[29]は、終戦となって国に帰ろうとしたアメリカ人婦人が途中の長崎でそれをおもちゃ代わりに遊んでいた子どもから買い取ったことから値打ちのあるようなものとして売られたとされる通称「原爆人形」のエピソードとも通じている。

医者の宇南親雄は『虚構のクレーン』との主人公仲代とも重なり、その真偽には様々な議論があるにも関わらず（原一男、1994)、作家自身の経歴を思わせるようなところがある人物である。宇南は現職の医師である。小さい時に母は死亡、父は行方不明だったので祖母アマネと妹明子と暮らしていて、炭鉱で働いたあと進学して医師になる。しかし彼は母のことと宇南自身の出生に関する真実を知らず育つが、あの日の半年まえに受けた徴兵検査の時、母が部落出身であることを知る。このことは宇南の中でははっきりしないまま続き、やっと 8 月 11 日、「二人の女の上に重ねられて青白い火花を散らす父」(井上 1972、208 頁)に尋ねることが出来る。すでに生きていない父との会話は終始何も収穫のないものである。このように否定しつづけることは上でも触れた家弓光子のように、原爆だけではなく被差別部落出身というものによって苦難を背負ってきた者たちの自己防御にも捉えうる。これは津山の母が被爆者であることに加えて「浦上の信者」だったかも知れないという重ね重ねのしがらみである。

母に関する疑問と不思議さに加えて宇南が戦後 17 年たっても心のなかに負目として担いでいるのは、朝鮮人女性を死なせたということである。宇南は小さい時炭鉱町で育つ。その炭鉱とは、『虚構のクレーン』と同じ戸島炭鉱(「九州戸島海底炭鉱二抗の抗木置場」)[30]である。彼は 16 歳の時(1942 年)に坑内で朝鮮人朱宝子と肉体的関係を持つことになる。その後朱の姉・朱宰子が訪れてきて妹との関係の決着を促すが宇南はただ回

---

[29] 井上光晴の短編小説『夏の客』(1965)もこのような話で、舞台は広島である。自分たちが「被爆者」であることを装い観光客からお金をだまし取る女性たち、「手帖」(被爆者である証明)を見せて稼ぐ老人がいる。しかし本当にこの人たちが「被爆者」かどうかは最後まで曖昧なままで終わる。

[30] 井上光晴の「妊婦たちの明日」(1964)にも同じ炭鉱が出る。この炭鉱が閉山した島には「白い面」のような顔の「流れもん」の女性たちと「かぼちゃ」みたいにお腹が膨らんでいる女性たちが住んでいる、今は廃墟のような島である。

避するばかりであった。

彼は数え年十六歳の夏、九州戸島炭鉱海底炭鉱二抗の抗木置場で、安全灯婦朱宝子の電池の匂いのする体をおしつけ、杉の皮と炭塵のこびりついた汗で泥まみれにしてしまったのだが、四か月後、太平洋戦争が勃発した。そしてそれかた十日あまりに経った後、県立長崎高等女学校音楽教室を試験場として行われた専験（専門学校入学資格検定試験）受験を終えて帰った彼を待ちうけるようにして、同じ安全灯婦をしている朱宰子が「妹をとしてくれる」と濁音の出ない日本語で迫ったのである。
……
「おれはしらんよ……」繰込場の裏の大工小屋の蔭で、宇南親雄はこたえた。背中をぴったり背後の板壁にくっつけ、変に明るい寺島水道の真上から落ちてくる濁った月光を肩に受けた朱宰子の影に触れるのを恐れるように。
「しらん……？」朱宰子はおうむ返しにいった。そして、宇南親雄にいうのでなく、自分自身にむかって洗濯棒を振りあげるような声でつづけた。「ああもう、としたらよかろうかね。たった十六かそこらというのにコトモがてきてしまってね。あんたが朝鮮人なら、労務に納屋もろうて、そりゃなんとかてきんこともない。労務が納屋をくれないというなら、あたいたちの納屋に一緒に住んてもいい。あんたは坑内道具方たから若すきるといっても労務は納屋くれるかもしれない。少しは笑われるかもしれんけとね。それても十六よあんた。ああもう、宝子かまいぱんまいぱんてあるく、あの時、気ついておれぱね。いまになって宝子は泣いてるけと、泣いても取り返しのつくこととつかないこととあるからね。泣くな、泣いても取り返しつかないよと、そういってやったよ……」（井上 1972、102～103 頁）

結局耐えられなくなった朱宝子は自死を選択する。またレッドパージ後共産党の「筑後川上流黒谷部落の日共水害救援工作隊員」として行った村で炭鉱からの友人森次庄治は死んでしまう。共産党とそのシンパに対する排斥の雰囲気の中では、誰も彼らを歓迎しなかった。この二つの「死」は、宇南をもって森次の恋人であった現在の妻・英子に対して乱暴な形で表れる。

森次さんの飢え死にした村をどうしても見ておきたいという彼女の希望をいれて、昭和二十九年の五月、二人は筑後川上流の黒谷部落をたずねたのだが、二日目の夜、やや下流の護岸工事に従う土工の飯場を兼ねた川沿いの商人宿で、英子は宇南親雄に抱かれたのだ。
翌朝、「ここらはこんなものばかりしかないので」と宿の女にいわれてお膳に出された、殆ど山芋ばかりのお菜を前にして宇南親雄はいった。「何だか、森次に悪いような気がするなあ」英子は黙っていた。（井上 1972、231～232 頁）

「山芋」とは、森次が病気で体力が衰えている時に救援隊に助けてもらったにもかかわらず村の誰も食べ物と助けを施してなかったことに対して、一人の老人がみんなの目をくぐって持ってきたものだった。森次は最後の元気を絞り出してこの山芋の丼を手にした瞬間に死んだのである。

この作品はたくさんの人間の「死」が背景としてあるといえる。原爆という本当の出来事による大量の死がまずあり、宇南に限って言えば朱宝子のお腹に宿っていた命、英子の5回の流産によって水子になってしまった命、友人森次の死、原爆による父の死もある。特に朱宝子と宿っていた命の死は、英子の流産によって増殖し現在進行形である。宇南が背負ったその複数の死は、まるで原爆によってからだにケロイドが残った人々のごとく、英子の身体に刻まれて行く。英子の子宮に5回も行われる掻爬手術は、現代医学のメスにより女性の子宮にダメージを与える。掻き出す行為は子宮の中にも損傷をもたらし、子宮の外部にも医療用の針と糸が通った傷を残す。

第5節　炭鉱におけるお産と医療――渡辺淳一「廃礦にて」

この節では、渡辺淳一の作品を論じる。作家・渡辺淳一は『リラ冷えの街』(1971)、『阿寒に果つ』(1973)、『失楽園』(1997)、『愛の流刑地』(2006)などがベストセラーとなり流行語を数多く作り出した小説を書いた。そのため、作品は所謂「不倫」「愛」を描いた「男女小説」がさらに強調されるようになる。渡辺淳一は出身の大学・北海道立札幌医科大学の校友会雑誌『あるてりや(アルテリア、動脈)』に1950年代半ばから持続的に小説を発表して次々と北海道内での評価も得ていく（北海道立文学館 2015、24頁)。1965年に「死化粧」が第12回新潮同人雑誌賞を受賞し、翌年には第54回芥川賞の候補作となり注目を集める。

渡辺淳一は北海道空知郡砂川町(現・上砂川町)で生まれる。母は歌志内市の裕福な商家の娘でありながら父とともに教師を務めた。祖母が営んでいた雑貨店は、当時空知炭田が新興炭田としてかなり栄えていたことからその繁盛ぶりが推することができる。炭鉱の労働者と直接に関係したことはないが、渡辺淳一は炭鉱町で経験した出来事について書いたことがある。過酷な労働に耐えられなく逃げようとして捕まり、町で見せしめにされる朝鮮人をみてショックを受け、そのような仕打ちをする直接な権力としての日本人納屋頭に対する恐怖を覚える（渡辺 2012、141～142頁)。この経験は戦時中の他の経験とともに、すぐに「被害者と加害者」という問題枠に収められる。

森崎和江と上野英信において戦後の家族イデオロギーに回収されないかたちで記述されるのが炭鉱独自の再生産労働と恋愛である。医師でもある作家渡辺淳一個人の体験に基づいて書かれた小説「廃礦にて」は、少人数で構成される核家族形態が当たり前のようになっている今の観点から考えると奇妙にも思えるエピソードが物語の中心となる。渡辺淳一の小説とエッセイを読み、「近代的」とはかけ離れているお産と医療を読

み解く。そして渡辺淳一という作家が持つ女性へのまなざしとはセクシュアルなものであるが、ここではそれを炭鉱における女性のお産と再生産労働に対するまなざしの一つとして取り入れることにする。さらに考えるべきことは、このように「再生産労働」という既存の規定には収まり切れないお産とそれに関わる営みが日本型家族モデルの成立や優生思想とのあいだでいかに緊張関係をはらんでいたのかである。

渡辺の小説で登場する炭鉱は雄別炭鉱であるが、渡辺淳一は雄別炭鉱病院に 3 回出張医として勤務したことがある。その派遣期間は合計半年であった[31]。

渡辺淳一は 1976 年から 1987 年までの 12 年間をかけて長編小説『白夜』を雑誌『婦人公論』に連載する。同作品は医師でもある著者渡辺淳一の経験に基づいた自伝的作品であり、北海道の炭鉱町のいくつかに勤めたことも書いてある。この作品の中で彼が医師としてはじめて炭鉱と関わるのは、「U という炭坑町の診療所」（渡辺 2009-1、273 頁）に友達から人手不足のため助けてほしいと言われたからである。この炭鉱の診療所は、新米医師の高村にはおかしい体制だと思われる雰囲気であった。俗称「共産党病院」といわれるこの診療所の医師と看護婦たちはみんな共産党員だという。当初その診療所の話を持ちかけた友達は高村と仲が悪いわけではなかったが、政治的な面においては意見の違いがあるのであまりそのような話はしないようになった所以である。高村がみるにこの診療所の老医師と看護婦たちは親切ではあるが、それ以上に診療所で診療を受ける炭鉱の労働者にあまり甘いのであった。炭鉱では怪我などをしたら有給休暇がもらえる。労働者の中には真面目な人もいるが、「悪質」な人もいて軽い怪我なのにごまかしたりするなどもいて医師もそれに応じて休業延長と休業補償の証明書を濫発する。高村はこのように「人情や思想などに左右されず医学的に正しい判定」（渡辺 2009-2、22 頁）をしなければならないと考えた。

炭鉱の病院に勤務するようになるのは、雄別炭鉱病院であった。渡辺は大概の炭鉱がそうであるように、雄別炭鉱の町も人口 7,000 人のほとんども炭鉱と関わり合って生活しているという。雄別炭鉱は釧路炭田に属しており、大正 9 年に北海炭砿鉄道が舌辛川上流に開発された。釧路炭田の終着駅がこの「雄別炭山」であった。1924 年に運営主体が三菱鉱業に変わる（石川 2014、38 頁）。1970 年 4 月 23 日で解散、清算会社となり、使われていた石炭車と解体、ディーゼルカーは青森と常磐線などへ運ばれたという（石川 2014、62 頁）。

作品の中で、病院は高村を含めて 8 人となる。しかし前任の中山先生が患者たちにあまり信頼され慕われていることに高村は大きい不安を覚える。これは自分が中山医師より二期下ということでもあるが、現場の経験不足と人望の厚さに対する自信のなさに他ならない。

---

[31] 「直木賞作家・渡辺淳一さんを悼む「ベテラン婦長」」、https://www.kango-roo.com/work/739/2014 年 5 月 28 日。

現実に患者と接して、伸夫ははじめて断定することの難しさを知った。いままではわからなければ先輩の医師にきけばよかった。その場だけは「もう少し様子をみましょう」といって、次回にきたときまでに調べておき「あと一週間です」と答えれば済んだ。だがいまはすべて自分で決めなければならない。「もう少し」とか「しばらく」という曖昧な表現のままいつまでも延ばしておくわけにはいかない。どこかの段階でギプスを外し、どこかで治療を打切らねばならない。
だがギプスを外したり治療を打切ることは医師の立場からすると怖いことだった。それで確実に治ればいいが、早すぎて悪化したり再発しては大事である。（渡辺 2009-2、15 頁）

『白夜』自体が整形外科医である渡辺淳一自身の経験が溶け込んでいるので、実際に現場に立ってみないと分からない感情と心理が表現されていると言ってもよい。この場面では人間の命に係わる存在の医師が持たざるを得ない「責任」とその重さが大きいテーマとしてある。この責任感は医師として死の判定を間違った過失の経験が重くのしかかっているせいである。しかしその分、勉強に勉強を重ねることができる。

この責任感はすぐ「不安感」につながる。この病院は炭鉱の病院である。炭鉱とは事故がつきもので、雄別炭砿はガス含有量が少なくて「ガス爆発は少ないが」「災害患者の数は他とくらべてさほど低くない」（渡辺 2009-2、32 頁）のである。しかし高村は間もなくして崩落事故、巻揚げ機に身体が巻き込まれてなど炭鉱であるからこその凄まじい事故に接するようになる。そこで彼は手が届くような身近いところに生と死の境界があるように感じる。「廃礦にて」の軸をなす女性患者の話はこの作品にも書かれているが、「廃礦にて」では「初めての二か月は大きな事故もなく、無難に乗りきることができた」（渡辺 1976、7 頁）と書いているに対して、『白夜』には凄まじい事故の後であるとされている。しかも、崩落事故で 3 人が運ばれてきるが、高村は誤診をしてしまい、その中一番重態だった人が亡くなる。その人は高村が「初めから自分一人に委ねられ、自分の見ている前で亡くなった初めての患者」（渡辺 2009-2、84 頁）であっただけに、医師としての高村には大きい事件であった。それに対して「廃礦にて」には医師の責任感と不安感がさほど強烈なものにはなっていない。『白夜』では極めて率直で臨場感のある記述が「廃礦にて」では文学的表現となっている。

「廃礦にて」（1976 年）を概観しよう。整形外科医の有村は大学病院から道東の Y 炭礦病院に 3 カ月の出張を命じられる。あいにく他の医者が全員留守中のとき、ある緊急女性患者のことを担当するようになる。女性は 9 回も堕して身体に無理がある状態でまた 10 回目の妊娠をしているが、子宮破裂によって死にかけている。有村は手術に取り掛かるが 9 時間も処置なしで放置されていた女性は致死量の出血をする。実物の子宮をみたこともない有村はベテランの看護婦に手伝ってもらいながら手術を成功させる。4 年後、Y 炭礦病院に再び出張に行った有村は、偶然彼女に邂逅する。彼女は生まれたば

かりの赤ちゃんを連れてである。その数年後また近くに用事ができて、今は閉山しているかつてのＹ鉱山によって見回る。閉山後もまだ住み続けている人に彼女の話を聞くと、夫は落盤事故で命を失い彼女はお腹のなかに一人を孕んだまま二人の子供を連れてここを去ったという。

同じ話が『白夜』にも登場していると上述したが、『白夜』には同じ話が「廃礦にて」とは異なる文脈の書かれていることに注目したい。その異なる文脈とは大きく二つあるといえる。一つ目は雄別炭鉱における労働者間に存在する「差」と、二つ目は患者の女性に関する事実である。

まず一つ目のことは、労働者の中でも「直轄夫」と「組夫」という区分があるということであった。「廃礦にて」では、女性患者と夫は組の人の集落である「横山」に住んでいる。夫の保険証には「工藤組」と書いている。渡辺淳一は『白夜』においても炭鉱に存在する差別について述べている。

一般に組夫は会社の直轄夫にくらべて仕事に出たがる。医者が「出てもいい」というと、ほとんど厭な顔をせず出る。これに反し直轄夫は、「頭が痛い」とか、「まだ自身がない」などと理由をつけては一日でも長く休もうとする。この背景には、直轄夫は会社健保で面倒を見てくれるが、組夫は全額日給制で休むと一円ももらえないし、病気でも保険で面倒を見てくれるという保障がない。（渡辺 2009-2、123 頁）

一般の直轄夫が入る現場は広くて、採炭しやすい場所が多いらしい。ほとんどが立って作業が出来るし、換気や排水の条件もいい。これに対して組夫の行く現場は、狭くて曲がりくねり、蹲んだり、ときには寝転んで採炭するような現場もあるらしい。
条件のいい場所は会社がおさえていて、悪い現場だけを組に掘らせている。それは会社の横暴という見方もあるが、もともと炭山（やま）はすべて会社のものであった。（渡辺 2009-2、124 頁）

一言にいえば、「組夫」というのは炭鉱会社の下請けの労働者たちである。この「差」の存在は、ガス爆発の時に明白にあらわれる。事故が起きて 7 人も生き埋めになっても、会社に籍をおいている直轄夫の事故の際とは違って、会社は何もしない。組合も同様である。

このように高村は、この炭鉱病院にきて自分の意思とは関係なくこの炭鉱町の事情を目撃し知ってしまうところも少なからずあった。直轄夫と組夫、職員と雇員という階級のようなものの存在、組合の欺瞞性など、まだ新米の医師の眼に映った田舎の炭鉱町は大きな矛盾を抱えているものであった。そして彼は元来持っていた考え方とものへの見方も変わっていくことを感じる。意識する主体としての高村が持つ考え方自体が妥当か正しいかなどより、その変化に目を向けたい。

炭労という荒々しいイメージとは別に、下部の労働者の一人一人は気のいい男達だった。大学のときから、伸夫は学生運動にはあまり興味がなかった。仲間にはマルクスや革命について語り、セツルメントなどに加盟している者もいたが、それはごく一部の学生だった。大半は学業の余暇にはスポーツをするか、デートに精を出していた。伸夫もそれに近い、いわばノンポリであった。……日米安保を中心とした政治テーマや、自由主義や資本主義の社会体制にも疑問はもっていた。……それでも伸夫は労働者に共感を抱いていた。……だが現実に社会に接して、伸夫のこの考えは少しずつ変っていた。……伸夫は初め、彼等は同情に値する虐げられた人達であり、彼等のために尽くすのが医師の使命だと思った。（渡辺 2009-2、106～107 頁）

「彼等は同情に値する虐げられた人達であり、彼等のために尽くすのが医師の使命だと思った」という多少は図式化された認識はともかく、彼は炭鉱という場所を通じて医師としての任務と使命感・世俗的でありながらもやりがいを見出す。そもそも整形外科とは炭鉱病院においては「花形」であった。事故が付き物だと言われる炭鉱で大きい事故が起きたらまずは高村のところに運ばれてくる。派遣医にすぎないが人命の尊いとそれに釣り合わない炭鉱町の人間関係の不条理さを経験するにはそれ以上ない場所であった。そしてこの高村でも有村でも渡辺淳一自身でもある「わたし」は戦後日本においてその繁盛と斜陽化、衰退を迎える炭鉱の変化を見届けることになる。

こうして、わたしは三十六年春、三十八年秋と、三度この町を訪れている。いずれも三ヵ月前後の大学病院からの短期出張であったが、この間、町の様子は微妙に変わってきていた。
初めての三十四年のころは、炭労（炭鉱労働組合）の力はなお強く、合理化を求める会社とストライキなどで対抗し、激しく闘っていた。しかし三十六年になると会社側の人員整理案により、山を去る人がではじめ、三十八年には炭鉱不況が一段と深まるとともに退職者が相次ぎ、「去るも地獄、残るも地獄」という暗いムードがただよっていた。
だがそれも、炭鉱がつぶれるなどとは誰も思っていなかった。石炭がエネルギー源として石油におされていることはわかっていたが、合理化して縮小すれば、まだまだ生き残れるはずだと、わたし自身も思っていた。
いいかえると、石炭が斜陽化しながら、ゆっくり傾いていく過程を、わたしは見ていたことになる。（渡辺 2000、133～134 頁）

これは戦後日本のエネルギー産業を担う主役としての炭鉱に対する一般的な認識かも知れない。ところが「わたし」においてはそれが自分の信念と考え方、見方の変化とともに大きく、時には激しく揺らいで変わっていったことが重要である。このような信

念と考え方にもう一つ変化をもたらす出来事でもあるのが、この炭鉱病院で出会う女性患者に関することである。

先の話に戻り、二つの作品における異なる文脈の二つ目は、『白夜』において女性の患者が以前「水商売」をし、また「梅毒」にもかかったことがありまだ完全治ったとはいえないということである(渡辺 2009-2、149 頁)。この女性は「廃礦にて」では陽気でなぜか生命力あふれる女性(朝井千代)として描かれている。夫は炭鉱夫であり、朝井千代はこの夫と初めて正式に結婚をするのであった。

「あの女性は九回も堕してますからね」
「九回？」
「そう、堕しちゃ妊娠し、堕しちゃ妊娠でね、その度に子宮の壁をひっかくから、もう随分薄くなっちまってんですよ」
……
「たしか一度注意したはずですが、でもあの女性は今年の春、初めて正式に結婚したんでね、そんなわけで、今度は絶対産むというものですから」(渡辺 1976、25〜26 頁)

朝井千代が実際にどのような人であったかを完全に分ることはできないが、少なくとも彼女は高村、有村には到底理解不可能な存在であった。同一な出来事であるがこの「理解不可能」さの描き方は「廃礦にて」と『白夜』において少し異なっている。『白夜』においては女性の強さという面で淡々と書いているが、「廃礦にて」では「女性への畏怖」ともいえるような書き方で、強靭なあまり「不気味」なまでに感じられる女性の生命力である。その「不気味」さと「畏怖」は「子宮」という身体器官によるものである。

福島県には常磐炭鉱があり、1950 年代に常磐炭鉱の事例は成功的ケースとして新聞などを通じて大々的に宣伝された。そのなか常磐炭鉱の内郷(うちごう)病院長・林英郎は母性保護という観点のもと、中絶手術ではない避妊法を通して産児調節に取り掛かった。常磐炭鉱の事例は、現場で生殖に関する実態―戦後、中絶手術の急増、他院で鉱山の母親が人工中絶手術によって死亡したことへの危惧―をみてきた林英郎が国立公衆衛生院へもちかけた相談がきっかけだったという。常磐炭鉱の医者林英郎と違って小説の有村には自分が経験したことを母体保護など観点から見ることはなかった。有村は奇跡だとしか言えない、手術の成功と女性の回復に対してもただ「無気味な思いで女を見」て「女だからかもしれない」とつぶやく。

炭鉱のなかにはたくさん産む人もいれば、人工中絶手術と家族計画で会社が言う近代家族・貧困防止・母体保護などの理由で産むことを制限される人もいるはずである。数回に至る人工中絶手術は、渡辺淳一の小説にも出てくるように「堕しちゃ妊娠し、堕しちゃ妊娠でね、その度に子宮の壁をひっかくから、もう随分薄く」なり「風船玉が膨らむように、子宮の壁が薄くなって膨らんだらしい」(渡辺 1976、25 頁)ようで、母体に

至大な影響が出る。その結果、母体の傷と水子が大量に生じる。しかし前節の『地の群れ』でもみたように、このような構図は見えにくくなっている。

戦後日本における受胎調節（産児制限）に関わる政策の異例さ[32]についても触れておきたいと思う。日本においてピルが長らく使用禁止されてきて使用が承認されるのは1998年のことである。しかし中絶は1948年優生保護法の成立とともに積極的に進められてきた[33]。このような所以で人工中絶手術が最も選びやすい手段（廉価で提供されたという点）だったという事情がある。実際に受胎調節（産児制限）を実践しようと／する女性にとって中絶とは医療技術の力を借りずに行う方法に比べて安全性も高く、経済的な負担も少なかったことが指摘できる。

二つの作品で「お産」が描かれているわけではない。しかしお産とは常に胎児の状態により胎児も母体も危険に陥る可能性を持っている。つまり、お産と中絶、流産というのは切り離して考えることができない。渡辺淳一の作品に登場する、度重なる女性の中絶が論点になるのは、単に母体保護という観点であるよりは、戦後日本の生殖におけるポリティクスが女性の身体に残した傷痕そしてそれが炭鉱村における暮らしと家族の形態とも関わってくるためである。ひいては、それがセクシュアルな文学的表現として書かれたことも重要である。

第6節　炭鉱における「関係の貧しい」人々――高橋揆一郎「観音力疾走」「木偶おがみ」

作家の高橋揆一郎は、渡辺淳一も参加していた北海道を拠点とする同人雑誌『くりま』(ドイツ語の Das Klima、風土)[34]で文学作品を発表するなど、炭鉱と炭鉱に生きる人々を書いた作家である。

高橋揆一郎は、1928年北海道の歌志内市で生まれた。「住友上歌炭砿十二号抗夫長屋」で生まれた彼の父は坑内労働者であり、その父・菊五郎は「揆一郎文学の根幹にある」（北海道立文学館 2013、165 頁）存在であった。1991 年発行された小説『友子』は、父をとりまく友子制度、そしてそれで生きていく人間たちについて書かれたものである。高橋揆一郎はイラストレーターでもあったが、画文集『帽灯に曳かれて』(1984)には坑

---

[32] 「官民双方が大々的に家族計画に乗り出す一〇年ほど前に中絶が合法化されていたので、戦後の避妊に関する政策決定の多くは、先行した中絶重視に由来する制度的な遺産や利益集団の要請に突き動かされてきた。「中絶が避妊に先行」した現象は、日本の避妊政策に良くも悪くも影響した。」(ティアナ・ノーグレン 2008、6 頁・65 頁)

[33] 松原洋子は最近の論文において北朝鮮と樺太など旧外地から引き揚げてきた女性たちが、当地での強姦によって「不法妊娠」されたことに対して中絶が行われたことに注目する。重要なことは、この「引揚者医療救護」が中絶を合法化する 1948 年以前で行われた点にある。(松原洋子 2019)

[34] この雑誌の名前は『凍檣(とうしょう)』だったが、6 号より「馴れ合い的な同人雑誌を排し、新しい精神風土の上に立った文学を築くのを目的」として渡辺淳一が改題したという。（北海道立文学館 2015、25 頁）

内労働をする高橋自身と父の姿が描かれている。

彼の 1970 年代の代表的作品である「観音力疾走」（1977）と「木偶おがみ」（1978）は、両方とも女性を語り手にして、炭鉱町を中心に血縁関係ではない人々が「家族」という名の下に営む暮らしを描いている。柄谷行人（1978）はこれを「関係の貧しい」人たちだと評している。ここで「関係の貧しい」という表現の意味は、単に物理的に血のつながりがない関係を指しているか、それともそれを越えて様々な状況のために「家族」のような関係を強いられて溶け合うことの難しい関係を指しているか、それ以上言及されていないので確定はできない。

「観音力疾走」は語り手の女性ふさちゃんの語りから始まる。語るのは、部落のみんなからまむしの伝吉と呼ばれる乱暴な男についてからである。この伝吉の乱暴さは、ふさと関係を結んでいく中でその理由が明らかになる。

ふさは 20 歳の時に樺太から引き揚げてきて結婚し子ども三人も抱えているが、元坑夫の夫に逃げられた身であった。食べ盛りの子どものため、険しいので誰も入らないが食べられる山菜がある場所に夜入ることになる。そこでふさはあのまむしの伝吉に出会ってしまい、肉体的関係を持つ。子どもが 3 人いるからと言っても伝吉はふさと一緒になってほしいという。

実はふさが一番心配したのは、長男青治（あおじ）とその乱暴さで悪名高い伝吉の関係であった。青治は「生まれつきの知恵遅れ（ママ）」であり、逃げた先夫も青治と関係が円満ではなかったため、乱暴な伝吉とはいい関係を保つことは到底不可能だとふさは考えた。しかし伝吉は親に愛されなかった過去を持ち、様々な場所を転々し苦労してきた人である。「百姓から逃げるために横須賀の海軍さ入って終戦になって、それでもう養家には戻りませんでした。炭山ば渡り歩いておしまいにこの部落さきたわけ」（高橋揆一郎〔1977〕1978、71 頁）である。こうした伝吉の出自は、意外と暴力を振舞う方向には向かず、青治に気を遣わせる方向に働く。愛されない、居場所を見つけられない伝吉の立場こそが青治へ注ぐ関心と気遣いとなったといえるだろう。ふさは青治も少しは心を開いていくものだと考える。そもそも血縁でもない人間同士であり、少しずつ相互に認識しあうこと自体が望まれない関係であったためである。特に、労働力という観点からみればなおさらである。

炭鉱町において「労働力」として働けない人間は、その存在価値を認めてもらえない。近代日本における炭鉱の歴史が、増産による軍需産業、朝鮮戦争の特需を支える役割、高度経済成長期の主役としての歴史であることは承知の通りである。幼い子どもでも坑内に入ってせめて子守りをしたりたまには炭箱を押したという坑内労働の実態[35]は、人

[35] 戦前には児童の坑内労働が厳然と行われ、1916 年省令として公布された『鉱夫労役扶助規則』のなか児童労働保護立案に対する石炭資本の抵抗も、児童が石炭産業における主要な労働力として見なされていたことを証明している。1923 年に満 14 歳未満の児童の雇用が禁止される後も、炭鉱村の児童たちは雑役に働かせることが多かったため、学校にあまり通わない児童は多かった。上野英信は 1959 年に訪れた香月町所在の S 炭鉱に長欠児童が 40%

間がいかに労働力として見なされてきたかという証左でもある。したがって、人が多いところにいくと必ず「てんかんをたかる」青治をみる人達の視線とは、単に青治が厄介者であるからでなく、労働力にならない者だからである。「ひとさまさ迷惑がかかります」（高橋 1978、68 頁）といって一人ではなかなか外に出さないふさの思惑は、13 歳にもなる息子の青治が一日中 4 畳半の部屋で小石を「かりかり」とすり合わせ伝吉が彼のために買い求めたテレビの画面を見つめていることが、一番良いと考えているのであろう。

森崎和江が元女抗夫との聞き書きの中で、ともに労働する、協働することの意味をさぐったところには、やはり「成果を問わず」労働することが肯定的に描かれる。しかしその成果を問わず行われる労働とは評価されにくいものであり、成績とノルマを果たすということが坑内労働の主となっている現実もある。「無意味」だとされる日課で日々を送る青治は労働と生産という枠に当てはまらない。

青治はある寒い日、行方不明となり大騒ぎになるが、その事件が原因で青治は急性肺炎で亡くなる。ふさは息子の死に心を痛み、伝吉もその苦しみをともにする。この時、伝吉は奇妙な話をする。

おら、頭がばかになったかも知らんねえど、といいました。わたしがびっくりして、まあどうしてばかになるわけないっしょ、こうやってわたしと喋っているのにといいましたら、坑内で仕事をしているときに、あたりががんがんとやかましいのに、それがかりかりというように聞こえるというのです。
かりかりという青治の石のおもちゃの音でしょ。わたしとしてもふしぎですから、どうしてがんがんいう音がかりかりに聞こえるのかしらん、ほんとに頭がへんになったんだろうかと心配になりましたです。（高橋 1978、87 頁）

この「かりかり」の音を聞くのはこともあろうに坑内であった。偶然にも青治は入ることのなかった/できなかった、そしてこれからもない/できないとされる場所である。そして青治の死後 1 年がたち、ふさは身ごもる。ちょうどこの妊娠と入れ替わるかのように、伝吉が坑内事故に遭わされる。命は取り留めたものの、口が利かなくなってしまう。生きていても生きていないような伝吉をみてふさはふと、それが青治の恨みではないかと思うようになる。これは物語が、「関係の貧しい」人たちの関係が改善し結ばれていく方向ではなく、逆に破局に近いものといえる。乱暴であり苦労をしてきた流れ者ではありながらも労働者として坑内労働を行った伝吉と、労働とそれを通しての生産に加えることのない青治の差異は、「あのひとと青治の心と心が合うからだと思いました」

もあると書いている。また、炭鉱で歌われてきた唄にはこのようなものがある。「〽七つ八つからカンテラ提げて　坑内さがるも　親のばち―　ゴットン」（山本作兵衛 2013、6 頁・77 頁；上野英信 1960、20 頁）

（高橋 1987、87 頁）という勘違いとは違って、埋めようがないものであった。ところがふさの妊娠は生命の再生産でありそのお腹にいる命は将来の労働力になりうる存在でもある。このような生産の連鎖の中心にいるのはふさである。青治が亡くなった分をまた増やすといった、引き算、足し算では言い切れない命の連鎖を担っているのである。この作品は生と死の、背中合わせのような隣り合わせを、ふさがいつでも唱える「みっしょうかなりき」に表現している。

みっしょうかなりきですか。あれはやっぱしわたしの母親が唱えていましたからわたしも覚えたのですけど、青治の一周忌にお坊さんに聞いてみましたの。
そうしましたらお坊さんはだいぶしばらくかんがえてから、かなりきはかんのんりきではなかろうか、きっとそうだと思うがみっしょがわからないといいますから、みっしょでなくて、みっしょうとのばすのですといいましたら、どっちにしても見当がつかないけれど、しいていえばねんぴかんのんりきしっそうむうべんぼうのことだかもわからない。
かんのんりきしっそうが逆さまになってみっしょうかなりきか、あんたのお母さんは観音経のひとふしを聞きかじって自分なりの経文を唱えていたんだろうといって、紙さむずかしい字をかいてくれました。
けど、わたしとしてはいまさら聞いてもわかりませんのでみっしょうかなりきでいいです。
わたし、いまほんとうの心では、青治があのまんま生きていて母子四人でいたほうがよかったのか、これからさき一生ものをいわないかも知れないひとを抱えてゆくのがいいのか、どっちがよかったんだかわたしにはもうわかりません。（高橋 1987、93 頁）

このような言葉の変形は、「言語学的に言えば、「メタテーゼ」といって、言葉の音を記憶しやすいように、発音しやすいように民間で変形させること」（工藤正廣 2013、19 頁）である。本来の形と意味がどうであれ、それを母を通じて取り入れたふさは完全に恣意的に用いて自分のものとしていることを言っておかねばならない。母からの言い伝えのような「みっしょうかなりき」は、文字世界とは離れた世界における女性の生き方を表していると同時に、その生き方に必然的に存在する生と死の隣り合わせと生命の再生産が諦念を帯びた形でもある。このように女性による土俗的な世界は、「木偶おがみ」においても見つけることができる。

「木偶おがみ」で加代は現在再婚して再婚相手の夫・織田と先夫の間からの子供らとともに都市に暮らしている。彼女は元々炭鉱の近郊にある農家の出身であり、見合いで炭鉱の測量部で務める先夫と結婚していたが、坑内事故で夫が亡くなったのである。「観音力疾走」と同じように、坑夫の家族は坑夫が事故などで死亡したら炭鉱住宅から出るのが原則である。そこで加代は子供二人を抱えて働かないといけなくなり、炭鉱の購買

部に働きながら炭鉱住宅（長屋）に住み着くことを決心する。その後、現在の夫織田と再婚するが、加代は「再婚四か月にして新しい亭主が信心というような心の問題にまじめにとり合ってくれる男ではないことが分ってしま」（高橋 1978、174 頁）う。先夫の祖父の墓をめぐった「信心深い」加代と夫・織田との葛藤は、科学的には説明しがたいスピリチュアルな世界こそ信じて人間関係を築いていく女性の存在を強調する。葛藤の原因となる墓の問題が逆に子供たちと夫の関係改善に向かわせたという結末は、炭鉱において築かれた人間関係を清算することができずそれが引きずるままに生きていく女性の一生を表現したものである。「観音力疾走」では女性の身体を通じた命の連鎖において炭鉱の労働力を論じたことに対し、「木偶おがみ」では炭鉱において独自的だともいえる人間関係が新たな人間関係を増殖させていくことが分かる。

第３章　主婦会と炭婦協――「主婦」として、「母」として

終戦後、社会の各方面において主婦たちが名乗りをし始めた。1948 年には主婦連合会が発足した。主婦連合会は消費者運動として出発したものであり、1951 年には「おしゃもじとエプロン」をシンボルにし「台所の声を政治へ」をスローガンに生活を守る主婦大会を開催した。ここでは主婦が「家庭」と「台所」という空間を確保することが「外」の政治への発言につながるとされた。ここで注意すべき点は、主婦自身が自らの居場所を家庭と台所に集中化させているところである。主婦が居続けることができる場所が家庭と台所であり、これは「日常」「生活」「暮らし」という言葉によって囲まれる。この時、主婦の居場所の問題は空間の問題でもあり、その空間で誰が動いているかによって家族形態は変わってきた。日本近代における「家庭」概念の歴史を鑑みた時、「家庭」はその言葉自体が性別役割分業を前提としている場所でもあったが、逆説的に女性たちはその場所を砦にすることも可能であった。主婦連合会の理念が証明しているように、主婦たちが声を上げていくすべは「家庭」と呼ばれる場所、その中でも毎日の労働が行われる台所にある。主婦連合会自体とその理念は、命をつないでいくための不可欠な再生産労働・ケア労働に携わることがいわゆる「外」の政治ともつながることを体現している。

「台所」は一つの比喩でもあり、空間的には女性の「領域」として見なされてきた場所でもある（西川祐子 2004）。序章では先行研究検討を通じて生殖のコントロールとその主体としての主婦、労働の変化につれて家庭を支える主婦について触れ、女性は「主婦」という名の下で「家庭」「家族」につながっていくと論じた。対して、本章では関連資料を通して日本炭鉱主婦協議会と、日本炭鉱主婦協議会北海道地方本部、太平洋炭鉱主婦会など「主婦」たちの組織結成の経緯、主な運動と活動の性格について分析を行い、炭鉱の「主婦」が「闘う」こと、運動することは女性が「主婦」・「母」として自己を規定していくことであると同時に組織の強化でもあったと論じる。これは運動が「家族」との関係を前提にして可能なことであり、第 4 章で検討を行う生活記録を通じての「家庭」「家族」とのつながりを論じることとも関係する。

第１節　「主婦」とは誰なのか――暮らしを守る主婦たち

本節では、とりわけ炭鉱の主婦概念に関する先行研究をまとめる。婦人運動におけるバリエーションと自己規定に関する分類を行った古村えり子（2005）は、炭鉱のみならず運動する女性としての「主婦」の分析に力点をおいている。古村は婦人運動における女性を、①男性社会を支える婦人会の女性、②社会運動主体としての婦人、③「生活世界」において日々生活を営む女性と分類している。①は行政との関わりがあるため行政上の権限があり、現在には地域婦人会の形をとっている。戦前の国防婦人会、愛国婦人会が解散した後を引き継いだといえる。②と③は変化の契機を持っている点においては共通しているものの少し異なっている。②は男性との差異を基盤とした運動であり労働

組合との関係がある程度はあることに比べて、③は夫と喧嘩をしてまで運動に参加する、「女同士の絆」を大事にする存在である。そのなかで古村が焦点を合わせているのは②の「「労働者の妻」という自己規定」と③である。古村は、北海道主婦会連絡協議会（「主婦協」）の活発な活動を通じて、主婦とは縁遠いものとしてされてきた「激しさ」、「闘争」のイメージを帯びてきて「闘う主婦」が誕生したと分析している。しかし、古村の分類における②と③のあいだに境界線を引くことに難点があり、炭鉱における主婦の在り方を考察する糸口になる。

古村の分類及び事実誤認に関しては西城戸の批判がある（西城戸誠 2020、47 頁）。北海道炭鉱の主婦会資料アーカイビングと研究を行う西城戸誠は、炭鉱主婦会と炭婦協の運動が活発だった 1960 年代に関しては比較的に研究の蓄積も見えるが、その後地域社会とのつながりの中で繰り広げられる運動については研究が皆無であることと、主婦たちの運動がジェンダー論・フェミニズム論に基づく研究により評価が高まっていないとの研究動向を指摘している。そして古村の研究が解釈している、克服される「労働者の妻」像とそれを乗り越えた「個人」としての運動への肯定的な評価、炭鉱主婦会の運動から「対抗性」を積極的に読み取ることが持つ図式性・単線論、事実と異なる点を批判している。西城戸は赤平と芦別という北海道の二つの炭鉱地域における主婦会の事例分析を通して議論を展開しており、その主婦会の運動と地域において果たした役割を、「主婦」に留まらず行政と個人の間で社会との関わりを持つ「仲間集団」の活動として結論を結んでいる。西城戸の研究で注目したいところは、主婦たちの運動が激しい労働運動のみならず閉山後にも続く仲間集団として意義があったという見方と、「主婦」というカテゴリー自体へかけられる批判を問題視し、「主婦」「母」「妻」などの名の下で行われた運動自体も否定してしまう研究への懸念である。批判と評価をする現在の観点ではなくその運動が展開された時代の状況と情勢に合わせて考えるべきである。これに関してはまた西城戸（西城戸 2015）が指摘しているように、「母」としての自己認識が性別役割分業を深め母性神話を維持したという理論的批判もあるが、その「母」という使命感こそが女性たちの母親運動、平和運動を後押しできたのであり、この点は重要である。「母」としての女性主体とその主体による運動は、その「母」として自らを名乗りだしたから可能な運動であったことに注意を払いたい。これは「主婦」として名乗ることも同じである。女性たちは主婦会の活動を通じて「母」と「主婦」に名乗ることが可能になった。

このように、炭鉱の主婦たちが「母」「妻」「主婦」を名乗ること自体が運動への原動力となり、その運動は「労働者の妻」でありながら同時に独自的な闘いを展開したといえる。戦後の炭鉱において女性たちが労働運動の場に公式的に登場するのは、やはり炭婦協の名の下であった。

北海道地域の炭鉱における主婦会と炭婦協、道炭婦協についての研究業績としては、産炭地研究会(JAFCOF)がすでに関連人物に対する聴き取りと資料の整理を行っている。

特に 2015 年の「太平洋炭鉱主婦会の記録―北海道炭鉱主婦協議会の会長の聞き取りと資料を中心に」（西城戸他 2015）には、太平洋炭鉱主婦会・炭婦協・道炭婦協の会長を務めた多嶋光子氏と佐藤邦子氏の講演が載っており、「主婦」として行った運動の面々が垣間見える貴重な資料である。また、釧路市立博物館では 2000 年代初めの頃から九州と北海道を結ぶ企画展示、炭鉱と鉄道に関する企画展示などを数回行っており、2011 年にはヤマの話を聞く会第 7 回「ヤマを支えた女たち～太平洋炭鉱主婦会～」を開催した。この催しにおいては元太平洋炭鉱主婦会の会長であり炭婦協の会長も歴任した佐藤邦子氏と元太平洋炭鉱主婦会の事務局長を歴任した片桐美代子氏が「女性として、主婦として、労働組合とともに、懸命に頑張った」[36]話をした。この会も JAFCOF との共催であった。

炭婦協は 1952 年 3 月に結成準備会が作られ、同年 9 月 11 日に結成された。炭婦協の北海道支部である道炭婦協の結成はそれより少し早めの 1952 年 5 月 27 日（道炭婦協 1973、219 頁）であった。道炭婦協は北海道炭鉱主婦連絡会(炭婦連、1952 年 3 月発足)を発展的に解消されたものであった。炭婦協は、日本炭鉱労働組合(「炭労」)と夫と妻のような関係性の中で作られ出発した。「夫組織」[37]である炭労の要求と行動を共にし、たまには個別にも運動に取り組んだ。

私は、かねがねみなさんのひたむきな物の見方、考え方、そして戦い方に心の中で拍手を送っている一人ですが、とりわけ私たち男共では到底処理できない程の盛り沢山な家事をキチンと切りまわしながら、なお″矛盾″や″不正″に対して激しい怒りを燃やし、どんな切り崩しにもめげず堂々たる闘いを展開する、いってみれば(八、四〇〇カロリーの高度瀝青炭)をも焦しつくす…)ような、みなさんの逞しいエネルギーにたいし讃辞を吝まないものです。

引用は道炭婦協の 20 年史発刊当時、道炭労執行委員長である森田久雄の祝辞で、炭婦協の性格を非常によく表現している。つまり、炭婦協の「主婦」たちは「家庭」に身を置きながらも「家庭」の外の炭鉱が直面した課題にも取り掛かるべきだという、物理的空間に存在する境界をこえるラディカルな側面である。これに対して二つの解釈ができる。一点目は森田の認識と言葉は女性の身動きの範囲を「家庭」内に制限してしまったということ、それと同時に、労働組合が登場する前の「友子制度」とそれに運営される仕組みの中では「親分―兄分―子分」といった関係が中心になることに対し、戦後の労働組合にとっては主婦会すなわち家庭の主婦としての女性がパートナーとして浮かび上がるという点である。二点目は、森田が認識したかどうかに関わらず主婦たちが「家

[36] 釧路市立博物館のホームページ
https://www.city.kushiro.lg.jp/museum/gyouji/2011/0003.html から。
[37] 道炭婦協 20 年史の中、当時道炭婦協会長の福井よし江氏の言葉より。

庭」を拠点にしながらその運動の範囲は「家庭」に限らないという可能性である。これは第 4 章で議論する綴方、生活記録運動とも関わるが、女性が自分を語り始める場所が「家庭」であることは、「主婦」が如何にして「家庭」とつながるかを分るための糸口になる。

「友子制度」とは、九州で主に「納屋制度」と呼ばれた相互扶助組織である。労働者同士の繋がりを固め、生活面におけるお互いの世話と面倒を見ることと炭鉱労働に付き物の事故の際には金銭を出し合って助け合う「相互扶助」の側面も持っていた。友子制度は戦後なくなったが、戦後にも人々の意識として残っていたことが太平洋炭鉱に勤めた佐藤進氏の回顧から分かる（佐藤進 2001、100 頁）。

炭婦協はこのようにその結成当時からも「炭労」を「夫組織」として持っていて炭労と連携する形で運動を続けてきたが、問題は炭婦協と炭労の関係だけではなく、「主婦」のあり方であると記しておきたい。戦後日本においては主婦が「家庭」と強力につながる通路として生殖コントロールと労働形態変化があったと序章で言及したことに対して、ここで主婦が「家庭」とつながるものとして論点となるのは、いわゆる「激しい」「闘い」の運動である。「主婦」として名乗り始めた女性たちは、組合と異なる方法で戦いをする必要がある。それは古村の分類を敢えて引っ張ってくると②と③を合わせたような形態である。運動を遂行する主体は、あくまでも「労働者の妻」である女性が雇用主に対する労働者・労働者の味方の立場に立って労働条件について闘うということである。そして③のようにそれは当然家庭での労働とも両立を難しくし、時には支障をきたすこともある。それに加えて夫との葛藤も生じる。

もともと炭鉱会社と国の合理化政策に対する組合、炭労の運動には、戦後の食糧難が背景としてあり、これは労働者の家庭にも大きく響いた。いわゆる「物よこせ運動」で象徴される労働者の賃金と食糧の問題は、男性の賃労働によって営まれる家族の家計には深刻な問題である。1950 年頃に始まった豊里の首切り反対をきっかけに、主婦たちがこのような問題に取り組むべく北海道の労働運動に登場する。

スト突入後、婦人会はただちに主婦大会を開き″台所は私たちの手で″″夫と共に要求貫徹までたたかう″ことを決定するとともに、越冬賃金を要求、大衆交渉をはじめた。乳呑児を背負い、手弁当で鉱業所に座り込み、身近かな要求をたたきつけた。
会社は(一銭もダメだ…)の一点ばりで押し通そうとしたが、十五時間四十分にわたる主婦の粘り強い交渉によって、ついに一千円の越冬賃金を獲得した。
当時、婦人部は会長に職員の主婦、副会長に鉱員から出ていたが、前述の行動のなかで職制の主婦が離れていったのは自然の成行きであった。こうして(働く者の立場から堂々と主張のできる組織を自分たちの手でつくろう…)と、階級的に目覚めていった主婦たちは二十六年「生活を守る主婦会」を結成した。（道炭婦協 1973、23〜24 頁）

このような記述から分かるのは、労働者の夫と労働者の妻である主婦が、運動の主体として分離せず認識され、書かれているという点である。このように同じ目的のために闘うという共通点から出発し労働者と労働者の妻は運命共同体のように認識されがちであったものの、その激しさは主婦の独特な方法と様子であった。そしてその激しさは共通の目的のためには妥当な闘いとされた。その妥当な激しさを表す言葉が引用した文章においては「台所」と「乳呑児」「手弁当」だといえる。いずれも「家庭」を連想させ、空間的には「外」ではなく「内」であるが、この内なるものが「外」に姿を現れた時はより効果的に家庭内の「生活」「暮らし」[38]が困窮であると主張することができる。そして「激しさ」が生まれるのである。つまり、「内」が「外」に可視化されることは、過激、激しさという感覚を呼び起こす。

そして、主婦たちが一番大切にした「暮らし」とはどのようなものであったのか。これには、戦後日本における食糧難が背景としてある。太平洋炭鉱の主婦会活動を証言している多嶋光子、佐藤邦子、片桐美代子氏はそれぞれ厚岸(釧路)、函館、樺太生まれであり、佐藤邦子氏は父親が樺太敷香(ポロナイスク)で働いたことがある[39]。親戚・家族を頼って、結婚により炭鉱へやってくるのである。この女性たちの話によると移住してきたばかりの際には「社宅」が当たらなかったということが述べられるが、それにも関わらず、鉄鋼と石炭産業において行われた戦後の復興は、暮らしにおいてはもっとも考慮すべき選択肢であった。戦時期には炭鉱における労働者の数が減り、終戦後には人口の移動が増え、招集される前に炭鉱で働いていた労働者は復帰する場合もあった[40]。太平洋炭鉱も例外ではなく、九州からの労働者も受け入れた[41]太平洋炭鉱及び労働者たちは暮らしに困難を抱える。

戦後樺太から北海道へ引き揚げた人々のなかには、暮らしと食糧難のため来た場合も少なくない。一つの事例として、戦前に樺太に生まれ引き揚げた後雄別・尺別炭鉱で過ごした経験を持つ岩崎守男氏の講演がすでに産炭地研究会によってまとめられている（笠原良太・嶋崎尚子 2018)。戦後における樺太から北海道の炭鉱への引き揚げパターンは様々であるが、彼によると二つのパターンが考えられる。樺太には炭鉱が盛んであ

---

38 「「いのちとくらいを守る」ことをスローガンにした主婦会は、特に生活面において大変頼りにされていた。」(石川孝織 2014、132 頁)

39 「私は昭和 15(1940)年、函館生まれです。樺太の敷香、現在のホロナイスクに父親が仕事で行っておりましたが、昭和 20(1945)年に亡くなりました。母の姉が釧路にいて「炭鉱は景気が良いから一度こっちにおいで」と言われ、5 歳の時に釧路に来たのです。」(佐藤邦子 2011、38 頁)

40 釧路炭田とその軌跡 https://www.city.kushiro.lg.jp/www/common/003hp/home.html から。

41 労働組合史に「追い追い帰つて来ていた九州転換者」と書かれている部分は、太平洋炭鉱に勤めた大河久夫さんによると 1944 年緊迫した状況の中で太平洋炭鉱・春採坑の労働者たちが九州の三池と田川炭鉱に配置転換となり労働力が一部九州に抜け、戦後に太平洋炭鉱に復帰したという。(太平洋炭鉱労仂組合 1955、15 頁；大河久夫 1999、20～21 頁)

り石炭産業が主要産業であった事情により、引き揚げ後にも炭鉱に行くことが当然のこと、そして戦後の食糧事情と暮らしの難しさを考えると当時のエネルギー産業が集中される炭鉱には特別配給があったということである。そのような情報を知り合い、家族・親族などから入手した人たちは炭鉱に流れる。後者の場合は、太平洋炭鉱や空知炭田主婦会の女性たちが語る証言にも当てはまる。

女性たちの樺太からの引揚げ体験に関しては既に数多くの聞き書き、証言集が出ており、彼女たちの引揚げ体験による戦後は苦難に満ちたものであり、日本近現代の歴史において重要な資料となっている[42]。太平洋炭鉱主婦会の女性たちにとっての引揚げと移住などの「移動」は何を意味していたか。太平洋炭鉱は他の炭鉱に比べて安定的な環境であったという[43]ものの、人口増加とそれに伴う食糧難、失業問題、暮らしの課題は、戦後の炭鉱全体が抱える問題であったといえる。戦後直後の 1946 年太平洋炭鉱所長に提出された労働組合の決議には一番に「一、食糧及生活必須物資配給機構の管理」（太平洋炭鉱労仂組合 1955、28 頁）と要求事項がある。つまり、食糧問題を含めた暮らしが労働者の肝要な課題としてあったわけである。主婦会の多嶋光子氏が、「炭婦協は、非常に物取り闘争はうまいけれど、炭婦協には思想がない」という一学者の発言に対して「思想が無いと言ったって、思想が無くても、食べるものが無ければ物を取ってくれれば、それで良いのではないか。そこに思想が（あっても）なにをするの」（多嶋光子〔1987〕2015、18 頁）と反発したことは重要であり、暮らしを確保するため女性たちが行った移動を裏付けると同時に「主婦」の存在意味と運動を的確に表している。

1938 年国家総動員法による物資の配給など戦時期から続いた食糧問題が太平洋炭鉱だけの問題ではなかったことは周知の通りである。1945 年の時点で配給制は廃止されるが、1947 年には閣議決定による「石炭非常増産対策要綱」（昭和 22 年 10 月 3 日）の「2. 職場基準の確立と給与制度の改善」に「(3)炭鉱従事者に対する生活物資（家族に対する特配物資を含む）の特配分は、一般的且つ特権的なものではなくて、誠実なる勤労に依る損耗の補充と、報奨を目的として行うことを明確にするよう、配給方法を確立すると共に之を確保する。なお炭鉱現場における措置として、増産の効果を挙げ得ないでいるものは、この際徹底的に是正する。」とある。なお、同閣議決定により太平洋炭

---

[42] 代表的な本として創価学会婦人平和委員会編 1964『《シリーズ》平和への願いをこめて⑪樺太・千島引揚げ（北海道）編　フレップの島遠く』第三文明社；語り・和田英行、聞き書き・野原由香利 2005『フレップの林を抜けて』など。「フレップ」とは苔桃（コケモモ）で、樺太に広く自生し、島民に愛されたという。

[43] 「感じたのは、他のヤマは持ち家制度が無かったことと、それから月給制では無かったこと。他はあくまでも請負金で、「今日はここからここまでするといくら」という感じで、急いでさっさとやってしまい、あとは居眠り…というようなことも聞かされました。……太平洋炭砿の場合は給料が安定していることは、非常に良いと言われました。「賃金が良いところに常に回されれば良いのだけれども、時にはそうではない時がある。そうすると賃金が下がるので、安定しない」と言われました。また、「持ち家制度があって良いね」とも言われました。」（佐藤邦子 2011、52 頁）

鉱では、坑外・坑内労働が 3 交替制となり長い間行われてきた長時間の労働もなくなった（太平洋炭鉱労働組合 1986、39 頁）という。このような優遇措置と状況により、炭鉱への人口移動が促される。各地から様々な経歴を持った人々が炭鉱に集まる（佐藤進 1999、129 頁）。しかし藤野豊(2016)が指摘しているように、石炭産業へ施された経済政策の集中に象徴される石炭増産と GHQ の方針の違いによる結果、1949 年頃から石炭産業は大きい打撃を受け閉山、大量解雇、失業者問題が生じる。そして佐藤邦子氏によると「優遇」とはいえ、ギリギリの生活だったという（佐藤邦子 1999、24 頁）。太平洋炭鉱労働組合の結成が 1946 年 5 月[44]、主婦会は 1947 年であるが、多嶋氏の話によると主婦会が運営体制を整え暮らし問題に取り組みだしたのは、1949 年頃からである。この時期は戦後における石炭産業全般は傾け始める頃になるが、太平洋炭鉱主婦会は未だに乏しい暮らしの改善のため動き出したのである。

ライフヒストリーとも重なる女性たちの移動をどう捉えるべきなのか。炭鉱における女性たちが行う移動の要因は、結婚と就職など理由も様々であるが、統計に捉え難い側面がある。特に炭鉱における人口の移動は大きく、戦時期には招集と国家の方針による産業の集中化により北海道と九州間の移動、閉山による大量の離職者の発生、終戦に伴う朝鮮人・中国人・捕虜の帰国、これらとは無関係で常に炭鉱への流入と離脱などがある。しかしこの時、数値化されるのは労働力としてである。つまり、「家族ぐるみ」と表現されることはあるが女性が主体になることは珍しい。女性が主体になるのは、個別の回顧と証言、語りによる時のみである。

加えて、本論文では「物資」「食糧」「暮らし」といった用語を女性にのみ関わる独自の概念としては考えていないことを述べておく。ただ、今の文脈において女性の炭鉱への移動を論じようとする際に、その移動を促す一つの要素であることは否定しない。それには終戦後という時代的背景も働いている。さらに、女性が「家庭」と「家族」と関連して「主婦」としてある時に限ってこの議論は有効である。本論文の全体を通して論じようとするところでもあるためである。

第２節　「主婦」と主婦会

第 1 節で検討した通り、主婦たちは戦後の深刻化した食糧難を打開するため「物よこせ」の闘いを展開した。その中で主婦たちの運動が炭労と各炭鉱の労働組合との共同で行われたことは事実であるが、本節で検討したいのは、主婦たちが単独ではなく「集団」として闘いを展開することがより効果的だということを意識し議論し続けたという点である。ここで集団・組織が論点になる。「主婦」を名乗ることは個人でも可能だが、

[44] 太平洋炭鉱における組合は、1945 年 11 月 25 日に「春採炭鉱労働組合」、1946 年 1 月 17 日に「別保炭鉱労働組合」、その 10 日後の 1 月 27 日に「太平洋炭鉱職員組合」、5 月 12 日には職員と鉱員の組織が合同を認め「太平洋炭鉱労働組合」の誕生に至る。（太平洋炭鉱労仂組合 1955）

組織としての「主婦」の主張と要求は多数の意思として提出されることによって、力を持つ。ここでは炭婦協・道炭婦協・太平洋炭鉱主婦会に関する資料を検討し、その個人と組織との関係をみてみよう。

第1節で触れたように炭婦協・道炭婦協の結成時期は1952年であるが、各炭鉱における主婦会（当時は「婦人会」）の結成はもっと早いし、各炭鉱が持つ事情がそれぞれであるように主婦会も設立事情などが異なっていた。例えば1949年長期化した賃金未払いと労働協約の一方的な修正を行った会社に対して運動を開始した豊里では、激しい運動の中で当時婦人部に入っていた職員の妻が離れていく。この闘いでは、「働く者の立場から堂々と主張のできる組織を自分たちの手でつくろう…」(道炭婦協1973、23頁)と、労働者（「鉱員」）の妻が「階級的に目覚めて」（道炭婦協1973、23頁）いくきっかけになる。戦時期に愛国婦人会・大日本連合婦人会・大日本国防婦人会が存在し、戦後にはGHQの「女性解放」「民主化」政策により女性たちが「婦人」という名の下に地域ごとに組織された。このような一般的な状況から見ても戦後炭鉱における婦人会、主婦会に入る女性たちは女性団体の経験を持つことが稀でなかったことに加えて、「主婦会」は「女性」「婦人」という広いカテゴリーでなく階級に基づく細分化により形作られていく[45]。労働者階級の台所、家庭を砦にする運動が始まるわけである。

多嶋光子氏も戦前の1940年頃には国防婦人会に入り分会の副会長で活躍する経験を持ちながら、その経験が個人の持つ姿勢とともに主婦としての目的意識の下、主婦会・炭婦協運営にも生かされていたと言って過言ではない。多嶋氏が主婦会に入ったのは1949年頃である。当時の太平洋炭鉱主婦会には、坑内労働をする女性たちが多数いたという。

当時〔昭和24年頃：引用者注〕、やはり、坑内に男性は少なかったので、裸で、お腰一枚で坑内に入っていた女性たちが最初の組織をしたのです。ですから、大変な私以上の「あばずれ」が、いっぱいいるわけですよ。「あばずれ」と言うと言葉が悪いから、「あねご」がいっぱいいるのです。そして、主婦会のいろいろなことを提案するのは、主婦会の役員ではなくて、いわゆる、組合の教宣部の人たちがいろいろな提案したり、答弁をしたりしました。そして、そこにいつでも焼酎があるんです。焼酎がダンと据えてあって、飲みながらこういう鉢巻をしてね。子守結びっていうのか、前の方に結んでね。そしてこういうふうにして、ダンと置いてグビーっとね。会長さんやいろいろな人が、グビー、グビーと飲みながら、ね。そのうちに喧嘩が始まるわけ。そうするとお前はこの間、下駄を買ってきた金を主婦会から出させた、だとか、つまらない話で喧嘩をする

[45] 例えば、北海道の新幌内労組婦人部は「愛国婦人会、国防婦人会が敗戦と同時に解散し、労組内に婦人会新幌内分区として設立」され幌内鉱も「労組の支持をうけて、四六年四月国防婦人会をすて、幌内婦人会を発足させ」、豊里でも「「豊里大日本婦人会」が敗戦とともに「豊里婦人会」と名をかえ」る（嶋津1964、704頁）。

のです。…だから、私は「あんた方、ここに何をしに来ていて、何時間ここに座っているのだ」と、「私たちはあんた方が焼酎を飲んで喧嘩するのを見物に来たのではない、私は帰ります」と言って出てきたの。（多嶋光子〔1987〕2015、15〜16 頁）

引用で興味深いところは、当時の主婦会の様子である。1949 年にはすでに終戦しており 1947 年の労働基準法により女性の坑内労働は禁止されたにも関わらず、まだ女性の坑内労働が行われていたと分かる貴重な証言である。加えて、坑内労働をした女性たちは、その後主婦会の運営をしていくいことになる「主婦」たちとは異なって、主婦会の運営は緩くされたのである。それは戦後の民主主義風潮に反するものであったと、多嶋氏の証言は言っている。この時期の太平洋炭鉱は戦後の復興が計らわれる時期（清水拓 2014、3 頁）であり図書室設置の福利厚生による「文化」涵養が目指された。このようなことにより労働力への再考があった可能性もある。「主婦」としての女性たちが改めて声を出すこと、以前主婦会の運営をした女性たちとは区別されるような側面が必要とされる。多嶋氏の話では、当時の「主婦会」には主婦会運営に対して態度・理解が異なる女性たちが混在していたことが分かるのである。しかし太平洋炭鉱主婦会は 1947 年結成以前からも、「働く婦人」と「主婦」の要求が違うということが問題視された。

昭和二一年
当初青年婦人という中で一緒に考えられていた主婦活動も、青年婦人の「勉強しよう」という動きの中から労働組合結成以来、米よこせ運動を通じ色々な斗いの経験の中から、新しい歴史の流れとして、三月に組合青年部としてここに産まれた。然し、職場で働く婦人と主婦との要求が違う中で、主婦は主婦だけで会を作るべきだという気運の中で、やがて太平洋主婦会の胎動が初まって行く。（『母のうぶごえ』46 号 1998、12 頁）

多嶋氏の話が時期と内容において間違いがないとしたら、このような問題すなわち炭鉱内で女性たちが労働運動をしていく上で異なる立場に立ち、それぞれの理解・要求も異なるという問題は、主婦会結成以前から主婦会が結成されてからも続くものであった。多嶋氏が回顧している 1949 年頃に主婦会の運営は労働組合の方針と運営の一環であり、それは運営における非効率性と非民主性であるよりは、主婦会という組織に対する理解と運動の目的・要求の「差」が表面化したことに他ならない。

主婦たちの運動は、第 2 節でも検討したように台所を砦にしてその「内」なる場所を「外」に換気する形で展開されてきた。道炭婦協の「日本炭鉱主婦協議会北海道地方本部規約」の「第二章　第五条」には「主婦会は原則として組合員の家族で組織します」とあり、炭婦協の「日本炭婦協主婦協議会規約」の「第二章　第六条」にも「主婦会は原則として組合員の家族である主婦で組織する」とあるように、家庭という空間を連想させる運動方法は組織の作り方によって支えられた。

炭婦協の 5 年史として認識されている[46]、女性問題研究家の嶋津千利世が『炭労十年史』(1964)のなかで書いた「炭婦協のあゆみ」には 1952 年炭婦協が結成される前から各炭鉱に存在した婦人部の動きにも触れており、とりわけ北海道における女性労働運動の主体についての議論が紹介されている。

この審議において、「婦人労働者」を「働ク婦人」と訂正することを可決し、働く婦人と主婦との関連について次のように討議されている。
登川　働ク婦人ト主婦ヲ切リ離シテ考エラレヌカ
議長　切リハナスコトハ出来ルが主婦ノ賛助ニヨリ強力ナモノト致シタイ
など、活発な意見が続出し、「コノ部ハ支部協所属ノ婦人ヲ中心トシテ構成スル」「書記ハ働ク婦人カラ幹事会ヲ経テ選出」を可決した。
…
「前回ノ婦人部会議デ主婦モ婦人部員ト認メタガ組合法ニ依リ常任会議デ否決トナル議論ノ結果勤労婦人ヲ正員、主婦ヲ賛助員ト決定」し、…
この働く婦人と主婦との関係は総会の決定権に対する矛盾として、四十七年五月二六日に開かれた全炭支部協婦人部第一回年次総会で、規約改正の件として次のように提案された。
…
夕張　この支部協婦人部内に設ける事は不賛成、若しこのような会合を持つならこの規約に載せないで別箇に持ったら良いと思う。
登川　正員と賛助員に分けられて同等権利でないのだから賛助員会を持っても意味がないと思う。
小田切　この規約はあくまでも支部協婦人部の規約であるから各支部に於ては各支部に即応するようにしたら良い、従ってこの賛助員会も協議会の形で持つのであるからこの規約にうたっても差支えないと思う。(嶋津 1964、695～696 頁)

内容をみてみると、各炭鉱に組織された「婦人部」が活発に活動するなかで、1947 年に「北海道全炭婦人部確立大会」が開かれ、その方針において「働ク婦人」と「主婦」が区別されている。このプロセスでは、「働く婦人」の方が発言権を持っており、審議を経てからもその区別は残り「働く婦人を正員主婦を賛助員」(嶋津 1964、696 頁)とす

[46] 嶋津千利世によって書かれた「炭婦協のあゆみ」は炭婦協の歴史記述において重要な存在であり、繰り返して使われるようになる。炭労の 10 年史の中に含まれているが、炭婦協側では炭婦協 5 年史として認識していたようである。1973 年発行の『研山は知っている―道炭婦協の 20 年―』には、嶋津執筆のものが引用され引用先のページは明記してないものの、「炭婦協五年史より」という表記が数回登場する。また、日本炭鉱主婦協議会 1983『日本炭鉱主婦協議会結成三十周年』の「炭婦協のあゆみ(資料)」(16～23 頁)は、嶋津千利世の記述の 693～707 頁(「全炭支部婦人部規約」を除いて)からの記述と重なる。

る規約が採択された。この「労働婦人」＝「働く婦人」と「家庭婦人」＝「主婦」の区別は、活動の中で分離と統合をしながらも存在したという。このことは、「主婦」を全面に掲げていた炭婦協が結成時には「組合員の家族たる主婦で組織する」方針をとっているが、その「主婦」とは「労働婦人」との関係性の中で作られ、炭婦協は最初の段階では家庭の主婦だけの団体ではなかったことを証明している。そのような「労働婦人」と「労働組合」との関係性を内包しつつも、1951 年からは世界的な国際婦人運動の動きとともに「主婦」たちは、「労働婦人」とは別の組織で運営するようになる。つまり「再編成」に至るのである。その中で炭婦協の運動と主張は、当然「家族」を単位にして行わざるを得ない。

このように組織としての炭婦協が持つ体制の堅固さは、北海道主婦会連絡協議会(「道主婦協」)の結成時(1958)にも目立つものであった。道主婦協の結成 20 年を記念にして開かれた座談会＜歴代会長、オルグによる《座談会》＞では、当時女性運動における炭婦協の位置付けがよく表れている。

沢田　最初の時は、これでも女かしらと思うくらい活発で(笑)。炭婦協だけが目立った感じがする。私たちは、家庭からポッと出て来た田舎者でしたから、男性の中で発言することさえ膝がガクガクしていた時でしたから―えらい所に来たという印象が強く残っている。

下出　準備会の中では、絶対賛否は問わず、徹底的な話し合いを当初からめざしていた。しかし、発言の主体はいま出たように炭婦協だった。私がオルグになってからでも北教組〔北海道教職員組合：引用者注〕や国鉄へ行くと、そういうきびしい発言ばかりではついて行けないという意見が強く出されていたくらいです。炭婦協は歴史もあり勉強もしている上、地域の中でも苦しい生活を強いられていたわけですから、身についていた言葉だったわけです。しかし、当時はまだ皆んなが段階が違うのだからということで決して賛否を急ぐことはなかった。

福井　その頃、炭婦協には地区十二もあった。したがって、道の三役のほかにそれぞれの地域に十二人もの強者がいたわけだし、地域代表がいろんな発言をしていたわけです。しかし、環境が違うというか、生活の中のきびしさの中から結成されていた炭婦協と奥様組織として結成されたところとの違いは、ずい分あったと思う。だから、初めの頃は非常にビックリされたと思います。

…

福井　先ほと炭婦協に対する一部批判があったけれど、考えてみると炭婦協の活動は組織づくりより運動の方が先行していた。炭婦協の運動の前身は、米ヨコセ運動から始まったといわれるように、皆んなで集まって要求してがんばれば何んとかなる―という歴史があるわけ。そういう土壌の中で育ってきたから、発言の内容も当然きびしかったと思う。(北海道主婦会連絡協議会 1979、6～7 頁)

この時期に炭婦協は1952年からわずか6年経った組織であったが、すでに組織として声を上げて要求をする体制がつくられていた。引用の座談会は、その生活の基盤を炭鉱にする主婦たちとそうでない主婦たちの運動のしかたの違いが顧みられているものである。座談会の参加者である福井よしえ氏が炭婦協は「組織づくりより運動の方が先行していた」と言っているが、それにも関わらず組織は拡張し続けた[47]。これは、暮らしに関わる切実な米よこせ、物よこせという要求が労働運動において占める位置を思い起こすものである。

一方、「組織づくり」は各主婦会の集まりでありながら要求を調整する炭婦協という上位の組織より、各主婦会における運動の中で図られるべき課題であったことも考えられる。各炭鉱における主婦会の運動は、まず主婦各々の参加が必要とされるからである。1978年、太平洋炭鉱主婦会では主婦会結成30年に当たって旧三役と本部役員などが出席した座談会を開き、創立期から30年が経った現在における運動の変化と課題を議論している。その中一つの議題として出されるのが主婦会という組織と主婦個人との関係についてである。

佐藤　これは選挙だけではないのですが、いままでは組織が生活を守るということになっていたけれど、今は自分で生活を守るという風に意識が変わってきています。それをなんとか組織が生活を守るんだ、という方向にまっていきたいのですが、すぐ実現を目の前にやられるものだからやりず〔ママ〕らいんです。そういう悩みがあるのですが。
荒木　時代の流れでね、戦争なんかでひじょうに苦労してやっと生活がよくなったという年代の人たちと、生まれてから何の苦労もなく育った人たちが一緒にやるというのはむずかしいんだけれども、なんとか同調してもらってなんとか運動していかなければならないんですものね。
…
田中　主婦会とはどんな役割をはたすのかということをきちっとしていかないと、こまると思います。組織は自分のことを何をやってくれるんだろうかということをわかってもらわなければなりません。主婦会とは自分たちにとってどんな組織なのか、何のメリットがあるのか、ということですね。情勢が多様化してやりにくい面はありますし、年代が変わってきていますが、それに対応した要求、考え方をまとめて組織化していかなければならないですよね。″主婦会は何のためにあるのかわからない″といわれるようなことをなくさなければなりません。生活が苦しい、苦しいから働きにいく、これは目

[47] 炭婦協結成時の組織の規模としては、北海道地方が42支部で会員数36,000名、福岡地方が36支部で約20,000名、佐賀地方が10支部で6,000名、山口地方が10支部で約70,000名、長崎地方が14支部で8,000名、常磐地方が4支部で7,300名であった。（嶋津1964、746頁）

先の解決にはなりますが、根本的にはならないのですからね。(『母のうぶごえ』36 号 1978、42～43 頁)

とりわけこの議論には、生活、暮らしの問題が個人レベルでの解決はできないという意識が前提されている。座談会出席者たちは、個人の賃金労働、努力では根本的な暮らしの改善が難しいのであり、問題自体を労働環境と条件の問題として捉えようとしているのである。このような前提と認識に基づいて次に問題となるのは、個々の主婦を主婦会の運動に如何に巻き込んでいくのかである。これは運動する主体を増やすためではなく、組織と個人の関係性を再設定するためである。すなわち、個人と組織との適度な距離感を持たせることが重要であり、運動の方向もそこから始まらないといけないのである。このように個別の主婦会レベルでは実際に運動を遂行していく運動家＝オルグの育成が課題として出され、それと同時に組織と個人の距離を保つことが模索された。

第３節　「主婦」の母親運動

ここでは炭婦協と道炭婦協、太平洋炭鉱主婦会が主婦の運動として力を入れたもう一つの運動として「母親運動」を取り扱い、主婦会の労働運動が「母」として行う運動と同時に行われたことの意味を考える。

とりわけ炭婦協が母親運動といかにして関わってきたかについて、道炭婦協の 20 年史を参考にして母親大会参加への流れをまとめる。1953 年に国際民主婦人連盟(「民婦連」)の呼びかけで「世界婦人大会」が開催される。ここに日本代表として当時キリスト教矯風会の会員だった小笠原貞子氏たちが参加、その後小笠原氏は日本国内で報告活動を活発に行い、このような雰囲気の中、北海道でも「全道婦人大会」が開催されこれが基礎となり「平和婦人会」が結成するようになる。この「平和婦人会」には炭婦協をはじめ日鋼室蘭、労組婦人部、地域婦人会、女子学生などが幅広く参加、そして「日本婦人団体連合会」(「婦団連」)に加盟することが決定された。この際初代会長が小笠原貞子氏であった。しばらくして 1954 年にビキニにおける水爆実験が起こりこれに対する反対・抗議の運動が日本国内でも盛んであった。同年、水爆実験の恐ろしさを訴える世界民婦連の呼びかけで「世界母親大会」開催が決まる。婦団連から平和婦人会に代表派遣の要請により、多嶋氏は札幌母子くらしの会会長の梅田幸子氏とともに北海道の代表となる。日本からの代表団は河崎なつを団長にして 14 名であった[48]。

[48] 日本母親大会ホームページ
(http://hahaoyataikai.jp/02_taikai/taikai_1/taikai_1.html)から。

世界母親大會に北海道から
梅田幸子
多島光子さんを送りましょう

経歴

推薦のことば

＜写真　盛会母親大会に代表を送るためのカンパ活動「世界母親大会に北海道から梅田幸子・多島光子を送りましょう」パンフレット。二人の経歴と覚悟の一言、推薦のことばが掲載している。写真の左が多嶋氏。出典は「太平洋炭砿資料」の「道炭婦協①02 - 01」＞

母親運動は、平塚らいてうが「原水爆禁止」と訴えたことが反響を呼び、戦争と水爆、原爆という人命の大量殺傷に対する恐ろしさを思い起こし、第 3 次世界大戦勃発への危機感をもとに「私たちは母の名において、死から生命を守り、憎しみから友情を守り、戦争から平和を守るために団結して行動しましょう」というフランスの科学者であり女性解放運動家のユージェニーコットン氏の発案により始まった。この 1955 年の大会は第 1 回であり、1953 年の「世界婦人大会」とは違う目標において開かれるものであった。この大会でギリシャの詩人ペリディス氏が唄った「生命を産みだす母親は、生命を育て、生命を守ることをのぞみます」がスローガンになる。

炭婦協内部では世界母親大会に代表を送るには費用がかかるので、その費用をあてがうためのカンパを呼びかけていた。この「世界母親大会に北海道から梅田幸子・多島光子〔文献によってはこのような表記が見える：引用者注〕さんを送りましょう」キャンペーンは、炭婦協においてはカンパ金の募金を各炭鉱の主婦会へ呼びかけることで展開された。次は「太平洋炭砿資料」の中、道炭婦協発翰・来翰・事務綴り 02 の道炭婦協発翰 01 に入っている道炭婦協発の文書である。

世界母親大会代表派遣に就いて

第五回道炭婦協定期大会は七月七日よりフランスのパリ―〔開催場所が後にスイスのローザンヌに変更された：引用者注〕で開催される世界母親大会に北海道代表として道炭婦協より一名を派遣する事に決定、具体的人選は新運営委員会に一任され、カンパ金として一人当たり参拾円のカンパを決定致しました。

従って四日に開催された第一回運営委員会は人選を行った結果左の二名を候補として山元

に帰って種々検討の結果、内一名を派遣する事にしたがカンパ金に就いても、街頭募金、バッチ売上げによる利益金、手拭、鉛筆の販売等による巾広い活動を開始して三〇円のカンパを七月末日までに実施する事にしました。従って各主婦会、各地区協は七月末日迄にあらゆる方途を以ってカンパ運動を展開し、代表の派遣に努力せられる様、お願い申上げます。
尚、カンパ金は書記局宛御送り下さい。
記.
代表候補　畑田下枝(前道炭婦協運営委員長、全国炭婦協副会長、北海道平和婦人会副会長)尺別
〃　　多嶋光子(元道炭婦協運営委員長、現道炭婦協会長)太平洋

このようにして募金したカンパ金は、同じ資料群の「多嶋会長母親大会カンパ内訳」から分かるように、各炭鉱の主婦会(44 会)から約 110 万円に、外部(国会関係、道会関係、その他、炭労本部)から約 4 万 6 千円であり合計は約 120 万円である。これに対する実際の支出は約 11 万円であったので、実際の支出を超えるカンパ金が集まったわけであり[49]、炭婦協の組織として持つ集結力が分かるところである。また、中小炭鉱が集中されている長崎では主婦たちが九州の代表に被爆者の山口みよ子氏を送るため必死にカンパを行ったという（永丘智郎 1957、109～110 頁)。

多嶋氏の所属である太平洋炭鉱においても「全山一丸となって」(『母のうぶごえ』26 号 1968、14 頁）カンパ活動を展開した。大会に参加して帰国した多嶋氏は、スイスでの成果と報告活動を全国的に行い、太平洋炭鉱に留まることがないほど忙しかったという（『母のうぶごえ』26 号 1968、14 頁)。

多嶋氏はこのような母親運動と炭婦協を含めた主婦会活動の関係を同時に見る際に検討すべきである。第 1 回世界母親大会の代表として参加したことも象徴的であるが、これはなにより炭鉱の主婦としての「米よこせ運動」が平和を願う母親としての運動と接続していくプロセスである。第 1 節で検討したように、主婦たちは暮らしという個人レベルの問題を政治という公的な場に出し、それが主婦たちの運動である。多嶋氏は太平洋炭鉱主婦会から道炭婦協・炭婦協、母親運動に参加していくが、この政治的領域といえるところへの参加は多嶋氏の「主婦」としての運動の延長線上にあるのである。主婦としての運動に至るまでのことを顧みる多嶋氏の回顧はそのようなことを言っている。

当時は食糧不足で、主婦はよく組合と一緒になって〃米をよこせ〃と砿業所におしかけたものです。役員の家は、石けん、軍手、マッチなどでさながら物資の倉庫のようにな

[49] ①各炭鉱主婦会から 1,155,496 円/②外部カンパ金 46,390/①＋②＝1,201,886 円/実際支出 1,067,747 円/差引残高（炭婦協のカンパ金となる）134,139 円

り、配分に大わらわでした。
こういう状態ですから、夫たちは子供のお守りやリヤカー引きなど、家事に協力するということが習慣づけられていきました(現在だんだん薄れて来ていることは残念ですね)。
こうして″生活を守る″ということから出発した私たちの組織は、その後激しい闘いの中から、すこしずつではありますが、私たちの生活を脅かす根元へ眼をむけ、次第に政治的にも目覚めてきました。そして今では、生活と権利、平和を守る日本の主婦の中心的な存在として内外に評価されるというところまで成長しました。(多嶋光子 1964、38～39 頁)

多嶋氏の経験から見ると、炭鉱の主婦としての運動は「組合員と一緒に闘うほかにも」(多嶋 1995、173 頁) 食糧のことは言うまでもなく、当時高価だったストーブの支給、唐紙・畳の張替えなど暮らしに必要なものへの要求は労働組合を通じることなく主婦の独自的なものであった。母親運動への参加はこのような主婦の要求・運動から連続していくものである。日本国内における母親大会など、母親運動の動きの拡散は直接には世界母親大会の日本代表参加とその後の報告活動を通じた啓蒙があげられるが、参加する「母親」も様々で地域ごとにも抱えている問題が違い、職業、年齢なども異なることが一つの原因としてある。つまり母親としての抱える諸問題を話し合う場が必要であり、「母親大会」はそのような場であった。このようなことを念頭に置いて、北海道という地域の代表として多嶋氏が炭婦協から選ばれたということから、炭鉱の主婦と母親という自己規定の重なりを考察する必要がある。

炭鉱における女性の暮らしを論じる時、賃金労働、育児・家事・ケアを含めたいわゆる再生産労働が中心となるが、本論文ではその女性労働の連続性をどのようにして捉えるかに焦点を合わせる。つまり、ここでは主婦が主婦会の労働運動、暮らしのための運動を展開すると同時に母としての自分を名乗ったということである。そして母としての女性を論じる際にも注目したいところが、母親大会からも分かることであるが母親たちの個人のあらゆる悩みと苦難が共有される場としての母親大会が、「平和」「反水爆」「戦争反対」など大きい政治の問題にたどり着く場でもあったということである。先にもまとめたようにこの場が作られた直接的なきっかけは、世界婦人運動の動きという影響とアメリカによる水爆実験である。戦後約 10 年が過ぎた時点において起こった水爆実験はまた戦争の恐怖と記憶が甦る契機であった。1955 年 6 月 7 日から三日間開かれた第 1 回日本母親大会では、ビキニ環礁での水爆実験で夫を亡くした久保山すず氏も原爆の恐ろしさからの水爆・原爆反対、戦争反対を訴えた。言うまでもなく朝鮮戦争と米軍占領、サンフランシスコ条約・日米安全保障条約と MSA 協定の締結、労働法の改悪、破壊活動防止法、企業整備など 1950 年代の情勢も影響していた。

このような情勢と、各部門の女性「母」が置かれている暮らし、労働などの問題とは

どこで接続しているのか。そして母としての女性たちはどのようにして接続させようとしたのか。多嶋氏は世界母親大会の参加についての経験を語る中で、多嶋氏自分のことも含めて当時女性たちが「母」を名乗ることの意味を示唆している。

やっぱり、「アカ」攻撃があったのですよ〔多嶋氏と世界母親大会の北海道代表として行くはずだった日鋼室蘭主婦協議会の池野五乙女氏が代表を取りやめた理由への質疑があり、その質疑に対する応答である：引用者注〕。結局、小笠原さんの話を前に聞いていたでしょう。国際会議に行って来たことなんかっていう話を、前に帰って来たときに。だからその、やっぱり向こうに行って、ソビエトやなんか、とにかく、母親云々、戦争反対って言われるのだから。そういう時代でしたから。やっぱり、帰って来てからの闘争との関係です。あそこも苦労しましたからね。（多嶋光子〔1987〕2015、43 頁）

とりわけ共産党が非合法下のアメリカの母親は「なんとか会議にはたどりついたが、無事に子どものまつ家に帰りつけるかどうか心配だ、私はただの母親なのに」と訴えました。また同じような発言が多くあったのです。私はこの会議でアカのレッテルは日本だけではなく、とくに大国の植民地政策がおこなわれている国ぐにでは生命をかけたたたかいが繰り返されていることを初めて知ったのです。（多嶋 1985、203 頁）

母親運動との関わりが「アカ」とされることは日本だけではなかったが、日本におけるこのような時代の認識と雰囲気には、多嶋氏が親交を深めた小笠原貞子氏[50]の先立つ洋行と活動が一つの背景としてある。小笠原貞子氏（1920～1995）は 1953 年に世界婦人大会のためデンマークに出発するがその後中国とソビエトの招待を受け、汽車に乗って東ドイツ・ポーランドを通ってソビエト（アルメニア・グルジア共和国）・中国からルーマニア・チェコスロバキアを見学してから日本に帰る（小笠原 1983）。小笠原氏もこの時思い寄らぬ招待に驚きながらも悩みに悩みを重ね結局見学を決める。この時小笠原氏の気持ちを綴った文章から分かるように、当時日本にいる家族に「これから私は社会主義国に入ります。なにか起こるかわかりませんが、みんなと一緒だから心配しないでください」と葉書を書いた（小笠原 1983、113 頁）ほど「アカい国」へ行く意味は決して軽くなかった。

世界母親大会を控えて開かれた第 1 回日本母親大会（1955 年 6 月 7 日～9 日）は「涙の第 1 回大会」「泣き親大会」と呼ばれた。それほど、全国の様々な地域から来て話をする母親たちとそれを聞く母親たちは、お互いのことを話し合い、それから泣くばかりではなく行動に踏み出すことも決意した。会場には少しでも自分たちが置かれた状況を発

[50] 二人の関係は単純に仲良しなどでは表現が難しい関係であった。共産党所属であった小笠原氏への支持のために多嶋氏は関わった組織から「裏切者」とされたし、多嶋氏自身も小笠原氏に完全好意的でないものの親交を保っていた。（多嶋 2015）

言しみんなで共有したいと思う人びとの行列がマイクの前に絶たず大会の進行に困難はあったが、議長の整理でみんなが溶け合って議論できたという（日本母親大会連絡会 1966、68 頁）。

この大会では、広島・長崎、佐々木・富士基地、水爆実験の問題を含めて炭鉱の問題も報告され大きく取り上げられた。次のような報告が続いたという。

ある炭坑では生活の苦しみから学校を長期欠席する子どもがふえていることや、捨てられた給食パンをそっとポケットにいれ、家にいる弟たちに食べさせるという話、苦しいなかを旅費と晴着のセーターをくめんして子どもを修学旅行に出したのに、船の遭難で子どもはお母さんのために買ったお土産とセーターをとりに船室へ下りていって、助かる生命を失ったという悲しい報告も出て、一同を暗然とさせました。（日本母親大会連絡会 1966、61 頁）

福岡の炭坑地帯では夫の失業のためお母さんが働きに出なければならないので、一五〇円の日給のうちから五〇円の金を出してあずけなければならない悩みが出され…（日本母親大会連絡会 1966、63〜64 頁）

北九州の炭坑から、やっと分科会の終わり頃に赤ちゃんを背負ってかけつけて来た若いお母さんは、炭坑の窮状を涙ながらに訴えました。炭坑内のお弁当を盗みにくるお腹のすいた子どものこと、ボタ山で拾う石炭もなくなり、困っている母親のために、石炭を積んだトラックにかけ上って石炭を落とす子どものことなど、盗みに走る子どもを責めることはできない現実や、過重労働と栄養失調で父が倒れ、五人の子どもを抱えた母親が二号となって生活を支える話、青年に母親くらいの年配の婦人が、五〇円で自分の身体を買ってくれとたのむ話、中学を出ないうちにどこかへ売られていく子どもたちのことなど、全く人間としての生活は破壊されているのです。たった一つの風呂に二〇〇〇人もの人が入浴し、伝染病が出ても収容する病院もない、この惨状を訴えて来てくれと一円、二円と出しあってこの母親大会に送られて来たことを涙ながらにつたえました。（日本母親大会連絡会 1966、67 頁）

企業整備すなわち合理化の流れは、炭鉱においては会社による首切り断行として現れる。賃金・金券の遅配と首切り、閉山などが進んでおり、女性たちは暮らし、賃金労働と育児労働の両立の困難さを抱え、また人身売買にさらされていることが多かった。このように炭鉱の女性が抱える諸労働における問題は、暮らしを守る主婦としても子どもを守る母としても取り組むべきであった。母親大会とそれを組織する女性たち、参加する女性たちにとっては「母親」という広範な名の下で女性同士の問題を語り合うことが可能であったし、その中でもすでに主婦会、炭婦協としてまとまった炭鉱の女性たちは

「主婦」から「母」として名乗ることによって炭鉱で抱える問題を公論化し、運動に参加しようとしたのである。もちろん多嶋氏が「私が炭婦協の意義を知ったのは、世界母親大会に出席し、そこで立派な母親たちにあったときでした」（林恒子 2015、146 頁）と述べているように、世界母親大会出席以降からも日本国内において母親運動に携わり、続けた人物の役割も大きかったといえる。

第４章　女たちの文化運動
――太平洋炭鉱主婦会誌『母のうぶごえ』の生活綴方欄の分析

第 4 章では、主婦たちがサークル誌を通じて果たそうとした文化運動を議論する。北海道釧路市にある太平洋炭鉱主婦会文化部が刊行した『母のうぶごえ』(以下、『うぶごえ』と略称する)の生活綴方欄を取り上げる。第 3 章で考察した、「闘う」主婦がその運動によりさらに「家庭」「家族」と繋がることを念頭に置きながら、ここでは炭鉱の女性たちが生活綴方において日常と夫の坑内労働、井戸端会議のような主婦たちの集まりについて書く行為を「主婦」たちの文化運動として論じる。これを労働運動と断定することには留意しつつ、第 3 章で検討した主婦たちの「くらしを守る」運動との関連で主婦たちの生活綴方を考察する。

分析の対象としては『うぶごえ』の初期における生活綴方欄に注目する。これは、戦後と国内外の情勢が影響しあっている時期ということと、第 3 章で触れたように戦後炭鉱における労働運動の至急課題が、食糧難と象徴される暮らしの問題であったこと、その暮らしと生活記録というキーワードが結合する場がこのような媒体(サークル誌)であるからである。

「生活記録運動」には、終戦後におけるアメリカ軍占領期、朝鮮戦争とその休戦による影響、高度経済成長期への侵入という時代の流れの中拡張しつつある「記録」(鳥羽耕史 2010、14～15 頁）が背景にある。戦前から続く綴方教育・運動の地続きである「生活記録運動」は職場における労働者・女性・主婦の参加（北河賢三 2014 ; 辻智子 2015）が目立つ。女性たちが主体となって生活記録を行った代表的な事例は、鶴見和子が中心になった運動[51]であった。その中に「主婦」たちは、書くことのみならず、必ず夫と子供との関係、日常で起きる出来事と身の回りのことなどを書き、話し合うことを繰り返し続けた。

産炭地研究会による主婦会の講演会開催及び記録があるが、『うぶごえ』のみを取り上げた研究はない。唯一、『うぶごえ』を太平洋炭鉱主婦会の運動として重要に取り上げているのが『ヤマの話を聞く会　記録集 2』に寄稿した西城戸誠（西城戸誠 2012）の文章である。太平洋炭鉱資料のアーカイビングが現在進行中という状況の中、散在する『うぶごえ』をまとめて全体像を把握すぐことが困難であると推測できる。そのため、本章ではとりわけ『うぶごえ』の所蔵状況をまとめることから始めたい。その後、太平洋炭鉱の労働組合史と釧路の文学運動史などで『うぶごえ』に触れている部分を検討して『うぶごえ』の持つ性格・特徴をみてから、『うぶごえ』の生活綴方欄の分析を行う。

第１節　『母のうぶごえ』(1955 年～2005 年）とは

太平洋炭鉱主婦会が主体となって発行した『母のうぶごえ』は、1955 年 7 月創刊し、

[51] 『生活記録運動の中で』(未来社、1963 年)には鶴見和子が主婦、働く女性など鉛筆を握ることによってはじめて社会の諸問題に向き合う人たちとの出会いが書かれている。

1968 年 3 月の 26 号は「主婦会 20 年史特集」、1978 年 5 月の 36 号は「創立 30 年記念特集号」、1988 年 11 月の 45 号は「主婦会 40 年史特集」、1998 年 11 月の 46 号は「主婦会 50 年史特集」、2002 年 5 月の「解散記念誌」を最後に終刊となる。

2021 年現在、『うぶごえ』の所蔵が確認される場所は 4 ヶ所あり、①釧路市中央図書館内釧路文学館、②釧路市中央図書館内郷土資料コーナー、③北海道労働資料センター、④太平洋炭礦炭鉱展示館である。

	バックナンバー	所蔵先	備考
①	第 1・7・26 号合本バインダー製本	釧路市中央図書館 6Ｆの釧路文学館	館内閲覧可能、比較的最近製本
②	27～36、38～45 号	釧路市中央図書館 5Ｆの郷土資料に「太平洋炭鉱資料」コーナー	館内閲覧可能
③	6～9 号、18 号、20 号、27 号、28 号	北海道労働資料センター[52]	館内閲覧可能
④	39 号、40 号、45 号	太平洋炭礦炭鉱展示館	展示ケースにあるもののみの確認

＜表 1＞『母のうぶごえ』所蔵情報

＜表１＞のとおり、創刊号が閲覧できるのは①のみとなっている。釧路市桜ケ丘所在の「太平洋炭礦炭鉱展示館」には『うぶごえ』が展示されており、複数所蔵していることのみが分かる。このように、資料は公開され閲覧も可能ではあるが、資料の散在することから来る総合的研究の困難さがあると考えられる。

次は『うぶごえ』の号数と発行時期を記したものである。

１号（１９５５．７）
６号（１９５６．９）
７号（１９５６．１２）
８号（１９５７.６）
９号（１９５７．１２）
１８号（１９６２．９）

52 昭和 59 年に北海道労働文化協会（会長・更科源蔵）が「北海道労働資料館（仮称）」の建設計画を提唱してから昭和 62 年に道が「労働関係資料保存検討委員会」を設置し、検討を開始。平成 5 年に施設の名称を「北海道労働資料センター」として 9 月 10 日開設。『北海道労働資料センターのご案内』パンフレットから。

２０号（１９６３．９）
２６号（１９６８．３）
２７号（１９６９．３）
３１号（１９７３．７）
３２号（１９７４．５）
３３号（１９７５．１０
３４号（１９７６．７）
３５号（１９７７．８）
３６号（１９７８．５）
３８号（１９８０．６）
３９号（１９８１．６）
４０号（１９８２．６）
４１号（１９８３．７）
４２号（１９８４．８）
４３号（１９８５．１２）
４４号（１９８７．４）
４５号（１９８８．１１）
４６号（１９９８．１１）
４７号（２００２．５）

各号ごとに編集者と発行者が異なるなど変動多いことと、入手しているバックナンバーからみると上のように発行間隔が不規則であり、主婦会の事情により不定期刊行になっている。他方、不定期的刊行ではあるが、例えば最初の 1 年半という期間の間には 1 号（1955 年 7 月）から 7 号（1956 年 12 月）までの 7 回という頻度で発行され、『うぶごえ』に注がれた関心と活発な活動がうかがえる。そして 20 周年、30 周年、40 周年、50 周年記念号の特集が組まれていることからは、『うぶごえ』自体が「主婦会史」も兼ねているといえる。20 号(1963 年)から主婦会役員選挙が話題に上がったり主婦会結成 16 周年で旧役員の回顧が掲載されるなど、主婦会の活動が本格的に取り上げられるようになる。主婦会の「機関誌」にふさわしい体裁になってくるのである。生活綴方欄という名称は、9 号から 18 号の間に「生活綴方」から「生活の中から」に変更される。

上でも述べたように、『うぶごえ』は 1950 年代における生活記録運動の影響で生まれた。この時期は、生活記録運動とともにうえごえ運動が盛んにおこなわれる時期でもあった。『うぶごえ』が「母の産声」ではない「母のうぶごえ」であることは、うたごえ運動が全国的に拡散したこの時代の影響である可能性もある。太平洋炭鉱には労働組合史が炭鉱全体の歴史を記述しており、『うたごえ』の 20～50 年記念号には主婦会の運動が中心となっている。

この年メーデー行事の一貫〔ママ〕として「生活綴方運動」の成果として、主婦会機関誌、母のうぶ声が産まれた。又三月五・六日、美唄において第1回北海道炭礦のうた声が開かれ、″うた声は平和の力″を合言葉に釧炭協地区一二〇名、太平洋も主婦会から、地区から、職場からと代表五六名が派遣され、後に平和・文化運動に大きな影響をもたらす様になった。(『うぶごえ』26号1968、14頁)

五月一日メーデー行事の一つとして主婦の綴方及うた等を広く会員より募集致した所、綴方及うた等合わせて三十篇以上のお母さん達の作品が集まりました。(『うぶごえ』1号1955、4頁)

太平洋炭鉱労働組合の30年史、道炭婦協20年史の中には、『うぶごえ』に関して次のように書かれている。

こうした気運のなかで、主婦会の手によって生活記録誌『母のうぶごえ』が生まれた。また、教師たちの間でも組織的な運動が展開されていたが、釧路でも「釧路作文の会」が中心となって討議や研究発表の集まりがしばしばおこなわれていたし、道炭労教宣部も生活をつづる運動について長文の指導文書を各支部に送ったり、講師を派けんしたりした。ヤマには高山貞章(道炭労文学講師)、岩上順一(新日本文学会会員)などの各氏が指導と助言に来山した。(太平洋炭鉱労働組合1976、224頁)

太平洋主婦会では三十年に「メーデー感想文集」をつくったのがキッカケとなり、生活綴り方″母のうぶ声″が発刊されてすでに三〇号をだしている。(道炭婦協 1973、186頁)

『うぶごえ』はうたごえ運動の盛り上がりという全国的な動きと、太平洋炭鉱の坑内事故で夫を亡くした女性が書いた「悲しみに耐えて」と桜ヶ岡、益浦地区などで行われた主婦たちのグループ作り及び作文の成果[53]もともに紹介されている。太平洋炭鉱組合の40年史では「第五章　炭鉱文化運動の高揚」で30年史と同様に触れていること以外に、「第四章　サンフランシスコ体制と労働運動の闘争性の回復」においてもレッドパージの後回復してきた文化運動として『うぶごえ』の表紙写真が掲載(太平洋炭鉱労働組合1986、70頁)されている。

『日本の主婦』(1957 年)は編集者の永丘智郎と東京の「知識階級に属している主婦たちの勉強グループ」の企画からはじまり、炭婦協をはじめ各労働組合の婦人部と家族

[53] 作文集は『母の手』『母のひとみ』『母の灯』『母のいぶき』である(太平洋炭鉱労働組合1976、225頁)。

組合との接触によってさまざまな主婦たちの生活記録を集めた本であるが、ここにも「山に暮す母たちのこえ」章に炭鉱の文化運動として『うぶごえ』が紹介される。

生活綴方は、北海道の太平洋炭鉱主婦会が一昨年七月″母のうぶごえ″と云うB5版三〇頁、色刷表紙つきの綴方、詩、短歌、俳句のガリ版機関誌を出しはじめ、すでに多くの号を出しているのにつづいて、三菱美唄でも出されはじめている。（鈴木ふみ 1957、97頁）

引用の通り『うぶごえ』は太平洋炭鉱がある釧路だけではなく他の地域でも読まれており、新たな生活記録・綴方を触発したことも記しておきたい。主婦会の日常の闘いに加えて、原稿の募集と収集、編集と刊行には、相当の時間・手間がかかる。このようにして刊行した『うぶごえ』が太平洋炭鉱以外のところではどのような方法で広がっていたかは、確かめることが不可能である[54]。しかし道炭婦協と炭婦協、そして釧路地域内での主婦たちの連合団体の集まり・会議の際に持参して配った可能性は考えられる。1956年発行の『うぶごえ』6号には、広島に住む女性が便りを寄せている。「廣島縣三原市三菱社宅一〇〇号」住まいの大原芳子という女性はこう書いている。

先日は文集″母のうぶごえ″ありがとうございました。遠い遠い北海道のお母さん方がこんなにも見事に生活綴り方を実らせていらっしゃるのを知って本当にうらやましいと思いました。こゝまで実らせるにはどんなにか御苦労なさった事と思います。わたし達も昨年の春頃から綴方を始めました。（『うぶごえ』6号1956、26頁）

この女性は生活綴方をしているほかの女性が夫に「そんな事をしたら″アカ″だと言われるぞ」と言われ「にらまれたらいけないので」我慢したというエピソードを述べ、それでも「とてもとても保守的な人の多い婦人会」の新聞で編集担当し原稿募集をすることでその危機を乗り切っていると伝えている。この文章からは地理的に遠い地域においても『うぶごえ』が刺激を与え、その影響は相互的であったことが分かるのである。

1978年釧路の文学評論家・郷土史家の鳥居省三が執筆・著述した『釧路叢書　釧路文学運動史』（釧路市、1978年）にも『うぶごえ』は言及されている。この著作は釧路地域における文学運動史であるため、『うぶごえ』以外にも多くの文芸誌における生活記録運動・職場文芸運動という広い視点での記述となっている。太平洋炭鉱労働組合文化部の機関誌である『響土』は重要に取り上げられており、幾回の生活記録特集号が出て「その後も続けて生活記録を特集したので、この運動は深く春採地区に浸透した」（鳥居省三1978、163頁）と述べている。一方『うぶごえ』に対する記述は割愛しており、

[54] 『うぶごえ』6号の「編集後記」に「会長が母親大会に上京した折も大変「うぶごえ」の評判はよかったそうです」と書いてはいるが、もっと調べる必要があると考える。

創刊時期も「昭和三十五ころ」と推測し、「しかし、これらの運動も、指導者が転出することか、雑誌の消長に従って長続きできず、一時的流行の感を残したまま、昭和三十年代を頂点に消えてしまった」（鳥居 1978、163 頁）とまとめており、釧路地域における同好主婦たちによる『ともしび』にだけ焦点を当てて高く評価するなど、主婦会のサークル誌及び機関誌として長続きした『うぶごえ』の役割に関しては触れていない。それは『うぶごえ』が主婦会発行の雑誌であるため少人数で自主的な集まりではないという位置付けの問題か、それとも『うぶごえ』の「生活綴方欄」に対する文学史的評価・位置付けの問題か、特定することは難しい。本論文において生活綴方欄以外の検討は行わないが、分量は毎号相違でありながらも持続的に主婦たちが書き手になって様々な形態でモノを書き、それを話し合ってからまた書いた、毎日台所を砦にして時には米よこせ・ものよこせ運動も同時に展開しながら『うぶごえ』が続いたということ自体が、文学運動史的な評価では難解ではないかと考えられる。つまり、『うぶごえ』はそれが持つ内容のみでなく書き手の炭鉱主婦の日常・暮らしの営みと運動と関連して考える必要があるということである。

第２節　生活綴方における「生活」と「家族」の関係

『うぶごえ』の生活記録欄を読みこんでいくと、その中に「生活」という言葉は、炭鉱の主婦（女性）にとって家族と子どもという存在を中心にしか語られなかったということが分かる。『うぶごえ』は主婦会に属してない人でも文章を寄せることもできたが、6～9 号に載っている生活綴方欄を読むと、文章のネタになっている日々の出来事や考えたことは「家族」と「子ども」なしでは成り立ってないといえる。文学評論家の岩上順一が創刊号の巻頭に載せた「″母のうぶごえ″をお祝いして　主婦の言葉はたうとい」には、『うぶごえ』のこのような性格が表現されている。

わが子が可愛ければ、どのようなことだっていとわない、といわれるならば、もっと組合のこと、日日の台所生活とむすびついた政治のことを、主人とともに話しあい勉強しあうことができるのではないでしょうか。（『うぶごえ』1 号 1955、3 頁）

岩上は母親として平和を願うことが自然に政治性を帯びることであろうと書いている[55]。このような内容は同じ第一号（創刊号）に石鳥谷洋子という名前の主婦が書いた綴方（「平和の希いに寄せて」）にも見える。

″変な人″歯に衣きせぬ子供達の表現は残酷にきこえるけれど終戦後一応世相の落着

[55] 太平洋炭鉱組合史からの引用のようにこの岩上順一氏が道炭労教宣部の「講師」として派遣されたことは事実であり、そのため創刊号に書いた文章がある程度は「指導」の性格を帯びていると考えられる。

をみた折に出生した吾子は戦争の事など露知らず傷ましい特異体をそう表現したのでしょう。…
争いだけは、どんな事があってもやめて下さい。貧しくとも一家揃った平和、何時迄も続いてくれる様、二度と戦争にまきこまれたくないと、心の底から願うものです。(『うぶごえ』1 号 1955、13〜14 頁)

書き手石鳥谷洋子氏の綴方には、傷痍軍人が村を回っておりその傷痍軍人を指して「変な人」、不審者扱いをする子どもたちの悪意ない姿が描かれる。その傷痍軍人に対する同情心も表現されているがこの綴方の焦点は同情だけではなく、戦争を経験した人にはすぐに分かることが分からない、終戦後に生まれ戦争のことは欠片も知らずに育った子どもたちへの思いに当ててある。そして「戦後十年多種多様に亘り復興した中に未だ全国に数多くいるであろう傷病廃者の人々に更生の手をのばしきれぬ現在の政情、つくづく今更乍ら戦争の惨酷さに身振いさせられます」というところからも分かるように、戦争のない現在は平和である認識もみえる。ところが現在は「平和」だという状況認識には、逆に戦争がいつでも起こりうるとの不安感が内在されている。1954 年水爆実験のように命への危機は常に存在しており、「空爆」という石鳥氏自らの経験は過去のものに留まらず、傷痍軍人という戦争が残したもう一つの顔として現れているからである。戦争を語り継ぐということは容易でなく、「平和な世にあの様な体になった理由を納得させる形容詞がみつからず」のである。そのため、母親として願う平和とは、母親の主婦において完結するものではなく、子供と夫との話し合いの中に作っていくものである。そして何より「日日の台所生活」とつなげていくべきことである。更にこの女性は一日中時間をかけて言葉を探り、夜になって自分が経験した空爆の話を子どもに聞かせたら、子どもは「うん戦争っておっかないね、坑内でも一ぱいあぶない事あるのによその国と戦ってみんなおっかないね」と話す。戦争をすぐに坑内につないでしまうという子どもの感覚は、炭鉱に刻まれた戦争の痕跡と歴史を見抜いているといえる。

この文章に続く「映画から」(石沢不二子)においては映画『この広い空のどこかに』(1954 年、松竹)の観覧したことを題材にしており、戦争が残した戦災で足が不自由になり、デフレなどの爪痕から母親としての自分と子どもとの関係づくりを考えるという内容である。

第 1 号の綴方は 13 篇であり、子供会、修学旅行、おもちゃ、学校の話などが主なテーマである。その中には主婦たちが茶飲み話を綴り、「みんなといろいろとどうしたら、私達の生活が楽になるかと、又、団けつして子供を守り、主人を職場に送りいろいろとお茶のみ話をかいてみました」(『うぶごえ』1 号 1955、12 頁)とある。主婦同志の集まりは、自然に暮らしと生活の話、すなわち配給、買い物、子供にかかるお金などの話となり、それが主婦の「団結」につながっている。これは第 3 章でも触れた、主婦たちの暮らしの営みが運動に変わっていくことと同一な文脈といえる。台所にいながら家計

のやりくりをすることによって子どもと夫を守り、主婦たちは団結して炭鉱会社に対して配給とストーブを要求する運動を起こす。『うぶごえ』1 号の生活綴方には主婦会とその運動の話が直接に表に出ているわけではないが、このように茶飲み話と井戸端会議という形でしか出せない主婦たちの話と感情が表れているのである。

日本の女性は、男女同権と言われている現在の世の中で、どれだけの発言を与えられているだろうか、それは、まったく井戸端か、茶のみ話での中でしか、自分の意見を正しく言うことが出来なかった。それもぐちに近いものが沢山あった。あきらめや、夢に近い話がだされていた。この井戸端会議や、お茶のみ話の中で、グチが、夢が、それだけ女性の発言の場のせまさを教えてくれたものだった。
その主婦や、母たちがこうして″母のうぶごえ″を発行するまでに成長したのはなぜだろうか。
それは″もうだまっていられない″なにかがうずき出していたと思うのです。これは太平洋の炭砿の母親たちの、それだけではなくて、今日の日本全体の主婦や、母達の苦しみ、悩み等だったのです。
気の毒、母の座はもう古い仕組の上には、ないのです。書くことは自分の生活を紙の上に表現するだけではなくて、それは古い妻の座、母の座への抵抗なのです。生活は決して停止してはおりません、それは古いものと、新しいものとの争いの中で、労仂者の生活は強くたくましく生きているのです。(『うぶごえ』1 号 1955、26 頁)

公的な「女性の発言の場」は与えられていないが、その場を改めて作る必要はなく、今までの通り家庭という空間を支え続けながらそれを共有しあうことで、主婦たちは今までの女性が持つ「妻」「母」像に抵抗する。ここで重要なのは「生活は決して停止しては」ないということであり、暮らしこそが女性たちの運動を続く場所であることを意味する。このように『うぶごえ』は創刊時から、暮らしと生活を話し合い、共有する行為を通して、暮らしと運動という主婦たちの闘いを表明している。『うぶごえ』は 1 号以降から 6 号の間の号がまだ入手できていないため 1 号に続く雰囲気と議論が如何なるものだったか分かるすべがないにも関わらず、生活綴方は「主婦会 50 年史特集号」の 46 号(1998 年)まで続いている。鳥居省三が、大体の生活綴方が昭和 30 年代を頂点に指導者の不在と個別雑誌の事情により消えていたと述べたことを考えると、『うぶごえ』には長期的にわたっての指導者といえる人が不在に近い状態でありながらも持続的に続けられたことは評価するに値するし、生活を記録すること(書くこと)こそがいわゆる「激しい」主婦の運動に原動力を与えまたつながっているといえる。
6 号の生活綴方欄にも 13 篇が載っており、ここには日常と家族に関わる話がメインである。その中には終戦 11 年目になっていてもまだ日本に帰ってこない家族のことを書いたり(「帰らぬ弟」)、満州からの引揚げを想起しこれからの暮らしを考える(「今

日この頃」)など、今も続いている戦争を思い起こされる部分がある。そして坑内見学の後に見学の内容と感想を綴った「坑内見学感想」もある。「昼食後の茶飲み話」は、書き手の女性石黒むつ子氏と夫が昼食の後に仕事に行く前に交わした会話を綴っているが、その内容は簡単に言うと主婦会の活動と育児・家事労働の両立に関する葛藤だといえる。

夫は話しだした。「子供は親がいると安心して遊びに行くのに母親のいない時の子供は外から帰ってきても淋しいものなんだよ、だからなあなるべく用のない時には家にいてやる事が一番嬉しいことなんだよ」……
「……うちでは子供を見てくれる人がいないので一番のなやみはこれだから、常会等に、主婦の社会勉強をするのには益浦にも保育園を建ててほしいと話した事もあるけど早くしてほしいと思うね」すると夫は「そりや、社会勉強のために歩くことも大事だが家にいて新聞、雑誌等からも人生勉強や社会教育の参考も沢山あるから、その中から自分にふさわしい勉強をすれば良い」(『うぶごえ』6 号 1956、15 頁)

会話は、妻に「母」による育児専念への要請をする夫に、主婦会での活動も重要であると主張する妻の議論である。ここで「常会」は時期によってその様子が異なると思われるが、主婦会の草創期には毎月、集会所、支部長宅など交互にして持たれ(『うぶごえ』20 号 1963、3 頁)、班長のもとで下町、上町と各班に分かれて開かれた集まりを指しており、「会員と膝つき合わせての話合いが一番と、困っていること、やってほしい事など有意義な話合い」(『うぶごえ』46 号 1998、114 頁)が行われた。そして太平洋炭鉱が持ち家制度を導入する(1963 年)前なので炭住と呼ばれた六軒長屋(通称「ハーモニカ長屋」)、少なかった社宅を回る分、移動する距離は持ち家制度導入後の社宅を回ること(佐藤邦子 2014、54 頁)よりは大変ではなかったとしても、署名や回覧板、各種のお知らせ、運動参加への要請などの仕事もあると予想できる。そして第 1 号でこの女性は「子供会」という綴りの中で主婦会への提言もしているが、その内容はかなり詳しく主婦会ができるだけ頻繁に集まりの場を作って話し合いをしてほしいと述べている。この女性が主婦会の活動に活発に参加していたことが分かる。この石黒むつ子氏は主婦会で活躍され 1959 年文化部長、1962 年情宣部長になり、主婦会 20 周年記念の功労表彰者にも含まれている(『うぶごえ』26 号 1968、7 頁)。石黒氏が文化部長をしていた 1959 年発行の『うぶごえ』を入手していないため該当する『うぶごえ』は確認できないが、『うぶごえ』は文化部による発行となっており編集後記の作成と編集者名は文化部長の名義であるため、石黒むつ子氏は『うぶごえ』の原稿募集と収集、編集、発行の仕事をしたと考えられる。文章の中に登場する保育園の問題は 1950 年から主婦会において本格的に取り上げた問題であり、太平洋炭鉱の従業員運動会で売店を出し食べ物の販売をして純利益 5000 円ができ、これを保育園建設の資金にした(『うぶごえ』26

号 1968、9〜10 頁）という。

ここで問題になっているのは、「社会勉強」と育児の衝突である。「社会勉強」とは主婦会の活動、常会を指している。その都度に留守しているため子供の世話が不可能になるからというのが夫の意見である。なぜ妻の主婦会活動が家事と育児労働などと両立「可能」か「不可能」かと考えられるのか。ここでは問題を「可能」と「不可能」という二項対立項に設定すること自体を考えたい。それは、主婦会の活動・運動を行い参加する「主婦」たちにとっては主婦会の要求こそが子供と夫を守る暮らしの要求であるため、両立可能・不可能として捉えるものではなく一致しているに対して、夫にとっては選択の問題として受け止められているからである[56]。男性によって行われる労働運動においてこのようなことはさほど重要な問題ではない[57]。ところが、ストライキになると、やりくりしないといけないのは台所である。つまり、労働運動は主婦たちの理解と賛同なしでは行えないのであり、主婦たちの「参加」が必要であることは当然である。

闘争の時にはいつも主婦会がいなければと。主婦会が無ければ闘争もできない。と言うのはね、なにも大変な力があったからでは無いんですよ。お父さんたちが、なぜストライキをやるのか。労働者の武器はストライキだと、組合から教えられるけれども、実際に休めば(賃金が)入って来ないわけですから。そうすると、文句は台所から出るのですよ。最初の段階では、組合潰しをやるのは台所だったのです。それを、お母さんがいろいろ組合に行って話を聞けばね。今の日本の支配階層というのは、労働者が要求してストライキをしなければ、出さないのだから。そうすると、主婦会でも、こりゃ、ストライキをね、何とかして支持しなければならないと思うようになったわけです。それの力なのです。そりゃ、最初のうちはストライキなんかやったら、お父さんと夫婦別れするとかね、いろいろ言った炭鉱(やま)の主婦なのですから。（多嶋〔1987〕2015、23 頁）

この企業整備反対闘争〔昭和 30 年：引用者注〕で書〔ママ〕も粘り強く闘つたのは炭山の主婦である。
札幌での炭婦協の大会で決定した方針をもつて帰山した荒木会長〔1953 年からの太平洋炭鉱主婦会会長：引用者注〕をはじめ首のう部は、ただちに首切り反対闘争の組織にかゝつた。そして、おやじの労働組合がまだやらない先に全山の主婦二〇〇〇名を動員してケツキ大会を開き、デモ行進を行い、会社に抗議文つきをつけたのである。このデモに七〇才になるおばあさんが杖にすがつて参加したところからも炭山の主婦達のなみなみならぬ決意の程がしのばれる。

---

[56] 炭鉱はいつでも坑内事故が起こる可能性があり、そのため男性による坑内労働が優先されるのが当然だという認識があったと考えられる。
[57] ただし第 5 章で検討するような臨時雇いの朝鮮人、あるいは組夫・請負労働者は、組合に所属することができずストライキなどになると労働ができなく給料ももらえない。

……
この主婦会の努力は、企業整備反対の闘いを全山のものにする大きな力となつた。
結果的に、この企業整備は希望退職と云う形で会社から出され、それに応ぼした人員からだけみれば、この闘いは敗北であつたと云はれるとしても、闘いの巾を家族ぐるみに広げた主婦達の力は、「主婦の力を抜きにして、すべての闘いを組む事は出来ない」と云はれるところ迄評価きれる〔ママ〕ようになり、以後の労働運動に新しく大きい意義をあたえることになるのである。（太平洋炭鉱労仂組合 1955、247～248 頁）

主婦たちが育児・家事労働より主婦会の運動に集中したと想定しても、それは育児・家事労働を完全に放棄しているわけではない。綴りの中でも書き手の石黒氏なりには「だからあたしだって用のない時は、出ないようにしているよ」といった言い分があるのである。これは、生活を維持しながらも生活をより良くするための運動に参加する主婦自身の葛藤でもあり、主張でもある。そしてこのような主婦の葛藤、ジレンマをあきらめず書き留め続け『うぶごえ』に投稿する意味は、主婦が経験する、家族を支える生活と運動の連続性である。

また生活綴方欄における生活と家族を論じる際に着目すべきものは、「労働者の妻」としての主婦である。主婦たちは危険な坑内労働に対して理解の深化と奨励を要求され、自発的に行ったともいえる。主婦会の女性たちは坑口で暖かい食べ物や手ぬぐいを渡すなど、定期的に坑内労働者たちの慰問を行っている。これは主婦会の恒例行事となる。第 6 号には「坑内見学感想」が載っており、坑内見学の内容の記録とともに、夫や息子たちの坑内労働を知り「家庭の主婦として努力する心得です」（『うぶごえ』6 号 1956、11 頁）と締めくくっている。第 8 号にも「坑内見学を顧り見て」があり、太平洋炭鉱海底坑の興津坑の見学記である。

時折保安教本を出して見ますけど、仲々これから一そうより良き明るいヤマに協力致したいと痛感しております。私達の主人は地上の労働者と違い、あらゆる作業条件の違っている悪環境に於て日夜作業をしている事を私達が考えれば、家庭に帰った時だけでも一日の疲労を快復して戴く様に気をくばり、その他の娯楽に計画を立てゝ明るい家庭を作って行きたいと考えさせられたのです。（『うぶごえ』8 号 1956、21 頁）

書き手は小林みさを氏であり、夫の坑内労働を理解し、支えることが「明るい家庭」作りであると述べている。坑内見学記を書く女性たちは、家庭のなかでは坑内の労働について何回話を聞いても実感がないということだから、実際に見ておかなければそのサポートができないという。第 3 章において炭婦協を通して検討したように主婦会自体が家庭とのつながりを前提とするものに変わっていき、一方主婦たちは低賃金を補うため

内職と賃労働の負担を背負いながらも[58]、家庭内における生活のやりくりに積極的に取り組むことが重要であったといえる。この家庭を基盤にする生活のやりくりには、経済的な側面のみならず、家庭の雰囲気づくりも含まれている。これは、仕事に向かう夫の世話についての話からもよく分かる。太平洋炭鉱主婦会会長と炭婦協の会長を歴任した佐藤邦子氏は、「結婚前に「炭鉱は、朝、仕事に出たら、夜、帰って来るまで何が起きるかわからない」と父によく聞かされていましたので、私は夫が帰宅するまで常にいるようにしていました」（佐藤邦子 2014、47 頁）と話している。なるべく家にいるようにし、出勤する夫に必ず手弁当を持たせて送ったという毎日の行いもあるように、炭鉱の女性たちは「主婦」として、労働する夫を支える役割を果たさなければならなかったのである[59]。これは、上で引用した石黒むつ子氏のエピソードと衝突しているようにも見える。しかしここで強調したいのは、『うぶごえ』という場が「いのちとくらしを守る」という主婦会のスローガンのもとで、女性たちが如何にして生活のやりくりを工夫し、夫と子供との関係作りを試みたかが表れる場であったことだ。主婦たちの「家庭」と「運動」の「両立」構図がかえって、このような女性たちの毎日の闘いを見えないようにしているといえる。

第３節　生活綴方を通した「文化」の獲得

「戦後の釧路文化の発祥は太平洋炭礦からだ」（川島直樹 2012、7 頁）[60]と言われたくらい、太平洋炭鉱は「文化」的な雰囲気があふれ、地域にとっても文化の中心地として存在してきた。太平洋炭鉱は社内報『太平洋』をはじめ、労組機関紙『地叫』と文芸誌『響土』を作り出し、私立太平洋炭鉱図書館の運営[61]など、地域社会においても文化の

---

58 「北海道における婦人労働者の実態のなかでさらに低賃金と無権利な状態で働ら〔ママ〕いているのが、炭鉱主婦である。もともと主婦の内職的な労働は結成当時からもあったが、炭鉱労働者の賃金は他産業労働者に比較して低く、春闘はいつも他産業なみ、後半になると鉄鋼労働者なみの賃上げを要求してきた。さらに合理化に次ぐ合理化は重労働と低賃金を恒常化させ、夫一人の働きでは十分な生活が維持できないという状態にあった。従って家庭内に内職をもちこみ「昆布まき」「袋はり」「アイスクリームのヘラづくり」「和洋裁」などが内職の主役であった。三十五年以降は物価高に追いつけず今までのような内職では補ない〔ママ〕がつかなくなり、とうとう外へでて働く主婦が多くなった。」（道炭婦協 1973、112 頁）

59 このような行い及びしきたりは、韓国の炭鉱においてもあった。家父長的な雰囲気が強く、朝の仕事に向かう男性の前を女性が横切って通ったら縁起が悪い、主婦は朝食前に他人の家に訪れてはだめで主婦はその時間に夫の世話をしたという（イジェウン 2020、37～41 頁）。

60 この文章を『釧路市立博物館報』に寄稿した川島直樹氏は、釧路市で「古書かわしま」を営まれている。

61 私立太平洋炭鉱図書館が開館したのは 1949 年からで、1951 年からは市立釧路図書館に転出した。初代図書館長は後年（1952 年）同人誌『北海文学』を創刊した鳥居省三であり、鳥居は 1949 年に図書館長に就任した時、分類法を導入して本を整理し、小中学生を集めて読書会を結成、本の借り方・読み方を教えた。彼の取り組みは「当時の道立図書館長金田一

中心地であった。このような雰囲気の中で、主婦たちが『うぶごえ』を通して目指した「文化」とはいかなるものであったか。

第3章においては激しい運動を行う主婦たちについて検討し、第2節では『うぶごえ』の生活綴方欄を分析したが、『うぶごえ』のなかに生活綴方を書いている女性たちと、「闘う主婦」とどのような関係であるかという問いができる。また、彼女たちの生活記録をある「運動」として見ることはできるか？可能であれば、その「運動」とは如何なるものであろうか？また、主婦たちが綴方を通して獲得しようとした「文化」とは、いいかなる意味を持つのか。すなわち、主婦たちの綴方、書くことにおいて「運動」と「文化」はどのようにして関係しているのか。

『うぶごえ』8号には、それまでの『うぶごえ』における生活綴方の状況と批判と助言、進み方についての文章が掲載している。畑佐美好氏の「主婦の力で「うぶごえ」を育てよう」は、炭鉱の女性に対するまなざしと炭鉱の女性たち本人が持つべき理解と綴方の書き方を関係して述べている。

少し昔までは「炭山のオカミ」と言っただけで非常に下品で荒々しい感じで受取られていたのが常でした。教育的にも、文化的にも、たいへんレベルの低いのが「炭山のオカミ」だと思はれていたようです。(今でさえ、そう思っている人がかなりあります)
又、「炭山のオカミ」は、親父のサービスをしていればそれでいゝのだと、云う考え方が強く残っていたことも事実です。
それらの人たちは、「母のうぶごえ」の誕生を、たいへんな驚きをいだきながら目を見はったのです。だから「女のくせに、生意気なことを書いているんでないか」とか「いいっぷりしているなあ」とか「ものすぎなもんだ」…中には「そんなもの書いているひまに、ボロつぎでもやれ」とか「家の恥をさらすな」と、いう夫の批判も出てくる始末でした。私自身も、「何時まで続くのかなあ」と云った心配をしていました。(『うぶごえ』8号 1957、3頁)

この引用には、対抗すべき「見られ方」が大きく二つあるという。一つ目は「炭山のオカミ」である。これは生活の基盤を炭鉱にする女性である「炭鉱の主婦」という規定に加え、その女性たちは教育と文化面においてレベルが低いという偏見である。第3章でも触れた、「米よこせ」運動に対する「思想の無さ」が言われこれに抗議したという多嶋氏の話もこの文脈と通じているといえる。

二つ目は、「女性」一般に対するまなざしである。これは女性がものを書くこと、日常・生活を書くことの意味への思考自体を封じてしまうものである。第2節でもみてきたように、女性たちの記録は家族と暮らしに関わる話が多く、暮らしの営みはそれを記

昌の高い評価を受け、太平洋炭鉱図書館は道内でもトップレベルの私立図書館として名を馳せた」という（市立釧路図書館郷土行政資料室 2016、64頁）。

録する行為と分離しづらい。

お母さん方は学校を卒業して以来、何十年と鉛筆やペンを持ったことがないと言う人たちだった。そして組合や、主婦会で生活綴方を募集しているのをみて、便箋や半紙におそるおそる書きはじめた、それが、この、″母のうぶごえ″だった。たいていの人は子供の成長や、子供の日常の仕事と、母親の愛の目をとおして書かれていたものだった。それは上手、下手をぬきにして読む者に大きな感動を与えた。(『うぶごえ』1 号 1955、26 頁)

家事と子育ての最中に綴る文章は、食糧とやりくりに悩む毎日の中で「便箋」や「半紙」に「おそるおそる」書かれる。字を覚えたことのない人、字を書く生活とは離れた生活をする人たちが、宣伝ビラの「字が間違っている」と言われ泣きながら帰る人たちと重なり合うのである[62]。

それまでは自分たちで宣伝ビラなどは書いたことがなかったのですね。全部労働組合が書いてしまうのです。私が(会長に)なってからは、どんなに下手でもいいから自分たちで書こうと。今にして思うと、ウーマンリブの考え方で男が女をだめにしていると思っていましたから。ですから、私たちの手でやろう、相手に意思さえ通じればいいのだからと。そうするとやはり炭鉱にはいろいろな人がいますから、戦後になって女子大などを出た人もたくさん入って来ましたが、そういう人はうまくすり抜けてしまって、役員には出て来ませんから。そうすると、字の書けない人もいるのですよ、間違いもたくさんありますが、鉛筆を舐めながら一生懸命に書くわけでしょう。
それを会社の掲示板に貼らせてもらうわけですが、会社に持って行って見せないといけないのです。すると、この字が間違っている、こんなことで主婦会は良いのかと言われ、泣いて帰ってくるわけ。(多嶋〔1987〕2015、17 頁)

二つの対抗すべき「見られ方」は相互に関係しており、主婦会の女性たちはこのようなまなざしに抵抗していくべく、鉛筆を握って舐めながら間違っていても宣伝ビラを書き、暮らしと家族のことを書いていったのである。字が間違っていても綴方を書くことは、書いた後に持たれる合評会・話合いの会を通してもう一度議論される機会を得る。母親大会が他人の話を聞く場でもあったということは第 3 章でも検討したとおりであるが、「主婦」という立場と炭鉱における暮らしや家計のやりくり、子育てなど主婦たちに共通している問題に取り組み、話を共有することは大事である。生活綴方において

[62] もちろん、畑佐美好氏が述べている「「生活綴方は労働運動か？」などと故意に曲げて考え」(『うぶごえ』8 号 1957、4 頁)るような、綴方をすぐに労働運動と同質なものとしてみなすことには、留意したい。

その上手・下手さがさほど重要ではないという主張がそれであり、生活綴方の核心は、書いてから話合い、また書くことが反復されるプロセスである。そのプロセスを繰り返していく内に「自己をふくむ集団のもんだい」（鶴見和子 1963、18 頁）つまり共通の問題に対する認識の共有と解決を目指すことが可能になる。このようなプロセスは、主婦会の活動と無関係ではない。毎月持たれる主婦会の常会も、細かく班ごとに分かれて開かれた。支部や代表者会議とは異なって小さい単位での話し合いなので、先に石黒むつ子氏の文章を通してみたように主婦たちの実生活から来る問題と悩みなどが共有されることができたと考えられる。そしてその話し合いの場は、家事の合間を縫っての場であったといえる。主婦たちは子供と夫を送り、家事をこなし「はーい今板ふきましたらゆきますね、ぼろぬい持ってゆきました」（『うぶごえ』1 号 1955、11 頁）と近所にお茶を飲みに行き、生活のさまざまな話をして「団けつ」への覚悟までするのである。

ここで、この節の冒頭で投げた問いを想起してほしい。主婦たちが綴方を通して獲得しようとした「文化」とは、いかなる意味を持つのか。この問いを論じるためには、当時の炭鉱において「文化」という言葉がどのような文脈で使われたかについての検討が必要である。太平洋炭鉱労働組合の 10 年史には、1951 年のサンフランシスコ条約による資本の独占と集中、経済の軍事化、労働運動を取り締まる 3 法案、破壊活動防止法への改正に対する国民と労働者たちの怒りが、第 23 回 5 月 1 日のメーデーに爆発したと述べている（太平洋炭鉱労仂組合 1955、227 頁）。太平洋炭鉱もこのメーデーに太平洋合唱団が先頭でメーデー歌を歌い行進をはじめ、青年会館で文化展を開催した。文化展では「カメラ・書道・俳句・短歌・絵画・生花など大変成況であった」という（太平洋炭鉱労仂組合 1955、207～208 頁）。文化は、労働者にとって悪化しつつある国内情勢を敏感に感じ取り、反動的政治に反対するという目的の下で行われる運動と同一線上にあったのである。『うぶごえ』自体もメーデーの一環で行われた生活記録運動から生まれたということも忘れてはいけない。第 5 章で取り上げる映画『女ひとり大地を行く』の撮影もこのような労働運動の高潮の中で制作された。この際に「文化」は、支配階級の「頽廃文化」と労働者の「国民的文化」と分かつ。

支配階級は敗戦によって生まれた虚脱した心理状態につけこんで頽廃文化を計画的に奨励すると共に昨年九月従属講和以後において反動文化や戦犯追放解除で再軍備政策と併行して、すべてを従属的な方向に進めつゝあった。（太平洋炭鉱労仂組合 1955、212 頁）

この時期における労働運動の盛り上がりは、国内情勢と緊密に連動して行われた。その中で「文化」とは労働者の階級意識を目覚めさせ、働く者同士の横のつながりを強力にしながら労働条件の向上をはかった。たとえばうたごえ運動の広がりは、歌を歌う行為だけで消費されるのではなく労働運動の現場においても現れた。生活記録は、『うぶ

ごえ』の場合、ほぼ同一の条件である暮らしの環境、苦しい生活を共有してつながりを持つこと（天野正子 2005、34 頁）を文章で書きとめることであり、もう一つのつながりの話合いの場を作り出す。話合いの中で主婦たちは夫の労働を考えるのである。夫の坑内労働で営まれる家計でやりくりする主婦たちは、ストライキが断行されたら困るわけである。労働運動を支えるしかないのである。「炭山のオカミ」というレッテルへの抵抗は、単にその言葉とまなざしに含む「非常に下品で荒々しい」「教育的にも、文化的にも、たいへんレベルの低い」への反発ではない。それは「労働者の妻」としての自覚とともに生活綴方を通じてつながりを作っていくプロセスを目指しているのである。

第５章　北海道の炭鉱における女性の炭鉱労働と暮らし、恋愛――映画『女ひとり大地を行く』(1953 年)

第 3・4 章において女性たちが「主婦」「母」として行った労働運動を検討し主婦たちの生活綴方を文化運動との関係の中でみてきたことに続き、本章では、太平洋炭鉱で後半の撮影が行われた映画『女ひとり大地を行く』(1953)の分析をする。友田義行(2010)が劇映画における炭鉱表象として『女ひとり大地を行く』と『にあんちゃん』をとりあげ、朝鮮戦争後、すなわち石炭産業の衰退期における代表的炭鉱映画として、1950 年代という時代背景に注意を払わなければならないと指摘している。

ここで取り上げる映画『女ひとり大地を行く』には子育てをしながら坑内労働をはじめ炭鉱で生活する女性が描かれている。この映画は日本炭鉱労働組合北海道地方本部（「道炭労」）が亀井文夫監督に制作を依頼し制作された映画である。映画のはじめには次のような字幕が流れる。

これは
北海道の炭鉱労仂者が
一人三十三円づつ出しあって
つくった映画である

道炭労の労働者たちが一人 33 円ずつ出し、総制作費が訳 1200 万円（炭労 1992、116 頁）であったという。映画の中においては炭労でバイトをしながら夜間学校に通う次男喜代二が「日本炭鉱労働組合　北海道地方本部」という看板がかかった建物から出るシーンがあるほど、撮影には炭労が深く関わった。当初ロケ地だった夕張炭鉱では会社との交渉がうまくいかなく予定されていた坑内の撮影などが不可能になり、撮影はより難航したというところで太平洋炭鉱の組合の人から誘われてロケ地を移した。主婦会も労働組合とともに全面的な協力をし、「歴史的な六十三日のストの中で主婦会もエキストラや、映画演技者の宿泊等を引き受け活躍した」（『母のうぶごえ』26 号 1968、11 頁）とされている。

昭和二七年八月　炭鉱映画＝女ひとり大地をゆく＝製作のため総評北海道地方連絡協会に主婦会・職場・サークル等が協力して資金を集める売店を開く。

昭和二七年九月　炭鉱労働者が自分たちの手で映画をつくると言うことは日本では始めての出来ごとであった。（先発できた岸旅江・岡村千鶴子を囲み選炭課のおばさんたち、奥さんたち）

＜写真左　主婦会、他のサークルなどが協力して制作資金を集めるための売店を開く。
写真右　選炭課の女性たちと俳優（太平洋炭鉱労仂組合 1955、214 頁）＞

後半の撮影が行われた太平洋炭鉱では主婦会と労働組合、サークルが協力し、映画制作の資金集めと撮影ロケ隊の宿泊、エキストラなどに力を合わせた。次の引用は映画において「サヨ」役に扮した山田五十鈴が太平洋炭鉱組合の文芸誌『響土』に寄稿した文章であるが、映画撮影時の様子が詳しく書かれている。

二十七年の九月から十一月にかけて、映画「女ひとり大地を行く」の撮影のため、はるばる北海道にまいり、炭鉱に働く皆さんと生活を共にしました、短かな期間ではありましたが、いろいろのことが、つい昨日のようにまざまざと想い出されます。始めに幾春別鉱山にゆき、続いて夕張、釧路の太平洋炭鉱にロケーションしたわけで、かつてないことばかり体験してまいりましたが、帰りましてもそれが大そう勉強になりました。……北海道での宿泊所は、炭鉱で働く人たちの家に泊めていただいたのですが、その時感心させられましたことは毎日疲れて帰る御主人のために、何はさておいてもお蒲団だけは立派なものを作って、それにやすんでいたゞくということでした。はじめ、何も知らぬ私は、新しいふかふかしたお蒲団を敷いてくださつたので、わざわざつくつて頂いたのではと恐縮してお礼をのべますと、どこの家でも必ずといつてよいほど、命がけで働いている御主人のために、厚い立派なお布団を用意してあると聞いて、その悲しいほどに切ない家庭の愛情に打たれたことでした。それから御主人が急に落盤などで亡くなつて未亡人にでもなりますと、すぐその住居から追立てられるとゆうことなどもうかがいましたが、もうあれから二年になりますので、そんなこととは解消されていてくれればいいがと「祈り」にも似た気持でおもいだしたりしています。
私がまいりました時は、丁度、斗争の最中でしたので、撮影しますのにもところによつては、会社側の強硬な反対があつたり、この映画に協力すると会社から馘になるという「デマ」がとんだりして最初はなかなか協力してくださる事がなかつたのですが、組合の皆さんのたゆまぬ説得によつて、映画の内容がだんだん理解され、作る意義もわかつて下さつて、途中からは次第に協力者がふえてまいりました。映画のラストシーンのズリ山のところを撮影する時ど、朝三時におきて、三里の山を越え、神威、美唄、赤平、砂川、万字茶志内などから、若い人達が五百人から集まつてくださつて、熱心に協力していただいた時など、涙が出るほど有難く思いました。(『響土』9 号 1955、52～53 頁)

該当する号は太平洋炭鉱の春採坑で起こったガス爆発事故の一周忌特集号であり、その知らせを聞いた山田五十鈴が太平洋炭鉱との思い出とともに慰問の文章を書き寄せたのである。太平洋炭鉱のみならず他の炭鉱からも応援に来たほど、この映画に対する炭鉱の労働者、家族たちの思いは強いものであったことが分かる。このような映画のロケ隊と労働組合の協力体制は一つの文化運動でもあった。

第１節　映画の成立事情・背景、映画における「記録性」

ここでは、『女ひとり大地を行く』の映画が作られた背景を検討する。とりわけ監督の亀井文夫はこの映画を検討するときに欠かすことはできない。亀井文夫(1908～1987)は「記録映画」の巨匠として知られているが、それを裏付けるものとして以下の評価がある。

しかし左翼映画作家に人なき現在、好きなドキュメンタリイ・フィルムを捨てて、劇映画を作らなければならぬ。…だから性に合わないのを承知で、拙い劇映画を撮っておるのだ。…いやしくも人間であり、芸術家魂を持つドキュメンタリストである男が、芸術的なタッチを忘れ、イデオロギイの骸骨踊をさせて済ましていられるだろうか。(『キネマ旬報』69 号 1949、37 頁)

引用にある「記録映画」と「劇映画」との区別から論じられる亀井文夫に対する評価を、資料に沿ってみていく。亀井文夫は「反骨」「社会派」と呼ばれてきた。亀井は戦前は第二次世界大戦のＰＲ映画と主に中国大陸で撮影して上海事変、支那事変などを、戦後は砂川闘争、原水爆、米軍基地、被差別部落問題等に取り組んだ。彼は『戦ふ兵隊』(1939)の表現が問題視され 1941 年治安維持違反法で逮捕・投獄される。そのような履歴から彼は反権力・反骨的な「リベラルな芸術家」(都築 1992、112 頁)としても評価されるようになる[63]。

しかし彼には権力と戦争に反対するため「記録映画」というジャンルが先にあったわけではない。このようなことには、ソビエトで接した映画の衝撃と映画制作の雰囲気が背景にあったといえるだろう。彼はソビエト留学を心に決め軍艦に乗って、戦前の 1928 年ウラジオストクに着く。『上海ドキュメント』(ヤコブ・モウセイヴィチ・ブリオフ監督、1928 年)と『幸福の港へ』(ウラジーミル・エロフェエフ監督、1930 年)をみて映画というものを知る(フィオードロワ・アナスタシア 2011)。このことをきっかけに、亀井は約 3 年間ソビエト、とくにレニングラードで映画技術専門学校(キノ・テクニクム)の聴講生になるなど映画の勉強をする[64]。当時、ソビエトは様々な芸術運動が活発になり、芸術において多様な試みが行われていた。ソビエト留学の経験は日本という生まれ育った場所を問い直す原動力にもなった。亀井はその後日本に帰ってからは主にＰＲ映画をはじめ、後「記録映画」と呼ばれる領域に足を踏み出すが、彼にとって「記録映画」

[63] 佐藤洋は東宝争議・レッドパージに関する「通用する定型化された」イメージと理解を批判し、独立プロ運動の担い手であり思想的な理由で企業から追い出された「被害者」として自分たちの経験を述べている。たとえば、今井正監督に貼られた「レッドパージで東宝を追い出された抵抗の映画監督今井正」もそのような理解の結果であるという。(佐藤洋 2009、276～277 頁)

[64] 都築政昭は、この時期において亀井が映画以外に青春を燃やしたものが「恋」だと述べている。亀井はレニングラードで「ニーナ」とい女性と知り合って結ばれ、「デマル」という男の子まで生むが、肺結核にかかったためやむを得ず帰国を急いだ。彼女と息子との縁は断ってしまった。(都築政昭 1992、46～48 頁)

は「ドキュメンタリー風のもの」（亀井文夫 1989、24 頁）であり、「劇映画」の対立項としてあるよりは、表現の方法として考えられた。彼は 1949 年山本嘉次郎との対談「劇映画における記録的手法について」で、「リアリズムを追求する立場をはっきりつかんでしまえば、必ずしも実写を必要としなくても、ある場合には漫画でもいいわけなんだから」（『キネマ旬報』53 号 1949、13 頁）と言う。

リアリズムの方向を取ろうとしてごく初歩的な形が、つまりドキュメンタリー、セミ・ドキュメンタリーというような形で出て来るのじゃないかというふうに思う。だから結局リアリズムが更に完成されれば、セミ・ドキュメンタリーというような言葉ではなくて、実際に、リアリズムの様式が劇映画として十分に完成されて来ると思うけれども、そこが山本さんのいうようにもう一度劇映画の完成された様式が生まれて来る場合が予想されております。……劇映画の完成された様式はリアリズムを基礎にしている。（『キネマ旬報』53 号 1949、13 頁）

また、亀井文夫自身の語りのように書かれている『たたかう映画―ドキュメンタリストの昭和史―』（岩波新書、1989）[65]を読んでみると、彼が単なるありのままの「記録映画」にこだわっていなかったことがよみとれる。

ぼくは、映画のモンタージュは単なる技法ではなく、映像による思想表現の方法論と考えるようになった。そして、記録映画の方が劇よりもはるかに、若いそのころの気持にぴったりした。しかし、ぼくが主に記録映画をつくってきたのは、必ずしも芸術の中の記録映画というジャンルに興味をもったというだけではなくて、新聞に投書欄があるように、映画の方法で社会に投書したいという動機の方が大きい。不満なり、こうあるべきだということをフィルムを通していいたい、それが記録映画を作る非常に大きな原動力になっている。美学的にももちろん興味をもったが、それ以上に社会批判、文明批判の動機が強いのはこの時の影響もあるだろう。（亀井文夫 1989、18 頁）

もちろん亀井が作る映画は現状批判的な思想が入れ込まれ、はっきりとした志向性がある。しかし、このような志向性は一方的な方向性を持つものではなく、解釈の可能性を常に開いておく方法であった。つまり、あくまでも見る側（亀井文夫が想定している対象は主に当時の日本人観客）にどうみられるかという点に注意をはらっていたことは確かである。

要するに亀井に関わる映画思想、すなわち「記録性」は、事実を撮った実写フィルムを紡ぎ合わせる作業にとどまらず、レニングラードの雰囲気から学んだように議論と研究、話し合いのなかで構想され、観客に「じっくり見せて判断できるような」（亀井 1989、

[65] 亀井文夫と関係深い記録映画監督・記録映画史研究家の谷川義雄の編集による本である。

25 頁）ものから生まれる。

一方『女ひとり大地を行く』の背景には戦後間もない時期に「生産管理と撮影所従業員の企画参加への要求」（亀井 1989、119 頁）として始まった「東宝争議」があるが、映画はそのなかでおこった「独立プロ運動」の流れでできた「キヌタ・プロ」との共同制作であった。亀井監督には「キヌタ・プロ」において『母なれば女なれば』（1952）に続く二つ目の作品であった。しかし 1952 年から映画の封切りの 1953 年までの『キネマ旬報』に限ってみると、この映画はさほど注目されてない。映画封切り（1953 年 2 月 20 日）まで撮影中には 3 回登場する。

①1952 年第 51 号の【日本映画紹介】
②1952 年第 52 号の「撮影所」の「獨立プロ」（『キネマ旬報』52 号 1952、76 頁）:「キヌタプロは亀井文夫監督で既報「女一人大地を行く」を撮影中」
③1953 年第 55 号の
→「グラフィック」:「女ひとり大地を行く　亀井文夫監督・山田五十鈴主演」
→一枚の白黒と赤のポスター
→「撮影所」の「獨立プロ」（『キネマ旬報』55 号 1953、81 頁）:「キヌタ・プロは亀井文夫監督で「女一人大地を行く」を撮影中」

『キネマ旬報』からはあまり注目・評価されなかった[66]ものの、この映画は当時人気スターであった山田五十鈴を主演にして、ロケの時は大勢の見物人が集まったという。おかげで撮影を許可しなかった会社側の反対にもかかわらず、撮影は進んでいた。上述のように、ロケ班はロケ地の夕張で会社の寮に泊まりながら撮影をしたが、結局会社にとって宜しくないところを撮ろうとしたことから撮影が難しくなる。そして映画で喜代二を演じる俳優の内藤武敏氏によると、当時夕張炭鉱では労働争議が起こって予定されていた坑内の撮影などが不可能になり、撮影はより難航したというところで幸い、太平洋炭鉱（釧路）の組合の人から誘われてロケ地を移す。

『女ひとり』は封切りの前、映倫にシナリオと映画フィルムを提出し審査を受けるが、板倉史明（2009）がまとめているように、削除を希望されることについて日本炭鉱労働組合から抗議文が出される。亀井監督は新藤兼人に書いてもらったシナリオを必要によっ

[66] 『女ひとり』は 2 時間 18 分（138 分）の長さのものであるが、この流通されている「従来版」はもともと 4 時間程度の映像素材を大幅に編集（主にカット）したものとみられる。映倫（映画倫理委員会）から削除・変更を勧告されたことも影響があるだろうが、実際にその勧告はさほど反映されてない。むしろ劇場での上映という現実的な条件から編集された可能性が高い。当時この映画に対する批評にも「編集」という事情が映画批評の一つの論点（「乱雑」「編集の不手際」「欠陥」）になっていることが分かる。ちなみに、この映画の場合、流通されている「従来版」が再編集されたり短縮された「オリジナルネガ」で、「最長版」が逆にそれより長いヴァージョン（146 分）である点が興味深い。（板倉史明 2009）を参照。

て書き直し、撮影中には会社、組合からも意見を聞き、「裁きながら」映画を撮影する。さらにそのシナリオも天気やその場の状況によって書き替え続ける（亀井 1989、133～134 頁）。

『女ひとり』には、独立プロ運動の潮流が反映されていると同時に労働組合と独立プロとの提携制作という体制、「各労組の映画製作は組合組織を基盤に持ち、既成配給ルートに委存せず公開出来る利点」（『キネマ旬報』73 号 1953、87 頁）があった。映画が制作・配給・流通される既存の枠組みを拒否し、労働者がそれを自主的に共有しようとしたことが強く表れている。

『女ひとり』に目立つもう一つが、人物や台詞であり、それは炭鉱のなかで中国人と日本人労働者が助け合うシーン、手を繋いでまたは肩と腕を組んで抗議し未来への希望を楽しく歌う同志愛などである。映画全体において登場し、決まり文句のような言葉が台詞の中にある。これは上述したように「記録性」の表現でもあり、また実際にこの時期における労働運動の盛り上がりでもある。

第２節　炭鉱労働の記録としての側面――1929 年～1949 年、北海道の炭鉱

次に、1929 年～1949 年、北海道の炭鉱を描いたこの作品の分析を行い、炭鉱労働の記録としての側面を検討する。この映画はナレーションによる補足説明と時間の変化によって徐々に進むが、物語がその主な表現になっている。物語の筋を成しているのは炭鉱の労働である。映画は第一次世界大戦後の経済恐慌が日本全国にも影響し不景気であるというナレーションから始まり、主人公のサヨとその夫の喜作、子供たちが北海道に流れる原因を説明している。

ナレーション「大戦争の後には必ず経済恐慌が来る。第一次世界大戦の時も 10 年経って昭和 4 年秋、突如、ニューヨークウォール街が大混乱に陥った。この世界的不景気は数日も経たないうちに日本にも押し寄せてきた。その上飢饉に襲われた東北の農村一帯では百姓の出稼ぎや娘の身売りは後を絶たず、夜逃げ、首吊りがいたるところに起こった」

このような状況の中、秋田の農夫である喜作は経済的な困窮に追われ 1929 年北海道の炭鉱へ向かうが、このとき喜作と彼を送る妻サヨと子ども二人の後ろにも「娘身買の場合は当相談所へ御出下さい。〇〇〇〇相談所」「北海道行人夫〇〇大募集…」という掲示板が映る。この掲示板の存在と後に出てくる飯場での劣悪な環境のタコ屋、それから脱走した労働者に対する「見せしめ」、ガスが爆発する坑内事故は、彼が炭鉱労働に至る経緯と炭鉱という場所、労働を説明するに十分である。

何回も登場する坑内での労働シーン（手作業から機械への変化もよみとれる）、そして映画においては「戦前」として設定されているところでは、ヤマの入り口から上がる労

働者たちの姿、それとすれ違うように馬が見え、坑内が順番に写される。サヨは戦前には坑内で「先山」として働いた。

「1944 年」という字幕。
ナレーション「日華事変が太平洋戦争に拡大した頃、ヤマではまったく男手が不足した。（「採炭救国」という標語が映る）内地から徴用工を連れて来ても間に合わないため、中国人の捕虜をヤマに入れて強制労働をさせた。坑内では 12 時間、14 時間と激しい労働が続けられた。サヨもいま採炭の先山になって、なれないピックを握った。ただ、会社のクラブだけは特別で軍人や役員が宴会、宴会で我が世の春を歌っていた」

サヨは石炭を運び、少年になった子供二人にお弁当を渡し、坑内労働に向かう。それと対称するように「北洋礦業所倶楽部」の看板を掲げた建物が映り、芸者たちが下駄の音を立てて建物に入る。会社の役員たちと軍幹部は宴会をしていて軍人がスピーチをする。

軍人「今や皇国の興廃はいつにかかって銃後の増産には、かかる重大な時にあってかかる名誉ある…会社も鉱員も一体となって私利私欲を捨て、…北洋炭鉱においても…いまただちに軍の作戦に合わせて石炭を出さなければならん。そのためにはたとえ人命を犠牲にしてもいいではない…」

「人命を犠牲にしてもいい」という軍人の台詞のように、この後には現場で起こる中国人捕虜に対する虐待が描かれる。中国人捕虜の雷さんが現場監督に無惨に殴られる。ここには、上で引用したナレーションによる説明のように、戦争の拡大が背景としてあり、より具体的には長期化した戦争による日本経済の軍事化、「生産の不均等、生産設備の″腐朽″化、資材と労働人口の相対的縮小、富の少数者への集中と工場労働者の増大、潜在的なかたちでの階級矛盾の拡大（えん戦、怠業、移動）など」（田中宏他解説 1987、527 頁）があげられる。ことに工業・石炭産業は戦争遂行のために重要な産業部門であるとされ、1942 年 11 月 27 日の閣議決定「華人労務者内地移入ニ関スル件」により、「内地ニ於ケル労務需給ハ愈々逼迫ヲ来シ特ニ重筋労働部面ニ於ケル労力不足ノ著シキ現状ニ鑑ミ左記要領ニ依リ華人労務者ヲ内地ニ移入シ以テ大東亜共栄圏建設ノ遂行ニ協力セシメントス」（田中宏他解説 1987、525 頁）という方針により、中国人が計画的に強制動員される。この閣議決定の直前の 1942 年 10 月 22 日には「俘虜派遣規則」が公布されたが、これは「軍事俘虜を俘虜収容所以外に収容して、工場や鉱山に労役させるもの」であり、この時、「俘虜」と名付けられたほとんどの中国人は一般住民であった（田中宏他解説 1987、531 頁）。戦争時に動員され強制労働させられた中国人は約 4 万人であったという（法政大学大原社会問題研究所 1965）。

現場監督「何だ、君は！」
金子「いい加減にしないと死んじまうぞ」
現場監督「何？貴様、捕虜に味方する気か！この野郎！（金子を叩く）この野郎！（金子を蹴っ飛ばし踏みいじる）出喋るな！馬鹿野郎」
重度の暴力にも関わらず、起き上がって現場監督と向き合う金子。困った顔の雷さん。
金子「気が済むまで殴れ、病人殴っても始まらねえぞ」
帽子をかぶり直し、監督に近づく金子。
現場監督「作業中断。勝負は後にしよう。（雷さんをつつき）おい、早く立て！」
雷さんに礼をして帰る金子。その後ろに
現場監督「てめえみたいなやつがいるから戦争がうまくいかねえんだ！馬鹿野郎！」

中国人捕虜を助ける金子は、炭鉱会社から見れば労働による石炭増産、ひいては戦争の遂行を妨害する者に他ならない。その直後、サヨは労働の仲間である金子の召集の話を聞き、慌てて金子を訪れる。中国人労働者に対する虐待などの酷い仕打ちとそれに同情する者の金子が召集を受け戦場に出るが戦死してしまうことは、炭鉱の労働が抱えている捕虜労働者問題は太平洋戦争が生み出した問題であると示唆している。同時にこのような表現は、権力と植民地主義に抗して連帯を要請する役割を果たしているといえるだろう。映画の最後に息をひきとったサヨの体を、終戦後中国に帰った雷さんから送ってきた「民族の独立と平和のために斗う炭鉱の英雄たちへ」と書かれる旗で包むことがそれである。ここには、炭鉱における生産中心主義と軍事化された日本経済に抗して生まれる労働者たちのつながりがある。

やがて炭鉱でも終戦を迎えるが、北洋礦業所にも労働組合が出来上がり、労働組合運動が活発に盛り上がって坑内労働条件改善を求める要求が行われる。労働者たちが嬉しがって拍手するシーンはいわゆる戦後の民主主義的な雰囲気を醸し出す。男性の労働者たちと同じ格好をしたサヨの表情は落ち着いているが、そのあと彼女は「選炭婦」として働くことになる。

そして戦後間もなく勃発する朝鮮戦争においても、炭鉱は大きく影響される。炭鉱会社側とアメリカ人が出席した豪華な宴会で 7 万トン増産計画と「徹底的な作業の合理化」が決定され、それを突き詰めようとする次男・喜代二を含め 5 人が「入坑禁止」処分される。炭鉱における増産は、戦前・戦時期には「お国のために」という名目で、戦後には朝鮮戦争の遂行のため行われる。その過程で労働者たちは炭鉱会社の生産中心主義に抗議し、安全対策への強化などを訴える。ここで労働組合が労働運動の中心となり仕切ることは、戦後炭鉱において労働組合が持つ存在感と力をあらわすものである。この映画が撮影される時期の 1952 年には、賃上げを要求して展開された 63 日ストライキが行われていたことから、映画における労働運動の意義がある。映画は労働者たちの労働運

動を、雄壮でたくましく描く。労働者たちとその家族は元気であり、労働者たちが無期限ストライキに突入した際にも他の炭鉱から励ましに来るなど、労働者たちは助け合う。サヨの次男である喜代二に嫌疑がかけられた時も、喜代二は堂々な姿を見せ、隣の仲間たちは気をつかって助力する。

第３節　「サヨ」という人物――炭鉱労働と恋愛

主人公のサヨはどのような人物であろうか。炭鉱労働と恋愛という側面に注目してみてみよう。『女ひとり』は最初『美しき女坑夫の一生』という題目であった（板倉 2009、94 頁；炭労 1992、116 頁）。「美しき女坑夫」は他ならぬサヨのことであろう。亀井は『女の一生』(1949)『母なれば女なれば』(1952)に続く作品として『女ひとり』を考えた可能性も考えられる。そして『女ひとり大地を行く』という表題は、「亀井がスメドレー〔アグネス・スメドレー：引用者注〕の『女一人大地を行く』をちゃっかり拝借し、『女ひとり大地を行く』にした」という(都築政昭 1992、211 頁)。

物語は喜作が働いている炭坑で起きたガス爆発事故から本格化され、喜作が事故で死んでしまったと信じられているなかでサヨの姿が具体性を帯びてくる。ここで喜作は主役ではなく、「真の労働者」になるための試練を経験し、帰って来てからは「父」「夫」としてではなく「労働者」同志としての位置である。喜作はほぼしゃべらず、分量的には短く登場する。しかし長い時間映画には登場しない分、彼は様々な経験を積んでいたことになっている。

ナレーション「一人の男がヤマに現れた。それは喜代二の父、喜作である。18 年前、あの恐怖のガス爆発事故のあった日、危機一発のところで死から逃れた。喜作は山越えをして漁場で働いた。港の石炭運びもやった。転々としてペテン師どもの手から手へ渡され、ある時は蟹工船にのって、カムチャッカに渡り、流浪の幾年を重ねていたが、終戦を満洲の撫順炭鉱で迎えた。やがて満洲が解放された日、喜作は初めて働くものだけの知る大きな喜びにしたった。喜作は真の労働者になった。引き揚げてきた喜作は、故郷を訪ねて妻と子を探した。だが、その行方が全く分からないままに、かつて自分の苦しみの土地であったこのヤマが、かえって喜作の心をとらえたのである。しかし、再び振り出しに戻った喜作は、もう 2 度と同じコースをたどる喜作ではなかった」

これは再び現れた喜作が出るシーンにおける映画のナレーションである。このシーンに続いて、「やあ、しっかりやれ。」と彼は喜代二を励ましてお風呂を上がる。このように喜作の経験も取り入れながら、女性のサヨを主人公に設定したのは、この映画の肝心なところではないかと思われる。子供たちの教育の為だとはいえ、夫である喜作でなく妻のサヨを前面に出して坑夫として働かせたのは、坑内と抗外を緩やかにつないで見せる映画的装置である。彼女の労働と暮らしは男性労働者が経験とは異なり、サヨが炭鉱

に初めてやって来た時に色々助けてもらった近所のお花、次男と健全な恋愛関係になる孝子との付き合いは、血縁で結ばれた家族ではないながら強いものである。女性同士のこのような付き合いは暮らしをともにする同志の付き合いであり、この映画の独自的な部分であるといえる。同時に、労働と暮らしのふたつが炭鉱で持つ関係性を強調している。サヨという人物によって表現されるのは労働と暮らし、家族・人間のつながりの絡み合いである。

サヨが夫探しとそれに続く夫の死を知らされたときの絶望を抱えながらも、飯場ではなく喜作が働いていた「坑内」で働くことにするのは、サヨの唯一の目的に見えた(そして後半になっては果たされたとされる)子供たちの教育という目的を裏切るきっかけである。彼女は炭鉱労働を通して金子との恋愛関係を形成するからである。金子はまるで喜一・喜代二の父のように親切でサヨとも良い関係になる。

金子「じゃ、降りろ」
喜代二「やだやだやだ」
サヨ「何してる？（金子を見て目で会釈する）ね、喜代二、おりれ」
喜代二「いいじゃないか！うちの父ちゃんなんだもん！」
金子「(照れくさそうに）ほら、そんなこと言っちゃだめだよ」

サヨは彼が「アカ」だという噂を長屋の区長から耳にするが構わない。サヨは出征を目の前にした金子と話をしている時、彼が持っている女性の写真を見て強張った顔で「これは誰ですか？」と聞くが、すぐにそれはお父さんが落盤事故で亡くなった後行方不明になった金子の母であることを知り安心する。サヨの子供たちとも仲良くしていた金子はサヨと子供たちにプレゼントをするが、サヨには「作業着」をあげる。

金子「母さんにはこれを」
言いながら包みを差し出す。それを受け取って開けるサヨ。
サヨ「へえ、すまないね」
包みから出たのは、大きな穴が開いた作業着。みんな笑い、雰囲気が緩む。

労働を続くことを意味する「作業着」は、彼女に寄せる想いが労働とつないでいることを表している。作業着を残して金子は戦死する。その後戦争が終わり、中国人の雷さんが以前助けてもらった金子にお礼をしにサヨたちの家をおとずれるとき、「あなたの旦那さんに助けてもらったんです」と言うこと、そしてサヨたちの隣人であるお花と彼女の夫も初婚ではないことを併せて考えると、サヨと金子二人の関係は映画に直接表現されているよりも深いといえる。

サヨと喜作、サヨと金子の関係を比べてみることも可能であろう。サヨと喜作は秋田

の農村で暮らしながら家族を営む生活をした。二人の間に「恋愛」という関係が成立するかどうかは断言できない。前近代的農村における結婚であった可能性が高い。サヨと喜作は子どもの教育を何よりも重視し、それを託す・義務づけられる関係である。

他方、炭鉱に働くサヨは、自分の力で暮らしていかないといけない状況にいる。それは労働を通してできることである。サヨが先山になる前には金子とペアを組んで後山として働いていたと考えられる。「作業着」から分かるように、働くことから恋愛を、また恋愛から働くことを考える関係がうかがえる。このような関係は、農村における喜作との結婚とも、近代の結婚という制度においてだけ正当だと認められる夫婦関係とも異なるものである。

第４節　恋愛と「健全たる」労働者像、歌

次は登場人物の間に生じる恋愛と「健全たる」労働者像、歌を検討する。

サヨと喜作の次男喜代二がしゃべる台詞は『女ひとり』が与える硬い印象にもかかわっている。これは上述した労働組合の存在と労働運動の盛り上がりとも関わる。「健全たる」労働者としての喜代二と警察予備隊に入って酒に浸かる生活を送る喜一の対比は、当時労働者たちが持っていた「文化」概念と関係がある。第 4 章の最後に引用した太平洋炭鉱組合からの文章をもう一度引用する。

支配階級は敗戦によって生まれた虚脱した心理状態につけこんで頽廃文化を計画的に奨励すると共に昨年九月従属講和以後において反動文化や戦犯追放解除で再軍備政策と併行して、すべてを従属的な方向に進めつゝあった。(太平洋炭鉱労仂組合 1955、212 頁)

うたごえ運動も「頽廃文化」に対抗する労働者の階級意識を向上させる運動であった。『女ひとり』の中で歌が頻繁に登場するのは、このような雰囲気の反映であり、喜代二が代表しているのである。喜代二は長男の喜一とは全く異なるキャラクターである。喜代二は教育のため歯を食いしばって働く母サヨの希望と中国人の雷さんが「平和守る凄まじい子になれ」と言う通り凄まじい坑夫として成長する。彼は「労働のなかに生きた学問があるんだ」「俺はあの金子おじさんみたいになるんだ」「俺は危険にまともにぶつかってて、それをなくなるようにしたいんだ」と堂々と言う。

母の許で充実に生きていく彼に想いを寄せる一人の女性は孝子である。彼女はおとなしくて質素であり真面目な女性として描かれる。

サヨ「お嬢さんが、よく思い切ってここまで来ましたね」
孝子「いやだわ、おばさん、お嬢さんだなんて。あたしお嬢さんなんては大きらい。だって、お嬢さん臭みなんて捨てちゃいたいからここに来たんじゃないの」

そう言う孝子を見つめ、
サヨ「喜代二と同じことしゃべるだね」

　このような孝子と喜代二の健全な恋愛関係に対して、結局改心し母のもとに戻るが喜代二を危機に陥らせる長男の喜一は、坑夫として働いていたが、炭鉱の生活を嫌うため幼馴染でありお花の娘の看護婦・文子と「駆け落ち」をする。

野原に喜一と文子。文子は座り、その膝を枕にして横になっている喜一。流れるギターの「エリーゼのために」。
文子「私、つくづく嫌になったわ」
喜一「ふん、同じようなこと言ってやがる。俺もつくづく嫌になったよ。一日中石炭のほこり浴びて。怪我と弁当は手前もちでよ。来る日も来る日も飲んで食ってちゃその日暮らしじゃねえか。いつになったら人間らしい生活ができるんだか分からねえし」
文子「（微笑みながら）ねえ、二人で札幌か函館か行っちまおうか？」
喜一「行ってどうするんだ。食えねえだろう？」
文子「なんとかなるわよ。どこ行ったってここよりましだよ」

　喜一と文子は、炭鉱の生活を嫌がることで共通している。二人の駆け落ちは隣人たちに噂され心配事になる。二人の行き先は米軍基地（千歳基地）における警察予備隊とパンパンを連想させる「乱雑」な生活である。町を歩く米軍、米軍としゃべる日本人の女性が散々見られ、英語看板がみえる千歳基地の周辺のなかに駆け落ちした文子のこじんまりな部屋がある。

喜一と文子の「愛の巣」の部屋のなかにベッドがある。母のサヨと警察がそれぞれ自分を探しに来たことを聞いた喜一は文子のベッドの中にもぐり、布団をかぶって隠れる。サヨが行き去ったことを窓から確認した文子がベッドに戻ると、表情が暗くなる。そしてそれは徐々に意味深い笑いに変わる。米軍の帽子を握って怒る表情の喜一。
喜一「どうしたんだ、これ！」
と追及する喜一。
文子「（部屋にかけた紐にかかった上着を羽織りながら）何さ！いちいちあたしの行動に因縁つけなくたって、いいでしょう？あんただって分かってるじゃないの？キャバレーの稼ぎで食べられないことくらい。ほかの人だって、みんなやってるわ」

　その後基地の町千歳でジェット機が出す爆音に驚くサヨとは異なって「ジェット機だよ」と驚かない文子は、秋田から北海道に渡って来たサヨの苦労と子供たちの教育における希望が崩れていくことを喜一の「没落」よりも象徴的に見せている。基地のシーン

にずっと流れるのはジャズである。

これに対して炭鉱村では「春が来た」「ホーム・スウィート・ホーム」がバックグラウンドミュージックとして流れ、「赤旗の歌」(2 回)「赤いチョゴリ」「ワルシャワ労働歌」「若者よ」が炭鉱労働者たちによって歌われる。この部分では、当時盛んであったうたごえ運動の影響を見ることができる。その中「赤いチョゴリ」は、太平洋戦争後の北朝鮮において土地革命が進められた時期に歌われ、「北の地の明るさと希望」(日朝協会愛知県連合会 2016、13 頁)を表す歌であった。映画においては、孝子を含めた健康に歩く労働者たちが歌い、「明るいヤマで暮らしたい」と話すサヨと喜代二がそれを微笑ましく見守る。孝子と喜代二はお互いに気づき、挨拶を交わす。

のどかな畑に　うたごえ高く
今年も豊作　黄金のうねり
豊かな朝鮮　自由な朝鮮
うなるサイレン　ハンマーは響く
トラジの花咲く　僕らの工場
銅鑼打ち鍛えよ　平和の鋼
豊かな朝鮮　自由な朝鮮

このような二人の喜代二と孝子に、喜一と文子のように肉体的な関係を暗示するところは全くない。二人は労働の場で不条理に抵抗する、そして喜代二に着せられたぬれぎぬを晴らすといった「助け合う」健全な関係である。映画では、労働者たちの恋愛は、労働を通した健康な恋愛だけが認められ、歌はそのような人間関係を見せる装置であるといえる。

第６章　1950 年代炭鉱映画における女性と労働――『にあんちゃん』(1959 年)の日韓映画をめぐって

本章では、主として日本で 1959 年公開された映画『にあんちゃん』を分析の対象とするが、『にあんちゃん』における女性の労働と性というテーマを論じるためには、取り敢えず日韓のテキストと映画比較が必要であると考える。これは原作の『にあんちゃん』が当時翻訳・出版・映画化という過程を経って、日韓における石炭産業の状況という環境と条件の差によって女性人物の表現と演出に影響していたからである。従って本章では、原作の『にあんちゃん』について述べた後に関連した先行研究をまとめ、日韓における出版、翻訳、日韓における映画の制作、日韓映画における女性と労働の順番で分析していくことにする。

第１節　『にあんちゃん』とは

『にあんちゃん』は 1958 年光文社から刊行されてベストセラーとなり学校の作文教育にも活用されるなど、広く読まれた本である。著者安本末子の兄・安本東石(喜一)が 1957 年肋膜の病気によって病床で妹・末子の日記を読み、「これは、自分一人で読んでいるべき日記ではなくて、できるだけ多くの人に読んでもらわねばならないものだ」（安本末子 a1958、5 頁）と思い出版社に原稿を送ったという[67]。本作品は、九州の佐賀県にある炭鉱村に住む在日朝鮮人の四人兄妹が両親を病気で亡くし、石炭合理化、民族差別を背景に貧困のため家族が離散する経験が描かれている。四人兄妹の末っ子である「末子」が 1953 年 1 月 23 日から 1954 年 9 月 3 日まで綴った日記が主となっており、末子の作文、長兄の手紙、日記に対する学校の先生のコメント、「にあんちゃん」こと次男の高一の日記が挿入されている。末子のテキストには、貧しさのため兄妹が離ればなれになり、様々な出稼ぎで働き口を見つけること、家がない・学校にいけない状況が子供の目線から表現されている。貧しさに挫けることなく、他人に対するやさしい心、希望を失わない末子によって、学校生活の楽しさ、友達との関係づくり、日常の出来事が淡々と記録されている。個人の葛藤、組合労働者との経済的格差などはもちろん、在日朝鮮人の兄妹が経験する差別と離散は、炭鉱にかかわる歴史と記憶を再評価する際に欠かせない。

『にあんちゃん』のテキストは、1958 年光文社のカッパ・ブックスシリーズの一冊として出された以降、1959 年に増補新版、1977 年にちくま少年文庫、1978 年講談社文庫、2003 年西日本新聞社、2010 年に角川文庫から出ている。1997 年呉徳洙(オ・ドクス)監督のドキュメンタリー映画『在日』の人物編では、安本末子の娘である李玲子(リ・

[67] 実は長兄・東石から送られてきた原稿は「編集室の隅に放っておかれた」が、「企画に詰まった編集室が読んで感動し」出版ができたという。また講談社専務でのち光文社社長となる小保宇三郎が「読んで、家族みんなが泣いてしまった。ついては、これをあげてくれと千円送ってきた」というエピソードもある。(新海均 2013、53～56 頁)

リョンジャ)が登場し、かつて『にあんちゃん』の舞台の大鶴鉱業所があった場所を訪ねて村人の話も聞く。一方、韓国における『にあんちゃん』は 1959 年に新太陽出版社と大東文化社での翻訳・出版があり、1970 年仁昌書館から、2005 年には韓国近現代の映画シナリオをまとめたシリーズの中に入って出版されている。

次には『にあんちゃん』を取り上げている研究をまとめる。林相珉(2011)は映画(1959 年、日活)の分析から、北朝鮮への帰国事業などをめぐった日韓の思惑などを考慮し、安本一家を朝鮮人として描くことに危険性があったと述べている。林は映画における安本一家が「日本人なのか、朝鮮人なのか。正解はそれがよく分からない描写」(林相珉 2011、34 頁)となっており、「おまけに「まったく日本人の生活にとけこんだ」安本一家は綺麗で流暢な日本語を使っているため、朝鮮人としてよりは日本人として見られてしまう」(林 2011、36 頁)と解釈する。林の研究では、映画を見る観客にとって安本一家のみが朝鮮人と見られるかどうかが日本社会における在日朝鮮人の表象を判断する基準となっており、映像分析としては不十分である。このような『にあんちゃん』の朝鮮人表象に関する研究に対して奥村華子(2018)は、先行研究が『にあんちゃん』の中から「民族的アイデンティティーの表出」か「日本人としての意識」という二項対立的な判断が強いと批判したうえ、日記の検討を行い「在日朝鮮人と日本人の間でいまだ自己形成を行う過程にある筆者の姿」を発見し、「戦後の日本で暮らすことを余儀なくされた在日朝鮮人の人々の置かれた不安定な立場や苦難」(奥村華子 2018、200 頁)を考察する必要があると評価した。藤野豊(2019)は、戦後の炭鉱における石炭合理化政策とそれによる失業問題を論じる研究の中で、『にあんちゃん』は原作よりも映画の方がより炭鉱がおかれた状況―失業問題―を描写していると分析した。在日朝鮮人表象に関しては「在日コリアンの置かれた立場の描写については映画の方が詳細であった」(藤野豊 2019、274 頁)と、林の研究とは異なる分析を行い、『にあんちゃん』が呼び起こした社会的な影響と反響をまとめている[68]。

韓国における研究には車承棋と金スングがあり、車承棋(2016)の研究は、『ユンボギの日記』と『にあんちゃん』をめぐる解釈とそれが文化的に消費される過程を通じて日韓に共通する歴史的解釈のしかたを分析している。児童の日記を読んで生じる倫理の問いを社会的感情・行為としてみている。『ユンボギ』『にあんちゃん』二つのテキストが、日韓において同時的に読まれ・翻訳・映画製作されたということからの分析である故に、その意味を積極的に引き出しているところが興味深い。金スング(2012)の研究は『綴方教室』、『授業料』と『ユンボギの日記』『にあんちゃん』など日韓の作文教育(綴方)の影響下に書かれた児童文学とその映画化されたものの受容・変容の過程を検討している。

[68] 藤野の韓国側での映画製作に関する以下の記述には事実誤認がある。「こういった状況下で、韓国政府が「舞台が日本だから映画化するのは技術的に困難」という判断を下し、韓国での映画化は不可能となった」の中「韓国での映画化は不可能となった」は事実とは異なる。(藤野豊 2019、270 頁)

韓国における『にあんちゃん』の研究は、児童の作文教育との関連性の中で行われていることが分かる。このように、『にあんちゃん』に関する日韓の研究では民族問題(在日朝鮮人表象を含めた)とコンテンツの日韓受容問題が主なテーマであり、炭鉱の実態と労働・失業問題も取り上げられた。これらの日韓の先行研究では在日朝鮮人の表象と不可視化、石炭産業の衰退との関係に力点が置かれ、テキストや映像の受容が検討の中心となっている。

第２節　日韓における出版、翻訳

（イ）日本における出版物

①安本末子『にあんちゃん―十歳の少女の日記』光文社、1958 年
②安本末子『にあんちゃん』ちくま少年文庫、1977 年
③安本末子『にあんちゃん―10 歳の少女の日記』講談社、1978 年
④安本末子『にあんちゃん―十歳の少女の日記』西日本新聞社、2003 年
⑤安本末子『にあんちゃん』角川文庫、2010 年

（ロ）韓国における出版物

①安本末子著　・　柳周弦訳『구름은　흘러도:　在日　10　歳　韓國少女의手記』新太陽社出版局、1959 年
②安本末子著　・　本社編輯部訳『(在日)韓國少女의　手記:十歳少女의日記』大東文化社、1959 年
③安本末子著　・　李文九訳『구름은　흘러가도　<在日　韓国　少女의　日記,仁昌書館、1970 年
④안소임 지음, 김지헌 각색『구름은 흘러도』커뮤니케이션 북스, 2005 年

『にあんちゃん』は日本においては戦前からの作文教育と生活記録運動の文脈と影響から完全に切り離すことができない。それは、日記をつける行為自体と学校の中で奨励され読まれたことを含む。『にあんちゃん』は話題になり、広く読まれたので、光文社で版を重ねて出版され、同年すでに増補新版を出しているほどであった。1978 年講談社からの出版と 2003 年西日本新聞社からの出版の間に時間の差があるのは、しばらく絶版されたのが、2001 年「にあんちゃんの里」のため反響を呼んだからである。2001 年に、同窓たちを中心にして旧入野小学校大鶴分校跡地に「にあんちゃんの里」という記念碑が建てられた。この記念碑建立のための募金の際には、地元民たちも参加したという。記念碑の建立を機に、安本末子とその同窓たち、光文社、講談社、改正版を出した筑摩書房の間に交渉が進められ、絶版であった『にあんちゃん』の復刻版が 2003 年に西日本新聞社から出ることになった(荻原照男「復刻版に寄せて」)(安本末子 d2003、311～312 頁)。

韓国における出版物の中、①新太陽社出版局からのものが、いわゆる「正式版」であ

る。これは『にあんちゃん』の翻訳と映画化をめぐって日韓両方で物議をかもした後、新太陽社出版局が韓国に在住の安本一家の親戚・安東福と正式に契約を結んだからであるという。そのため大東文化社の方は、いわゆる「海賊版」である。正式版の翻訳者の柳周弦(1921～1982)は雑誌『白民』に小説「煩擾の街」を発表して登壇して多くの作品を執筆、『白民』の編集同人、『新太陽』の創刊にも参加する。1973 年に新太陽社から『柳周弦歴史小説大全集』が刊行される。ちなみに、この出版社は日本の映画『ユンボギの日記』で知られる李ユンボギの原作を、1964 年に出版している（金スング 2012、154 頁)。

韓国の正式版では、日本版で「つけもの」だった箇所が「김치」（キムチ）と翻訳されているなど、韓国の事情に合わせた翻訳を行っている。海賊版は翻訳の一貫性が少し欠けている感があり、訳者である大東文化社の編集部による「訳者たちの言葉」がつけ加えられ、教育と社会的環境論の重要性が強調されている。ここでは安本の日記の執筆行為を「アジア的なこの恐ろしい自忘状態が作り出す凄惨な無関心に挑戦しながら安本は日記を書いた」と評価しており、同時代の韓国文学のもつ問題点を同時代の体験と感情の枯渇した「形式主義」（安本 g1959、183 頁）として批判している。

日韓における『にあんちゃん』の版本を比べると、削除された部分があることが分かる。それはにあんちゃんこと高一の日記の一部であり、「朝鮮人」に関連する記述である。

＜七月二十三日(金)晴＞
この家の主人の名前は「閔(ぎん)さん」といって、前大鶴で、ぼくたちと同じ町内にいた人だ。朝 7 時ごろ、朝鮮人丸出しの、こしょうとにんにくのたくさんはいったおかずで、ごはんを食べた。
ぼくも朝鮮人の父母からうまれたのではあるが、朝鮮人は大きらいだ。朝鮮人といえば、無学で無茶で、人からにくまれるようなことしかしない。たいてい馬鹿にきまっている。馬鹿な朝鮮人を見ると、ほんとうに腹が立って仕方がない。その中で良い人もかなりいる。けれど、馬鹿な朝鮮人があまりに多いから目立たないのだ。良い人のために、馬鹿な朝鮮人は、少し遠慮してもらいたいものだ。(安本 a1958、205 頁)

1978 年講談社、2003 年西日本新聞社、2011 年角川文庫には、引用で下線を引いている部分だけが削除されている。しかし、1977 年の筑摩書房では高一の日記自体が全部削除されていることが分かる。筑摩書房からの本に高一の日記自体が丸ごと削除された背景には、「ちくま少年文庫」のシリーズであることが関係していると推測できる。これは後で新聞記事の分析で触れるように、『にあんちゃん』とその主人公の末子・兄妹たちへ向けられた世間の関心とその話題性のためである。

韓国語版においては、新太陽社出版局には削除され、大東文化社には 153 頁に削除さ

れてないまま訳されている。1970 年仁昌書館でも訳されている。

나도 한국인의 부모에게서 태어낳〔ママ〕지만, 곤난한 입장에 서는 수가 많다. 한국인중에는 무지하고 경우 바르지를 못해서, 사람들로부터 미움을 사는 일만을 한다. 그들은 멍텅구리들이다. 멍텅구리 한국인을 만나면, 정말 화가 치밀어 오른다. 그 가운데는 훌륭한 분들도 많이 있다. 그러나 멍텅구리 한국인이 가끔 있어서 잘 눈에 뜨이질 않는다. 훌륭한 분들을 위하여서라도 멍텅구리 한국인은, 조금은 사양해 주었으면 한다. (安本 g1959、153 頁)

나도 한국 사람의 어머니 아버지에게서 낳았지만 한국 사람은 정말 싫다.
일본에 있는 한국 사람들은 뻔뻔하고 남이 싫어하는 짓을 잘 하기 때문이다. 대개 바보로 보였다.
그런 한국 사람을 보면 울화가 치밀어서 견딜 수가 없다. 물론 그 중에는 좋은 사람도 많다. 그러나 그렇지 않은 사람이 더 많은 것 같으니까 좋은 사람은 눈에 안 띠는 것만 같다. 좋은 사람을 위해서 그런 사람들은 날뛰지 말았으면 좋겠다. (安本 h1970、199 頁)

原文では「朝鮮人」である部分はすべての版本において「한국인」(韓国人)となっている。日本における出版物と韓国における正式版には削除されたにもかかわらず、韓国における海賊版と、時間が隔たっている 1970 年のものには削除されず翻訳されていることは、該当部分が場合によっては問題となりやすいという出版関係者の判断が働いたと推測できる。

もう一つ、末子の日記においても朝鮮人に関わる敏感な部分が存在し、版本ごと少し異なる。

びんぼう　ちょうせんじん　でていけ　おいがたの　いえにおらせん (安本 a1958、192 頁)〔原文はローマ字の上にふりがな〕

引用は 1958 年光文社で刊行されたものであり、1978 年講談社、2003 年西日本新聞社、2011 年角川文庫版においても全部残っている。韓国においても、表現のニュアンスに差はあるものの、残っている。

돈 없는 한국인이라고 업수히 여기며 무시하려는 눈초리에는 살이 내릴 지경입니다. (安本 f1959、227 頁)

가난뱅이 한국인 썩 나가라. 내 집에 들 수 없다. (安本 g1959、144 頁)

一つ目は新太陽社出版局、仁昌書館からのものであり、やや湾曲な翻訳となっている。二つ目は大東文化社のものであるが、「朝鮮人」が「韓国人」と変わっただけで直訳である。しかし高一の日記の中、問題になる可能性がある部分が日本における出版物と正式版では削除されたことに対して、この末子の記述はすべての版本において残されている点が指摘できる。また、講談社と西日本新聞社版には、末子が急性結膜炎で入院した時の日記（昭和 31 年 10 月 17 日～11 月 20 日）が付け加えられている。

『にあんちゃん』の翻訳・出版・映画化過程には、朝鮮戦争とそれによる日本国内での朝鮮ブームが過ぎ去り、ドッジラインをはじめとする経済不況と李承晩政権の対米・対日政策と雰囲気、日韓国交正常化以前という状況、すなわち、日韓における硬直した関係と政治的状況が影響していたといえる。次に紹介する原作『にあんちゃん』の無断翻訳・出版についての記事には、このような背景が垣間見える。

当時韓国の新聞『東亜日報』(1959 年 1 月 26 日・28 日)は「日서 無斷出版等에憤激-在日韓國少女手記 니안짱韓國版物議」などの見出しで、現在韓国において『にあんちゃん』の不法著作物が物議をかもしていることを報じる。この記事には、東京発記事の韓国語訳後に文教部当局担当者の話と、その「無断出版」を行った張本人の「出版業者」としての大東文化社社長の話を載せている。

『読売新聞』(1959 年 2 月 16 日）の「共感を呼ぶにあんちゃん(NHK の連続放送○)人種的偏見や貧苦に耐えて　兄妹いたわり合う韓国少女の日記」では原作がベストセラーになったことに続き、NHK 連続ラジオドラマが筒井敬介の脚色で放送され大きい反響を呼んでいるがその中で「さらにこの放送は韓国でも中波でキャッチされて大評判となり、無断の訳本も出て問題を起こしているほど」だと伝えている。同年『読売新聞』の「「にあんちゃん」とおとなの世界」(1959 年 6 月 7 日朝刊)によると「新太陽社も大東文化社も筆者の末子さんの承諾をうける前に出版したほどのあわただしさだった」とある。

記事を読む限りでは、日本においては、韓国で韓国語版が出版されたと判明された時、いわゆる「正式版」と「海賊版」の区別はあまりなく、とりわけ「『にあんちゃん』が韓国において無断翻訳・出版された」という認識である。しかし韓国では新太陽社出版局と大東文化社の翻訳をそれぞれ合法と非合法的なものであるという認識があったとみられる。

第３節　日韓における映画の制作

ここでは、原作をめぐる日韓の当局や出版業界、特に映画業界の葛藤と思惑などが存在したという点に基づき、これに関連する記事を紹介する。

韓国では「韓国少女の手記、映画製作不可能」(『京郷新聞』1959 年 3 月 19 日）と報じられ、日本の「ごまかされたツシマにかける橋　映画化に横ヤリ　童心はきれいなの

に」(『読売新聞』1959 年 6 月 7 日）には「日本、韓国で映画化が企画された。ところがこのプランが、韓国では政府によって「ごはっと」日本でも横ヤリが入って主人公が朝鮮人ではなく日本人にすりかえられた」と述べている。「韓国にもあった「にあんちゃん」の映画　日活。著作権で抗議　ベルリン映画祭でわかる」(『読売新聞』1960 年 7 月 11 日）には、「映画祭期間中の六月二十五日にこの映画は上映され、たまたま日本代表団の一人として出席し、これを見た日活の小平勝七外国課長は驚いて東京にその旨を打電した。日活本社はすぐ安本さんと原作の出版会社である光文社に確かめたが韓国の映画会社に映画化権を渡したことはないという返事」とある。日活はベルリン映画祭に出席して初めて同じ作品を原作にした映画の存在を知り、映画祭執行委員長に事情を話し、原作の出版先である光文社にも問い合わせをした。韓国側にも抗議をしたが、日韓の間に正式な国交がないので、先がどうなるか分からないという。前年度の 1959 年 6 月 7 日の記事にも、韓国側での映画製作は難しい・中止という情報があったので、日活も『にあんちゃん』原作の映画は他にないと思い込んでいた。

1960 年 7 月 23 日柳熙大「第 10 回伯林映画祭参加記　文化作品を出品しよう」『京郷新聞』には「日本のものは重く暗くて左向の性質があるが、我々のは「『東洋的な人情味を暖かく帯びた美しい映画』だと評価された」とある。この記事を書いた柳熙大は、韓国の映画『雲は流れても』の制作者である。

1959 年 6 月 7 日『読売新聞』の中に書いてある、「主人公が朝鮮人ではなく日本人にすりかえられた」という部分には少し疑問があるが、この部分と関わって日活での映画制作に関して記しておく。日本における映画は、当初、田阪具隆が撮ることになっていたが、日活を辞めてしまったので今村昌平に仕事が回ってきた(香取俊介 2004、159 頁）という事情があるが、今村は映画の素になる脚本にかなり時間をかけたという。任されたうえに後に文部大臣賞を受賞したという事実だけを見たら、今村のフィルモグラフィーにおいて「異質」な作品であるという見方もある。しかし今村自身は「そういうことはまったく考えていない」(今村昌平 2001、33 頁）のであり、原作が美談として話題になり受け止められている雰囲気の中で「炭鉱の町の朝鮮人を撮る」(今村 2001、34 頁）ことにしたと述べている。彼の作品全体の基底に流れる性への着目はかな子というオリジナルなキャラの登場につながり、この作品においては「朝鮮人を撮る」という明確な目標意識とともに描かれる。そのため、原作が持つ純粋さ・たくましさとも異なるし、韓国側の映画が「在日朝鮮人」という文脈を削除し映画は貧乏で両親を亡くした心の澄んだ四人兄妹の美談として作られたこととも異なる。

韓国では、日本での原作と舞台が日本であること、原作者の安本末子が「韓国国籍」かどうかという点が映画化に影響を及ぼした。自由映画公社から柳韓映画社に制作会社が変わり、監督に兪賢穆(ユ・ヒョンモク)が選ばれた。兪賢穆は「社会派」「リアリズムの巨匠」と呼ばれている。彼のよく知られている代表作として『誤発弾』(1961)があり、『金薬局の娘たち』(1963)『剰余人間』(1964)『殉教者』(1965)『カインの末裔』

(1968)『炎』(1975)『梅雨』(1979)『人間の息子』(1980)など、文学作品を原作にした映画を多数制作している。朝鮮戦争による南北分断とその事実からの悲劇、人間群像を描いている。一方、実験的な試みを映画に取り入れることも兪監督映画の特徴としてあげられる。映画評論家・金チョンウォンは兪賢穆の映画は主にリアリズムを追求し、それは大きく「現実批判的リアリズム」と「叙情的リアリズム」であり、両方が調和している（金チョンウォン 2006、173～174 頁）という。『雲は流れても』は後者に属しており、その手法は「大衆の感性と叙情に訴える」ものであるという。

一方、崔イルスは『雲は流れても』に対し、「ストーリーよりはスクリーンにおけるイメージの形成に注力しいている」し「全体的なトーンの形成においてはストーリーが目立ち、スクリーンイメージはこのメインのストーリーに比べてサブ的なものになってしまった」「兪監督のユニークで感覚的なアングル、濃い陰影の心理表現によりスクリーンイメージが生き生きしているがやはり説明的な部分が少なくない」（崔イルス〔1959〕1992、83～84 頁）と評価する。

いずれにしても、子供が書いた原作であり児童向けの読みものとして広く読まれた本を原作にしての映画制作というのは、二人の監督にプレッシャーで作用したと考えられる。それに加わって、硬直した日韓関係のため「朝鮮人」の物語を映画化することは容易ではなかっただろう。

第４節　日韓映画における女性と労働

（イ）『にあんちゃん』今村昌平監督、日活、1959 年

この映画の背景は最初のナレーションにより「昭和28、9年頃、すなわち朝鮮ブームと神武景気の中間に当る不況時代は、石炭産業にとってどん底時代である」（池田一郎・今村昌平1959、125頁）としている。これは原作が末子の日常を中心に書かれていることに対し、朝鮮戦争とそれによる特需の終焉、それに伴う石炭産業の不況という時代的状況を全面に出している設定である。原作と異なり、映画は四人兄妹の父の葬式から始まる。父の死により、亡くなった父の仲間であった辺見が、同じように仲間であり現在は労務管理の坂井を説得して四人兄妹の長男・安本喜一を特別臨時として雇ってもらう。しかし朝鮮ブームの時には多くの労働者を雇ったヤマであったが、今では賃金の遅配など問題があらわになり、労働者たちの不満は高まるばかりである。真っ先に首になったのは臨時雇いであり、四人兄妹は炭住からの立ち退きを命じられ、働ける長男と長女・良子が働き口をさがして廻り、次男・高一と次女・末子は他人の家に居候せざるを得なくなる。原作には学校生活も大きく取り上げられているが、この映画には学校生活がほとんど描かれてなく、子守りや掃除などの手伝いをしながら他人の家を転々する末子の姿が描かれている。

この映画は中小炭鉱を舞台としており、炭鉱と関係した女性の労働と暮らしを描いている。女性の主要登場人物は、末子と姉の良子、保健婦のかな子、坂田の婆である。か

な子と坂田の婆は原作にはなく映画化に当たって新しく作られた人物である。炭鉱労働と暮らしと言っても、坑内労働・選炭のようなものが登場するわけではない。炭鉱における朝鮮戦争後の困窮が背景としてあり、女性たちはその石炭産業が生み出した貧しい暮らしと離散、労働の形態・変化、恋愛[69]、生殖と労働(力)などを表現している。

良子についてみてみよう。末子の姉・良子は、原作の中では決して個性的な人物ではない。長兄は手紙、そして「まえがき」の書き手として、「にあんちゃん」こと高一も日記で登場し「高一の日記」を通して語っているが、良子は自分のことを語る場は与えられていない。映画においては、長女として兄妹を支えながらも父の亡くなった後には「口減らし」のため、働ける労働力として存在感を持つ。

17 作業所
炭車が着く。サオ取り一同バラバラと飛びおりて石炭を下の選炭場へ下す作業を始める。坂田の婆が帳面をさげてやって来る。
婆「喜一、よか話のあるばってん、乗らんか」
喜一「(肩で炭車を押しこみながら)どやんか話ね」
婆「良子ば奉公に出さんかい、口べらしに。長崎の料理屋でよか女子ば探しとるんじゃ」
喜一「料理屋？(石炭をザーッとあける)」
正午のサイレンが鳴って一同ザワザワと引揚げて行く。金山だけは残って二人の話を聞いている。
婆「良子ア働きもんじゃし、キリョウはええし、綺麗か着物きてとんとん働けば、たいした金もうけになるばい」
喜一「……良子ばそやん怪しかとこ、出せるち思うか、(婆をほうってさっさと引揚げかける)」
金山「怪しか、怪しか」
婆「怪しかとこてなんね！今はおまえ、警察もやかましかし、心配なんていらんと」
喜一「なんちゅうても断る！(どんどん帰って行く)」
金山「俺もことわる！」
婆「おまえになんのかかわりがあるとか。出しゃばるな」
金山「へへ」(池田・今村 1959、128 頁)

このシーンは、人身売買を斡旋しようとする坂田の婆と断る喜一のやりとりでもあるが、金山が良子に心を寄せていることも垣間見える。藤野も指摘している(藤野 2019、272 頁)ように、当時は炭鉱において人身売買が横行していた。戦後から続く不況経済と農村における貧困、石炭合理化など、女性は口減らしという名目の下、売られて行き、

[69] 性愛と恋愛の問題については、かな子が安本家の長兄・喜一に恋を抱き(映画では微かに)、金山が良子に好感を持つ(映画ではほとんど表現されず、シナリオでは目立つ)こと。

その行先は様々であった。原作においては子守りの奉公などの話は出るが良子にそのような話が持ち込まれることはない。しかし映画では、臨時雇いの長兄が首切りになるとっくに前から、良子は真っ先に人身売買の標的になるのである。長兄の断りとかな子の知恵により良子は危機を免れ、最終的には唐津にある肉屋の子守りに出る。これは四人兄妹の生計、特に良子に対して怪しい斡旋があることを心配していた金山の配慮であった。「おれたち朝鮮人」と言っているが、これは先行研究で指摘された民族のアイデンティティーの協調であるより、恋愛感情に近い。

原作においてはやさしいばかりの長兄は、映画においてはあまりの困窮に酒を飲んだり荒れるが、良子はそのようなことなく黙々と働きに出る。良子は朝鮮人であるということで坑内労働はおろか炭鉱町で仕事することができず、女性であるがゆえ人身売買にさらされることがわかる。同じように、安本家の隣の西脇は病人であるため奥さんのせいが家事と育児労働、稼ぎまで担っていたが、子供が病気になった時に奥さんがもう下関の新天地に出稼ぎに行っていることがわかる。「良か着物ば着て、お金うんと儲かるとこたい」という子供のことばからは分かることは、良子は斡旋から逃れたものの、炭鉱における労働の停止は女性の身体を媒介にする出稼ぎへとつながっているということである。女性の坑内労働が禁止されてから定着していく「坑内労働から坑外労働」という働き方の変化及び家族賃金という仕組みを、ここで見かけることはできない。

このように出稼ぎに出て移動を重ね続ける長兄の喜一と長女の良子の不在を補うのが辺見と金山、かな子という原作にはない人物たちである。原作においては炭鉱のことがあまり明確に書かれていないこと[70]に対し、1959 年公開の映画はおそらく閉山(1957 年)直後に作られたもので[71]、閉山がされることと閉山直前の坑内事故のため辺見は足に負傷をおい、希望退職する。金山も朝鮮人であり、鉄くず拾いと豚の内臓商売、高一・良子の仕事紹介などからわかるようにあちこちを流れて人と人をつなぐような役割をする。

次はかな子である。

この映画におけるかな子の登場を、1959 年 10 月 29 日の『読売新聞』は「映画のいま一つの長所は、中小炭鉱の経営困難という社会的背景を色濃く描き出していることで、そのため日記にはない保健婦を登場させてもいるが、こうした手法が、また一段と作品の質を高めている」と評価している。これは、中小炭鉱が抱え込む困難を明るみにするのがかな子だからである。衛生管理と産児制限という当時の保健婦の仕事が、労働環境

---

[70] 部分的には大鶴の閉山とそれについてのうわさがすでに街中に流されているということが書かれている。「〔昭和 29 年－引用者注〕六月二十一日　月曜日　晴　じつは、家がないかと、貸家がないかと、みつけにこられたのです。みつけたところで、大鶴(鉱業所)は一年もつづかないという人びとのうわさです。」(安本 a1958、193 頁)

[71] 映画のロケ地は長崎県北松浦郡福島町(現・松浦市)にあった「中興鉱業鯛之鼻鉱業所」である。映画では「鶴ノ鼻炭鉱」である。日活のホームページには、「鯛之鼻」が「鶴乃鼻」と記載されている。https://www.nikkatsu.com/movie/20390.html

と暮らしの面において都合がよくない中小炭鉱では理解されない。

かな子は伝染病の予防のため結核家族にレントゲン検診をすすめ、赤痢が発生する不衛生的な炭鉱住宅の水道環境を告発しようとし、近代的衛生観念をもった保健婦の知識を通じて鶴ノ鼻の生活を「改善」しようと頑張る。しかし鶴ノ鼻ではなく都会出身(博多)である上、鶴ノ鼻の人々を理解しようと試みるが、炭鉱村では悪戦苦闘を重ねる。家からせがまれている婚約者との結婚と保健婦としての使命の衝突は、かな子という人物が女性であるからこそ生じる。かな子の努力は実ることが無く、いつも村の住民たちはかな子の保健婦としての助言と実践に理解を示すことがない。戦後の優生学的な枠組みのなかで、大企業の炭鉱では、「産児制限運動」が実験的に行われていた。かな子が産児制限の講習会を開催するも、炭鉱村の人々は給料遅配に怒っているので来る人が一人もいない。

53文化会館の表
かな子が乱暴にテーブルを部屋の隅に積上げている。土間へ下りて、表に貼ってある「計画出産講習会会場」などの紙片をひっぺがす。
桐野が自転車で来て気付き止る。
かな子、手を何かにひっかかる。
かな子「あ、痛っ！」
桐野「(ニヤニヤして)何ばまた怒っとるとですか」
かな子「(腹立たして)意識の低かとですと、意識の」
桐野「意識？」
かな子「自覚の無さすぎるちゅうこと、一人も集まりゃせんが、ここの主婦達にゃ一番切実な問題のはずですばい」
桐野「ばってん給料遅配の方がもっと切実な問題でっしょうが」（池田・今村1959、134頁）

97 文化会館の表
人々、会館の前を走って行く。「計画出産講習会」の貼り紙や会場準備をしていたかな子と手伝いの坂田の婆もとび出していく。
婆「事故じゃ、事故じゃ」（池田・今村 1959、139 頁）

二つ目の引用に当たる映画のシーンでは、サイレンが大きく鳴り炭鉱長屋から人々が出て炭鉱に向かって走って行くのをカメラは上から撮っている。またも講習会の準備をするかな子であるが、やはり優先されるのは死ぬか生きるかという、暮らしに直接かかわる炭鉱労働である。計画的な出産は中小炭鉱においては肝心の問題として認識されていなかったことが、かな子を通じて分かる。さらにかな子の不衛生な環境の改良という

善意とともに描かれる産児制限(「計画出産」)の試みは、後述するように坂田の婆によって逆に利用される描写となっている。

意欲溢れるかな子の保健婦としての判断は、その判断が正しい衛生・医学的知識に根拠しているかどうかより、村の慣習的な部分への不理解によって挫折してしまう。かな子は西脇家の子どものひどい下痢を「赤痢」だと判断し、西脇家には消毒や村の水道使用禁止などが行われるが、西脇家が疫病の発生地であるという村人の認識・うわさに激しい恥辱を覚えた西脇は首をつってしまう。このことと産児制限講習会失敗の繰り返し、坂田の婆の下心によってかな子は逃げるように結婚を選択し、鶴ノ鼻を離れる。かな子と長兄はお互い密かに心を寄せていることが、いくつかのシーンで分かるが、二人の恋愛は長兄の労働の停止と移動、そしてかな子の保健婦としての仕事が失敗したことにより、成立しない。

坂田の婆は映画の冒頭で四人兄妹の父の葬式シーンからチマチョゴリを着て登場し、物欲と図々しさが目立つ人物である。

赤ん坊を背負った坂田の婆が金山に屑金を売っている。
婆「これでなんぼになるか？」
金山「現金なら五十円、金券で百円(と財布をとり出す)」
婆「(意外)全部でか？」
金山「全部入れて現金五十円」
婆「百円にならん？」
金山「タメタメ」
婆「(さっさと屑金をしまいこんで)止めた。今度戦争あるまで、しまっとくわい。(焚の方へ)五郎、五郎」
さっさと去る。（池田・今村1959、144頁）

坂田の婆はチマチョゴリを着て時々片言の朝鮮語を混ぜながらも、例えば金山と金目のものの売値を交渉するシーンでは、交渉がうまくいかないあげくに何気なく「また戦争になるまでしまっとくよ」と、朝鮮人でありながら朝鮮戦争にかかわる非常にきわどい言葉でしたたかさを表現している。坂田の婆の側面がもう一度目立つところは、炭鉱の労働力と優生学的な考え方に関する部分である。坂田家は大家族であるが、夫の坂田と娘の花子・菊枝と夫たち、その子供たちが7人に花子のお腹にもう一人、坂田夫婦の末っ子であり知的障害を持つ息子・正兎がいる。かな子から子だくさんによる不衛生的環境を指摘された坂田の婆は「多すぎることなか。たくさん産んどけば、ひとりくらいは当るけん」と反発する。坂田の婆も父の異なる子供たちを抱えていて、家族計画を立てたり産児を制限することなどとは無関係に思われる。夫の坂田は四人兄妹のことを気の毒に思い米を貸してくれるが、文脈からいえば坂田家の生計の中心は坂田の婆とみる

ことができる。坂田の婆の村人に対する高利貸し、いわば「非合法的」な金券売買、怪しい労働の斡旋などの方が一家の経済には大きいものであると推測できる。

子どもをたくさん抱える貧困世帯の経済的負担を減らすために行う産児制限には、優良な労働力を阻害する遺伝的要因を持つ男女に産む・生きる権利を停止（不妊手術）するという「優生思想」がはりついている。地方における推進主体である保健婦に、優生学的な「排除」の対象を結婚させようとする坂田の婆の画策は、中小炭鉱においては産児制限など優生学的試みが理解もされず行われずという現実、また中小炭鉱におけるかな子の努力と失敗は、優生思想と地続きの産児制限に対する、今村昌平の独自的表現である。

134 文化会館・会場(夜)
一五，六人のおかみさん連が集っている。
かな子「来週またやることにして、今日はこれで終わります」
立ってあくびする人、居眠りを起こされる人、縫い物を買物籠にしまう人など、それぞれやれやれという感じで出て行く。
黒板を拭いているかな子に、入口近くにいた坂田の婆が近づく。
かな子「おかげで沢山集ってくれて……」
婆「あんた、人気あるけん」
かな子「そげんことなか……(マンザラでもない)」
と出て行く。婆、追いかけて、
婆「あんた、保育園に一人で暮らして、大変たろ、何ならうちへ来てもよか」
かな子「……？」
……(中略)
かな子「ええ(誇る)まア、盛会だったです。やっぱり生活に直接ひびくことじゃけん」
桐野「(笑って)今夜来た連中、みんなあの婆に借金しとる連中ですたい」
かな子「え？」
桐野「借金の義理で、ききに来ちょったとです」
かな子「そんなバカなこつ。あの婆さんタダでそげなことばしてくれるような人じゃなかとですよ」
桐野「タダじゃなかとです。あんたの歓心ばこうて、嫁にしょうちゅうコンタンですたい」
かな子「(驚いて)嫁って……誰の？」
桐野「婆さんの息子で、正禹ちゅうデッカイ息子が居るでっしょう。図体はデカかばってん、少しここの足らん……」（池田・今村 1959、143 頁）

これは、「優生思想」の問題に朝鮮人という民族問題を絡めようとする演出となって

おり、坂田の婆という朝鮮人の女性にその役割が果たされているということである。「炭鉱の町の朝鮮人を撮る」という監督の考えが反映された結果であるともいえる。坂田の婆役を演じた北林谷栄は、その後この映画撮影の際に困っていたエピソードを書いているが、その中には「今村さんは以前、朝鮮のおばさんがそうして臓物を買うのを目撃したということで」「新鮮さをためす仕ぐさをしてくれ」（北林谷栄〔1963〕2004、71頁）と、豚の臓物を噛むように要請されたという。これは北林谷栄自身の朝鮮人への思い・持論もあり反対したが、臓物が腐っていくなどその場の状況により撮影したという。このように『にあんちゃん』の演出は坂田の婆を通して「朝鮮人」を描こうとし、それは後からつけられた在日朝鮮人の表象・アイデンティティーではなく、中小炭鉱における朝鮮人たちの様々な経験である。

（ロ）『にあんちゃん』と朝鮮人労働の実態

1950 年代は終戦直後に各部門において雨後の筍のようにできた労働組合が本格的に労働運動を展開し始めた時期であり、特に『にあんちゃん』の実際の舞台でもある佐賀県唐津市肥前町に存在した大鶴鉱業所は、1957 年に 96 日間に渡って行われた労働争議の中心にあった杵島炭鉱傘下である。杵島炭鉱が経営していた三つの炭鉱（杵島、大鶴、北方）の中北方と大鶴鉱業所は「炭質が悪く朝鮮動乱による好況時でさえ収支がつぐなわず、その上昭和二八年下期から朝鮮動乱の反動による不景気も加わつて全山を通じて赤字となり、更に標準作業量の引下げ等により他社に比し高賃金を支給していた事情も加わり、神武景気といわれ他社が黒字経営をしていた昭和三一年でさえ赤字を計上していた」[72]事情がある。

このような労働争議の事実と、1958 年の原作におけるストライキの記述、このヤマにおける朝鮮人労働の実態[73]と合わせて考えることは、映画『にあんちゃん』における四人兄妹の離散と苦労、朝鮮人に関わる表現を理解するため必要である。

大鶴炭鉱は佐賀県唐津市肥前町にあった。一九三六年に杵島炭鉱の傘下となり、一九五七年まで採掘がおこなわれた。肥前町の大鶴は仮屋湾に面し、対岸は玄海町方面であり。

---

[72] 東京地判による昭和 50 年 10 月 21 日の労働判例「炭労杵島炭砿争議同情スト」東京地方裁判所、事件番号：昭和 32（ワ）10282 の「杵島争議の経緯」項目を参考。

[73] 厚生省勤労局調査名簿の佐賀県分の中と石炭統制会の資料を合わせてみると、佐賀県に連行された朝鮮人の名簿・数値が分かる。統計によると 1942 年から杵島炭鉱への連行数は 3831 名、杵島北方へ 1490 名、大鶴へ 2000 名とされている。また、大鶴における朝鮮人数は、1944 年 12 月時点では既住朝鮮人 105 名に移入朝鮮人 1158 名、合計 1263 名であった。しかし厚生省の資料には大鶴に連行された朝鮮人の名簿が残っておらず、遺骨の連絡先などを特定・分析することは現在は難しいという。（竹内康人 2013、347～351 頁）；
「＜戦後 75 年さが 残したい戦争記憶遺産＞光明寺の朝鮮人労働者慰霊碑（唐津市肥前町）－旧大鶴炭鉱 51 人の無縁仏」『佐賀新聞』2020 年 8 月 6 日日付
https://www.saga-s.co.jp/articles/-/557842

現地には第二坑口が残っている。この第二坑が開かれたのは戦後のことである。また、二〇〇一年に建てられた「にあんちゃんの里」の碑がある。碑の裏面には、「大東亜戦争中、国策により朝鮮の人たちを大勢移動せしめ石炭増産に取り組む」とある。この「大勢移動せしめ」という表現は強制連行・強制労働の実態を示しえるものではない。
大鶴炭鉱の特徴は労働者の多くが朝鮮人であったことである。大鶴炭鉱への最初の連行は、一九三九年十二月の九七人であり、一九四〇年二月には更に一〇〇人が連行された。かれらは慶南の昌原、陜川から集団的に連行された。……
一九四四年一〇月の労働者数をみると、大鶴炭鉱の日本人数は五六〇人、既住朝鮮人数は一〇五人、移入朝鮮人数は一一三七人である。三人に二人は朝鮮人だった。このころ佐賀県で最も多くの移入朝鮮人を使用していたのは杵島炭鉱であり、一七五七人を使っていたが、大鶴の数はそれに次ぐものであった。……
一九五七年建てられた「大鶴礦業所殉職者之碑」がある。この碑の横には一九九〇年建てられた朝鮮人死亡者を追悼する「韓国人傷病者之霊位」という碑があり、……（竹内2013、349～350 頁）

引用からは、佐賀県大鶴鉱業所における朝鮮人労働者の数と労働者の出身地を含めて日本人労働者との比較などが示されており、戦前大鶴鉱業所で働いていた朝鮮人労働者の実態が一目で分かる。これで実際四人兄妹の両親（昭和 2 年に全羅南道宝城郡から北九州に渡ってきたという）と長兄の労働実態を照らし合わせて把握するのは困難であるが、大鶴鉱業所には朝鮮人労働者が多かったという事実と、なぜ映画でも隣人に朝鮮人を登場させたかが推測できるのである。

＜七月二十五日　土曜日　晴＞[74]
きょうのストは、ちんぎんがあがるのではなく、ボーナスがあがるストだったので、私の家には、なんのききめもありません。ただストがあったら、こまるだけです。
私は、いつも、ストがないようにと、心の中で、おがみます。〔安本末子 a1958、85 頁〕
＜八月二十九日　土曜日　晴＞
手に手にちょうちんを持って、二区の方へむかいました。子どもが、はんぶんぐらいです。みんな大きな声で「ろうどうしゃの歌」をうたっていました。……
三百七十五名。兄さんが、切られはしないかと、おちおちしていられません。（安本 a1958、95 頁）

このようなことは日本側の映画の中では、体調を崩した末子が町の診療所で診察を受けるシーンにおいて表現されている。赤い旗を持ち労働歌（「赤旗の歌」）を歌いながら

[74] この引用の日記はいずれとも昭和 28 年（1953 年）のものである。

行進するデモ隊が診療所の外を歩いていき[75]、診療所の医師などが窓からのぞいてみる。しかしこのような労働と暮らしを守るというスローガンも、特別臨時雇いも首になった長兄をはじめ末子たちにとっては関係がない。炭鉱労働者には会社に雇われる「坑夫」と下請け労働者の「組夫」などが存在し、労働運動においても分断が存在した。末子の長兄は「坑夫」として労働組合にも入れてもらえず、臨時雇いの長兄に労働者たちの労働運動は縁遠いものである。原作もこの映画も、長兄の炭鉱労働が本格的に描かれているわけではない。労働に関して言えば朝鮮人であるが故の「労働の停止」が、家族の離散の物語として登場しているのである。映画においては、「炭鉱労働そのものではなく石炭産業合理化の先行形態として朝鮮人炭鉱夫の解雇と流民化が描かれて」おり「原作においては安本末子個人の視点で書かれた生活記録という側面が強いが、日活版映画においては離散する兄妹の視点から流民化とそれぞれの労働現場の状況が立体的に描かれている」（姜文姫 2018、88 頁）。

『にあんちゃん』における炭鉱労働と暮らしを朝鮮人の視点から考えることは、この作品が出版された翌年の 1959 年に韓国でも 2 種類の韓国語版が翻訳出版されたこと、そして同年の映画化とも複雑に絡み合っている。

（ハ）『雲は流れても』（구름은 흘러도）兪賢穆監督、柳韓映画社、1959 年

上述のように日本側の映画は炭鉱村の実態、炭鉱の労働における民族差別とそれによる離散、女性労働の変化などが読み取れる。これに対して韓国側の映画は、同じ時期に制作された映画であるにも関わらず、印象的にはどうしても「感傷的」という印象がしてしまう。そして炭鉱村の描写も美しい自然に溶けてきれいに映っている。このような差の原因として、とりわけ石炭産業の状況に関する日韓の違いがあげられる。映画『雲は流れても』は朝鮮戦争後の石炭産業の状況（後述する）を背景にした時代を象徴的に表現している。ロケ地の磨磋里鉱業所は 1956 年に石炭生産 20 万トン、1964 年には 30 万トンを達成（寧越郡庁 2020）した。1972 年閉山・1990 年売却されるまでに合計 828 万トンを生産した[76]という。このような状況は、映画における恋愛、貧困、朝鮮人という文脈に代わって設定された「不健康な身体」を持つ労働者が生産力主義へ向かっていくように働く。

そして当時（1950 年代末）在日朝鮮人を描くための環境・条件が異なったという事情があると考える。この環境・条件には、在日朝鮮人に対する社会的まなざしと認識も含まれている。それが分かるのが、上述のように韓国側映画の制作には当時韓国・文教部の意見が圧倒的に影響したということである。韓国での映画化が話題となった頃、この

[75] 朝鮮戦争時には特需景気に沸いた日本の石炭産業はその後どん底に落ちた。この映画の舞台である「鶴ノ鼻炭鉱」（実際は「大鶴炭鉱」あるいは「大鶴鉱業所」）も、赤字になり労働者たちは会社との団交を続けていたが、受銭日、給料の遅配と金券の 7 割支給の決定に怒った労働者と家族たちは抗議のデモを始める。

[76] 江原道炭鉱文化村の展示パネル。

問題をめぐって文教部・法務部などの関係者が協議した結果、「国内では制作が不可能である」（「韓国少女の手記、映画制作不可能」、『京郷新聞』1959 年 3 月 19 日）と結論がだされた。その理由として挙げられたのが、韓国の『京郷新聞』（1959 年 1 月 19 日）によると、「作品の背景は日本にならざるをえないこと」、「我が言葉で制作してしまえば実感がないこと」であると報じている。対して日本の『読売新聞』では「「舞台が日本だから映画化するのは技術的に困難」というのがその理由だが、映画化できるかどうかという技術的な問題に政府がタッチするのはおかしな話で、日本人のよい面がかなり書かれているからだというのが消息通の一致した見解だった」。『東亜日報』1959 年 1 月 26 日の記事の中には、文教部が「安本末子の身分〔原文では「成分」: 引用者注〕が朝聯系ではないかということを検討するため、内務部に安本末子の身元を照会している」とも書いてある。この時期には「日常生活に残る植民地支配の影響を指して「倭色（ウェセク）」という用語が使われ、「倭色文化」や「倭色用語」の排除が社会的な議論となった」（李鐘元・木宮正史・磯崎典世・浅羽祐樹 2017、36 頁）ことが響いている。

関連してさらに指摘しておきたいところが、この映画におけるもう一つ特徴はマルスギ（「末淑」であり、末子のこと）の存在感である。日本側の映画の末子が口少でありマルスギより年齢が低く見える子供であることに対し、舞台の江原道の綺麗な自然を背景に遊ぶマルスギは感性の豊かな少女に近いキャラクターである。日本側の映画に比べて、10 歳の少女マルスギという個人に四人兄妹の貧困と苦難を象徴させているような演出である。日本の原作と映画において次男・高一の存在感が大きいことに対し、『雲は流れても』はマルスギがあくまでも主人公である。この点については、書き手の少女末子が自分を中心として周りのことを書いていくという原作に充実だといえる。もともと日本に在住する在日朝鮮人の少女が書いたものであることから来る、複雑な文脈―例えば高一の日記において書かれ、のち削除される部分には美談としての『にあんちゃん』の意味を損ねる可能性が高い―は韓国の映画においては反映することが不可能であり、そのような文脈を無理に削除したことによって、もっぱら原作者の末子＝マルスギの純粋さにフォーカスを当てることになった。

兪賢穆監督によるこの映画は、同一の原作に基づいており炭鉱村を舞台にしたという点において日本側の映画と共通している。しかし日韓の映画はそれぞれ日韓の異なる事情と制作環境により、登場人物の表現、炭鉱の描き方などに大きい差がある。

原作とも異なる部分が多いのであらすじを簡単に紹介する。炭鉱村に暮らす四人兄妹は父の死によって、貧しい生活を余儀なくされる。口減らしのため離ればなれにならざるを得なくなった四人兄妹であり、語り手である末っ子のマルスギは心を込めて日記をつける。マルスギの友達チヒを通じてその日記を読んだ鉱業所経営者一家は感銘を受け、長兄のドンソギ（東石のこと）に密かに心を寄せていたチヒの姉ソニによって本として出版される。日記はすぐ話題になり広く読まれ、読者たちからの暖かい手紙が届けられる。原稿料が入り、四人兄妹は村人たちに歓迎されるなか、失業していたドンソギは鉱

業所長の厚意によって石炭課で働くことになる。

とりわけ、炭鉱における生産力＝増産への期待が表れる部分を検討してみる。

映画は炭鉱村を背景とし、炭鉱で働く長兄ドンソギが労働者仲間から「ストライキ」への参加を無理やり強いられ、労働者たちは制裁を加える暴力的存在として描かれる。ストライキを行っても働けないし結局給料がもらえないからドンソギは拒否する。彼はストライキ参加への提案は「贅沢な取引」であるという。長兄の臨時雇いという立場は日本側の映画と共通しているが、原作と日本側の映画で際立つ「朝鮮人」であるゆえに臨時雇いである設定は、韓国の映画ではドンソギが「身体が弱い」という設定となっている。原作と日本側の映画における、朝鮮人日雇い労働者であるがゆえにストライキによって利益を得ることがないという労働組合の身分差別にかかわる表現が、ここでは正常な炭鉱経営を阻害する労働組合は暴力的な存在だという表現に書き換えられている。日本側の映画が閉山直前の風景を描いていることに対し、この映画において閉山はない。石炭開発臨時措置法は 1961 年、鉱業開発助成法が 1962 年であった。1960 年代半ばまで増産計画が着実に実現され、1966 年には供給より需要が上回る危機が訪れるが克服し、1970 年代の 2 回にわたる国内石油危機の際にも石炭産業が大きい役割を果たし、韓国の経済開発の原動力となった（舎北青年会議所 2001、25～26 頁）。韓国で石炭合理化政策は 1989 年から実施された。このような石炭産業の盛り上がりが表現されているシーンをみてみよう。

チヒ「あの、これかわいい？(マルスギの様子がおかしいのをみて)どうした？」
マルスギ、草むらから体を起こして、遠くを見つめる。ハッと、
マルスギ「あれ、止まってる！」
ロープウェイが見える。ロープウェイにかかった「バケツ」が二つ止まっている状態。
マルスギ「(起き上がって)なにかあるみたい」
チヒ「(マルスギに近寄って)マルスギは臆病だね」
マルスギ「(横に置いていたカバンをとりながら歩きだす)違う、それが止まったらわが村はみんな飢え死になるんだと」
チヒ「(興味なさそうに花束を作りながら)誰が？」
マルスギ「お兄さんが言ってたのよ」〔00：04：19～00：04：42〕[77]

鉱業所長「(頭を横に振りながら)しかしあんたの兄ちゃんは体が弱いんだ。健康な人たちに賞与金を支給して働かせたら、より多くの炭(石炭)が採掘できるのでは？悪いが、たくさん採炭すればこの村も豊かな暮らしができるのだよ。」
マルスギ「おじさん、お兄さんが可哀想です。(鉱業所長の横にかがむ)私達は親戚もい

[77] 映画『雲は流れても』からの引用はフィルムにおける時間を〔〕に囲み、全部筆者による書き起こし・翻訳である。

ないです。お兄さんが働いていなければ、お金を借りることもできません。おじさん、私は学校にも通えません。（泣く）」〔00：18：41〜00：19：23〕

マルスギ「（ドンソギと仲良く肩を並べて歩きながら）あたし、大きくなったら、お兄さんには働かせないわ。」
体の弱いドンソギが働くことへの心配で引き止めるマルスギ。
ドンソギ「マルスギ、たくさんの苦労に耐えて採炭して、我が国は豊かになるんだ。」と言い返す。〔00：24：00〜00：24：11〕

マルスギとチヒの会話からは、炭鉱が村における経済の中心であること、そして長兄の労働が可能か、不可能かという問題はマルスギには重要であり、その労働、石炭生産の象徴でもあるロープウェイが止まることに恐怖を覚えるのである。対して、鉱業所長の娘であるチヒにそのようなことは、命にかかわるような体感がない。ロープウェイが止まったとしても「すぐに」労働の停止で家計が難しくなるようなことはないからである。「マルスギは臆病だね」というセリフは、そのような敏感さの欠如を意味する。

マルスギが鉱業所長に訴えるシーンでは、原作と日本側の映画で中心となった「朝鮮人である」文脈はなく、「体が弱い」ことが労働を通した健康な国家と町づくりに適していないことがわかる。問題は、体が弱い長兄自身も、それを認知しているというところである。長兄とマルスギの会話に見れるように、健康な国家と町は石炭増産によって可能であるという信頼感が、鉱業所長のみならず長兄にもある。このような姿勢により安本一家は村の一員として国家に編入されていく。この映画における炭鉱労働はすでに個人的なものではなく、試練と屈辱に耐えながらも豊かな町と国の暮らしに貢献する行為である。

次はこの映画が美談として家族主義へと強力につながること、またそれが家族単位で増産を目指すことを論じる。

この映画でマルスギ（末子）とヤンスギ（「良淑」であり、良子のこと）の位置は、親友チヒの父である鉱業所長への訴えと神様へのお祈りと、心身ともに弱っている長兄への精神的な支えである。姉のヤンスギはほとんど家に留まり、食事の支度と洗濯など家事を担当している。マルスギに「私が、どこかに行くとしてもマルスギはちゃんと勉強できるね？」と聞き、出稼ぎに出ることになる。家を空けないといけないのでドンソギとヤンスギはバスに乗って出稼ぎに出て、ドンイル（「東一」であり、高一のこと）とマルスギは村の油屋に預けられる。

日本側の映画と同じように炭鉱労働の停止が移動と女性の出稼ぎ労働を生じさせるという点は共通しているといえるが、正確には長兄ドンソギは他の炭鉱に就職しているが怪我をし、長女ヤンスギもお手伝いさんとして出稼ぎしていたソウルから追い出されて村に帰ってくる。離ればなれになった四人兄妹が集まるきっかけは、マルスギの日記

がソニによって出版社に持ち込まれ、反響を呼んだこと、次男ドンイルの帰りである。

映画の最後は、安本末子本人の「この映画に悪人はいないでほしい」(『東亜日報』1959年8月26日）といった希望通りに、「悪人はいない」締め括りとなっている。日本側の映画にもそうであるが韓国の映画は特に、四人兄妹が大きい危機に落ちることはなく、平坦な描写になっている。鉱業所長は資本家ではあるが、日記を読んで心が動くような感性の持ち主であり、最後には炭鉱会社内に長兄の仕事を与える。増産という共同の目標の下、労使間の協力関係が読み取れる。

また、原作においてはまだ四人が一緒に暮らしているわけではないのに「きっと私たち兄妹四人の上にも、明るいともしびが、いつかひかると信じています」(安本 a1958、243頁）と書いているが、この映画ではそれを実現するように家族が苦難を乗り越えて一つになったという表現になっている。両親はいないが、まるで長兄が大黒柱のように労働を通じて賃金をもらい、ヤンスギは家事と兄妹の世話をするような形が、映画の中でずっと暗示されるのである。

日本側の映画と比べた時、女性の労働があまり描かれていないことが指摘できるが、恋愛の問題は少し異なる形で描かれている。この映画では長兄とソニが幼年時代からの友達であるが、ソニはマルスギの日記を読んで同情したことに加えて長兄に対して抱いている感情もあり、自分が働いていたソウルの出版社に日記の話を持ち込むのであった。日記を持って上京する汽車の中で書く手紙には「ドンソギさんは立派な妹さんがいて、幸せ者です。いえ、マルスギの日記でドンソギさんの高い人間性を感じることができました。……私は、その日のドンソギさんを忘れることができません。恵まれていない自身に向かって黙々と抗拒する健康な反抗の意志が読み取れたからです。やはりドンソギさんは、幼年時代と変わらぬ、立派な方です。お互い力になるようにと、祈っております。」〔01：12：06〕とある。ドンソギは新たな仕事場の炭鉱での休憩時間にこの手紙を読む。手紙を読み終わったところで、サイレンが鳴り、ドンソギは他の労働者と列をなして坑道の中へ歩いていく。このシーンは坑夫たちが坑内に向かって歩いていく様子を時間をかけて丁寧に撮影している。坑夫一人一人が段々と加わり、荘厳にすら見えるシーンである。

ドンソギとソニの関係は直接結ばれることはないが、マルスギの日記を出版社に紹介するなど、四人兄妹のたくましい生き様を世に知らせることが、ソニにとっての愛情である。すなわち、貧しいではあるがその貧困が明るく克服されるように助力するのである。そしてドンソギは体が病弱ではあるが、労働を辞めることなく続けることによってその愛情への返答となる。すなわち、二人の恋愛は貧しさにも負けずに生きて行くこと、労働を続けることに変わられるのである。

小括

以上は『にあんちゃん』の原作テキストと映画のそれぞれを検討し、『にあんちゃん』

が日韓において持つ独自的な意味と、その比較を通して明らかになる女性の性と労働について述べた。日本側の映画には女性の人身売買と生殖と恋愛が労働の停止と出稼ぎ労働、朝鮮人問題、移動を生じさせる表現として登場していることが分かった。対して韓国側の映画においては朝鮮人という文脈の削除とともに労働を通じた生産主義的な表現があり、恋愛もそのようなナラティブに収斂していく。

終章

本論文は炭鉱において「女である」ことから考える女性の性、労働、生命の再生産とその緊密性を、戦後思想と文学作品、労働運動生活綴方、映像を通じて検討した。とりわけ第 1 章では、森崎和江の思想と活動を通して、朝鮮生まれ育ちという森崎の出自・朝鮮経験に基づいた「女である」認識が、戦後日本において性と労働を軸とする炭鉱での思想、聞き書きへと繋がっていくことを明らかにした。ここで得られた論点は、戦後日本において女性が直面し抱え込む問題が性、労働、生命再生産であり、それは特に戦後の炭鉱における石炭合理化政策を背景にしながら様々な形態として現れるという点である。第 2 章では、戦後日本の炭鉱を背景にして書かれた文学作品を取り上げて近代産業機構としての炭鉱を再考察した。上野英信と帚木蓬生の作品を通して戦後の炭鉱における朝鮮人労働者・朝鮮人部落の「アリラン部落」を検討し、労働と労働力による生産中心の場所として捉えられてきた炭鉱を、生産中心主義のもと民族の違いからくる対立を越えていく可能性をはらんだ場所として位置付けた。畑中康雄の作品は坑内労働者ではないが炭鉱を支える労働者たちを描き、炭鉱が如何なる労働力で成り立っているかを問うている。また、井上光晴の作品に関しては、井上作品のテーマである朝鮮人、原爆、天皇制、被差別部落、党の問題が絡まっている小説『虚構のクレーン』『地の群れ』を取り上げ、前者においては男性中心社会である炭鉱への批判と恋愛関係による確実性への揺らぎを明らかにし、作品における「戦後」の意味を「クレーン」のように留保する存在の迷いとして分析した。後者に関しては多数の人間の「死」を背景とし原爆と朝鮮人問題を登場させながら女性の身体における暴力が露わになること、その暴力とは性と生殖に関わる暴力であることを分析した。医師として炭鉱病院勤務の経験を持つ作家渡辺淳一は中絶手術を数回繰り返す女性の話を書いたが、妊娠中断の方法としての中絶が戦後日本において持つ意味―1948 年の優生保護法の成立と中絶の推進―を合わせて考察することで、生殖に関与する医学的行為が女性の身体に及ぼす影響を明らかにし、炭鉱における家族形態の変化を考えられる糸口を作った。作家高橋揆一郎の作品は自らの出自が北海道の炭鉱であることから炭鉱を背景にした作品を書いている。女性を物語の中心に置く設定は、男性労働者の坑内労働とは異なる土俗的な世界と人間関係作り、生産主義の炭鉱社会に対する問いかけとなっている。このように炭鉱を背景とした文学作品の分析を通して、生産主義により支えられてきた場所である近代日本の炭鉱を、女性の性、恋愛と労働というテーマで論じるべき場所、歴史的にジェンダー規範が争点となっていた場所であると位置付ける。

第 3 章では炭鉱において「主婦」を名乗る女性たちの労働運動・「母」としての母親運動を取り上げ、「集団」としての主婦たちが「物よこせ運動」を通して暮らしと家族を守る独自的運動を展開したと分析した。母親運動への参加もこのような暮らしと家族を守る運動と分離せず、母どうしの話し合いと共有の場が政治的領域を含む場でもあったことを述べた。第 4 章では太平洋炭鉱主婦会文化部が 1955 年から発行した『母のう

ぶごえ』の生活綴方欄を分析の対象とした。『母のうぶごえ』に対する実証的研究とともに、第 3 章との関わりを念頭に置きながら主婦たちの生活綴方が身の回り話に留まらない、運動として持つ意味を分析した。

第 5 章・第 6 章では映像における炭鉱と女性表象として映画『女ひとり大地を行く』と『にあんちゃん』を分析した。前者の場合は第 3、4 章でも取り上げた太平洋炭鉱主婦会の撮影協力という面において文化運動としての関連がある。映画が作られた背景の分析とともに 1950 年代北海道の炭鉱の事情、登場人物の関係性を分析の軸にして女性の性、恋愛と労働という論点を映像の中から分析した。後者は、佐賀県の中小炭鉱に暮らす在日朝鮮人少女が書いた日記が 1958 年出版されそれを原作にして日韓で同時に制作された映画である。原作は日韓で同時に出版・翻訳出版された。しかしこの制作物たちには硬直した日韓関係、異なる石炭産業の事情などが反映されており、そのダイナミズムを念頭に置きながらそれぞれの映画における女性人物に注目した。日韓映画における女性人物たちが恋愛と性の面で異なる姿を持ち、それには日韓関係と異なる石炭産業が背景となっていると明らかにした。

本論文では、炭鉱における文化と文学表現、映像、サークル運動とジェンダー研究を総合的に行った。以上のような検討を通して近代日本の炭鉱が持つ場所としての意味を再考察した。女性と児童の坑内労働禁止が制定され進む 1930 年代から 1950 年代までにおいて定着する性別役割分業から分かるように、炭鉱はジェンダー規範が再編成しつつある場所であるにも関わらず、そのジェンダー化に対する考察が不十分であった。そこで本論文は、森崎和江の「女である」視点を取り入れ、女性であるがゆえに抱える労働と性、恋愛と生殖、生命再生産の問題を文学と映像表現から分析し、サークル運動と労働運動を検討した。ジェンダー史研究と文学研究の方法によって生活綴方と小説から日常生活と労働の関係性が明らかになり、近年の炭鉱の石炭産業遺産化傾向と生産力主義、家族主義を批判的に捉えた。

本論文は主に戦後と日本という時空間を設定し、その時空間にける炭鉱を研究の対象にした。しかし戦後日本という時空間はアジア・太平洋戦争が終了する 1945 年 9 月 7 日に終わったわけではない。炭鉱においては労働力の変動が激しくまた朝鮮戦争における好況景気によって増産が進められた。戦時中の強制連行・労働による朝鮮人・中国人・その他の捕虜は戦争が終わっても残る問題であった。炭鉱はこのような問題が戦後にも引き続きあらわになる場所であった。今後の研究として、韓国と中国の炭鉱に注目し旧日本帝国が経営に関わった炭鉱を中心にしてフィールドワークと資料調査を行い、日本の炭鉱との関連性を労働力、人の移動、女性の労働において調べる。それぞれの炭鉱に接点を作り、炭鉱における女性の労働と移動の問題を多角化することが今後の課題である。

【参考文献】

＜序章＞

飯田祐子 2019「リブと依存の思想――中絶・子殺し・育てること」『ジェンダーと性政治』（坪井秀人編）臨川書店

荻野美穂 2008『「家族計画」への道―近代日本の生殖をめぐる政治』岩波書店

聞き手・上野千鶴子、ゲスト・森崎和江 1991「見果てぬ夢―対幻想をめぐって―」（1990）『性愛論』河出書房新社

「女・エロス」編集委員会 1973「宣言」『女・エロス』第一号

佐藤泉 2019「記録・フィクション・文学性―「聞き書き」の言葉について―」『思想』1147、岩波書店

田間泰子 2006『「近代家族」とボディ・ポリティクス』世界思想社

豊田雅人 2019「1970 年代の投稿誌『わいふ』と『女・エロス』両者を比較して見えてくる「雑誌が死ぬとき」について」日本出版学会・春季研究発表会

永井亨 1953「開会の挨拶」『創立２０周年記念公開講演會　講演集』財団法人人口問題研究會

野依智子 2010『近代筑豊炭坑における女性労働と家族：「家族賃金」観念と「家族イデオロギー」の形成過程』明石書店

古村えり子 2005「「闘う主婦」の誕生～日本炭鉱主婦協議会の活動から～」『北海道教育大学紀要（教育科学編）』第 55 巻第 2 号

古村えり子 2005「「戦う主婦」が地域福祉をつくった」『北海道教育大学紀要（教育科学編）』第 56 巻第 1 号

森崎和江 1998 年『いのち、響きあう』藤原書店

＜第 1 章＞

〔日本語文献〕

稲葉継雄 2007「大邱中学校について「在朝鮮「内地人」学校の事例研究」，『九州大学大学院教育学研究紀要』第 10 号

聞き手・上野千鶴子、ゲスト森崎和江 1991「見果てぬ夢―対幻想をめぐって」（上野千鶴子著『性愛論』河出書房新社）

上野千鶴子、聞き手・伊藤比呂美・水無田気流・榎本櫻湖・文月悠光 2018「特集　森崎和江の詩と思想　上野千鶴子インタビュー　祖母から母、娘の世代へ、経験を言語化する」『現代詩手帖』61（9）

大畑凜 2018「流民のアジア体験と「ふるさと」という幻想：森崎和江『からゆきさん』からみえるもの」『女性学研究』25

大畑凜 2020「人質の思想―森崎和江における筑豊時代と「自由」をめぐって」『社会思想史研究』No.44、藤原書店

加納美紀代 2003「交錯する性・階級・民族―森崎和江の＜私＞さがし」『リブという＜革命＞――近代の闇をひらく』インパクト出版会

佐藤泉 2015「からゆきさんと安重根たち―森崎和江のアジア主義」『越境広場』創刊 0 号

反町真寿美 2020『森崎和江の詩研究』高麗大学大学院修士論文

茶園梨加 2018「特集　森崎和江の詩と思想　「産」の思想を考える」『現代詩手帖』61（9）

朝鮮総督府学務局 1939『朝鮮諸学校一覧　昭和 13 年』1
大邱府編 1932『昭和 7 年 11 月末現在 大邱府全図』(縮尺 1:10000)
大邱府『大邱府史』1943
冨山一郎 2019「それは誰の記憶なのか」シンポジウム『記憶の存在論と歴史の地平』2019 年 11 月 2 日広島市立大学
原佑介 2019『禁じられた郷愁―小林勝の戦後文学と朝鮮』新幹社
太田修 2012「戦時期大邱の朝鮮人女子学生の学校生活」韓哲昊・原田敬一・金信在・太田修『植民地朝鮮の日常を問う　第 2 回佛教大学・東國大学校共同研究』思文閣出版
広瀬玲子 2019『帝国に生きた少女たち：京城第一公立高等女学校生の植民地経験』大月書店
古川昭 2007『大邱の日本人』ふるかわ海事事務所
松井理恵 2020「方法としての「朝鮮」―森崎和江におけるインターセクシュアリティ」広島部落解放研究所紀要『部落解放研究』(27)
水溜真由美 2013『『サークル村』と森崎和江―交流と連帯のヴィジョン』（ナカニシヤ出版
森崎和江 1963『非所有の所有―性と階級覚え書』現代思潮社
――――1970a『ははのくにとの幻想婚』現代思潮社
――――1970b『闘いとエロス』三一書房
――――1970c『非所有の所有』〔現代思潮社、1963〕現代思潮社
――――1971『異族の原基』大和書房、1971
――――1974『かりうどの朝』深夜叢書社
――――1977a『まっくら―女坑夫からの聞き書き』〔理論社、1961〕三一書房
――――1977b『ふるさと幻想』大和書房
――――1980『からゆきさん』〔朝日新聞社、1976〕朝日新聞社
――――1984『慶州は母の呼び声―わが原郷』新潮社
――――1988『悲しすぎて笑う―女座長筑紫美主子の半生』〔文藝春秋、1985〕文藝春秋
――――1990『詩的言語が萌える頃』葦書房
――――1991『慶州は母の呼び声』筑摩書房
――――1992『第三の性―はるかなるエロス』〔三一新書、1965〕河出文庫
――――1998『いのち、響きあう』藤原書店
――――『森崎和江コレクション――精神史の旅 1 産土』藤原書店、2008 年
――――『森崎和江コレクション――精神史の旅 5 回帰』藤原書店、2009 年
――――2012「「植民地」朝鮮に生まれ育って」『月報』16（『帝国日本と朝鮮・樺太』集英社）
山下達也 2007「植民地朝鮮における「内地人」教員の多様性―招聘教員と朝鮮で養成された教員の特徴とその関係」『日本の教育史学』50 巻
李秀烈 2018「朝鮮植民二世の意識構造―植民二世出身作家を中心に」,『21 世紀東アジア社会学』第 9 号
李東勲 2019『在朝日本人社会の形成』明石書店
〔外国語文献〕

韓国史データベース（http://db.history.go.kr/）
모리사키 가즈에 지음・박승주, 마쓰이 리에 옮김, 『경주는 어머니가 부르는 목소리—식민지 조선에서 성장한 한 일본인의 수기』, 글항아리, 2020 년〔森崎和江著、朴スンジュ・松井理恵訳『慶州は母の呼び声—植民地朝鮮で成長したある日本人の手記』グルハンアリ、2020 年〕
신지영 2013「'쌈짓돈'의 공유, '듣고-쓰기'라는 표현-탄광촌 이족(異族) 코뮨 『무명통신(無名通信)』의 <우물가 수다모임>을 중심으로」동아대학교 석당학술원『석당논총』56
〔申知瑛 2013「「やりくり」の共有、「聞き書き」という表現—炭鉱村異族コミューン『無名通信』における「井戸端会議」を中心に」東亜大学校石堂学術院『石堂論叢』56〕
신승모 2018『재조일본인 2 세의 문학과 아이덴티티』아연출판부
〔シン・スンモ 2018『在朝日本人二世の文学とアイデンティティ』亜研出版部〕
송혜경 2018「식민지기 재조일본인 2 세 여성의 조선 체험과 식민지주의-모리사키 가즈에(森崎和江)를 중심으로」한국일본사상사학회『일본사상』35
〔ソン・ヘキョン 2018「植民地期における在朝日本人二世女性の朝鮮体験と植民地主義—森崎和江を中心に」韓国日本思想史学会『日本思想』35〕
秀峯学園五十年史編纂委員会 1988『秀峯学園五十年史』慶州中高等学校

＜第 2 章＞

池田浩士 2012『石炭の文学史』インパクト出版会
池田浩士 1997『海外進出文学論序説』インパクト出版会
石川孝織 2014『釧路炭田　炭鉱(ヤマ)と鉄路と』水公舎
井上光晴 1969『虚構のクレーン』新潮文庫
井上光晴 1972『地の群れ』新潮文庫
井上光晴〔1982〕2015『明日一九四五年八月八日・長崎』集英社
井上光晴〔1964〕1970「妊婦たちの明日」『妊婦たちの明日』角川文庫
井上光晴〔1965〕2011「夏の客」『戦争 x 文学　ヒロシマ・ナガサキ』集英社
上野英信〔1954〕1985「あひるのうた」『上野英信集 1　話の坑口』径書房
小田美智男 1977「炭鉱に生き、炭鉱を描いた文学——畑中康雄作品集「炭鉱」をめぐって」『月刊社会党』No.242
柿谷浩一 2006「読まれざる一篇「海豚の歌」--井上光晴初期詩作における「恋愛」という問題」『早稲田大学大学院文学研究科紀要　第 3 分冊』52
木下昌明 1977「＜労働者文学研究会第四回例会・対象作品＝畑中康雄＞畑中康雄と労働者文学」『月刊社会党』No.242
工藤正廣 2013「口碑のように、小さな叙事詩として」『高橋揆一郎の文学　キタの大地に生きて』(北海道立文学館)
新藤東洋男 1973「筑豊の女坑夫たちその 7——朝鮮人労働者と手をとり合って」『部落』

髙實康稔 2016「長崎と朝鮮人強制連行――調査研究の成果と課題」『大原社会問題研究所雑誌』687
高橋揆一郎〔1977〕1978『観音力疾走　木偶おがみ』東京新聞出版局
竹内康人 2013『調査・朝鮮人強制労働①炭鉱編』社会評論社
谷澤毅 2012「軍港都市佐世保の戦中・戦後 ―ドイツ・キールとの比較を念頭に」『長崎県立大学経済学部論集』45
ティアナ・ノーグレン著、岩本美砂子監訳、塚原久美・日比野由利・猪瀬優理訳 2008『中絶と避妊の政治学―戦後日本のリプロダクトション政策』青木書店
長岡弘芳 1977『原爆民衆史』未来社
金子章予 2015「井上光晴の原爆文学の現代的意義」西武文理大学サービス経営学部研究紀要第 27 号
中野和典 2011「空洞化する言説：井上光晴『西海原子力発電所』論」原爆文学研究 10、花書院
長野秀樹 2002「井上光晴「手の家」の構図」原爆文学研究 1、花書院
帯木蓬生 1995『三たびの海峡』新潮社
原一男 1994『全身小説家――もうひとつの井上光晴像――　製作ノート・採録シナリオ』キネマ旬報社
林えいだい 1981『強制連行・強制労働――筑豊朝鮮人坑夫の記録』徳間書店
林えいだい 2010『＜写真記録＞筑豊・軍艦島――朝鮮人強制連行、その後』弦書房
林えいだい 1990『グラフィック・レポート清算されない昭和――朝鮮人強制連行の記録』岩波書店
畑中康雄 1976『炭鉱』土曜美術社
広瀬貞三 1999「朝鮮における土地収用令――1910~20 年代を中心に――」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』2
北海道立文学館 2013『高橋揆一郎の文学　キタの大地に生きて』
北海道立文学館 2015『没後 1 年渡辺淳一の世界――『白夜』の青春　リラ冷えを往く』
松原洋子 2019「引揚者医療救護における組織的人工妊娠中絶―優生保護法前史」坪井秀人編『戦後日本を読みかえる 4 ジェンダーと生政治』臨川書店
水田九八二郎 1997「43『地の群れ』」『原爆文献を読む―原爆関係書 2176 冊』中公文庫
水野直樹・文京洙 2015『在日朝鮮人　歴史と現在』岩波書店
渡辺淳一 1976『廃礦にて』角川文庫
渡辺淳一 2000『マイセンチメンタルジャーニー』集英社
渡辺淳一 2009『白夜』1-5 巻、ポプラ文庫
渡辺淳一 2012『瓦礫の中の幸福論―私が体験した戦後』幻冬舎
「そらち炭鉱の記憶マネジメントセンター」http://www.mc.soratan.com/
「直木賞作家・渡辺淳一さんを悼む「ベテラン婦長」」https://www.kango-roo.com/work/739/

＜第 3 章＞

石川孝織 2014『釧路炭田　炭鉱と鉄路と』釧路市立博物館友の会
小笠原貞子 1983『一粒の麦―政治に愛を―』学習の友社
大河久夫 1999「太平洋炭砿の歴史」『証言集　ヤマの残響』緑鯨社
笠原良太・嶋崎尚子 2018「ふたつの故郷の喪失：樺太からの引揚げと尺別炭砿閉山―岩崎守男氏による講

演の記録」『JAFCOF 釧路研究会リサーチ・ペーパー』vol.13
佐藤邦子 1999「いつも新しい始まり」『証言集　ヤマの残響』緑鯨社
————2011「ヤマを支えた女たち―太平洋炭鉱主婦会―」『ヤマの話を聞く会　記録集 (2)』釧路市立博物館
佐藤進 1999「編集ノート」『証言集　ヤマの残響』緑鯨社
———2001『釧路炭田の友子』緑鯨社(非売品)
嶋津千利世 1964「炭婦協のあゆみ」『炭労十年史』日本炭鉱労働組合
清水拓 2014「太平洋炭礦における採炭の機械化過程」『JAFCOF 釧路研究会リサーチ・ペーパー』vol.3
太平洋炭鉱労仂組合 1955『創立十周年記念　労仂組合史』
————————1986『太平洋炭鉱労働組合四十年史』
多嶋光子 1964『くらしのうた―炭鉱の主婦の生活記録―』日本炭鉱主婦協議会
————2015〔1987〕「多嶋光子氏・講演（1987 年 9 月 12 日・札幌女性史研究会例会)」(西城戸誠他「太平洋炭鉱主婦会の記録―北海道炭鉱主婦協議会の会長の聞き取りと資料を中心に―」『JAFCOF 釧路研究会リサーチ・ペーパー』vol.5)
————1985「アカ攻撃と分裂策動を打ち破って（母親運動の 30 年)」日本共産党中央委員会『前衛』524
————1995「炭鉱を支えて」『私たちの戦後史―未来への語り部として』北海道新聞社
永丘智郎編 1957『日本の主婦』三一書房
西川祐子 2004『住まいと家族をねぐる物語―男の家、女の家、性別のない部屋』集英社文庫
西城戸誠・大國光彦・久保ともえ・井上博登 2015「太平洋炭鉱主婦会の記録―北海道炭鉱主婦協議会の会長の聞き取りと資料を中心に―」『JAFCOF 釧路研究会リサーチ・ペーパー』vol.5
西城戸誠 2020「産炭地における仲間集団としての炭鉱主婦会―北海道赤平、芦別市を事例にして」『現代社会学研究』第 33 巻
日本炭鉱主婦協議会 1983『日本炭鉱主婦協議会結成三十周年』
日本炭鉱主婦協議会北海道地方本部 1973『研山は知っている―道炭婦協の 20 年―』
日本母親大会連絡会 1966『母親運動 10 年のあゆみ』
太平洋炭鉱主婦会文化部 1968.3『母のうぶごえ』第 26 号
————————————1978.5『母のうぶごえ』第 36 号
————————————1998.11『母のうぶごえ』第 46 号
林恒子 2015「多嶋光子が語る「国防婦人会、炭婦協、そして母親大会」」『ほっかいどう女性史研究』第 5 号
藤野豊 2016「炭鉱合理化政策の開始と失業問題」『人文社会科学研究所年報』No.14、敬和学園大学人文社会科学研究所
古村えり子 2005「「闘う主婦」の誕生：日本炭鉱主婦協議会の活動から」『北海道教育大学紀要. 教育科学編』55(2)
北海道主婦会連絡協議会 1979『道主婦協二十年のあゆみ』
釧路市立博物館のホームページ https://www.city.kushiro.lg.jp/museum/gyouji/2011/0003.html
日本母親大会ホームページ　http://hahaoyataikai.jp/02_taikai/taikai_1/taikai_1.html

＜第 4 章＞

〔日本語文献〕
天野正子 2005『「つきあい」の戦後史―サークル・ネットワークの拓く地平』吉川弘文館
川島直樹 2012「太平洋炭礦図書館と機関紙「読書タイムス」」『釧路市立博物館報』No.410
北河賢三 2014『戦後史のなかの生活記録運動――東北農村の青年・女性たち』岩波書店
佐藤邦子 2014『そらち炭鉱の女性たちが語る集い』(産炭地研究会（JAFCOF)）特定非営利活動法人炭鉱の記憶推進事業団
市立釧路図書館郷土行政資料室 2016『釧路ゆかりの作家たち』
鈴木ふみ 1957『日本の主婦』(永丘智郎編）三一書房
太平洋炭鉱主婦会文化部 1955.7『母のうぶごえ』第 1 号
――――――――――1956.9『母のうぶごえ』第 6 号
――――――――――1956.12『母のうぶごえ』第 7 号
――――――――――1957.6『母のうぶごえ』第 8 号
――――――――――1957.12『母のうぶごえ』第 9 号
――――――――――1962.9『母のうぶごえ』第 18 号
――――――――――1963.9『母のうぶごえ』第 20 号
――――――――――1968.3『母のうぶごえ』第 26 号
――――――――――1969.3『母のうぶごえ』第 27 号
――――――――――1973.7『母のうぶごえ』第 31 号
――――――――――1974.5『母のうぶごえ』第 32 号
――――――――――1975.10『母のうぶごえ』第 33 号
――――――――――1976.7『母のうぶごえ』第 34 号
――――――――――1977.8『母のうぶごえ』第 35 号
――――――――――1978.5『母のうぶごえ』第 36 号
――――――――――1980.6『母のうぶごえ』第 38 号
――――――――――1981.6『母のうぶごえ』第 39 号
――――――――――1982.6『母のうぶごえ』第 40 号
――――――――――1983.7『母のうぶごえ』第 41 号
――――――――――1984.8『母のうぶごえ』第 42 号
――――――――――1985.12『母のうぶごえ』第 43 号
――――――――――1987.4『母のうぶごえ』第 44 号
――――――――――1988.11『母のうぶごえ』第 45 号
――――――――――1998.11『母のうぶごえ』第 46 号
――――――――――2002.5『母のうぶごえ』解散記念誌
太平洋炭鉱労仂組合 1955『創立十周年記念　労仂組合史』
太平洋炭鉱労働組合 1976『太平洋炭鉱労働組合 30 年史』
多嶋光子 2015〔1987〕「多嶋光子氏・講演（1987 年 9 月 12 日・札幌女性史研究会例会)」(西城戸誠他「太平洋炭鉱主婦会の記録―北海道炭鉱主婦協議会の会長の聞き取りと資料を中心に―」『JAFCOF 釧路研究会

リサーチ・ペーパー』vol.5)
辻智子 2015『繊維女性労働者の生活記録運動：1950 年代サークル運動と若者たちの自己形成』北海道大学出版会
鶴見和子 1963『生活記録運動の中で』未来社
鳥羽耕史 2010『1950 年代―「記録」の時代』河出書房新社
鳥居省三 1978『釧路叢書　釧路文学運動史』釧路市
西城戸誠 2012「太平洋炭鉱主婦会の歴史から学ぶ」『ヤマの話を聞く会　記録集（2)』釧路市立博物館
日本炭鉱主婦協議会北海道地方本部 1973『研山は知っている―道炭婦協の 20 年―』
『北海道労働資料センターのご案内』パンフレット
〔外国語文献〕
이재은 2020『회리바람꽃』모두의 책〔イジェウン 2020『フェリバラムコッ』modubook〕

＜第 5 章＞
キヌタプロダクション 1953『女ひとり大地を行く』(亀井文夫監督)
板倉史明 2009「『女一人大地を行く［最長版］の復元』『東京国立近代美術館研究紀要』(13)
大谷竹次郎ほか 1949「日本映画を動かす 30 人：人物論」『キネマ旬報』第 69 号
亀井文夫 1989『たたかう映画―ドキュメンタリストの昭和史―』岩波新書
キネマ旬報社 1952『キネマ旬報』第 51 号
キネマ旬報社 1952『キネマ旬報』第 52 号
キネマ旬報社 1953『キネマ旬報』第 55 号
キネマ旬報社 1953「勞組映画の流行」『キネマ旬報』第 73 号
山田五十鈴 1955「ヤマの想い出」『響土』第 9 号（太平洋炭鉱組合）
佐藤洋 2009「東宝争議・レッドパージとは何だったのか」『占領期の映画―解放と検閲』(岩本憲児編）森話社
太平洋炭鉱主婦会文化部 1968.3『母のうぶごえ』第 26 号
太平洋炭鉱労仂組合 1955『創立十周年記念　労仂組合史』
田中宏・内海愛子・石飛仁解説 1987、『資料中国人強制連行』明石書店
「炭労――激闘あの日あの時」編纂委員会 1992『炭労――激闘あの日あの時』日本炭鉱労働組合
都築政昭 1992『鳥になった人間―反骨の映画監督・亀井文夫の生涯』講談社
友田義行 2010「日本の炭鉱映画史と三池――『三池終わらない炭鉱(やま)の物語』への応答――」『立命館言語文化研究』22 巻 2 号
日朝協会愛知県連合会 2016『日本と朝鮮』No.397
フィオードロワ・アナスタシア 2011「「旅する」叙情詩人：亀井文夫の紀行映画における自己言及性をめぐって」『CineMagaziNet!』No.15
法政大学大原社会問題研究所 1965『日本労働年鑑　特集版　太平洋戦争下の労働運動』労働旬報社

＜第 6 章＞

〔日本語文献〕

日活 1959『にあんちゃん』(今村昌平監督)

今村昌平 2001『撮る―カンヌからヤミ市へ』工作舎

池田一郎・今村昌平 1959.10.15「にあんちゃん」『キネマ旬報』No.244 十月下旬号

林相珉 2011『戦後在日コリアン表象の反・系譜:「高度経済成長」神話と保証なき主体』、花書院

李鍾元・木宮正史・磯崎典世・浅羽祐樹 2017『戦後日韓関係史』有斐閣アルマ

奥村華子 2018「『にあんちゃん』論―日記における自己検閲を巡って」日本語文学研究『跨境』6 巻

呉徳洙監督 1997「人物編」『在日』

香取俊介 2004『今村昌平伝説(人間ドキュメント)』河出書房新社

姜文姫 2018「1950 年代における炭鉱記録としての映画『にあんちゃん』の日韓比較」『文化/批評』

北林谷栄〔1963〕2004『九十三齢春秋』岩波書店

新海均 2013『カッパ・ブックスの時代』河出ブックス

竹内康人 2013『調査・朝鮮人強制労働①炭鉱編』社会評論社

藤野豊 2019『「黒い羽根」の戦後史―炭鉱合理化政策と失業問題』六花出版

安本末子 a1958『にあんちゃん―十歳の少女の日記』光文社

安本末子 b1977『にあんちゃん』ちくま少年文庫

安本末子 c1978『にあんちゃん―10 歳の少女の日記』講談社

安本末子 d2003『にあんちゃん―十歳の少女の日記』西日本新聞社

安本末子 e2010『にあんちゃん』角川文庫

1959.2.16『読売新聞』

1959.6.7『読売新聞』

1959. 10.29『読売新聞』

1960.7.11『読売新聞』

東京地方裁判所 1975.10.21 労働判例「炭労杵島炭砿争議同情スト」「杵島争議の経緯」項目(事件番号:昭和 32(ワ)10282)

2020.8.6『佐賀新聞』https://www.saga-s.co.jp/articles/-/557842

日活ホームページ https://www.nikkatsu.com/movie/20390.html

〔外国語文献〕

유한영화사 1959『구름은 흘러도』(유현목 감독)

〔柳韓映画社 1959『雲は流れても』(兪賢穆監督)〕

안소임 지음, 김지헌 각색 i2005『구름은 흘러도』, 커뮤니케이션 북스〔安小任著・金チホン脚色 i2005『雲は流れても』コミュニケーションブックス〕

차승기 2016「두 개의 '전후', 두 가지 애도 - '전후' 한국과 일본, 가난한 아이들의 일기를 둘러싼 해석」『사이間 SAI』Vol21〔車承棋 2016「二つの「戦後」、二つの哀悼―「戦後」韓国と日本、貧乏な児童たちの日記をめぐる解釈」『사이間 SAI』Vol21〕

최일수〔1959〕1992「구름은흘러도」『닫힌 현실 열린 영화』제 3 문학사〔崔イルス〔1959〕1992「雲は流れても」『閉ざされた現実開かれた映画』第 3 文学社〕

김종원 2006「유현목의 리얼리즘과 작품세계」『위대한 영화감독 유현목』재단법인

한국영화인복지재단(정진우 발행)〔金チョンウォン 2006「兪賢穆のリアリズムと作品世界」『偉大なる映画監督・兪賢穆』財団法人韓国映画人福祉財団〕
김승구 2012「아동 작문의 영화화와 한일 문화 교섭」『한국학연구』41〔金スング 2012「児童作文の映画化と日韓文化の交渉」高麗大学韓国学研究所『韓国学研究』41〕
사북청년회의소 편 2001『탄광촌의 삶과 애환』도서출판 선인〔舎北青年会議所編 2001『炭鉱村の生と哀感』図書出版ソニン〕
安本末子著・柳周弦訳 f1959『구름은 흘러도: 在日 10 歳 韓國少女의 手記』新太陽出版局
安本末子著・本社編輯部訳 g1959『(在日)韓國少女의 手記: 十歳少女의日記』大東文化社
安本末子著・李文九訳 h1970『구름은 흘러가도 <在日 韓国 少女의 日記, 仁昌書館
영월군청 2020『광부이야기 강원도탄광문화촌』
〔寧越郡庁『坑夫物語―江原道炭鉱文化村』2020 年〕
1959.1.19『京郷新聞』
1959.1.26・1.28『東亜日報』
1959.3.19『京郷新聞』
1959.8.26『東亜日報』
1960.7.23『京郷新聞』